

第2章 吉田構内グランド屋外照明施設新設に伴う発掘調査

第1節 調査の経過

平成5年度の補正予算により、サッカー・ラグビー場における夜間照明施設設置の計画が本格化した。サッカー・ラグビー場の広大な敷地、南北140m、東西170mの範囲を照明するには、グラウンドの四隅及び中央両端の計6ヶ所に照明塔の設置を必要とした。計画された照明塔の高さは24mと大規模なもので、それを支える基礎の掘方は10m×10mを必要とした。また、6ヶ所の照明塔への電気配線が必要であり、高圧線のため現地表面から少なくとも50cmは掘り込まねばならなかった。

サッカー・ラグビー場付近は、かつて山口大学吉田遺跡調査団が第Ⅲ地区の南区・北区と呼んで重視した地区である。特に、北区はサッカー・ラグビー場の東隣接地にあって、現在は遺跡保存地区となっている。遺跡保存地区は山口大学吉田遺跡調査団が昭和42年に、山口大学埋蔵文化財資料館が昭和57・59・60・61年度に調査を実施し、弥生時代中期前半から古墳時代中期の竪穴住居跡21棟、その他にも土坑や柱穴を多数検出している。これらの調査により、微高地上に弥生時代から古墳時代中期の集落が形成されていたことが明らかになった。そしてその重要性から、本地は遺跡保存地区として遺構の保存措置が取られた。しかし、集落は遺跡保存地区にとどまらず北西方向に展開しており、埋蔵文化財資料館が昭和56年度に実施した教育学部棟新営に伴う発掘調査⁵⁾では、弥生時代後期の住居跡を4棟検出している。また昭和58年のラグビー場防球ネット新営工事に伴う発掘調査⁶⁾でも古墳時代の住居跡を検出している。以上の調査結果から、サッカー・ラグビー場の北東、保存地区から北西の教育学部棟一帯は、微高地が発達し弥生時代から古墳時代にかけての遺構密度の高い地区であることが認識されていた。

一方、山口大学吉田遺跡調査団が南区と呼んだ構内南門周辺では、多量の土器を含んだ弥生時代の河川が検出されている。遺跡保存地区の微高地に対して、南門周辺に

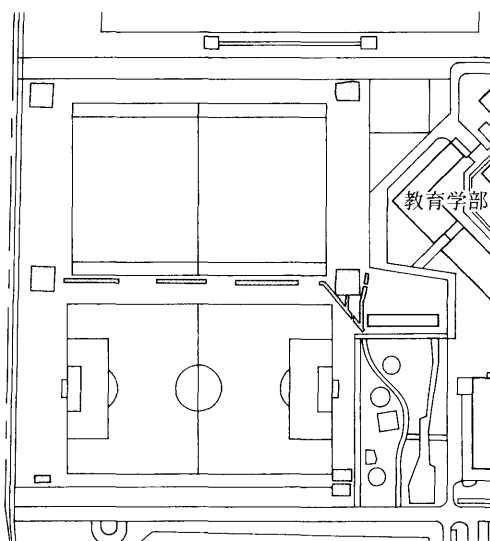


Fig.4 調査区位置図

は低地が広がり、幾筋もの河川のあることが予想された。

埋蔵文化財資料館運営委員会の協議の結果、調査が必要であるという判断が下された。これを受け、埋蔵文化財資料館が発掘調査を実施することになった。工事は照明塔部分が先に行われ、その完成後に配線工事が行われるため、発掘調査は照明塔部分と配線部分について、調査期間を変えて行う変則的なものとなった。

照明塔部分については、5月9日から7月15日まで調査を実施した。照明塔はグラウンドの周囲6ヶ所に設置された。サッカー・ラグビー場の北東辺に沿った3つの照明塔部分を東側からA・B・Cトレンチとし、南西辺に沿った3つの照明塔部分を東側からD・E・Fトレンチとする。6つの調査区では、様相が大きく異なった。

照明塔配線部分については、11月7日から12月2日まで調査を実施した。配線部分においては、先に行った照明塔部分の調査により地下データが得られていたため、それを基に関連部局との協議を行い、グラウンド側溝工事などに伴う既掘部分への配線埋設を行うよう要請し、埋蔵文化財への影響を最小限に食い止める配慮がなされた。その結果、サッカー・ラグビー場の南西辺に沿った配線部分については、遺構面及び遺物包含層が深く、工事による埋蔵文化財への影響はないと考えられたため、埋蔵文化財資料館の立会のもと掘削を許可した。北東辺の配線部分は、グラウンド側溝やネット基礎などの既掘部分に沿った路線に変更し、掘削に際しては埋蔵文化財資料館が立会調査を行った。

一方、グラウンドの中央を北東－南西に貫く配線については、照明塔部分のBトレンチとEトレンチの調査で、グラウンド中央を北東－南西に貫く近世暗渠のあることが判明しており、その暗渠掘削部分に沿った配線埋設を要請した。それでもなお、遺構面及び遺物包含層に影響が及ぶため発掘調査を実施した。この中央配線部分は全長が110mと長く、調査区の間陸橋部を設けた。この陸橋部や調査区の方角、または旧地形の変化から、調査区をA1・A2・B・C・D・E・F・G区に8区分した。このうち、A1～D区までは照明塔Bトレンチの周囲に配しており、検出した遺構は一連のものであることから、Bトレンチと合わせて説明を行う。

なお、照明塔のBトレンチにおいて検出した3棟の竪穴住居跡の保存を検討するために、埋蔵文化財資料館運営委員会が再び招集された。関連部局と協議の結果、竪穴住居跡を避けたBトレンチ内の南東側で、矢板を打ち込む工法への変更により遺跡の破壊面積を縮小して、照明塔の基礎工事が行われることになった。

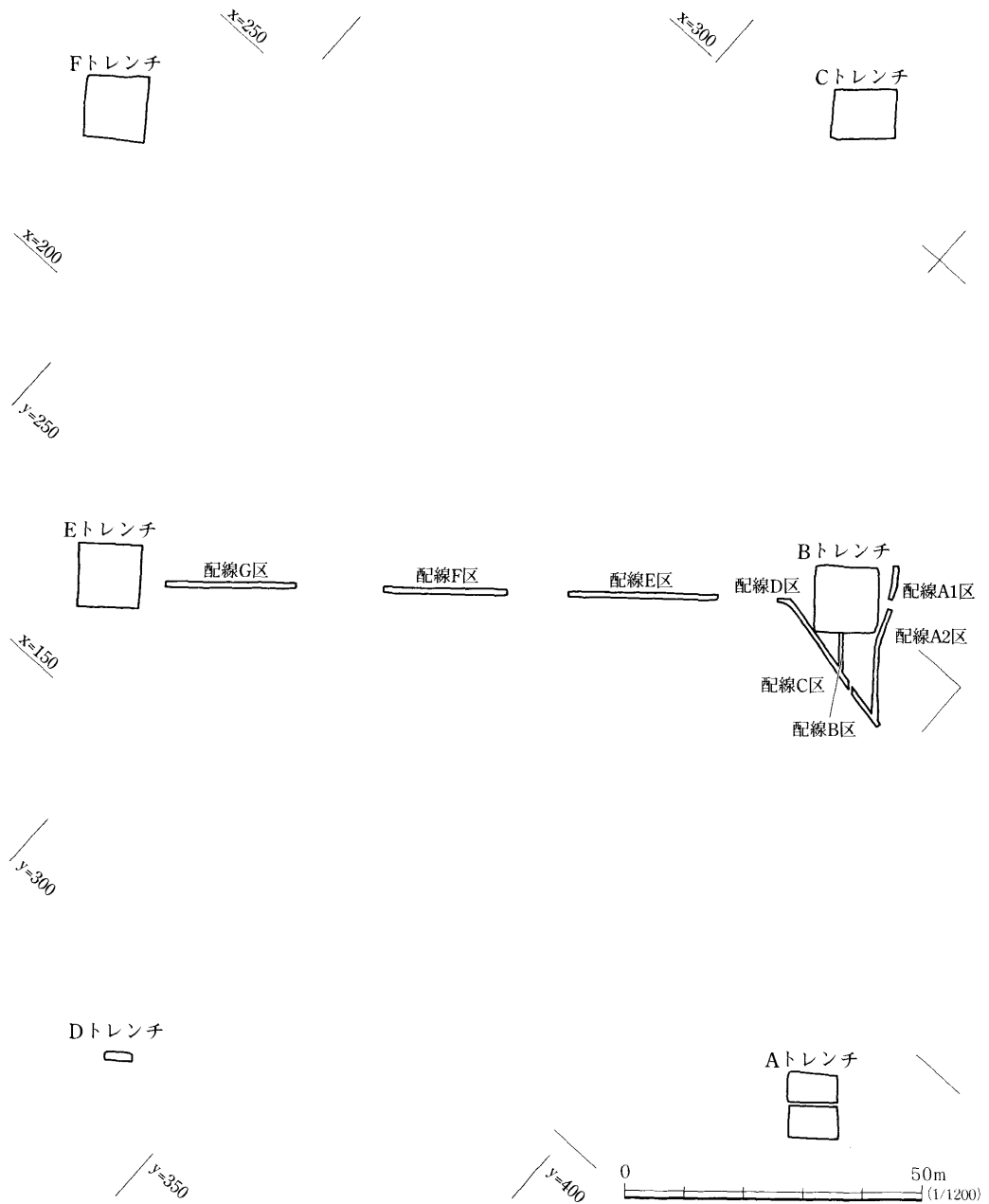


Fig.5 トレンチ配置図

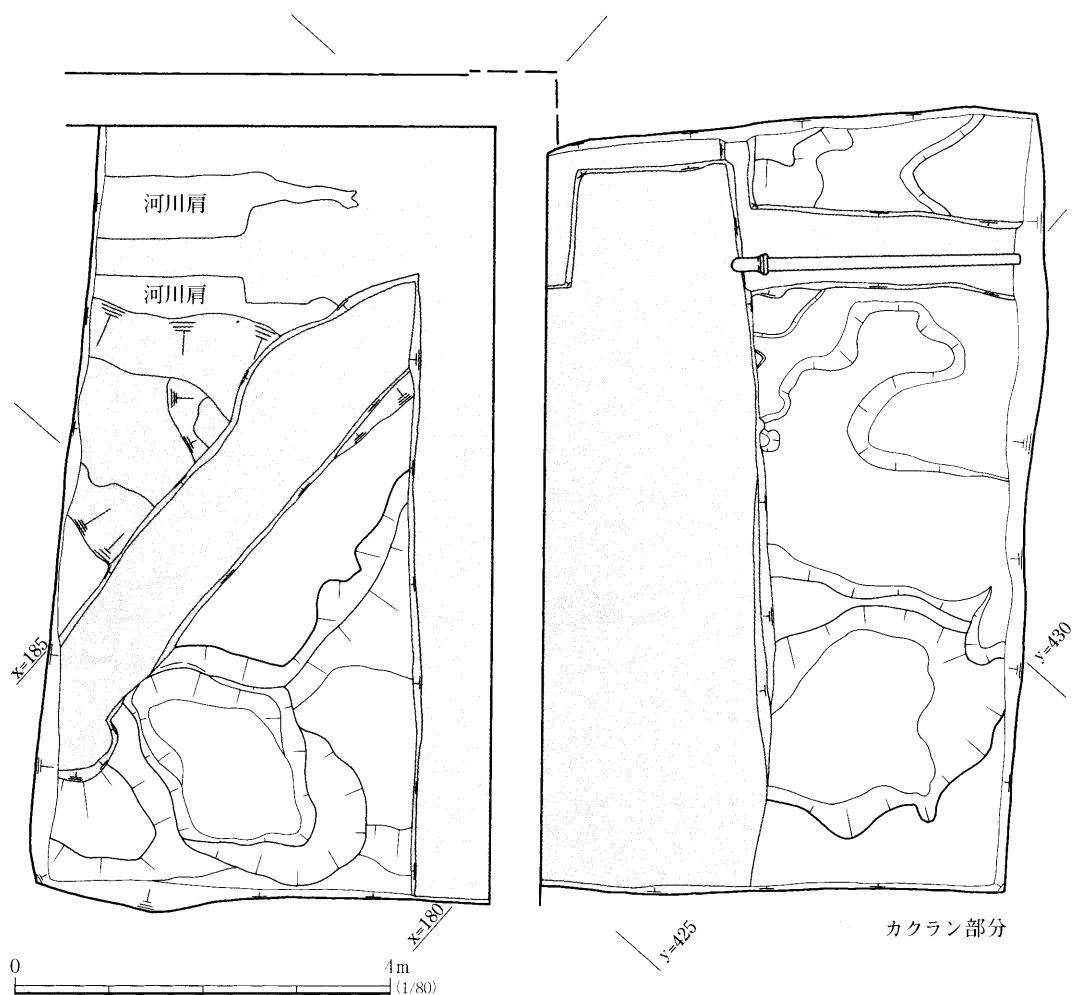


Fig.6 A トレンチ遺構配置図

第2節 遺構

1 A トレンチ (Fig.6・7, PL.2・3)

A トレンチは、遺跡保存地区の南側に接して設定した8m×10mのトレンチである。造成土の直下が河川堆積土で、上下の厚い明黄色礫層が中層の黒灰色シルト層を密閉していた。この黒灰色シルト層は、弥生時代後期終末から古墳時代初頭の土器を多量に含んでいた。調査は5月9日から5月30日まで実施し、終了とともに埋め戻した。

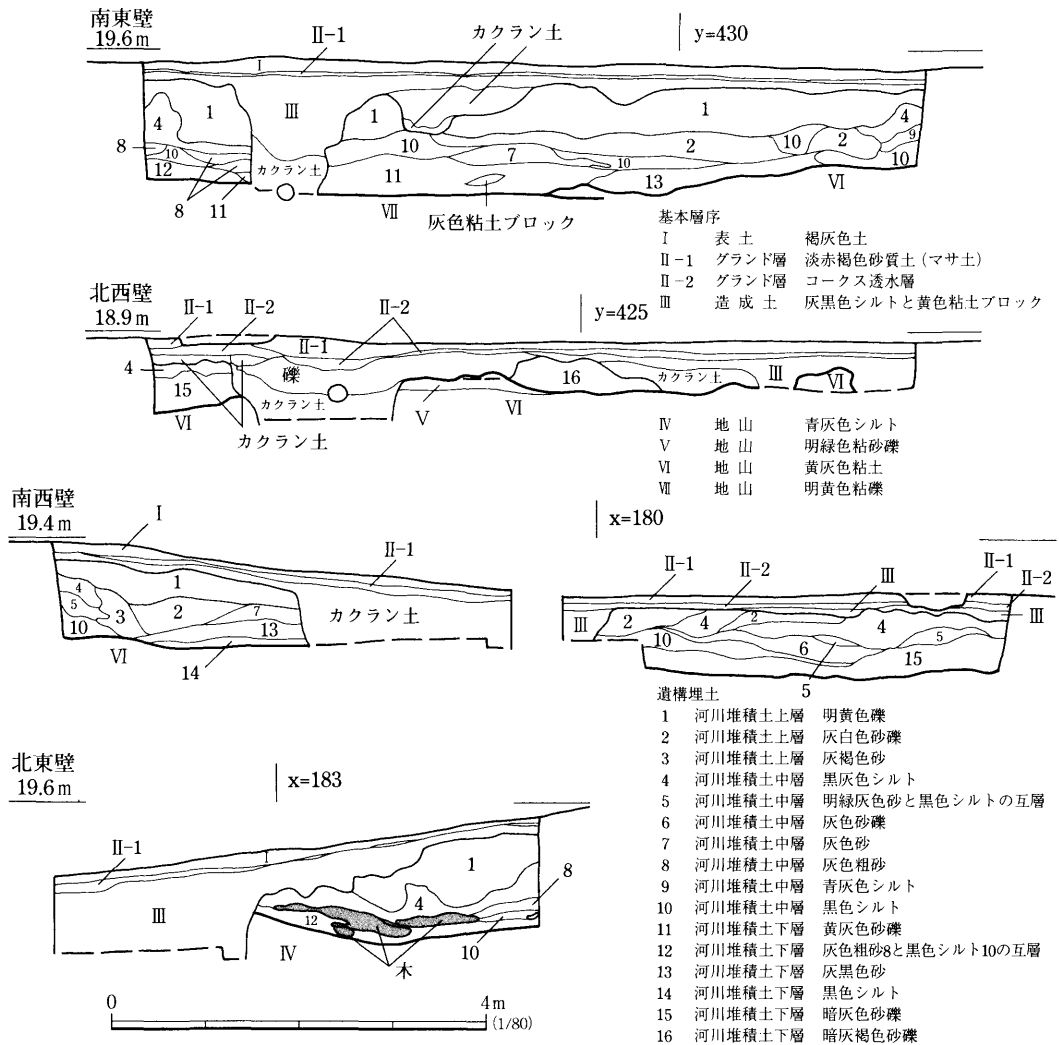


Fig.7 Aトレンチ壁面土層断面図

(1) 層序

本トレンチ内においては、薄い表層土の直下は河川堆積土であった。グラントから一段上がった南門道路の法面部分において、表層土直下から検出した厚さ約50～60cmに渡る明黄色礫は河川の最終堆積土と考えられる。礫の大きさから、突発的な大水がもたらしたものと推測できる。この層から遺物は一切認められなかった。この明黄色礫に密閉されていたのが、中層の黒灰色シルトである。植物遺体と共に、多数の土器片が出土した。下層は砂礫層であるが、土器はほとんど含まない。地山は黄灰色粘土あるいは青灰色シルトを主とし、一部明緑色・明黄色の粘砂礫が認められた。

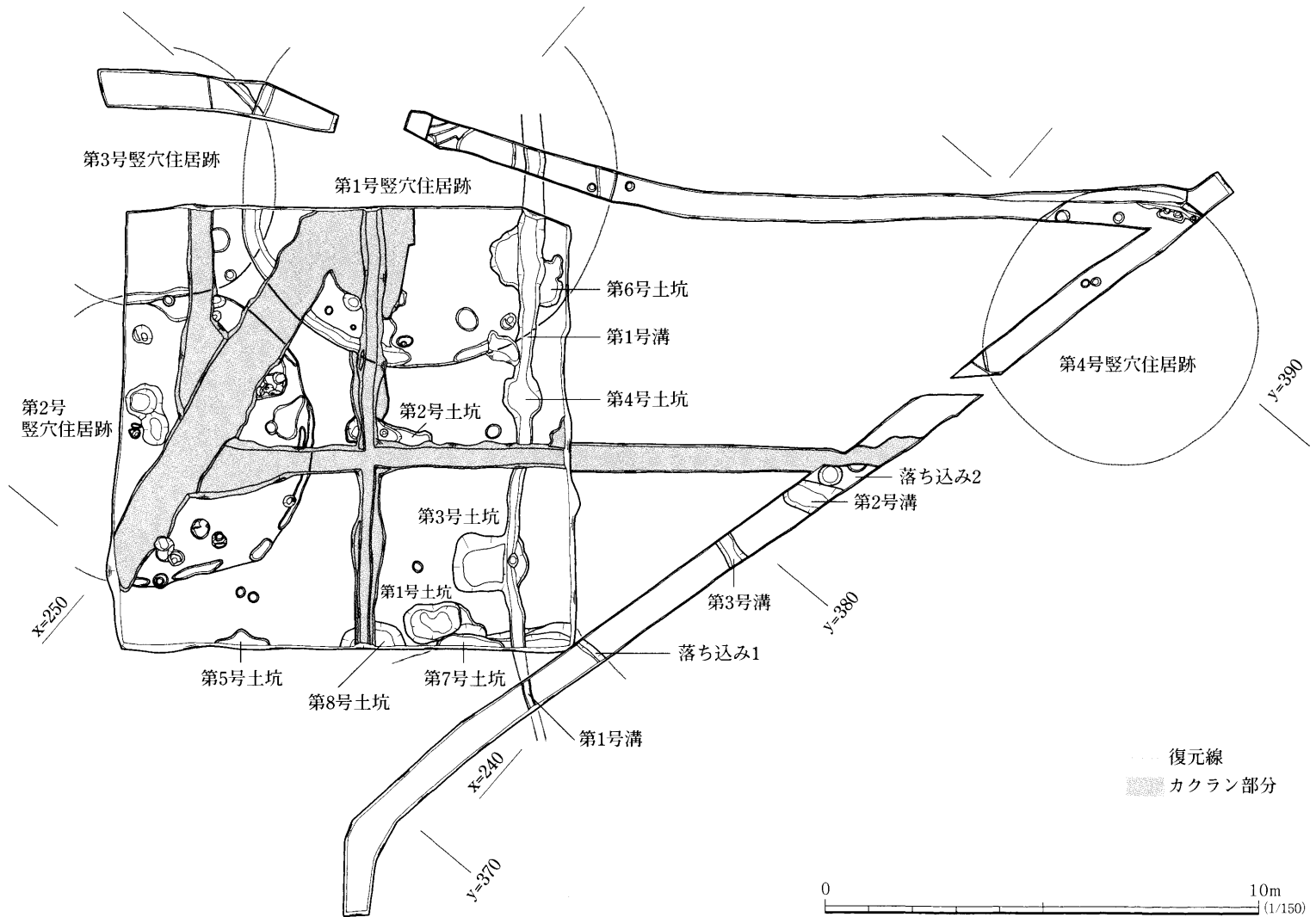


Fig.8 Bトレンチ、配線トレンチ遺構配置図

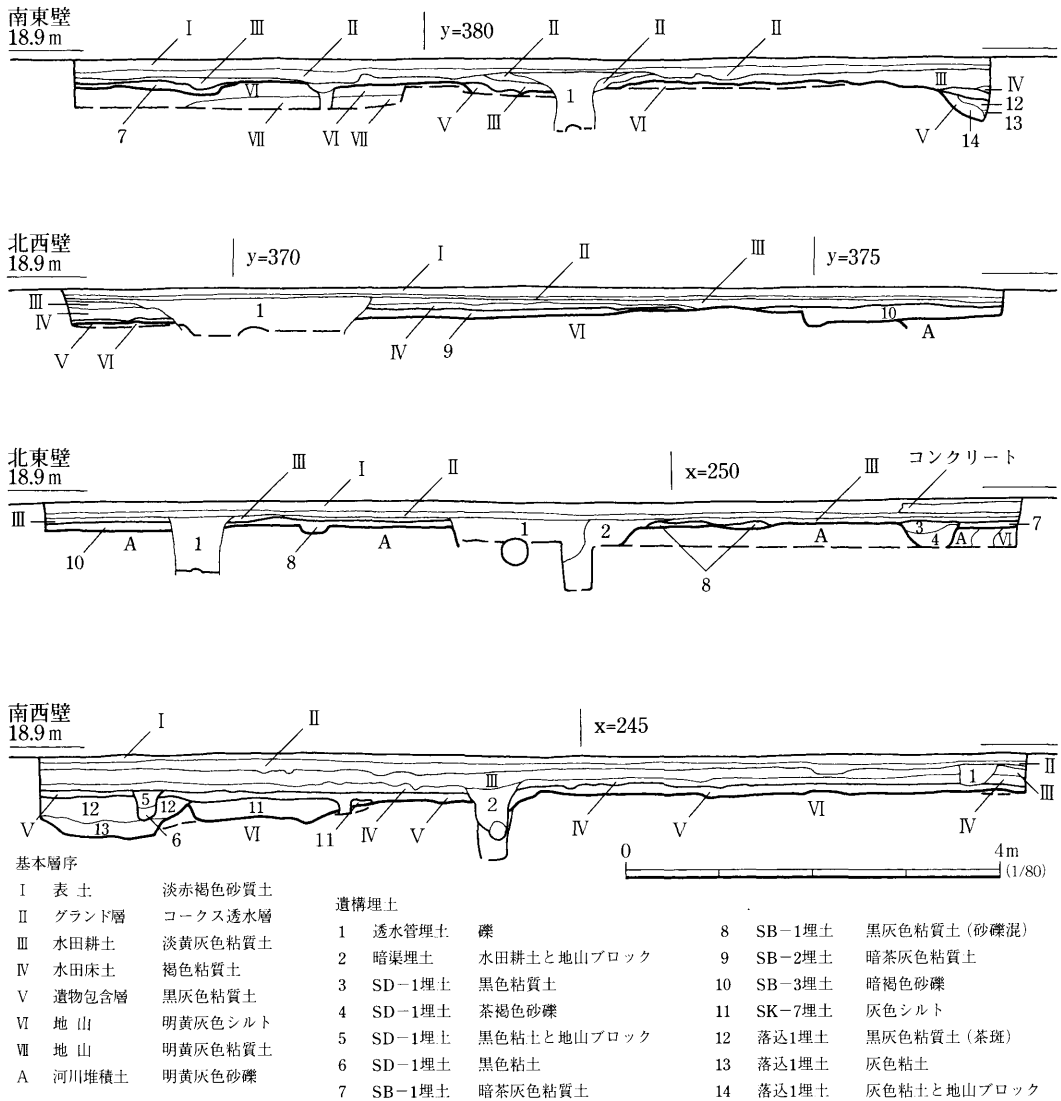


Fig.9 Bトレンチ壁面土層断面図

2 Bトレンチ (Fig.8~11, PL.4)

Bトレンチは、保存地区の南西側（グラントの北辺中央にあたる）、クラブハウス前に設定した10m×10mのトレンチである。グラント層直下が竪穴住居跡の遺構検出面であり、削平の著しさを窺わせた。調査は5月9日から7月15日まで実施した。また、周囲の配線トレンチA1・A2・B（透水管による攪乱内に設置した）・C・D区からは、Bトレンチと一連の遺構が検出されているため、合わせて報告を行う。

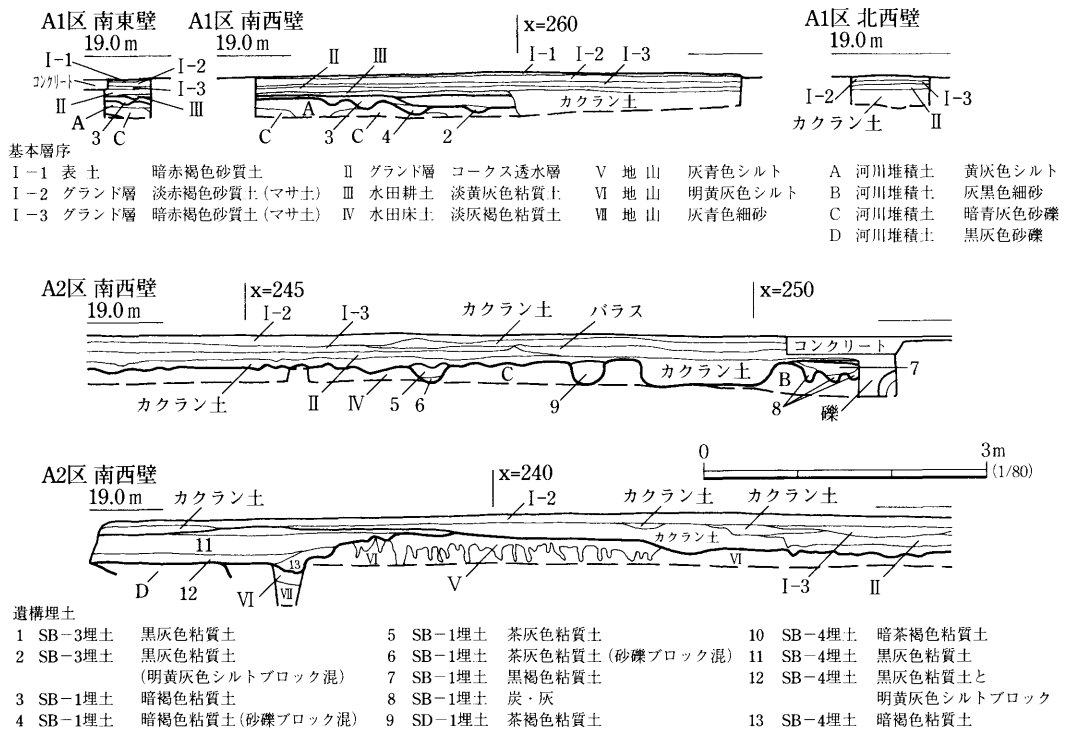


Fig.10 配線トレンチA区壁面土層断面図

(1) 層序

Bトレンチの北東側では、グラント層の直下に数cmの水田層が残されているだけで、すぐに第VI層：明黄灰色シルトの地山となる。南西にゆくにしたがい地形は落ち込み、厚くなった水田層下で、第V層：黒灰色粘質土の遺物包含層が認められた。

この土層堆積状況は、配線トレンチ内においても同様であった。北東側のA1・A2区では水田層はほとんど残っておらず、グラント層の下は攪乱層を挟んで、河川堆積土の明黄灰色砂礫及び地山と考えられる第VI層：明黄灰色シルト（上面標高約18.5m）となる。しかし、攪乱をまぬがれたA2区の東側では、標高18.7mで第V層：灰青色シルトを検出していることから、本来第VI層の上には第V層が広く堆積していたと考えられる。実際、地形が落ち込んだC区では、第V層：灰青色シルト（上面標高約18.5m）及び第VI層：明黄灰色シルト（上面標高18.4m）の上下2層の堆積を確認している。また、C区では攪乱の少ない部分で水田層を確認することができた。C区は南西側のD区に向かって深く落ち込んでいる。D区では地山層を確認しておらず、配線トレンチのD区からE区中央にかけては、大きな谷地形があったと想定される。

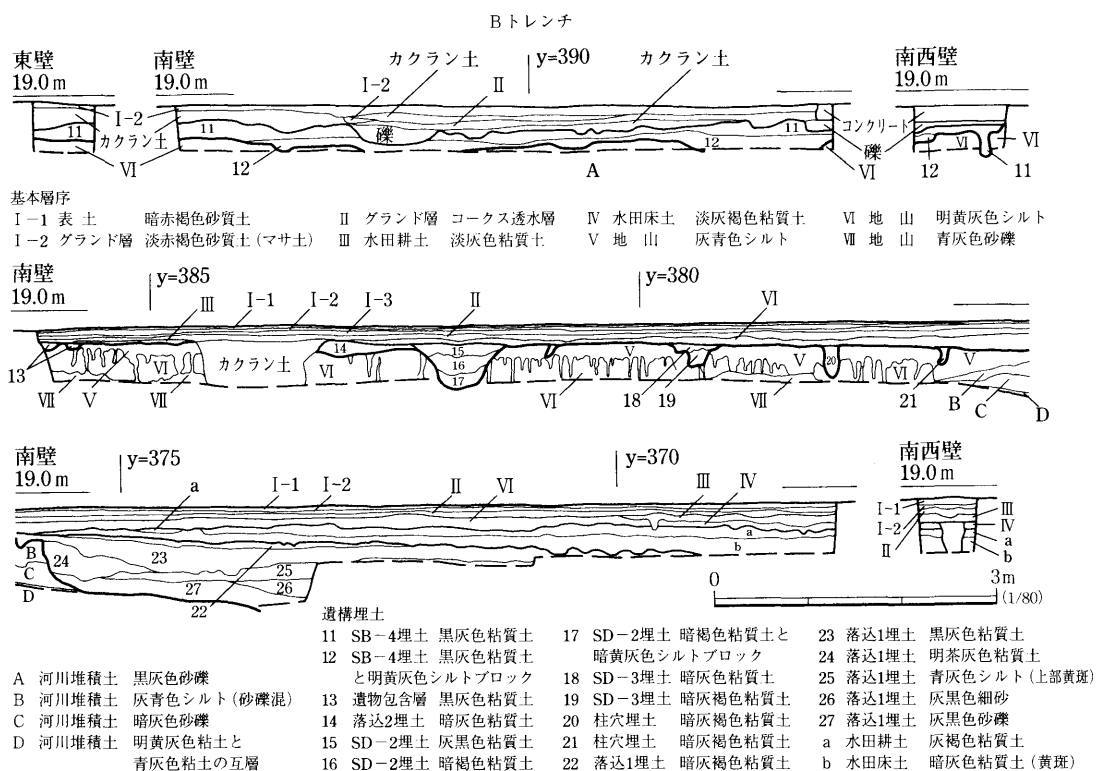


Fig.11 配線トレンチC・D区壁面土層断面図

これらのことから、Bトレンチ付近は微高地から低地への変換域にあたり、その南西側は大きく落ち込み、北東側の微高地は後世に著しい削平を受けていることが判明した。

(2) 遺構

河川 (PL.10)

Bトレンチの北東辺に沿って検出した。弥生時代の遺構検出面となる第VI層：明黄灰色シルトと同一面上の標高約18.5mで、河川堆積層と考えられる明黄灰色砂礫の広がりをも認めた。この明黄灰色砂礫の際に沿うように堆積し、明黄灰色シルトよりやや色調の薄い淡黄灰色シルトから縄文時代晩期中葉の土器を検出した。淡黄灰色シルトは下層になるにつれ、明黄灰色粘質土へと変化していた。明黄灰色粘質土層は無遺物層であるらしく、この層こそが本来の河川肩部と考えられた。おそらく、明黄灰色砂礫が河川本流の堆積土であり、淡黄灰色シルトは河川肩部の堆積土であろう。

明黄灰色砂礫の検出状況から、河川は南東から北西に流水していたと考えられる。検出したのは南肩部で、北肩部は調査区外にあるため、河幅は不明である。深さも、河床面を確認していないので不明である。給水管による攪乱が河川上面から深さ約40cmに及ぶが、河川の堆積土内にとどまる。明黄灰色砂礫層からは縄文土器小片がわずかに出土した。

第1号竪穴住居跡 (Fig.12, PL.5・6)

Bトレンチの北東部と配線トレンチで検出した、直径約8.4mの円形竪穴住居跡である。Bトレンチには住居跡の西側約1/3がかかり、住居跡の東側は配線トレンチで周溝の南北両端を検出したことから推定している。Bトレンチで検出した住居跡西側部分は、給水管とグラント透水管、弥生時代後期末の第1号溝によって著しい攪乱を受ける。また、住居跡の北西側は、第3号住居跡に切られているが、周溝には攪乱が及んでいない。住居跡検出面の標高は18.52mである。住居跡の基盤となる土層は、明黄灰色シルトと明黄灰色砂礫である。これは河川堆積土上に竪穴住居を掘り込んだことによるもので、明黄灰色砂礫が河川本流部分の堆積土である。住居跡の埋土は一樣ではなく、黒灰色粘質土を主としながら、基盤土層が明黄灰色砂礫の部分は砂礫を多く含む。

本住居跡は上面の削平が著しく、Bトレンチで辛うじて約5cmの周壁立ち上がりが検出できた。配線トレンチ南側では削平が床面にまで及び、下層の河川堆積土が露出している。土色は若干にごっているが、踏み込みなどによるものであろう。床面標高は、Bトレンチで18.47m、配線トレンチで18.58mである。床面は自然地形と同じく、北東から南西にむかってやや傾斜していたと考えられる。周溝が巡るが、南側の一部が途切れており、出入口の可能性がある。周溝は幅約30cm、床面からの深さが約10cmである。周溝底面の標高は、Bトレンチで18.35m、配線トレンチで18.40mを測る。周溝も床面と同様に、北東から南西にむかって傾斜がつけられていたと考えられる。柱穴は住居跡内において8基検出した。これらは平面形が円形あるいは楕円形を呈し、直径20～40cmと大きさに問題はないが、床面からの深さが10～25cmといずれも浅い。

炉については、配線トレンチにおいて炭・灰が充填した不定形な落ち込みを検出しており、可能性がある。ただし、この炉跡と考えられる落ち込みは、上面を溝状の遺構に、北側をグラント透水管によって攪乱されており、検出したのは東肩にとどまる。したがって平面形態については不明である。深さは、住居跡床面から約17cmである。

遺物は、住居跡埋土より、小片ではあるが弥生時代後期の土器が出土している。また、周溝の上面からは滑石製紡錘車⁸⁾が出土した。なお、埋土を水洗選別したところ19点のガラス小玉を検出した。しかし、石器及び剥片を見いだすことはできなかった。

本住居跡の時期は、滑石製の紡錘車を伴うことや石器が消失していることから、出土土器が示すとおり弥生時代後期に比定できる。また、弥生時代後期末の特徴を持ったタタキ甕を含む第1号溝に切られることから、終末以前の弥生時代後期と考えられる。

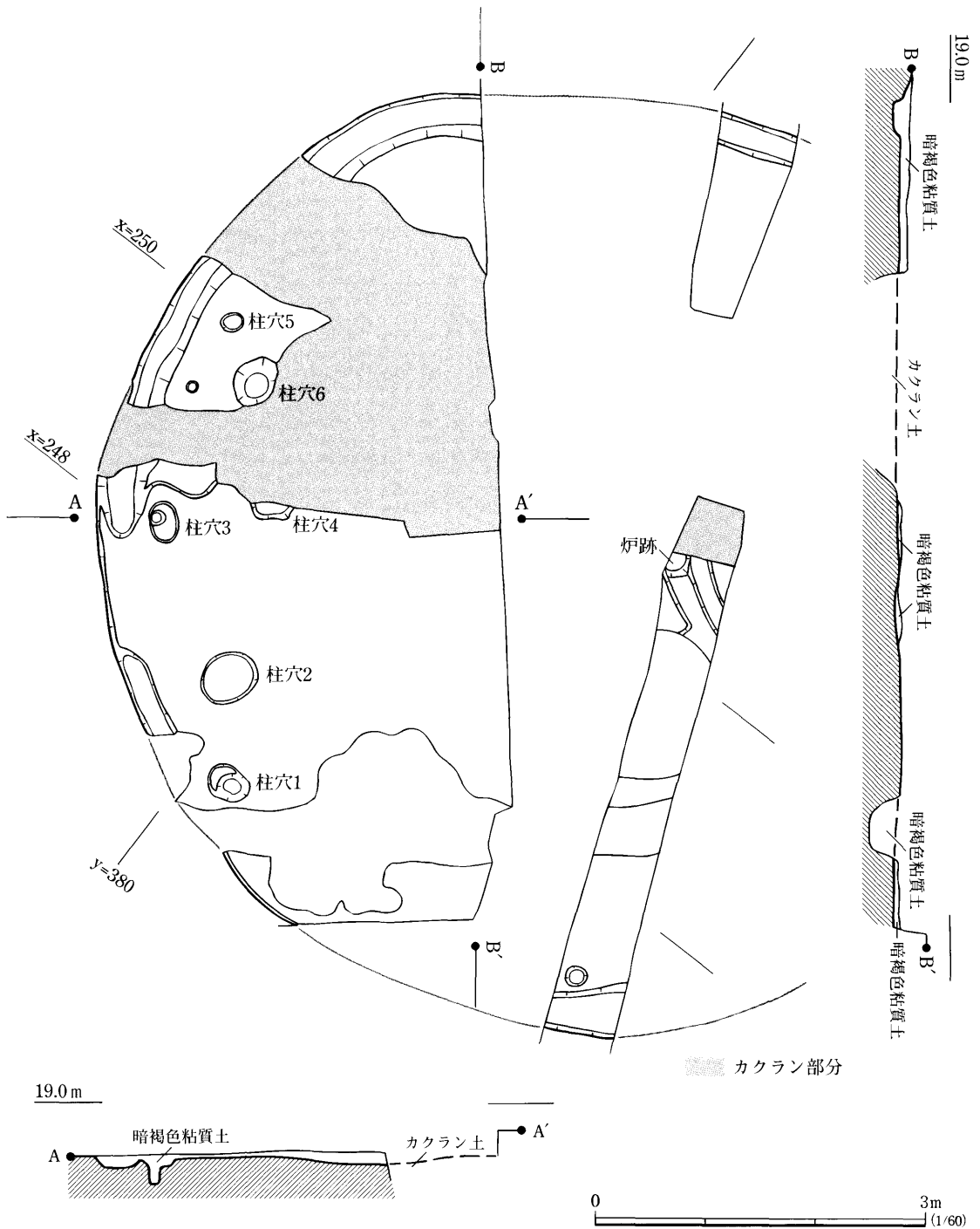


Fig.12 Bトレンチ第1号竪穴住居跡実測図

第2号竪穴住居跡 (Fig.13, PL.7・8)

Bトレンチの北西辺で検出した、直径約7.2mの円形竪穴住居跡である。住居跡の西半分は調査区外にある。検出した住居跡の東半分は、給水管と透水管によって著しい攪乱を受けていた。北側は第3号竪穴住居跡によって切られており、当初この第2号竪穴住居跡に伴うと考えた北側周溝は、最終的には第3号住居跡に伴うものと判断した。本住居跡の検出標高は18.54mであるが、著しい削平のため周壁は残っておらず、周溝のみを検出している。しかし、その周溝も断続的にしか検出できず、削平が周溝底面直上にまで及んでいることを示している。ただし、後世の水田による削平は、住居跡の北側のみであり、住居跡の南側上部には遺物包含層の堆積が認められた。遺物包含層は、弥生土器の他、土師器を含んでいた。第2号住居跡はかなり早い段階（おそらく古墳時代）に削平を受けていたことが窺える。住居跡の検出面となる土層は、第Ⅵ層：明黄灰色シルトである。

検出した床面には、第1号住居跡と同様のにごりが認められた。床面の明黄灰色シルトに、黒灰色粘質土がブロック状に混じっている。おそらく、生活面として使用され、踏み込まれた結果であろう。周溝は検出面から2～6cmの深さである。削平を受け周溝が浅くなる部分があり、また断続的である。住居跡の東側では周溝の一部が二重になる箇所がある。柱穴は住居跡内において13基検出しているが、このうち主柱穴になると考えられるものが8基である。ただし、このうちの6基については、2ヶ所でそれぞれ3基ずつが切り合っている。建て替えを示すものであろう。これらの柱穴は、いずれも平面形が円形を呈し、直径は30～40cm、深さは検出面から30～60cmである。

住居跡中央付近において炭・灰層の広がりを確認した。掘り下げた結果、2基の土坑と、浅い柱穴状の落ち込みとなった。このうち浅い柱穴状の落ち込みの性格については不明である。2基の土坑は炉跡と考えられ、浅い柱穴状の落ち込みについても、上面が削平された炉跡の可能性がある。炉跡1（北側の土坑）は長軸80cm、短軸70cmを測り平面形は円形に近い。深さは検出面から約20cmである。炉跡2（南側の土坑）は長軸75cm、短軸56cmを測り平面形は楕円形を呈する。深さは検出面から約20cmである。両者とも埋土は2層からなり、上層は茶灰色粘質土で下層は炭・灰である。周溝は二重になる部分があり、柱穴も切り合いがあることから、本住居跡は最低2回の建て替えが行われたと考えられる。

遺物は、削平が床面にまで及ぶため極めて少ない。したがって本住居跡の時期について、出土遺物からは明らかにできないが、第3号住居跡に切られることから、弥生時代後期以前のものと考えられる。

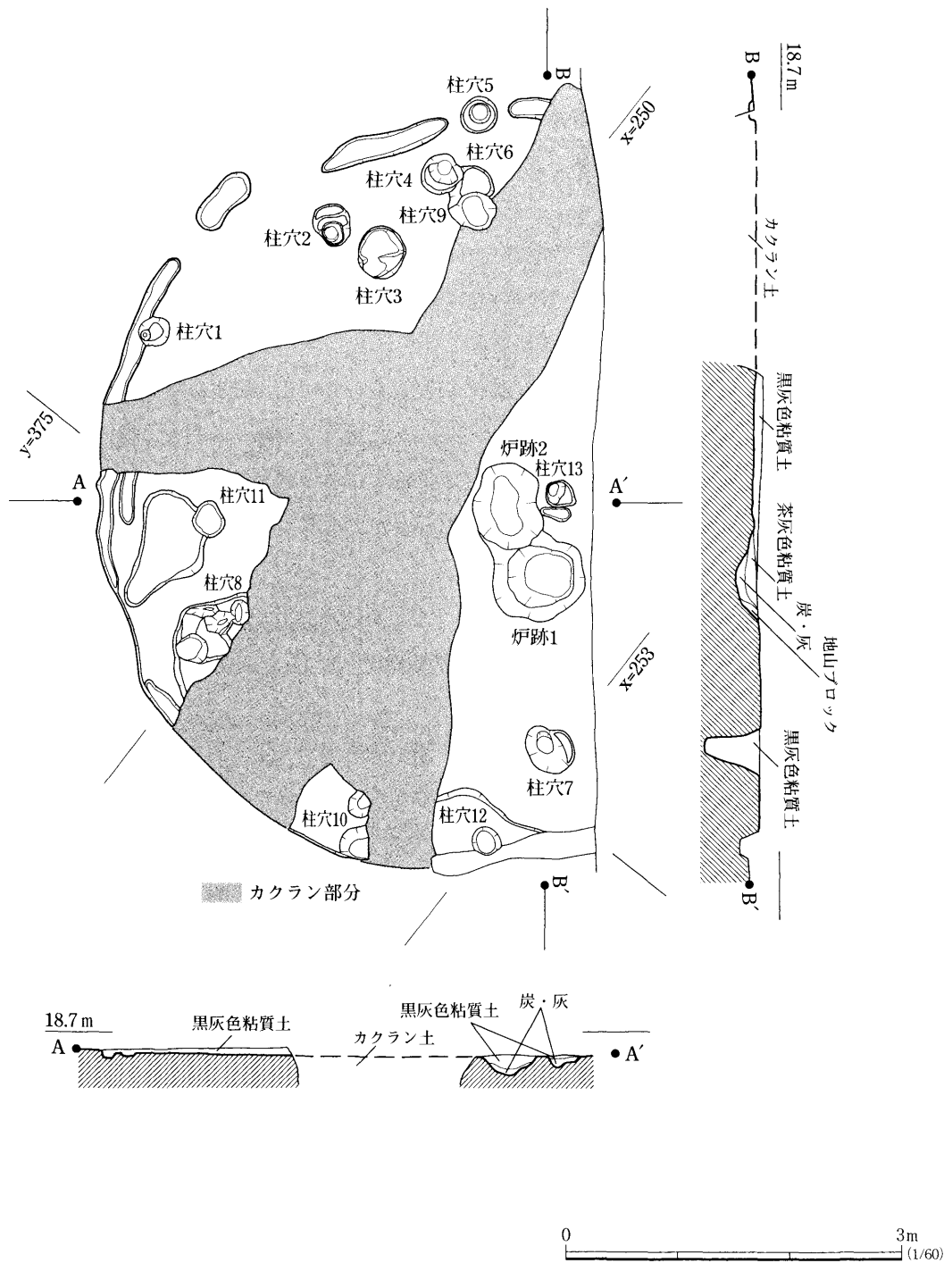


Fig.13 Bトレンチ第2号竪穴住居跡実測図

第3号竪穴住居跡 (Fig.14, PL.9 (1) (2))

Bトレンチの北隅と配線トレンチで検出した、推定直径約6.0mの円形竪穴住居跡である。第1号竪穴住居跡と第2号竪穴住居跡を切り込んでいる。検出当初、第3号住居跡の周溝を第2号住居跡のものと考えたため、第3号住居跡を落ち込み状遺構にとらえ、住居跡としての検出を行っていない。しかし、平坦な床面や多数のガラス小玉の出土、その後に行った配線トレンチの調査結果から、住居跡と判断するに至った。配線トレンチでは、住居跡北側の大半が攪乱を受けていた。検出標高は18.54mである。河川堆積土である明黄灰色砂礫（部分的に暗青色砂礫層）を検出面とする。

床面の標高は18.46mであり、高さ約10cmの周壁を残していた。埋土は暗褐色砂礫である。周溝はBトレンチでの第2号住居跡との切り合い部分と、配線トレンチで検出している。周溝幅は約20cmを測り、床面からの深さは約5cmである。周溝底面の標高は18.35mである。Bトレンチでは住居跡内で柱穴を2基検出したが、両者とも支柱穴になるとは考えられない。

遺物は、弥生時代後期の土器とともに、ガラス小玉が18点出土している。本住居跡の時期は、第1号竪穴住居跡を切ることから、弥生時代後期でもやや下がると思われる。

第4号竪穴住居跡 (Fig.14, PL.9 (3) (4))

配線トレンチで検出した推定直径約6.3mの円形竪穴住居跡である。調査区の幅が狭いため、北東の周壁及び周溝と、西の周壁を検出したにすぎない。また、北東の周壁部分のほとんどは、給水管によって攪乱されていた。検出標高は18.52mである。基盤となる土層は明黄灰色シルトであるが、住居跡の中央部分は明黄灰色シルトを切り込んだ黒灰色砂礫が基盤となっている。弥生時代以前の河川堆積土であろう。

床面の標高は18.44mである。床面からの周壁の立ち上がりは、B区では約8cmであるが、A2区では20cm近くを測る。埋土は黒灰色粘質土であるが、基盤層上面において厚さ約10cmに渡る黒灰色粘質土と明黄色灰色シルトのブロック土を検出している。貼り床とも考えられるが、周溝埋土との切り合いを観察する限りにおいて、このブロック土は周溝の埋土である暗褐色粘質土を覆っていた。第1号・第2号住居跡と同じく床面のにごりの可能性が高い。周溝を検出したのはA2区の南端部である。C区においては、周壁の立ち上がりを確認したが、周溝は認められなかった。周溝は幅約20cmで床面からの深さが約5cmであった。周溝底面の標高は18.40mである。住居跡内において4基の柱穴を検出した。弥生時代中期後半の土器片が出土している。

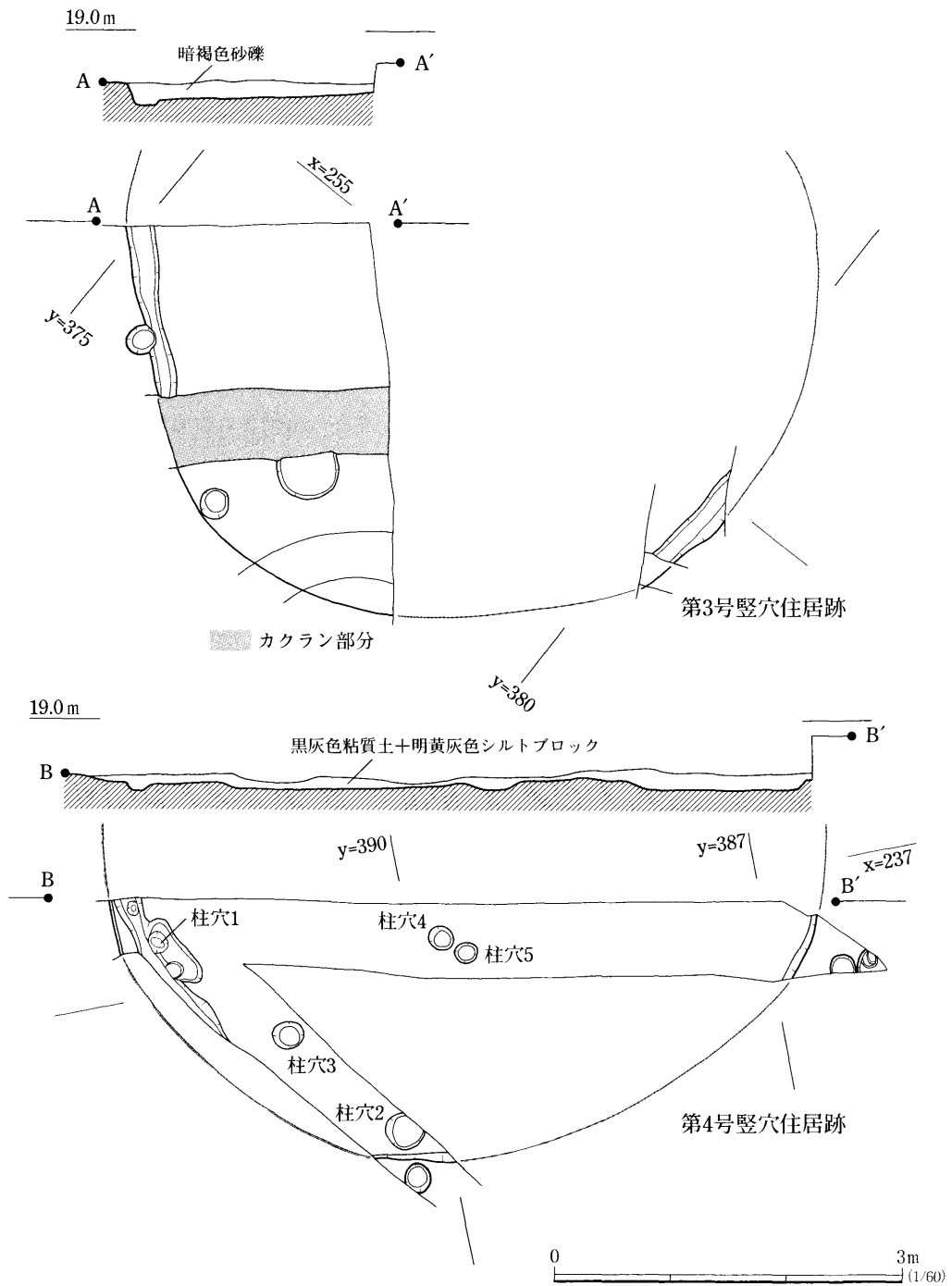


Fig.14 Bトレンチ第3・4号竪穴住居跡実測図

第1号溝 (Fig.15, PL.11)

第1号溝は北東－南西に軸をもつ溝である。Bトレンチで検出した弥生時代後期の第1号竪穴住居跡の埋土上面から切り込まれている。Bトレンチを中心として、配線トレンチのA2区及びC区で検出しているが、溝はさらに調査区外へと延びている。溝幅40～60cm、調査区内での延長12.9mを測る。北東側の底面標高は18.3mであるのに対し、南西側の底面標高は18.1mとやや低く、溝幅は北東側が約60cm、南西側が約40cmを測る。自然地形の傾斜方向から、北東から南西への流路方向が考えられる。第6号土坑の西に隣接した溝の底面には、甕が口縁部を下にして置かれていた。この甕や、他に出土した土器片の特徴は、弥生時代後期終末を示している。

本溝は、弥生時代後期の第1号竪穴住居跡が埋没してから掘削されたと考えられる。性格は不明であるが、北東側は微高地がさらに高くなっていると考えられ、そこにある住居跡の排水路であろうか。

第3号土坑 (Fig.15, PL.12 (1) (2))

Bトレンチの西側で、第1号溝に連結した状態で検出した隅丸方形の土坑である。規模は、長軸1.8m、短軸1.2mを測る。検出面の標高は18.5m。土坑の底面標高は18.28mである。土坑内の第1号溝の底面標高は18.22mと、溝底面のほうが土坑底面よりやや深い。また、土坑内の溝中央部には柱穴があった。柱穴の底面標高は18.1mである。埋土は2層からなり、第1層：黒色粘質土、第2層：黒灰色粘質土である。埋土の検討により、溝と土坑の間に切り合いを認めたが、一連のものである可能性も高い。

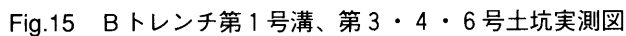
出土遺物にはタタキ甕胴部片があり、土坑の機能時期は第1号溝と同じく弥生時代後期終末と考えられる。性格は不明である。

第4号土坑 (Fig.15, PL.12 (3) (4))

Bトレンチ内の第1号溝のほぼ中央で検出した不定形な土坑である。第1号溝が幅90cmほどに広がる土器溜まりの可能性もある。底面においても幅は広がっているが、底面の標高は溝と同じである。埋土は2層からなり、第1層：灰黒色粘質土、第2層：暗茶灰色粘質土であるが、溝の埋土と基本的に同様である。

第6号土坑 (Fig.15)

Bトレンチ内の第1号溝の東側、第1号竪穴住居跡の埋土上面で検出した土坑である。第1号竪穴住居跡の埋土の上から切り込まれていたため、検出当初は輪郭が不明確であった。第1号溝が幅1.6mほどに広がる土器溜まりの可能性もある。



第1号土坑 (Fig.16, PL.13 (1) (2))

Bトレンチの西側、落ち込み1の東肩に接して検出した、平面形が楕円形を呈する土坑である。長軸は1.3m、短軸は80cmを測る。検出面の標高は18.4mで、深さは検出面から約25cmを測る。断面形は浅い皿状となる。底面標高は18.15mである。埋土は2層からなり、第1層：黒色粘質土、第2層：黒灰色粘質土である。上面で高坏脚部と甕口縁部、自然石などを検出している。出土した高坏脚部の特徴は、弥生時代後期後半を示す。

第2号土坑 (Fig.16, PL.13 (3) (4))

Bトレンチのほぼ中央、給水管と暗渠によって分断された状態で検出した土坑である。平面形は不定形な長楕円を呈すると考えられるが、西側を給水管によって切られるため、全形は不明である。長軸2m、短軸は50cm以上である。深さは検出面から約30cmで、南側のみにテラスをもった、変形二段掘りの土坑である。一段深くなった北側底面では、やや南よりに柱穴が検出された。柱穴の深さは土坑底面から約40cmである。

第5号土坑 (Fig.16, PL.14 (1))

Bトレンチの南西辺で検出した不定形な土坑である。大部分は西側の調査区外にあると考えられ、全形は不明である。検出面の標高は18.38mである。深さは検出面から約4cmほどしかなく、底面標高は18.34mである。

第2号溝 (Fig.16, PL.14 (2))

配線トレンチのC区で検出した溝である。北側にコーナーがあり、長楕円形を呈する土坑の可能性もある。長さは1m以上、幅は70cmを測る。検出面の標高は18.4mであり、深さは検出面から約40cmである。底面標高は18.86mであった。弥生時代中期後半の土器が出土した。

落ち込み1 (Fig.16, PL.14 (3) (4))

Bトレンチの南隅及び配線トレンチのC区で検出した落ち込みである。埋土の下層は砂礫からなり、河川と考えられる。調査したのは北肩のみであり、全体の規模については全く不明である。仮にE区で検出した落ち込みをBトレンチ落ち込み1の南肩とすると、幅は30mを超えるが、妥当性に疑問を残す。北肩はほぼ垂直に落ち込んでいる。埋土は大きく3層に分かれる。上層の黒灰色粘質土は古墳時代前期の遺物を包含している。下層の灰黒色砂礫からは弥生時代中期後半の土器が出土している。検出面の標高は18.5mである。深さは河床面を確認できた地点で検出面から約70cmを測るが、河床面はさらに南側へと落ち込んでいた。

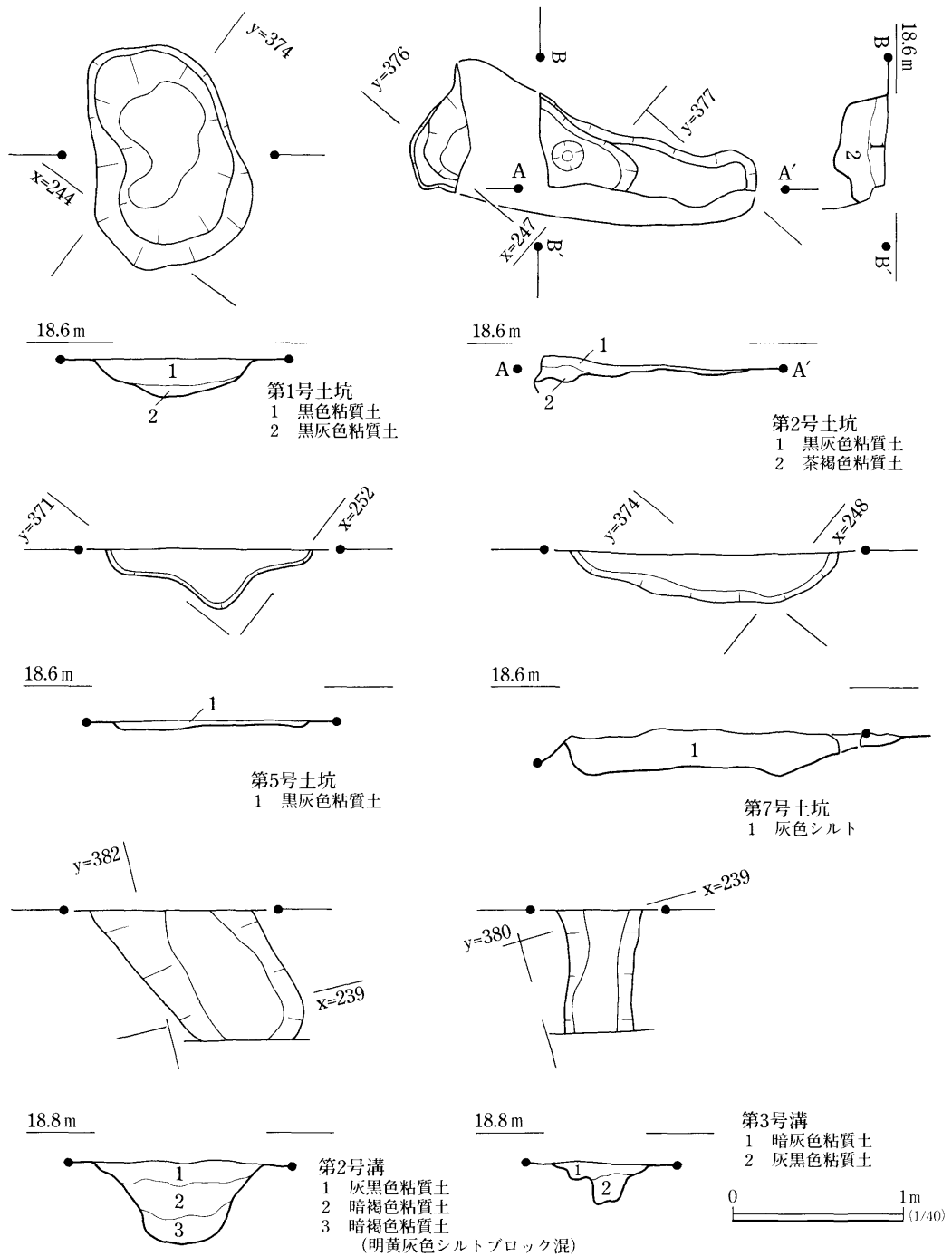


Fig.16 Bトレンチ第1・2・5・7号土坑、配線トレンチ第2・3号溝実測図

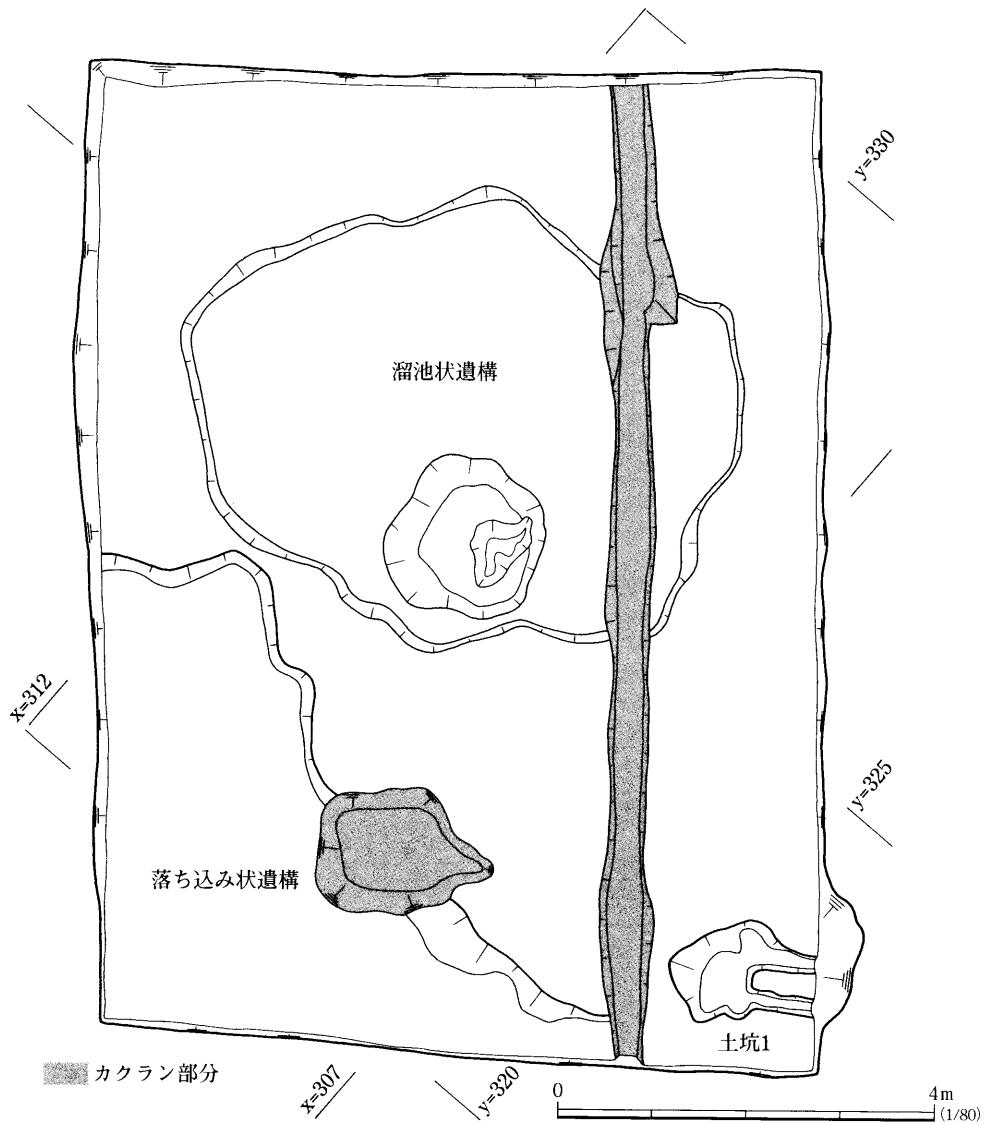


Fig.17 Cトレンチ遺構配置図

3 Cトレンチ (Fig.17・18, PL.15)

Cトレンチは、陸上競技場との境にあたるサッカー・ラグビー場の北端に位置する。遺構は、調査区の南端で2条の小溝が連結する小土坑を、調査区の西側で古代から中世にかけての土器を含んだ浅い落ち込み状遺構を、調査区中央で溜池状遺構を検出している。調査は5月30日から6月10日まで実施した。

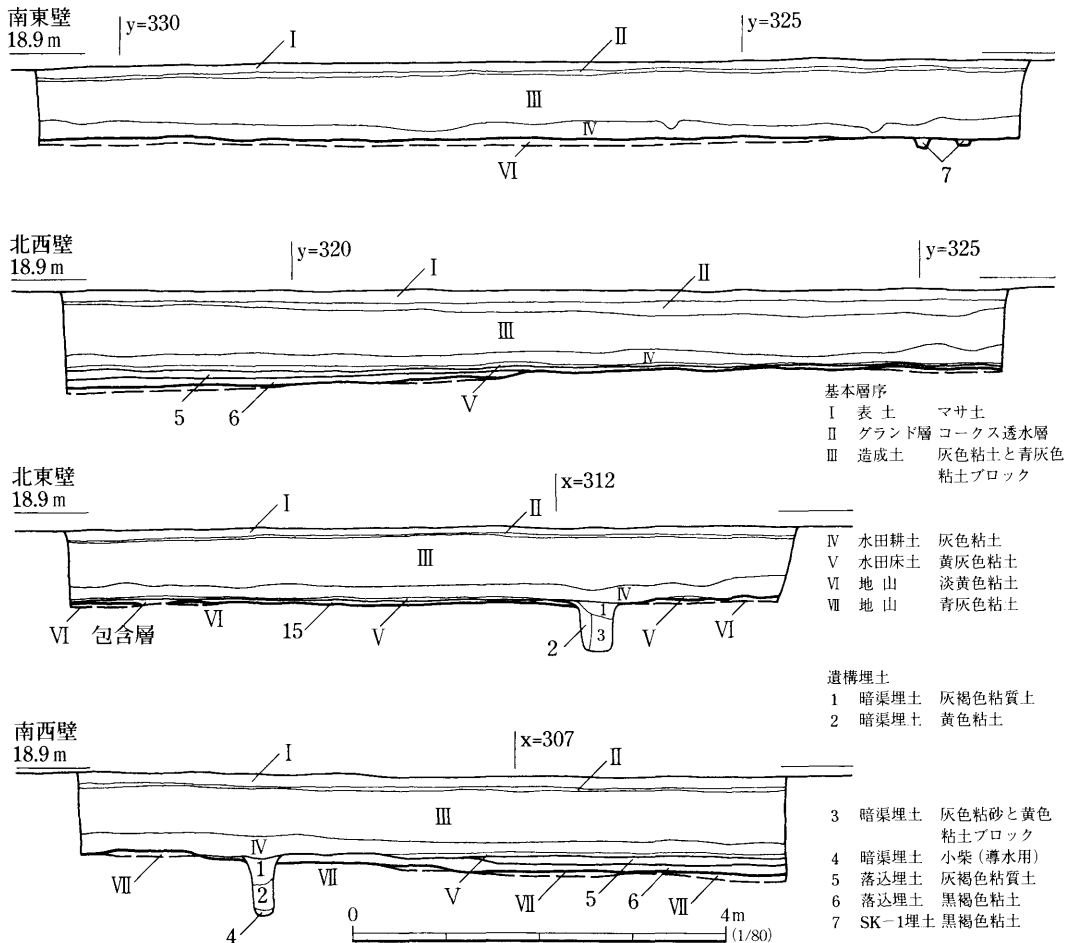


Fig.18 Cトレンチ壁面土層断面図

(1) 層序

基本層序は次の順である。第Ⅰ層：マサ土、第Ⅱ層：コークス透水層、第Ⅲ層：造成土、第Ⅳ層：灰色粘土（水田耕土）、第Ⅴ層：黄灰色粘土（水田床土）、第Ⅵ層：淡黄色粘土。

第Ⅲ層は、グラント造成時に平坦地を確保する目的で、地形的に低まったグラント西側のみに持ち込まれたものらしい。Eトレンチと同じグラント西側のFトレンチでも確認される。厚さは約50cmである。第Ⅳ層と第Ⅴ層は、統合移転前の水田層である。遺構は第Ⅴ層を除去した第Ⅵ層の上面、標高18.0mで検出した。また、トレンチの西から北にかけては、第Ⅴ層と第Ⅵ層の間に、わずか数cmではあるが遺物包含層を挟んでいる。このことから、旧地形が西側に向かって傾斜していると判断できる。

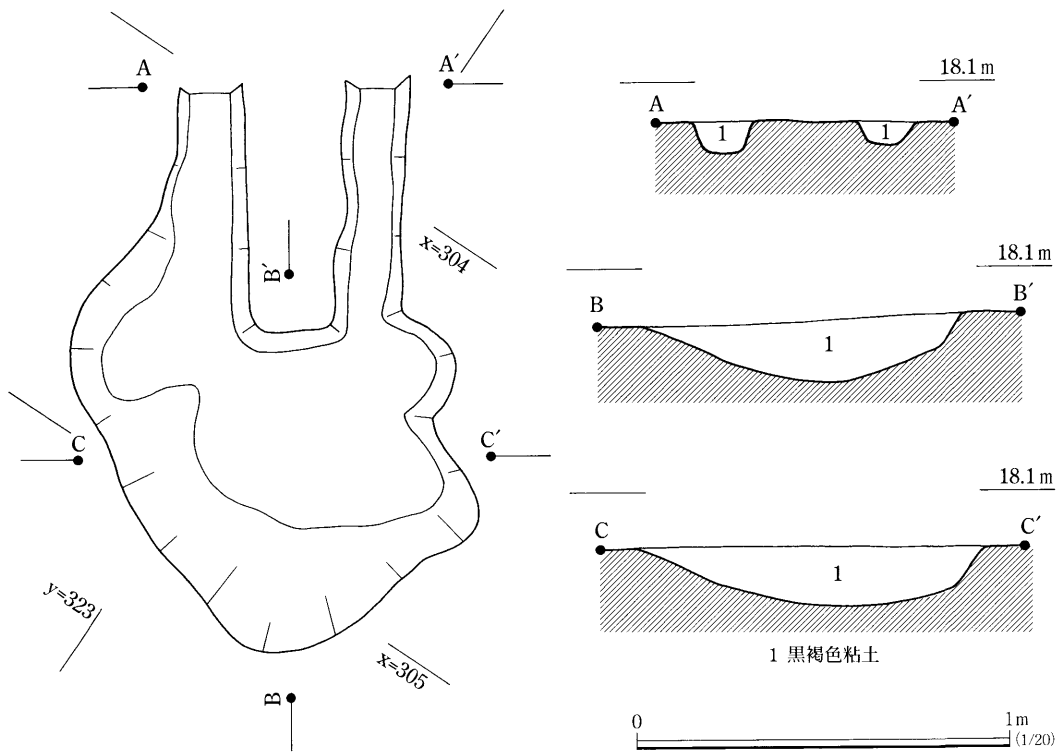


Fig.19 Cトレンチ第1号土坑実測図

(2) 遺構

第1号土坑 (Fig.19, PL.16 (1) (2))

トレンチ南端で検出した不定形の土坑である。長軸約1.0m、短軸約0.8mを測る。検出面の標高は18.0mである。深さは約20cmで、底面標高は17.78mである。南側には、平行する2条の小溝が取り付く。小溝は幅20cmである。深さは検出面から約5cmで、底面標高は17.95mを測る。埋土は、土坑・溝ともに黒褐色粘土の単層である。

落ち込み状遺構 (PL.16 (3))

トレンチ西側で検出した浅い落ち込みで、全形は不明であるが、西側へ谷状に落ち込んでいる可能性がある。検出面の標高は17.9mで、調査区内で最も深い西端の底面標高は17.7mである。埋土は2層に分かれ、上層が灰褐色粘質土、下層が黒褐色粘土である。

溜池状遺構

調査区の中央やや北東寄りで検出した楕円形の落ち込みである。暗渠に切られた形で検出したが、埋土は暗渠と同じく灰色粘砂と黄色粘土のブロック土であり、暗渠と同時期か、それ以前であっても近接した時期と考えられる。長軸約6.0m、短軸約5.0mを測る。

Dトレンチ

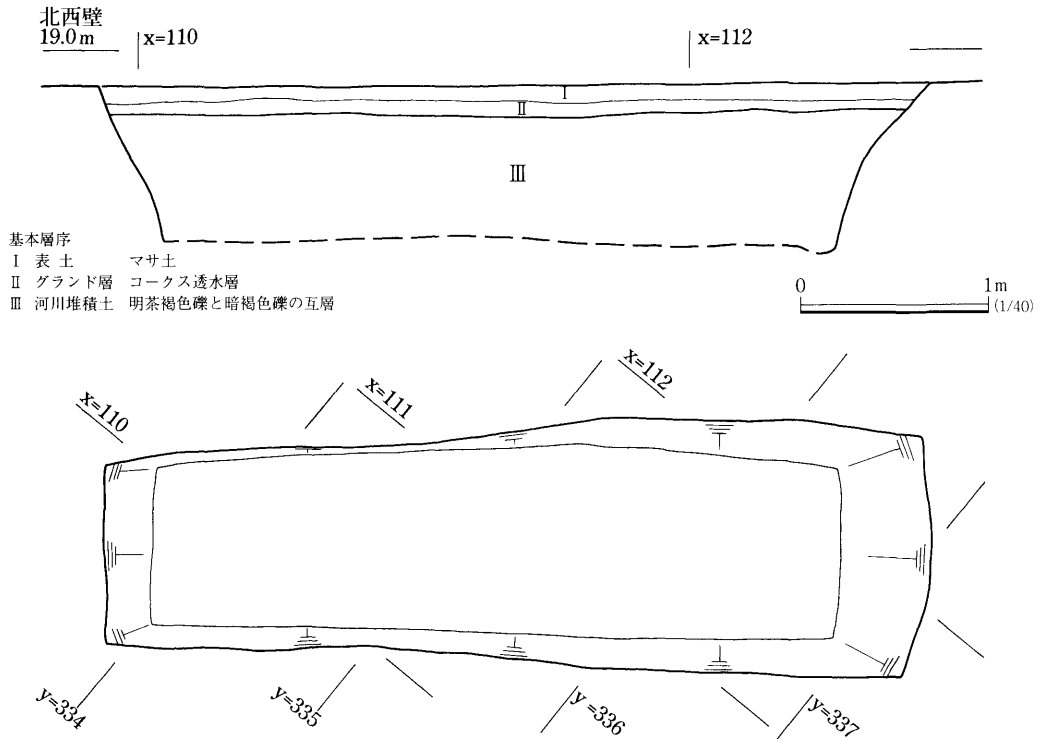


Fig.20 Dトレンチ実測図

4 Dトレンチ (Fig.20, PL.17)

Dトレンチはグラント南端、南門のすぐ西側に設定したトレンチである。調査は5月30日から行う予定であったが、表層を除去した途端、礫層となり湧水が激しく、水中ポンプの排水量を上回ったため、一旦調査区を埋め戻した。Dトレンチの位置が地下水の本流にあたると予想されたため、7月13日からの再調査は重機のバケット幅の掘削にとどめ、土層の確認のみを目的とした。調査区は幅1m、長さ4mで、面積約4m²の小規模なものとなった。遺構は全く認められず、7月15日に埋め戻しを行った。

(1) 層序

層序は、第Ⅰ層：マサ土と第Ⅱ層：コークス透水層からなるグラント層の直下が、河川堆積土の第Ⅲ層：明茶褐色礫と暗褐色礫の互層となっており、激しい湧水をみた。第Ⅲ層はより下位に続くが、湧水を水中ポンプ2台で辛うじて排水していたため、安全管理面から現地表下約80cmのところ掘削を中止した。

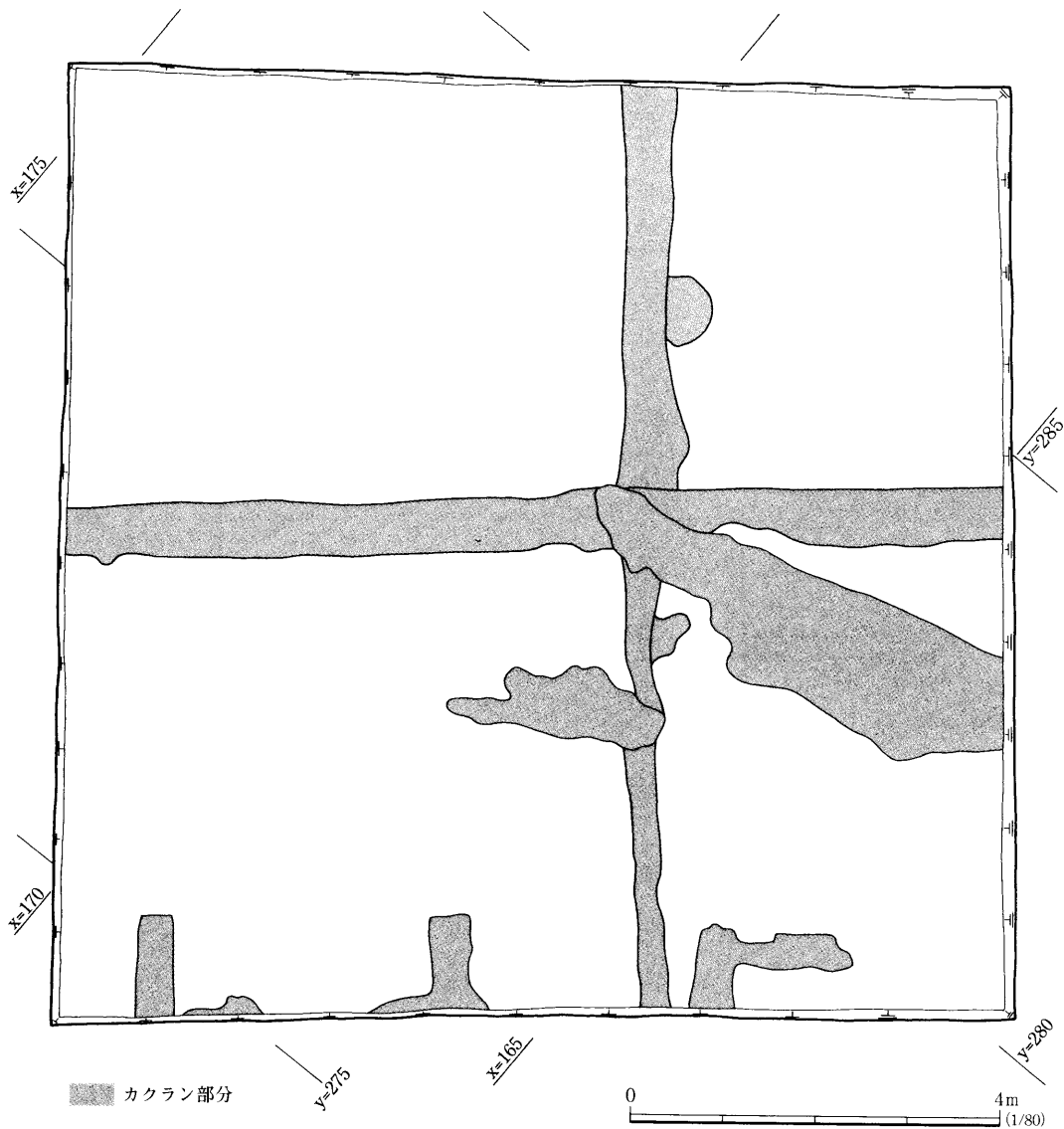


Fig.21 E トレンチ遺構配置図

5 E トレンチ (Fig.21・22, PL.18)

E トレンチはグランド南西部、D トレンチとF トレンチの並びの中央に設定した10m×10mのトレンチである。調査は6月10日から6月21日まで実施し、7月13日に埋め戻しを行った。縦横に近世暗渠が巡らされており、顕著な遺構は認められなかったが、調査区の全体に渡り黒色粘質土の遺物包含層が広がっていた。

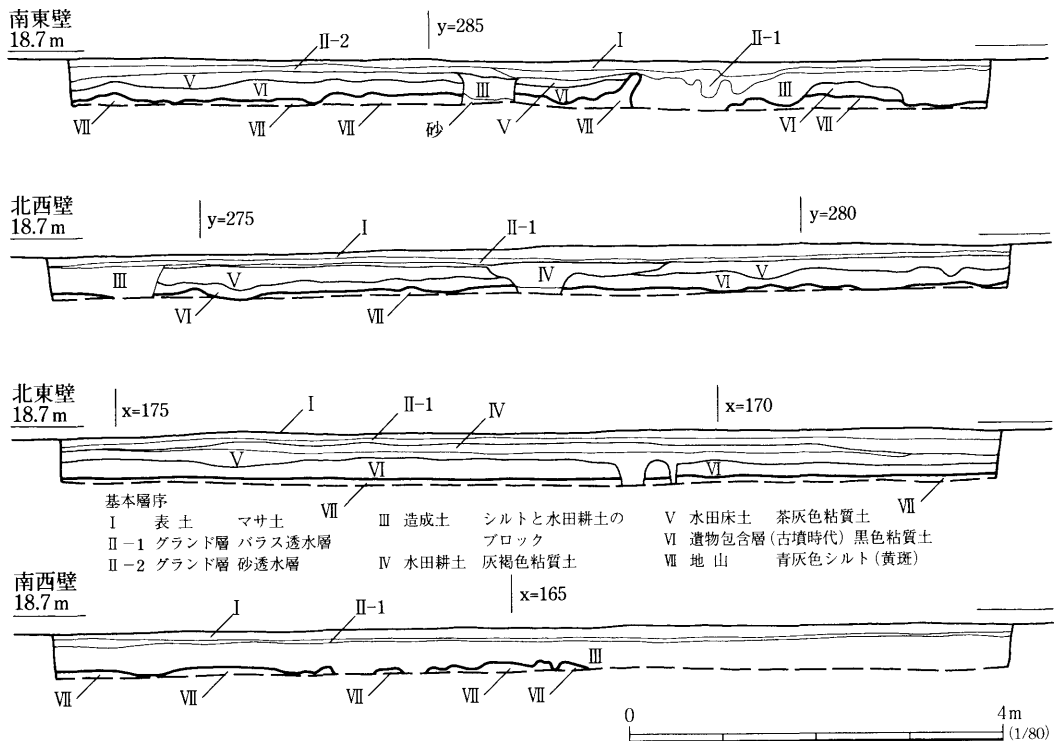


Fig.22 E トレンチ壁面土層断面図

(1) 層序

基本層序は以下のとおりである。第Ⅰ層：マサ土（表土）、第Ⅱ層：バラスと砂の透水層、第Ⅲ層：シルトと第Ⅳ層のブロック土（造成土）、第Ⅳ層：灰褐色粘質土（水田耕土）、第Ⅴ層：茶灰色粘質土（水田床土）、第Ⅵ層：黒色粘質土（遺物包含層）、第Ⅶ層：青灰色シルト（地山）。

地山となる第Ⅶ層：青灰色シルトの検出面は標高18.2mである。上面には遺物包含層である第Ⅵ層：黒色粘質土が厚さ約20cmに渡って堆積していた。第Ⅵ層と第Ⅶ層の境では、黒色粘質土が青灰色シルトに溶け込んでマーブル状になっていた。第Ⅵ層が第Ⅶ層を強い勢いで浸食しながら堆積していったことを示すと考えられる。遺物包含層である第Ⅵ層に含まれる炭化物は少なく、人為的形成というよりは洪水など自然的要因によって形成された可能性が高い。A トレンチ及び配線G区で検出した弥生時代後期終末の河川の氾濫原であった可能性も考えられる。ただし、E トレンチの第Ⅵ層は、須恵器出現直前の土師器を含んでおり、前述の河川より新しい年代が与えられる。

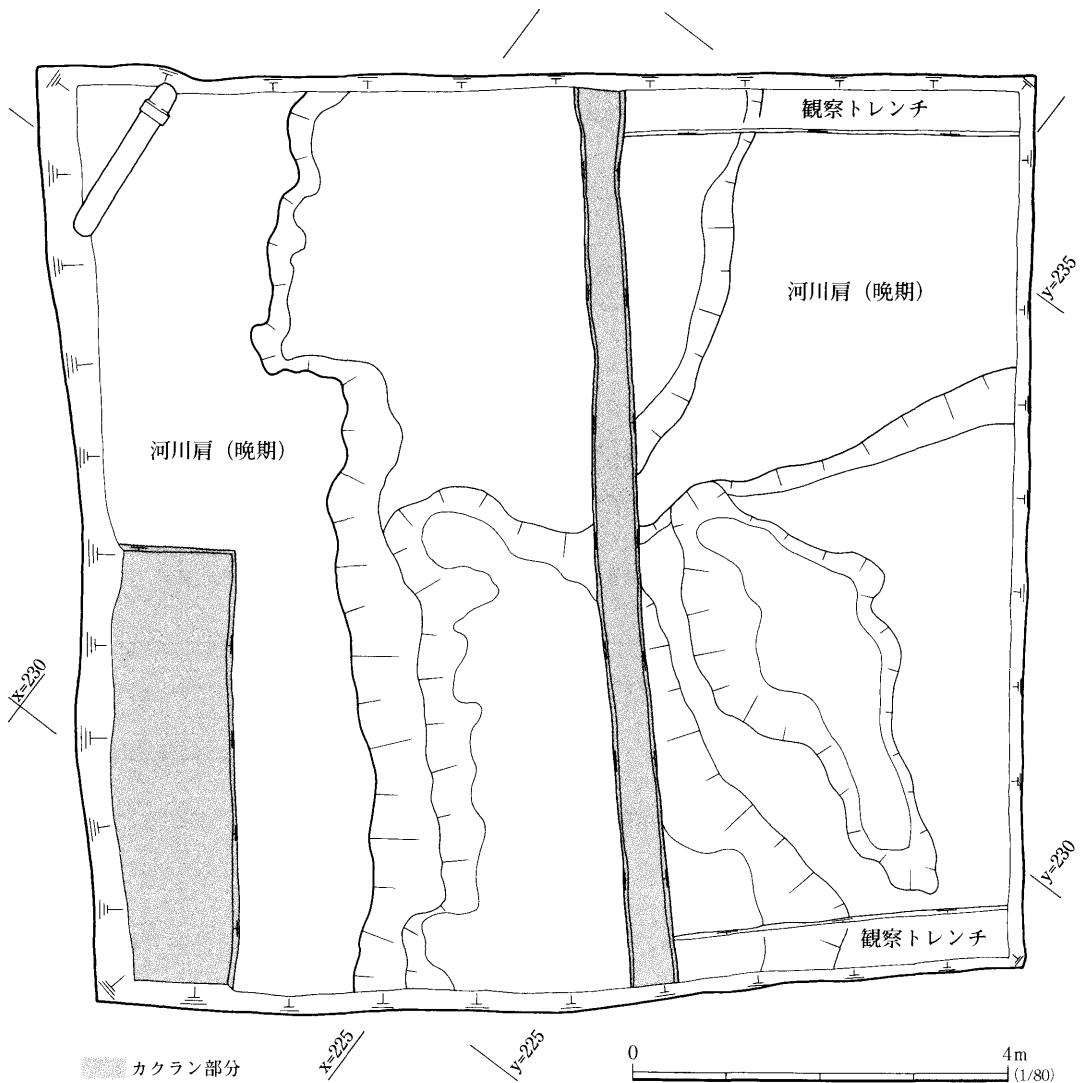


Fig.23 F トレンチ遺構配置図

6 F トレンチ (Fig.23・24, PL.19・20)

F トレンチはグランドの西端に設定した10m×10mのトレンチである。調査は6月21日から7月8日まで行い、7月13日に埋め戻しを行った。

縄文時代の河川を検出した。河川は青灰色シルト及び青灰色砂礫を河床とする上層と、それ以下の下層の2時期に区分できる。上層から晩期土器が、下層から後期土器が出土した。なお、Fig.23には、北西肩が検出できた、河川上層(縄文時代晩期)を図示している。

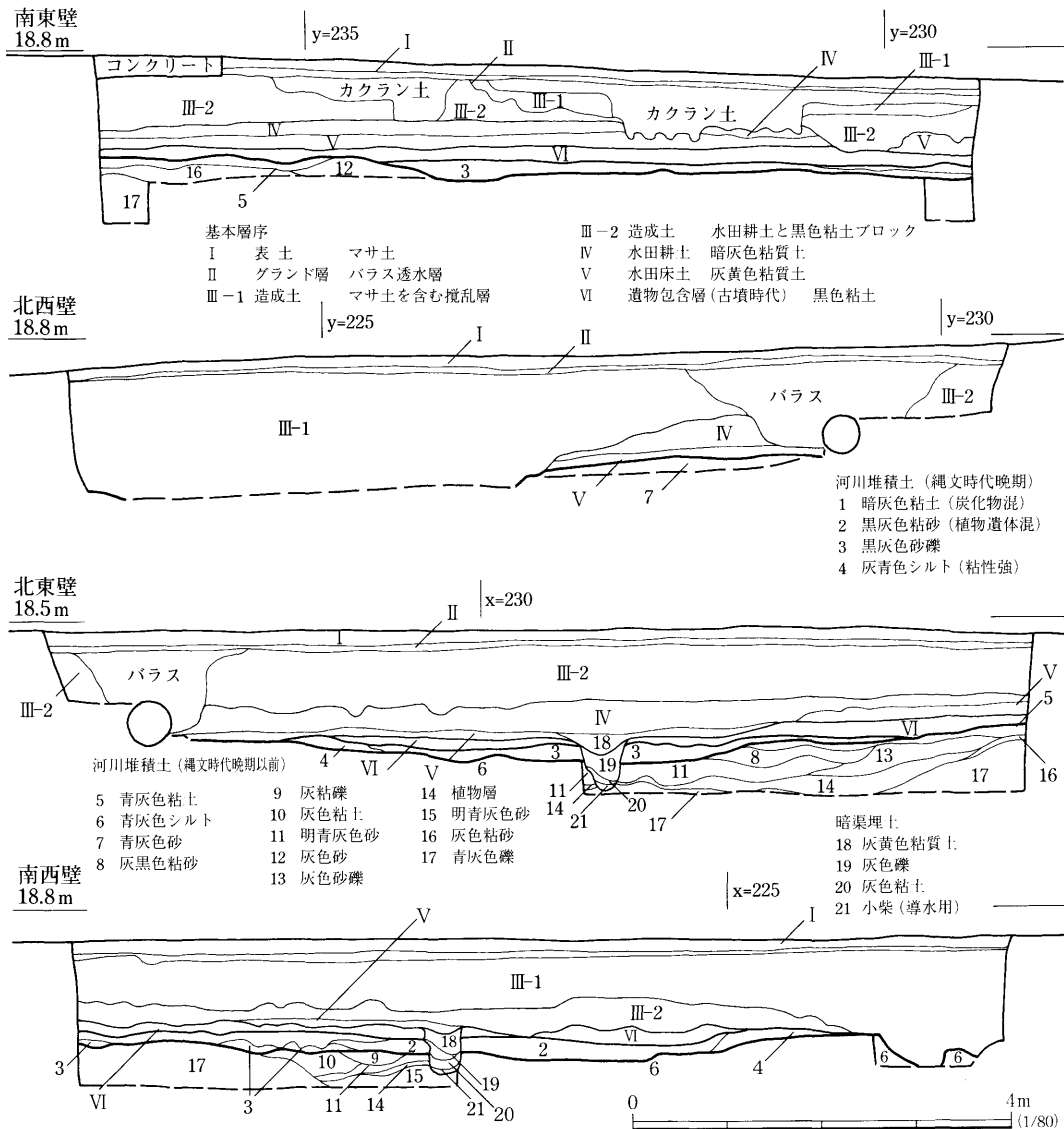


Fig.24 F トレンチ壁面土層断面図

(1) 層序

水田層直下に厚さ約10cmの第VI層：黒色粘質土の遺物包含層が広がっていた。弥生土器や土師器を含み、Eトレンチで検出した遺物包含層と一連のものと考えられる。以下は河川堆積土で、上下2つのまとまりで捉えられる。上部は縄文時代晩期の河川堆積土(1~4)、下部は晩期以前の河川堆積土(5~17)である。上部の河川は、下部の河川堆積土(5・6)を肩として検出する。7以下は砂礫層が続き、若干の縄文時代後期の土器片を出土している。

7 配線トレンチ (Fig.25, PL.21)

前述したように、照明塔への電源を引き込むために、電線の地中埋設がグラウンド内で計画された。高圧電線のため現地表から50cm以上の掘削が必要であり、幅は1mが要求された。検討の結果、BトレンチとEトレンチの間には暗渠が通っており、この暗渠部分を掘削することによって周囲の埋蔵文化財への影響を極力小さくしようとする妥協策が取られた。結果的に、グラウンドの中央にトレンチを入れる形となった。E区は長さ25m、F区は長さ20m、G区は長さ22mのトレンチである。調査期間は11月7日から12月2日までである。

(1) 層序

基本層序は次の順である。第Ⅰ層：マサ土、第Ⅱ層：コークスを主とするグラウンド透水層、第Ⅲ層：暗褐色粘質土を主とする水田耕土、第Ⅳ層：灰黄色粘質土（水田床土）、第Ⅴ層：灰褐色粘質土を主とする水田耕土、第Ⅵ層：暗灰褐色粘質土（水田床土）、第Ⅶ層：黒灰色粘質土（遺物包含層）、第Ⅷ層：青灰色シルト（地山）、第Ⅸ層：明黄灰色粘土（地山）、第Ⅹ層：暗灰色砂礫（地山）

I・Ⅱ層は大学のグラウンド造成に関係するもの、Ⅲ～Ⅵ層は統合移転以前の水田層である。第Ⅶ層が遺物包含層であるが、E区西端・F区・G区東半では検出していない。後世の開墾により削平されたのであろう。標高18.5～18.6mで第Ⅷ層を検出している。これも、遺構面が一定の高さを保っていたと考えるよりは、後世の浸食や開墾の著しさを示すものであろう。F区は第Ⅷ層の検出面が18.6mと他の調査区と比較して若干高いが、包含層及び遺構は検出していない。F区付近は本来微高地であり、遺構は削平されたと考えべきであろう。なお、E区西半は深い落ち込みになっており、遺物を含む埋土が厚く堆積していた。

(2) 遺構

配線トレンチE～G区は、トレンチを暗渠上に設定したこともあり、遺構の検出は極めて少ない。E区では東半のほとんどが深い落ち込みになっている。この落ち込みは、Bトレンチで検出した弥生時代中期後半の落ち込み1と埋土が近似する。

G区では河川を2条検出している。調査区東側の河川1は河幅が約5m、深さは検出面から30cm以上あるが河床を検出していない。河川1の西隣にある河川2は河幅が約1.2m、深さは約20cmである。河川1が本流で、河川2は支流であろう。河川1から複合口縁壺が出土していることから、Aトレンチで検出した河川につながると考えられる。

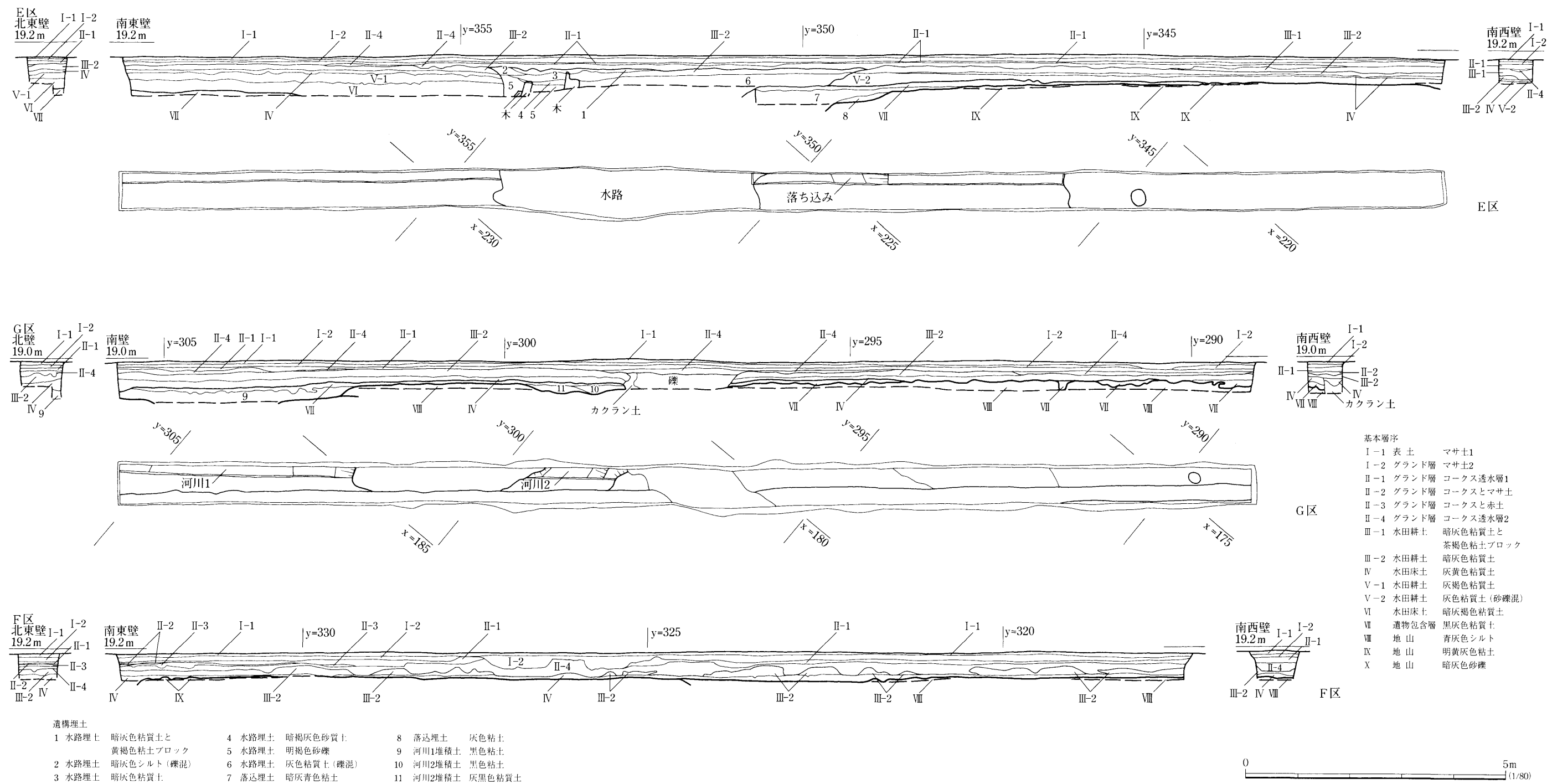


Fig.25 配線トレンチ E・F・G区実測図

8 小結

本調査は、吉田構内南西部に位置するサッカー・ラグビー場の周囲及びその中央部で実施した。結果的に、土層や埋蔵文化財の有無を広範囲に確認でき、また旧地形を復元する大きな手がかりとなった。グランド北東部のBトレンチ付近と、グランド中央の配線トレンチF区付近に、南東から北西に延びる二つの微高地があり、その間には谷状の大きな落ち込みのあることが判明した。また、配線トレンチF区付近の微高地の南側にも低地部があり、G区では弥生時代後期から古墳時代前期の土器を含んだ河川を検出した。この旧地形に対応するように遺構及び遺物の分布が認められた。検出した遺構について、時代を追ってまとめる。

(1) 縄文時代

Fトレンチにおいて、縄文時代後期の河川を検出した。この河川は、現在吉田遺跡で遺構検出面としている黄色系あるいは青色系シルト層の下位で確認された。流路方向は不明である。この河川の上面に、北から南に流れる縄文時代晩期の河川を検出した。Bトレンチにおいても、南東から北西に流れる縄文時代晩期の河川を検出している。これらの河川肩部の堆積土がシルトであり、このシルトが吉田遺跡低地部の弥生時代の遺構面を形成していることが判明した。

(2) 弥生時代

Bトレンチと配線トレンチA1・A2・C区において、4棟の円形竪穴住居跡を検出した。うち2棟は中期、他の2棟が後期のものと考えられる。いずれも削平が著しく残存状況は良くない。最大のものは後期の第1号竪穴住居跡で、直径8.4m、推定床面積約54m²である。なお、後期の2棟の竪穴住居跡から、合計37個のガラス小玉が出土している⁹⁾。その他、Bトレンチ及び配線トレンチC区からは、弥生土器を含んだ土坑7基と溝2条を検出した。

(3) 古墳時代

Bトレンチにおいて、弥生時代後期の第1号竪穴住居埋没後に上面から掘り込まれた小溝を検出した。小溝には土坑が連結しているが、両者の機能的関係は不明である。グランド北東部に設定したAトレンチとグランド中央の配線トレンチG区では、弥生時代後期から古墳時代前期の土器を多量に含んだ河川を検出しており、これらは一連のものと考えられる。また、この河川は、より低い南東部側にたびたび氾濫したと考えられ、EトレンチやFトレンチにおいて、洪水堆積土である黒色粘質土層を検出している。

(4) 古代

グラント北西隅のCトレンチにおいて、古代の土器を含んだ落ち込み状遺構を検出している。性格については不明である。

今回の調査分を加えると、遺跡保存地区から教育学部講義実験棟にかけての微高地では、弥生時代中期から古墳時代前期の堅穴住居跡が¹⁰⁾30棟検出されたことになる。その内訳は、遺跡保存地区¹⁰⁾21棟、昭和56年度教育学部校舎新営¹¹⁾4棟、昭和59年度ラグビー場防球ネット¹²⁾1棟、平成6年度屋外照明施設新設4棟である。これらの調査は微高地上全体には及んでおらず、微高地全体では堅穴住居跡の棟数はさらに増加するものと考えられる。今回検出したBトレンチの状況は、堅穴住居跡の切り合いはあるものの、遺構密度は遺跡保存地区と比較すると希薄で、地形的にも微高地の末端であることを考えるならば、集落の中心はBトレンチの北東側から遺跡保存地区にかけて存在したと想定される。

また、今回の調査ではグラント中央においても微高地を確認しているが、遺構及び遺物を検出することはできなかった。しかし、山口大学吉田遺跡調査団刊行の『吉田遺跡発掘調査概報』¹³⁾には、第Ⅲ地区南区とする南門周辺において、河川北側で弥生時代中期から後期にかけての遺構が検出されたとの記述がある。南区で検出した河川の北側は、位置的にはグラント中央付近にあたり、配線トレンチF区で検出した微高地の末端と考えられる。とすれば、配線トレンチF区では遺構が認められなかったが、これは微高地が後世に大きく削平されたためで、本来は遺構が分布していた可能性が高い。南区の出土遺物から、遺跡保存地区の微高地と谷を挟んだグラント中央の微高地にも、弥生時代中期から古墳時代前期の生活域が広がっていたと考えられる。遺跡保存地区からサッカー・ラグビー場にかけては、弥生時代中期から古墳時代前期の大規模な集落が形成されていたのであろう。

微高地に対し、低地部では弥生時代後期から古墳時代前期にかけての土器を含む河川を検出した。河川堆積土に含まれる遺物は水漬け状態であったため、土器は器面が美しく保たれ、植物遺体は腐食せず残っていた。これらは生活域である微高地上から流れ込んだものと考えられる。河川の大部分は、未だグラント下に眠っている。将来、有機質遺物を調査研究することによって、往時の自然環境と生活を総合的に復元する大きな手がかりを得ることが可能であろう。

[注]

- 1) 山口大学吉田遺跡調査団『山口大学構内吉田遺跡発掘調査概報』（山口大学、1976年）
- 2) 山口大学埋蔵文化財資料館「山口大学吉田構内遺跡保存地区の発掘調査（昭和57年度）」（『山口大学構内遺跡調査研究年報Ⅴ』、1986年）
- 3) 山口大学埋蔵文化財資料館「山口大学吉田構内遺跡保存地区の発掘調査（昭和59年度）」（『山口大学構内遺跡調査研究年報Ⅵ』、1987年）
- 4) 山口大学埋蔵文化財資料館「山口大学吉田構内遺跡保存地区の発掘調査（昭和60・61年度）」（『山口大学構内遺跡調査研究年報Ⅶ』、1990年）
- 5) 山口大学埋蔵文化財資料館「教育学部構内H-16区の発掘調査」（『山口大学構内遺跡調査研究年報Ⅰ』、1982年）
- 6) 山口大学埋蔵文化財資料館「吉田構内ラグビー場防球ネット設置に伴う発掘調査」（『山口大学構内遺跡調査研究年報Ⅲ』、1985年）
- 7) 河村吉行「山口大学構内の埋蔵文化財の分布」（『山口大学構内遺跡調査研究年報Ⅹ』、1992年）
- 8) 第1号竪穴住居跡出土としたものには、第1号溝出土のもの（228～232）を含む。これは、第1号溝からのガラス小玉の出土が、第1号溝が第1号竪穴住居跡を切り込んだ部分付近に限られることから、本来住居跡内にあったガラス小玉が流れ込んだと判断したためである。
- 9) 前掲注8参照
- 10) 山口大学埋蔵文化財資料館「吉田構内遺跡保存地区の発掘調査（総括）」（『山口大学構内遺跡調査研究年報Ⅸ』、1991年）
- 11) 前掲注5文献
- 12) 前掲注6文献
- 13) 前掲注1文献

第3節 出土遺物

1 Aトレンチ出土遺物

Aトレンチでは、河川から縄文時代晩期～古墳時代前期の土器が大量に出土した。遺物は、排水溝をはさんで南側を1区、北側を2区とし、各層ごとに取り上げたが、各時期の土器が混在しているため、一括して時期別に分けて説明を行うこととする。地区、層位については観察表を参照されたい。

(1) 縄文時代晩期 (Fig.26-1～4, PL.22 (1))

わずか4点であるが、縄文時代晩期中葉の土器が出土している。

1は深鉢胴部片である。外面には二枚貝条痕を施し、内面は条痕をナデ消している。岩田四類¹⁾cに相当する。

2・3は浅鉢の口縁部～胴部片である。2は口唇部をカマボコ状に肥厚させ、胴部はヘラ状工具により抉りを施す。口縁部内面もヨコミガキによって抉りが施されている。外面にはヨコミガキが施される。3は口縁部に山形状の突起があり、内面に抉りを施す。内外面とも風化が激しい。ともに岩田四類cに伴う浅鉢で、岩田四類bに相当する。4は底部である。浅鉢の底部の可能性が高い。凹底を呈する。風化が激しい。

(2) 弥生時代前期 (Fig.26-5・28-8, PL.22 (2)・24 (2))

5は甕の胴部である。外面にタテハケの後、4条のヘラ描沈線を施す。煤が付着している。内面はナデが施される。28は甕底部である。やや上底で外面にタテハケを施す。

(3) 弥生時代中期

北部九州系壺 (Fig.26-6～10, PL.22 (2))

6は長頸壺の頸部である。外面は丹塗りで、タテミガキを施す。7～9は鋤先口縁壺である。7・8はヨコナデにより口唇部を凹ませ、9は丸くおさめる。10は広口壺である。ヨコナデにより口唇部を跳ね上げる。

垂下口縁壺・在地系壺 (Fig.26-11～14, PL.22 (2)・23)

11は口縁部である。ヨコハケの後山形文とヘラ状工具による刺突が施される。12は頸部で、貼付突帯が剥離している。13は口唇部を刻み、口縁部内面を肥厚させ、2ヶ所で穿孔する。頸部は2条のヘラ描沈線と3条の貼付突帯を持ち、その上から逆U字状の浮文を施す。外面はナデで内面はヨコミガキである。14は胴部で、2条一組の貼付突帯を持つ。

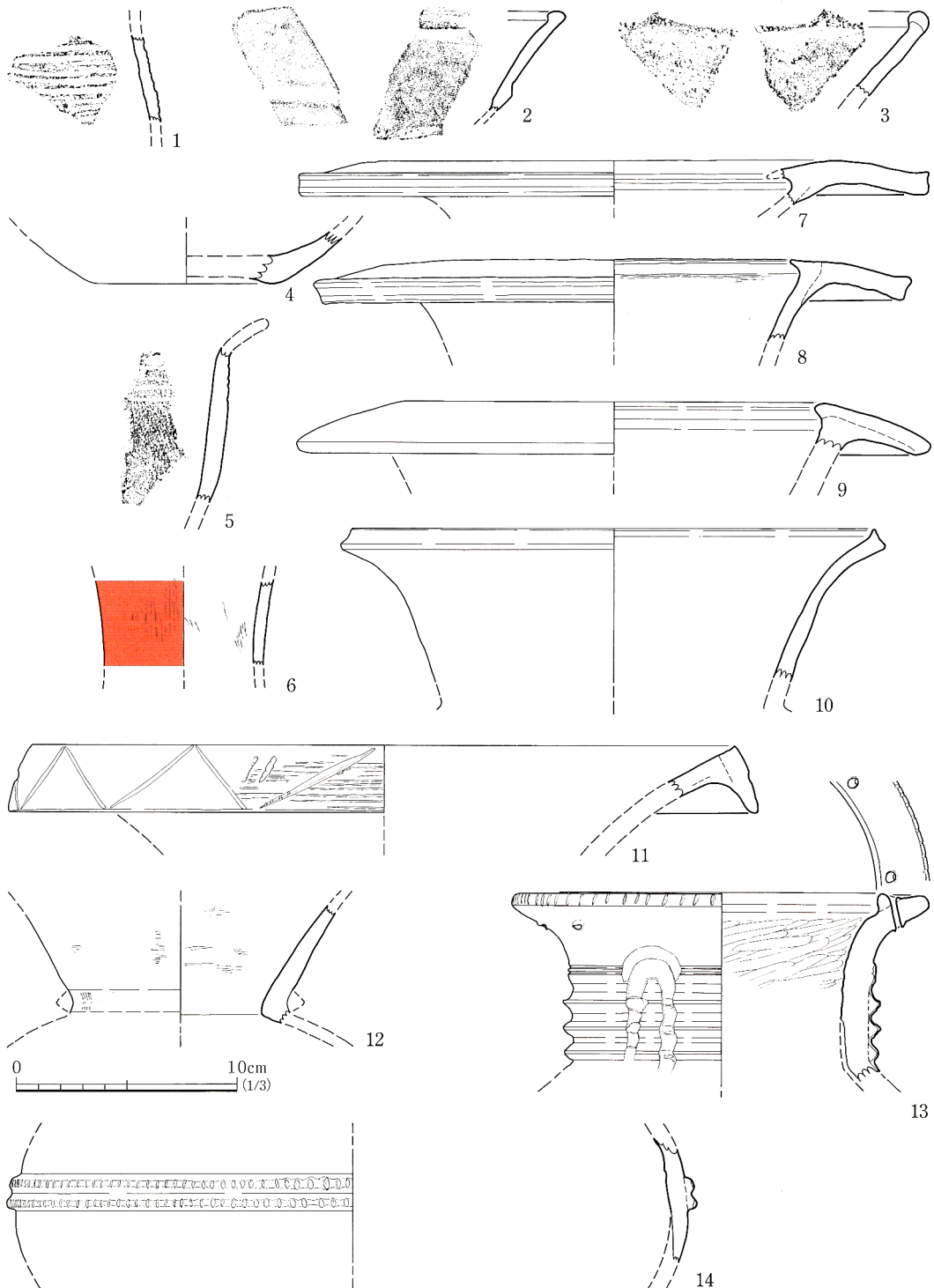


Fig.26 A トレンチ河川出土縄文時代晩期～弥生時代中期土器実測図(1)

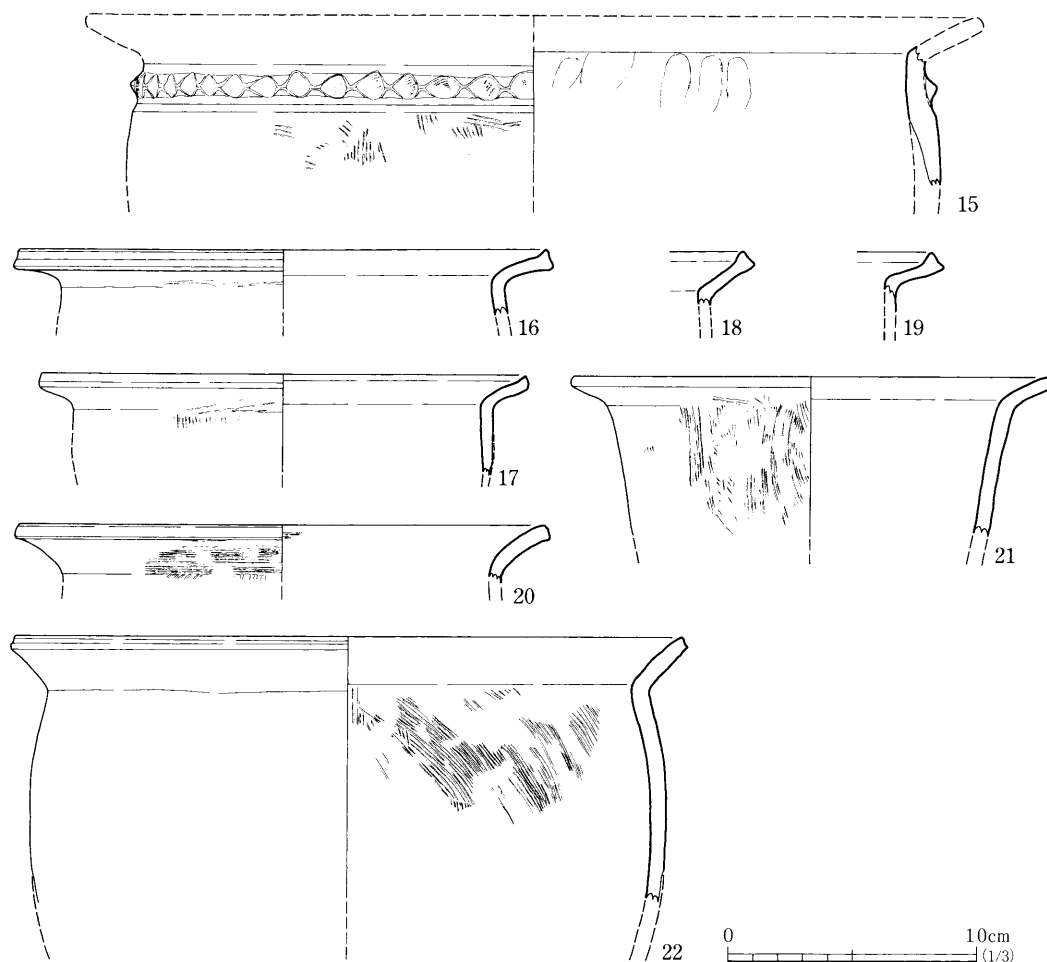


Fig.27 A トレンチ河川出土弥生時代中期土器実測図(2)

甕 (Fig.27-15~22, PL.23)

15は瀬戸内系の甕である。胴部に1条の貼付突帯を持つ。突帯貼り付け時の強いヨコナデにより、大きくくぼむ。突帯には布巻棒圧痕が施される。外面はハケの後、ナデが施される。内面には指頭痕が顕著に残る。風化が激しい。

16~19は跳ね上げ口縁の甕である。16~18の胴部外面はタテハケ後、ナデが施される。20・22は口縁部に面を持ち、21は丸くおさめる。20の口縁部外面はタテハケの後ヨコハケが施される。内面はナデが施される。21の胴部外面はタテハケの後、ナデが施される。内面はナデである。22は口唇部が凹む。外面は大半が風化しているが、残存部分はナデが施され、煤が付着している。内面には左上がりのハケが施される。体部はやや外に張り出し

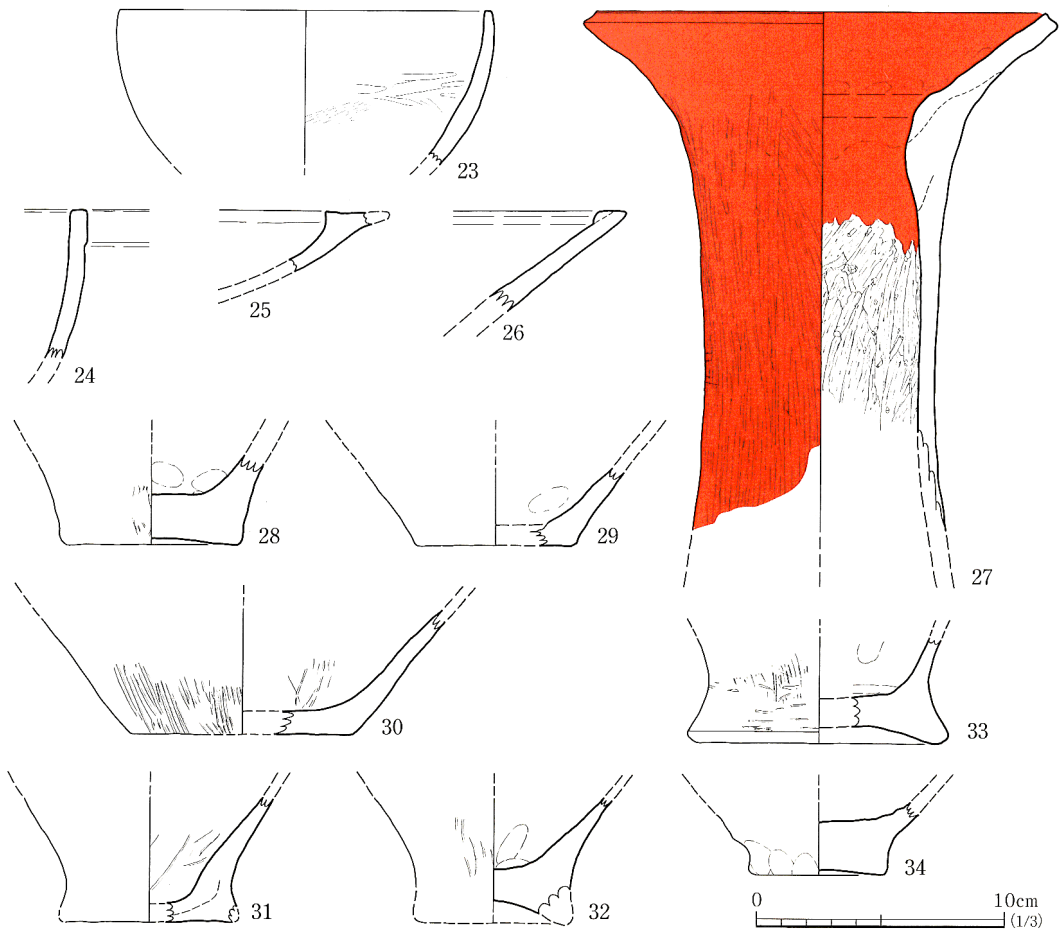


Fig.28 A トレンチ河川出土弥生時代前期・中期土器実測図(3)

ており、後期初頭に下る可能性もある。

鉢・高坏 (Fig.28—23～26, PL.23)

23・24は鉢である。23は直口で口唇部に面を持つ。24は口縁部を肥厚させる。外面は風化が激しく調整は不明。内面はヨコミガキが施される。25・26は高坏の坏部である。25は口唇部を欠損している。26は内面に粘土紐を貼り付け肥厚させる。

器台 (Fig.28—27, PL.24 (1))

27は北部九州系の器台である。外面は丹塗りでタテミガキが施される。口縁部内面は丹塗りで、その直下は下から上へケズリが施される。出土状況から後期に下る可能性もある。

底部 (Fig.28—28～34, PL.24 (2))

29～34は底部である。29・30は壺底部、31～34は甕底部である。

(4) 弥生時代後期

河川出土遺物は弥生時代後期後半以降～古墳時代前期が主体である。このうち、複合口縁壺、底部については終末期及び古墳時代前期のものと区別が困難なものが含まれる。今回の報告では、複合口縁壺は弥生時代後期に、底部については古墳時代前期の土器に含めた。終末期については古墳時代前期の土器と区別が困難なため、古墳時代前期の土器に含めた。

広口壺 (Fig.29-35, PL.25)

35は頸部が短く直立して外反する。口縁部はあまり広がらない。口唇部に面を持ち、軽くつまみ上げる。風化が激しく内外面の調整はわからない。後期中葉のものと考えられる。

複合口縁壺 (Fig.29-36～44, Fig.30-45, PL.25・26)

36は立ち上がりで剥離している。立ち上がりは短い。やや外反し、端部を外側につまみ出す特徴から後期後半以降と考えられる。37・40は立ち上がりのみで以下を欠損している。37は端部に面を持つ。内外面はナデである。40は口縁部外面に5条単位の櫛描波状文が施され、内面はナナメハケ後、ナデが施される。38・39は立ち上がりを欠損しており、剥離痕が観察できる。38は受部端部に面をもち、立ち上がりと合わせてヨコナデが施される。外面は風化が激しく、調整は不明。39は受部端部にヘラ状工具による刻みが施される。内面に剥離痕が観察できたため、複合口縁壺として復元した。内外面の調整はヨコナデである。

41は立ち上がりで剥離している。立ち上がりは内傾し、接合面が観察できる。外面には上部に指頭痕が残り、その直下に4条単位の櫛描波状文と4条の擬凹線が施される。風化が激しく、内外面とも調整は不明。42は立ち上がりほぼ直立し、端部は丸くおさめる。立ち上がりで剥離しており、接合痕が観察できる。内外面はタテハケの後、斜方向のミガキが施される。43は立ち上りの上半を欠損する。下半には櫛描波状文が施されており、現状では2条が確認できる。内面にはナナメハケがわずかに残る。風化が激しい。

44は複合口縁壺の頸部～胴部である。頸部は断面台形の貼付突帯をもち、突帯上にはハケ原体によって斜格子状に刻目が施される。刻目は右上がりの後に、左上がりに刻まれる。外面はタテハケ、内面はヨコハケが施される。

45は口縁部及び立ち上りを欠損する。色調は淡黄色で、1mm～3mm大の砂粒を含むが胎土は比較的精良である。42と近似した胎土であり、同一個体の可能性がある。胴部下

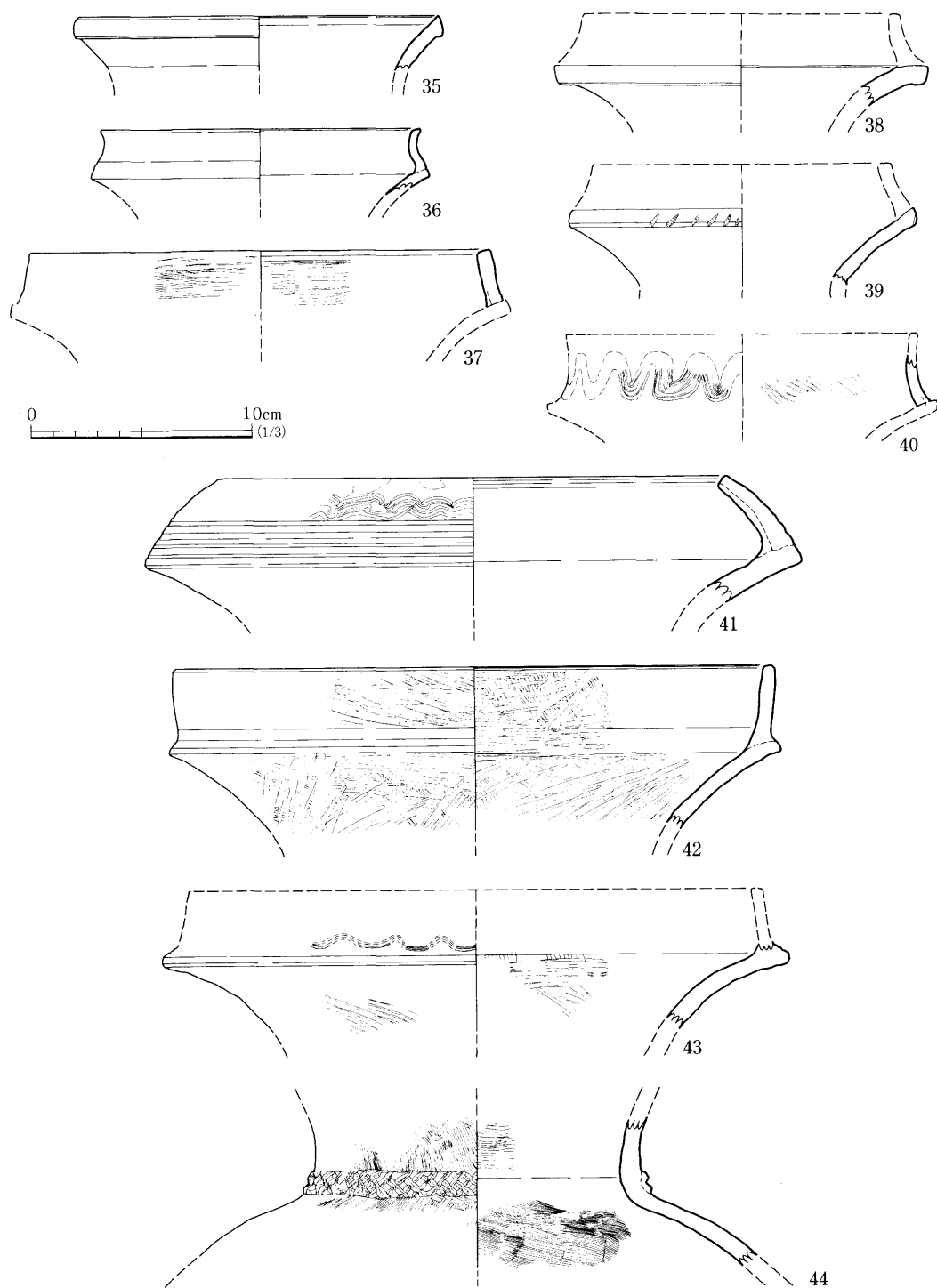


Fig.29 Aトレンチ河川出土弥生時代後期土器実測図(1)

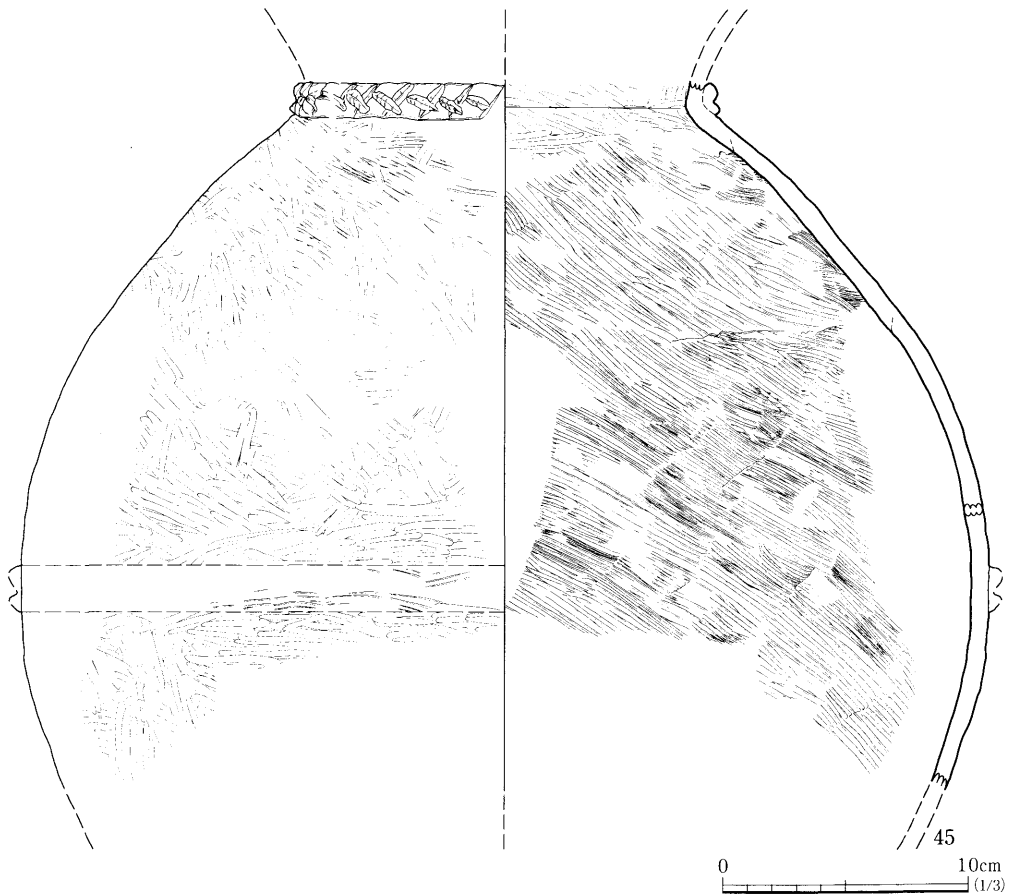


Fig.30 A トレンチ河川出土弥生時代後期土器実測図(2)

半は接合しないが、同一個体と考えられるため図上復元した。胴部外面はハケの後、ヨコ、斜方向のミガキが下から上へ施される。上半部はハケが顕著に残っている。頸部には1条の貼付突帯を持ち、突帯上はハケ原体によって斜格子状の刻目が施される。刻目は右上がりの後に、左上がりに刻まれる。胴部中位には突帯の剥離痕がある。頸部と同様な貼付突帯があったと考えられる。突帯貼り付け前にヨコハケが施される。内面は粘土帯接合痕が2ヶ所で確認できる。荒い左上がりのハケが下から上へ施される。頸部内面はハケの後、ヨコ・斜方向のミガキが施される。残存器高は28.8cm、胴部最大径は39.3cmを測る。

甕 (Fig.31-46~50, PL.25)

46・49は後期前葉の甕である。46は口縁部が「く」の字状に短く外反し、肩が張る。口縁部内面にはヨコハケが施される。胴部外面は風化しており、調整は不明。内面は下から

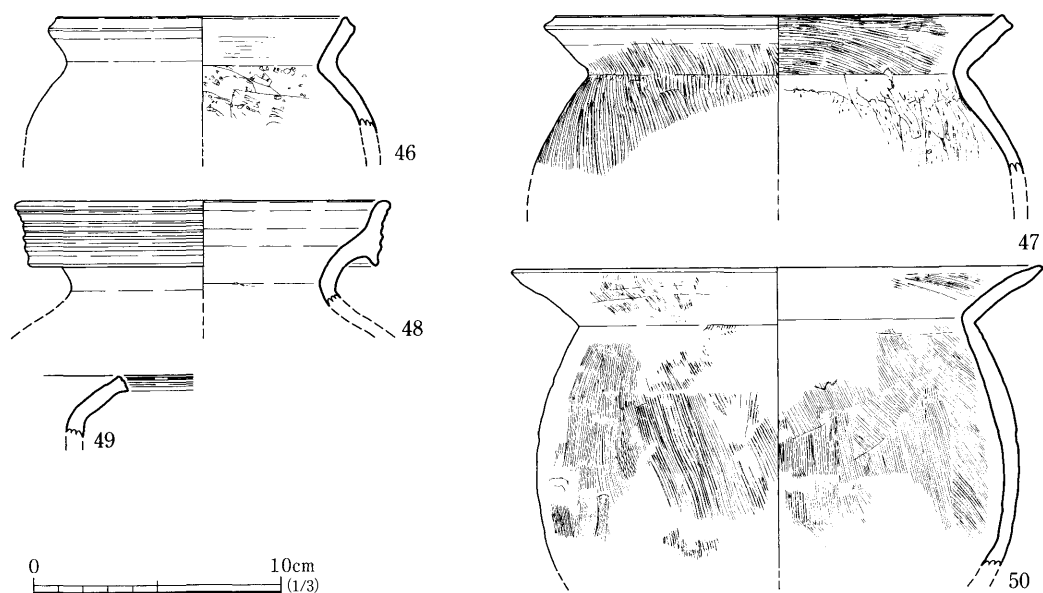


Fig.31 Aトレンチ河川出土弥生時代後期土器実測図(3)

上へケズリが施される。49は口唇部に2条の擬凹線が施される。内外面にはヨコナデが施され、煤が付着する。47は後期後葉の甕である。口唇部を凹ませ、外面には左上がりのハケが施され、煤が厚く付着する。口縁部内面はヨコハケ、胴部内面は下から上へ荒いケズリが施される。50は口縁部が舌状で大きく外反する。胴部中位が張り出す。口縁部外面はタテハケ後、ヨコナデ、口縁部内面はヨコハケ後ナデが施され、胴部外面、内面は左上がりのタテハケが施される。後期終末のものと考えられる。

山陰系甕 (Fig.31-48, PL.25)

48は拡張した口縁部に5条の擬凹線が施される。内外面にはナデが施され、外面には煤が厚く付着する。藤田編年2期²⁾、中川編年Ⅲ期³⁾相当の後期中葉のものと考えられる。山口県内において後期中葉の山陰系土器は県北部で突抜遺跡⁴⁾、坂手沖尻遺跡⁵⁾、羽波遺跡⁶⁾、宮ヶ久保遺跡⁷⁾で甕の大半を占め、また、佐波川下流域においては右田一丁田遺跡⁸⁾で11号住居跡から出土している。山口盆地では出土例は少なく、後期中葉のまとまった資料が得られていないことから、位置付けは今後の課題である。

高坏 (Fig.32—51～61, PL.27)

51は坏部である。上半が屈曲し短く外反する。内外面にわずかにタテハケを残す。その特徴から後期中葉のものと考えられる。

52～55は坏部で後期後半のものと考えられる。52は口唇部の面取りを行う。坏部上半で屈曲し、外反する。内面には接合時の段を残す。内外面はタテミガキが施される。53も口唇部の面取りを行う。坏部が直線的に外反する点で52よりも新しい傾向を持つ。内面は接合時の段を残す。内外面はタテミガキが施され、内面はヨコハケをわずかに残す。

54は口唇部を丸くおさめる。坏部上半は緩やかに外反する。外面はタテミガキが施され、内面は右上がりのミガキが施される。風化が激しい。55は口唇部に強めの面取りを行う。坏部上半は緩やかに外反する。外面はタテミガキ、内面はヨコミガキが施される。風化が激しい。

56～59は脚部で後期後半のものと考えられる。56は坏部との接合面で剥離しており、完成した脚部に坏部を接合したものと考えられる。円形透かし孔が2ヶ所で確認でき、3方透かしと考えられる。外面はタテミガキが観察できるが、風化が激しい。内面は透かし孔より上部で下から上のケズリが観察できる。57も接合面で剥離し、中央に穿孔する。外面はタテミガキ、内面はナデが施される。58は坏部と脚部の上半部が残る。外面は風化が激しく調整は不明。坏部内面は放射状にタテミガキが施される。脚部内面にはシボリ痕を残す。59は坏部と脚部が接合面で剥離しており、完成した脚部に坏部を接合したものと考えられる。脚部には6方の円形透かし孔が施される。裾部の開きは小さい。坏部外面はヨコハケが施される。内面はかすかに放射状ミガキが観察できるが、風化が激しい。脚部外面はタテハケ後タテミガキが施される。風化が激しい。内面はナデが施される。裾部外面は左上がりのハケ後、タテミガキ、内面はヨコハケが施される。

60・61は裾部である。60は裾部があまり広がらず、端部に面を持つ。外面がタテハケ後、タテミガキが施される。1ヶ所で円形透かし孔の下部が残る。内面はケズリ後、ヨコハケ、タテミガキが施される。61は端部を丸くおさめる。風化が激しいが、外面はヨコハケがわずかに観察できる。内面はヨコハケ後、ヨコミガキが施される。小片のため、古墳時代前期の高坏の可能性もある。

鉢 (Fig.32—62, PL.27)

62は鉢である。ヨコナデにより口唇部をつまみ出して先を尖らせている。このために歪みがみられる。外面にはタテハケをわずかに残す。内面はタテハケ後、ナデが施される。

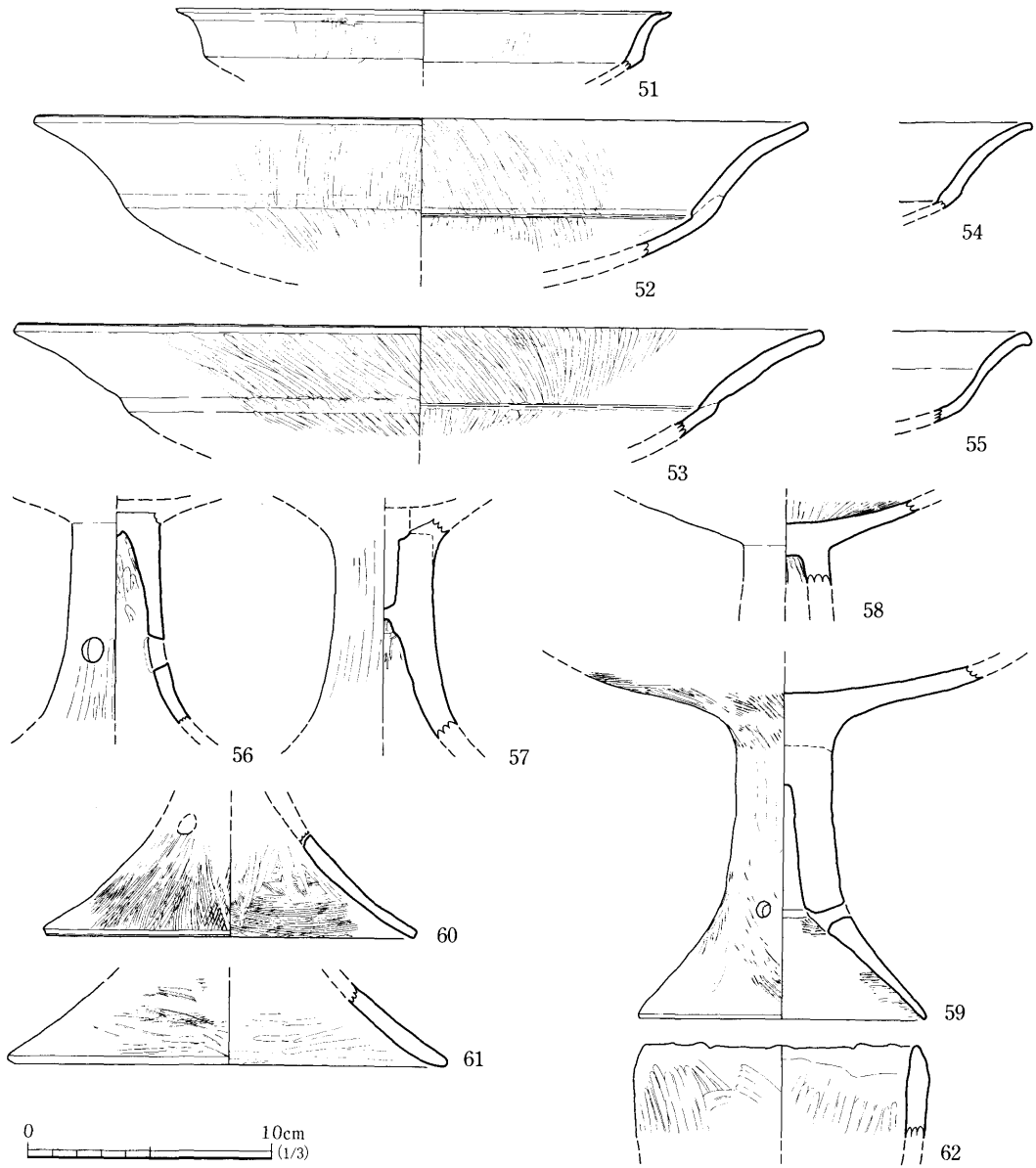


Fig.32 Aトレンチ河川出土弥生時代後期土器実測図(4)

弥生時代後期としたが、他時期の可能性もある。

(5) 古墳時代前期

河川出土土器のうち、主体を占め、時期的に下限となるのが弥生時代終末から古墳時代前期の土器である。先に述べたように、弥生時代終末の土器は古墳時代前期の土器と区別が困難なものが含まれるため、合わせて説明を行う。

直口壺 (Fig.33-63・67, PL.28・29)

63は直口壺である。口縁部は外方へ直線状にのび、球状の胴部を持つ。口縁部外面にはタテミガキ、胴部外面はヨコミガキが施され、部分的に煤が付着している。口縁部内面にはヨコミガキ、胴部内面上半部には接合痕を明瞭に残し、指頭痕がみられるほか、下半部にはヨコミガキが施されており、煤が付着している。

67は直口壺の頸～胴部である。接合しないが同一個体3片から図上復元した。外面はヨコハケ後、ヨコミガキが施される。内面はヨコハケ後、草茎状の原体で下から上へのナデが施される。

広口壺 (Fig.33-64・65, PL.28)

64は口縁部以下を欠く。口縁部の中程で屈曲して外反する。外面はナデで内面はヨコハケが残るが、風化のためよくわからない。65は口縁部が緩やかに外反する。口縁部外面は丁寧なヨコミガキを施し、内面にはヨコハケ後、ナデが施される。胴部外面はヨコミガキを施し、内面はヨコハケの後、右から左方向のケズリが施される。

東部瀬戸内系壺 (Fig.33-66, PL.29)

66は壺の口縁～胴部で、形態が香川県下川津遺跡出土の下川津B類土器⁹⁾に近似している。下川津B類の特徴を以下に要約しておく。①胎土は微細な角閃石を多く含む。②形態は直立ないし、内傾する頸部から強く折れて口縁部はほぼ水平に開き、端部をつまみ上げる。③体部外面はヘラミガキ、内面の上半は深く顕著なユビオサエで、下半はヘラケズリが施される。④口縁部内面には凹線状の強いナデが施される。

この特徴を踏まえて66を見てみると、胎土には角閃石は含まず、他と同様に1～3mmの砂粒を多く含んでいる。形態は近似しているものの、口唇部のつまみ上げはなく、口唇部は丸くおさめる。体部外面はタテハケの後、タテミガキを施し、内面上半にはユビオサエが施されるが、下川津B類ほど顕著ではない。下半はヨコハケが施される。

以上のように66は胎土、口唇部形態、調整において下川津B類とは異なっている。間接的には下川津B類の影響を受けた可能性が考えられるか、下川津B類土器は丸亀平野以東と阿波の一部に多く分布し、讃岐西部以西ではわずかしこ出土していない。時期的に、移

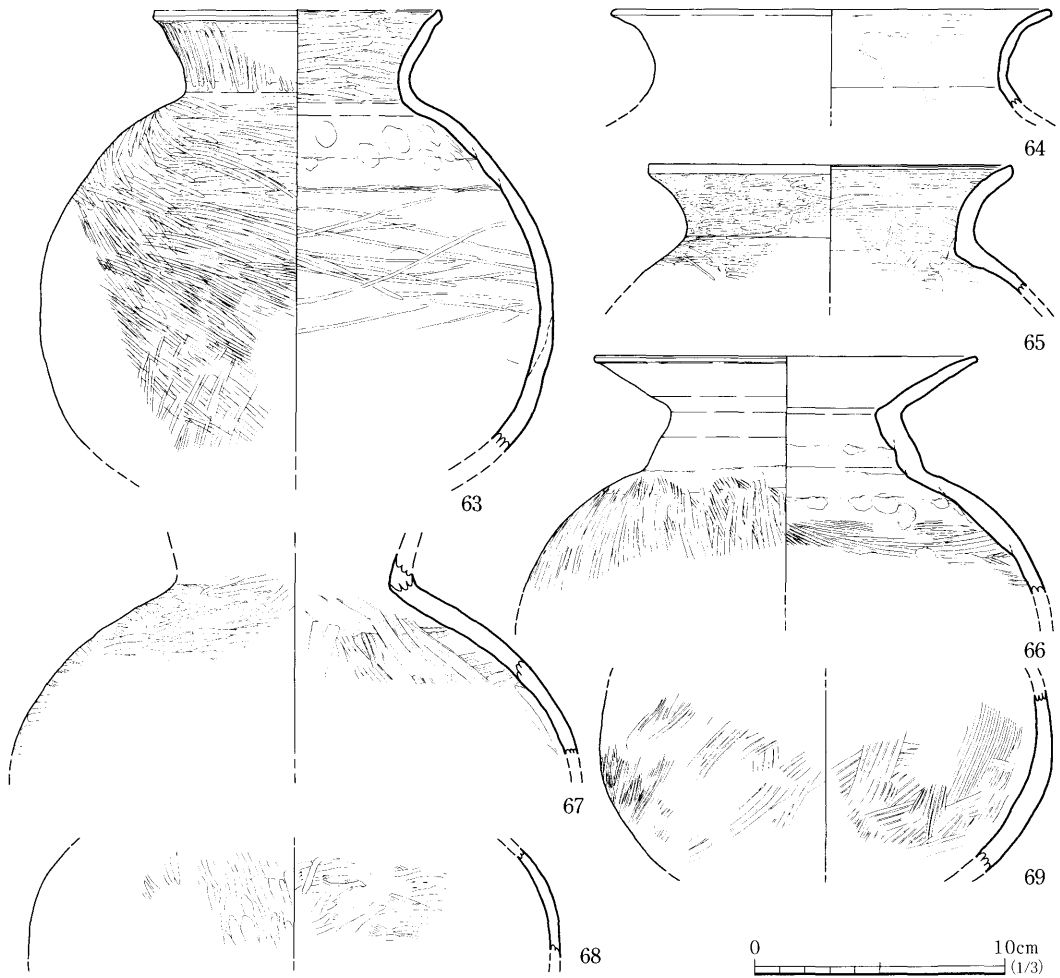


Fig.33 A トレンチ河川出土古墳時代前期土器実測図(1)

動の時期は庄内期の古相に相当する下川津4期に多く、その前後では極めて少ないという。66は単独で時期を決定するのは困難であり、判断は難しい。いずれにせよ下川津B類の影響が認められるとすれば、異例なものとなる。山口県東部では庄内～古墳時代初頭のまとまった資料が極めて少ないので、類例を待って判断したい。

壺 (Fig.33-68・69, PL.28)

68～69は壺の胴部である。68は外面にタテミガキが施され、内面はケズリ、ヨコハケの後にヨコミガキが施される。69は体部外面に左上がりのハケが施される。内面にはヨコハケ、タテハケが施される。

山陰系甕 (Fig.34—70～82, PL.30)

70～72は口縁部の破片である。70は外面にヨコナデが施され、屈曲部が鋭く突出する。内面にはヨコナデが施され、屈曲部以下は右から左方向のケズリが施される。71は外面にヨコナデが施されるが、屈曲部の突出はやや甘い。内面はヨコナデで屈曲部以下は右から左方向のケズリである。72は口唇部が上方にわずかにつまみ出され、やや内側に巻き込む。外面はナデで屈曲部が下に鋭く突出する。内面はヨコナデである。

73は口縁部と胴部上半がわずかに残る。口唇部が外側につまみ出される。口縁部外面にはヨコナデが施され、屈曲部が突起状に張り出す。口縁部内面にはナデ、胴部内面には右から左方向のケズリが施される。外面全体に煤が付着する。

74～78は口縁部の破片である。74は口縁部が直線的に外反し、ヨコナデにより屈曲部が突起状に張り出す。外面に煤が付着する。内外面とも風化が激しい。75は口縁部が緩やかに外反し、ヨコナデにより屈曲部が突起状に張り出す。外面には煤が付着している。内外面とも風化が激しい。76は口縁部が緩やかに外反する。内面下半はヨコナデによるくぼみが目立つ。ヨコナデにより屈曲部が下方に突起状に張り出す。内外面にヨコナデが施される。77は口縁部が直線的に外反する。ヨコナデにより屈曲部が突起状に張り出す。外面に煤が付着する。78は口縁部が緩やかに外反する。屈曲部が鋭く突起状に張り出す。外面に煤が付着する。

79・80は胴部である。79は口縁部を欠くが、内面に屈曲を残している。水平ないし、やや右上がりのタタキ(1条2mm 7mm/3本)の後、タテハケが施され、口縁部下はヨコナデが施される。外面全体に煤が付着する。内面下半には左から右方向にケズリが施される。上半にはケズリの後左上がりのハケが施され、指頭痕が残る。他とは異なる灰白色系の胎土、口縁部内面の屈曲から山陰系甕と判断したが、異なる可能性もある。

80も口縁部を欠くが内面に屈曲を残す。外面はヨコハケの後、タテハケ、ナデが施され、煤が付着する。内面は上半が右から左へタテハケの後、ナデが施され指頭痕が残る。下半はナデが施される。

81・82は胴部片である。81は櫛描波状文が施される。風化が激しいが、6条確認できる。内面は左から右方向のケズリが施される。82は8条以上の櫛描波状文の直下に11条単位の櫛描波状文が施される。内面には左から右へのケズリが施される。以上の山陰系甕は、中川編年のVI期中相・新相には¹⁰⁾ほぼ併行するものであろう。

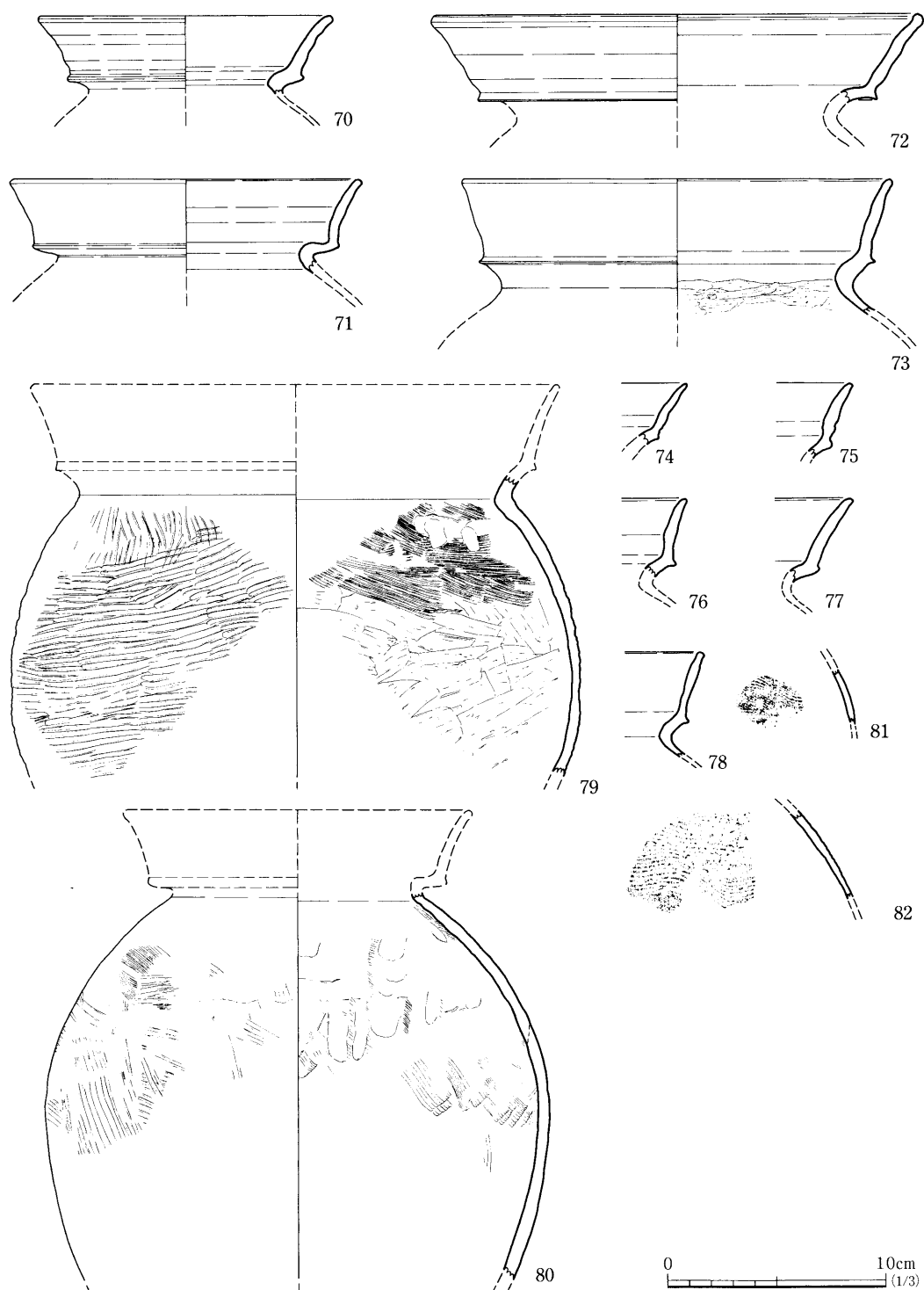


Fig.34 A トレンチ河川出土古墳時代前期土器実測図(2)

タタキ甕 (Fig.35-83~110, PL.31・32)

タタキを有する甕を一括してまとめた。タタキ調整の記述は年報XIにしたがい、タタキ1条の凹み幅と3条の幅を一単位として記述する。胴部片は内面の調整等によって上下傾きを決定したが、異なる可能性もある。

83~85は口縁部である。83は外面が右上がりのタタキ(1条3mm 1.1cm/3本)で、内面は右から左のケズリ。84は外面が右上がりのタタキ(1条1.5mm 7mm/3本)の後、上半部はヨコナデ。内面はヨコナデ。85は外面が右上がりのタタキ(1条 3mm 1.3cm/3本)。内面はヨコハケ後ヨコナデ。

86~110は胴部片である。86は外面が平行ないし右上がりのタタキ(1条2.5mm 1cm/3本)で内面は左から右方向のケズリ。87は外面が左上がりのタタキ(1条2mm 7mm/3本)で内面は右上がりのケズリ。88は外面が右上がりのタタキ(1条2mm 7.5mm/3本)、内面はナデで、接合痕が残る。89は外面が平行タタキ(1条2mm 6.5mm/3本)で内面はヨコハケ後ナデ。90は外面が平行タタキ(1条2mm 7mm/3本)の後、タテハケ。内面はナデ。91は外面が右上がりのタタキ(1条1.5mm 6.5mm/3本)で内面はタテハケ後、ヨコハケ。92は外面が平行タタキ(1条3mm 1.2cm/3本)の後、タテハケ。内面は右上がりのハケ。93は外面が平行タタキ(1条2mm 7.5mm/3本)で内面は左上がりのハケ。94は外面が平行タタキ(1条1.5mm 6.5mm/3本)で内面は左上がりのケズリ後ナデ。95は外面が平行タタキ(1条2mm 9mm/3本)で内面はヨコハケ後ヨコナデ。96は外面が平行タタキ(1条2mm 1.2cm/3本)で内面は下から上方向のケズリの後、ヨコハケ。97は外面が平行タタキ(1条2.5mm 1.2cm/3本)で内面は左上がりのハケ。98は外面が平行タタキ(1条1.5mm 6.5mm/3本)で内面はナナメハケ後ナデ。99は外面が右上がりのタタキ(1条2mm 8mm/3本)で内面が左上がりのケズリ後ナデ。100は外面が平行タタキ(1条2mm 1.4cm/3本)後ナデで内面は左上がりのハケ。101~103は同一の可能性が高い。101は外面が平行タタキ(1条3mm 1.3cm/3本)で内面はヨコハケ後タテナデ。104は外面が平行タタキ(1条2.5mm 1cm/3本)で内面はナデ。105は外面が平行タタキ(1条2mm 9mm/3本)で内面はヨコハケ。106は外面が平行タタキ(1条1.5mm 6mm/3本)で内面はナデ。107は外面が左上がりのタタキ(1条2mm 8.5mm/3本)で内面はナデ。108は外面が左上がりのタタキ(1条1.5mm 5.5mm/3本)で内面はヨコハケ。109は外面が平行タタキ(1条1mm 4mm/3本)で内面は左上がりのハケ。110は外面が平行タタキ(1条2mm 7mm/3本)で内面は左上がりのハケ。

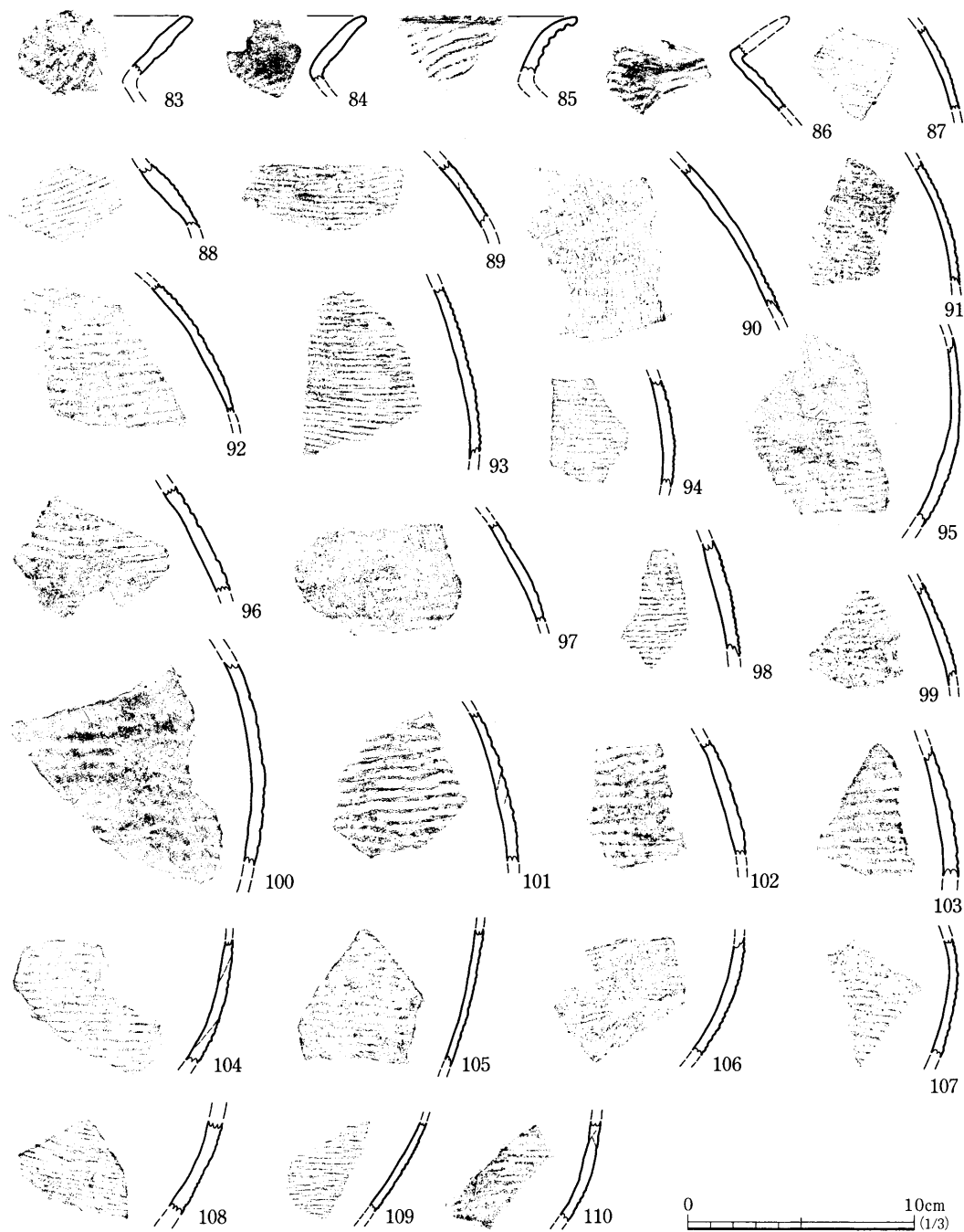


Fig.35 A トレンチ河川出土古墳時代前期土器実測図(3)

庄内系甕 (Fig.36—111, PL.33)

111は庄内系甕である。外面には煤が付着している。口縁部は短く直線的に外反し、口唇部を上につまみ上げる。口縁部内面はヨコナデで、胴部との境には鋭い稜線が形成される。胴部外面には平行タタキ (1条2mm 8mm/3本) が、内面は右から左方向のナデが施される。胴部器壁は4.5mmを測る。

山口県内において庄内系甕は綾羅木郷遺跡¹¹⁾、吉田馬場遺跡¹²⁾で出土しており、他にも散発的に出土しているようである。綾羅木郷遺跡を除くと、内面のケズリがなく、器壁が厚いため、搬入品とは考えにくい。なお、従来庄内系甕とされてきた、口唇部を丸くおさめ、胴部にタタキを持ち、内面にハケを施す球形の甕は、布留系甕を模倣した伝統的V様式系の甕と考えられる¹³⁾。

在地系長胴甕 (Fig.36—112, PL.33)

112は口縁部が「く」の字状に短く外反する。胴部の張りは少なく長胴である。口縁部及び胴部外面に右上がりのタタキ (1条3.5mm 1.5cm/3本) が下から上、左から右方向に施される。口縁部内面はヨコハケ、胴部内面は下から上へヨコハケが施される。胴部中位に粘土紐接合痕が観察でき、器壁は6mmを測る。

このタイプの甕はいわゆる伝統的V様式系の甕と呼ばれるものだが、本例のように頸部のすばまりが少なく、長胴で胴があまり張らないものは、伝統的V様式系甕の影響を受けて、従前の在地系の甕が外面にタタキを残したものと理解できる。山口県内では柳瀬遺跡LS005¹⁴⁾で一括出土例がある。弥生時代終末期に出現し、古墳時代初頭まで残存するものと考えられる。口縁部形態には「く」の字に外反するものと後期後半と同様な舌状口縁がある。タタキのくぼみ幅は3～5mm程度と庄内甕に比べて太く、ハケによってタタキを消すものも多い。内面は粗いハケ調整で器壁は5～7mm程度と厚く、小さな平底を特徴とする。

甕 (Fig.36—113～115, Fig.37—116, PL.33)

113～116は甕の胴部である。いずれも内外面の調整によって傾きなどを判断したもので誤っている可能性もある。113は風化のため単位幅がはっきりしないが、平行タタキの後、ヨコハケ、タテハケが施される。内面調整はナデである。

114は外面に平行タタキ (1条1.5mm 9mm/3本) の後、タテハケが施され、タタキが消される。内面は下から上へヨコハケが施される。器壁は5mmを測る。115は大型の甕で外面に平行タタキ (1条3mm 1.2cm/3本) が施された後、タテハケによりタタキが消される。内面は左上がりのハケの後、タテナデによりハケを消している。器壁は6mmを測る。

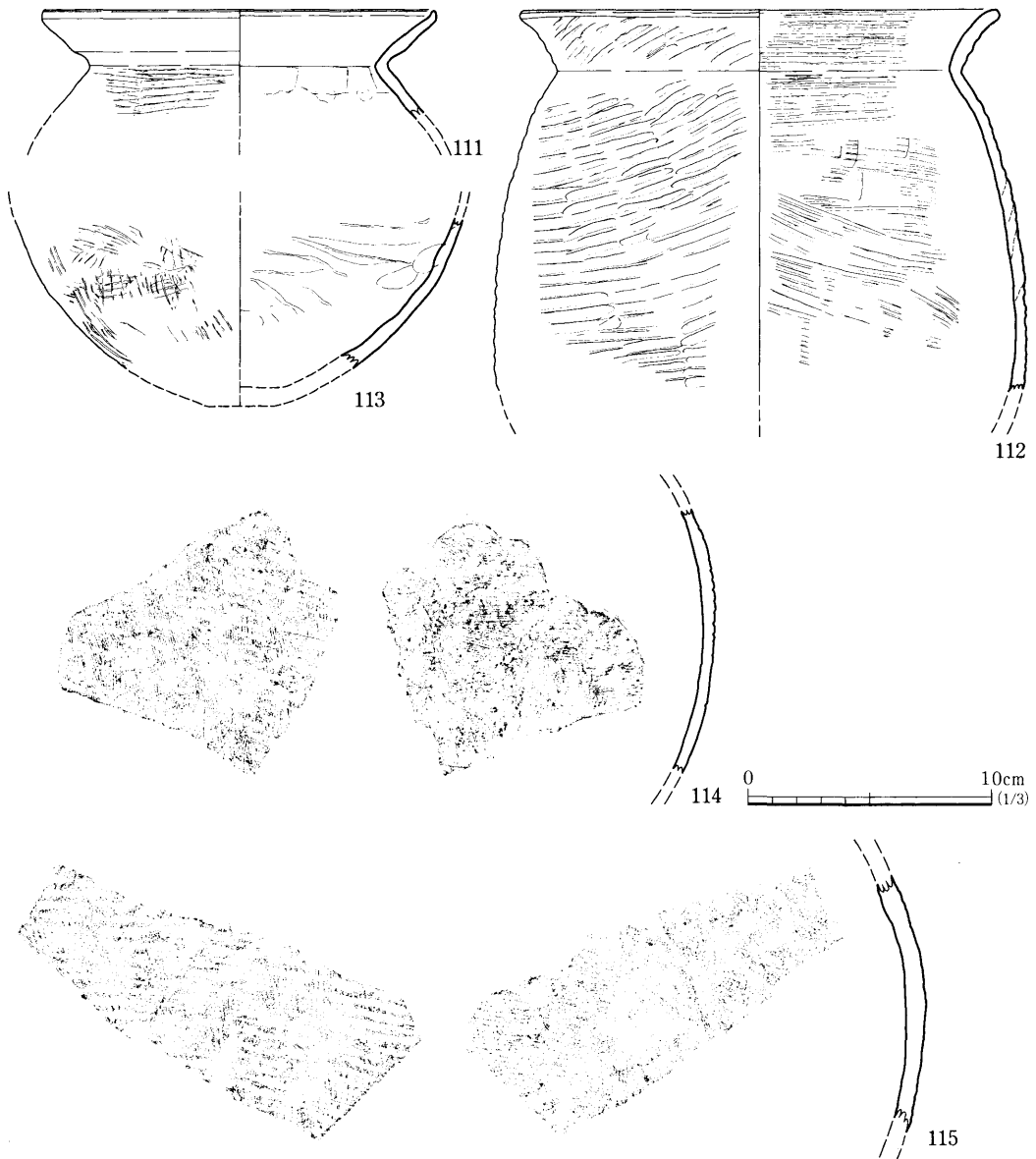


Fig.36 Aトレンチ河川出土古墳時代前期土器実測図(4)

116は外面に平行タタキ(1条1.5mm 8mm/3本)の後に左上がりのハケが施される。内面にはヨコハケが施される。器壁は9mmである。

113～116の甕から、Fig.35のうち、タタキの凹み幅、器壁の厚さ、内面調整から85・90・92・97・100～103・104は在地系長胴甕もしくは伝統的V様式系甕、その他は布留系系甕を模倣した伝統的V様式系の甕と考えられる。

甕 (Fig.37-117~127, PL.34)

ここでは胴部外面がハケ調整の甕をまとめた。117・118・120は口縁部のみ残存するもので胴部にタタキが施されていた可能性もある。117は口縁部が「く」の字状に鋭く屈曲し、内面には稜線を持つ。口唇部は面を持ち、口縁部外面は左上がりのハケ、内面はヨコハケが施される。全体的に風化が激しい。118は口唇部を丸くおさめる。口縁部外面はヨコハケ、胴部との境にはタテハケが施される。内面はヨコハケ後ナデが施される。119は口唇部を丸くおさめる。口縁部外面はヨコハケ、胴部外面はタテハケが施される。口縁部内面はヨコハケが施される。胴部内面は風化が激しいが、ケズリの可能性が高い。120は口唇部を丸くおさめる。口縁部外面は左上がりのハケ、内面はヨコハケが施される。

121は口縁部が舌状に外反し、胴部はやや肩が張る。内面には口縁部の粘土帯接合痕が明瞭に残る。口唇部は面を持つ。口縁部外面はタテハケの後、ヨコハケ、口縁部内面はタテハケの後、ヨコハケが施される。

122は口縁部は「く」の字に外反し、胴部は肩が張る。口唇部は丸くおさめ、胴部外面には左上がりのハケ、口縁部はヨコナデが施される。外面全体に煤が付着している。口縁部内面はヨコハケ、胴部内面は左上がりのケズリが施され、器壁が4.5mmとやや薄く仕上げられている。

123は布留系甕の口縁部である。口縁部の中位がやや膨らみ、やや内湾しながら外反する。口唇部は面を持つ。口縁部外面は左上がりのハケ後、ヨコナデが施される。胴部との境にはわずかにタテハケが残る。口縁部内面はヨコハケが施される。河川の下限を示す土器であり、第1層から出土した。

124は口縁部上半のみの破片である。口唇部には面を持つ。口縁部外面はタテハケ後、ヨコナデが施される。口縁部内面は風化が激しく、調整は不明。

125は胴部の上半と下半が直接接合しないが、同一個体と判断して図上復元した。口縁部は「く」の字に外反し、胴部中位が張り出す。上半は欠損する。口縁部内面には、稜線がみられる。口縁部外面はタテハケ後、ヨコハケ、胴部外面はタテハケ及び左上がりのハケが施され、煤が付着する。口縁部内面はケズリの後、ナデ、胴部内面はヨコハケ、左上がりのハケが施される。

126・127は布留系甕もしくは山陰系甕の胴部片と考えられる。内面のケズリにより器壁は薄く仕上げられている。両者は同一個体の可能性が高く、他にも同様な破片がある。いずれも内外面の調整によって上下、傾きを判断したので異なる可能性もある。

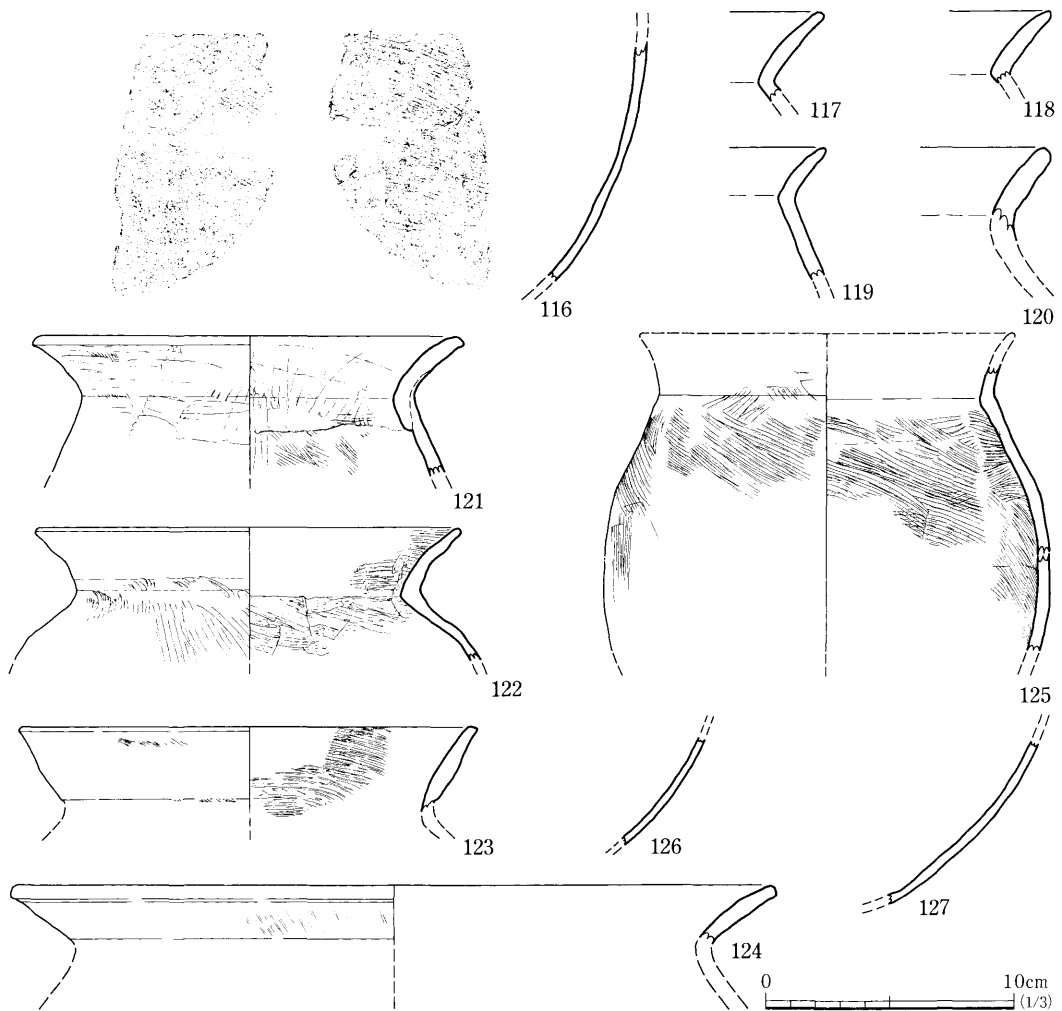


Fig.37 Aトレンチ河川出土古墳時代前期土器実測図(5)

126は外面がタテナデで、内面は下から上へのケズリである。器壁は3mmで外面に煤が付着する。127は胴部下半から底部にかけての破片であり、外面はタテナデで、煤が付着する。内面は上半が上から下へのケズリである。下半は指頭痕が顕著にみられる。器壁は3mmである。

高坏 (Fig.38-128~137, PL.35)

128~130は坏部である。128は上端を欠き、外へあまり広がらない。外面はタテミガキで下半との境にはヨコナデが施される。内面はタテハケ後ナデが施される。下半との境は明瞭でタテハケが施されている。129は上半が外へ大きく開く。口唇部は丸くおさめる。外面はヨコハケの後、放射状にタテミガキが施される。内面はタテハケが施される。130は有段高坏の坏部として復元したが、脚部の可能性もある。口縁部は屈曲部から外へ大きく開く。口唇部はヨコナデによりわずかに上下に突出し、屈曲部もヨコナデにより、下方に突出する。内外面にはヨコミガキが施される。

131~137は脚部である。131は中実の脚部で、中心部に坏部との接合面がわずかに残っており穿孔がみられる。内外面ともナデが施される。132は脚部の中心部分が剥離しており、中実であったと考えられる。外面にはわずかにタテミガキが残る。133は脚部の上端が中実になる。裾部は屈曲して開き、2孔一組の透かし孔がある。3方透かしと考えられる。

134~137は小型高坏の脚部である。134は内面にシボリ痕が残る。風化が激しい。135は脚部が短く、裾部、坏部が屈曲して開く。脚部外面には下から上方向のケズリが施され、裾部外面にはタテハケ、裾部内面にはヨコハケが施される。136は裾部である。風化しているが、外面にはタテミガキが残る。円形透かし孔があり、5方透かしと考えられる。内面はヨコハケが施される。137は裾部で端部はヨコナデによって内湾している。外面はタテハケ後、タテミガキが施される。円形透かし孔の下部が残存する。

鉢 (Fig.38-138~141, PL.35)

138は直口の鉢で外面下半に左から右へのケズリが施される。風化が激しい。139は小形丸底鉢である。口縁部は外反し、緩やかに胴部が張り出す。外面は風化のため調整は不明。内面は左から右方向のケズリの後、ヨコハケが施される。140は口縁部と胴部が接合しないが、同一個体と考えられるため、図上復元したものである。口縁部は短く外反する。胴部は肩が張り、底部は尖り気味の丸底である。外面は底部が左上がりのタタキ、胴部は右上がりのタタキが施される。口縁部内面はヨコハケ、胴部内面はヨコミガキが施され、底部内面にはユビオサエが残る。141は直口の鉢である。外面上半には煤が付着しており、下半部は被熱のため、一部は赤橙色に変色している。口縁部外面はヨコナデが施される。胴部内面は上半はナデで、下半は右から左へのケズリの後、下から上へのケズリが施される。

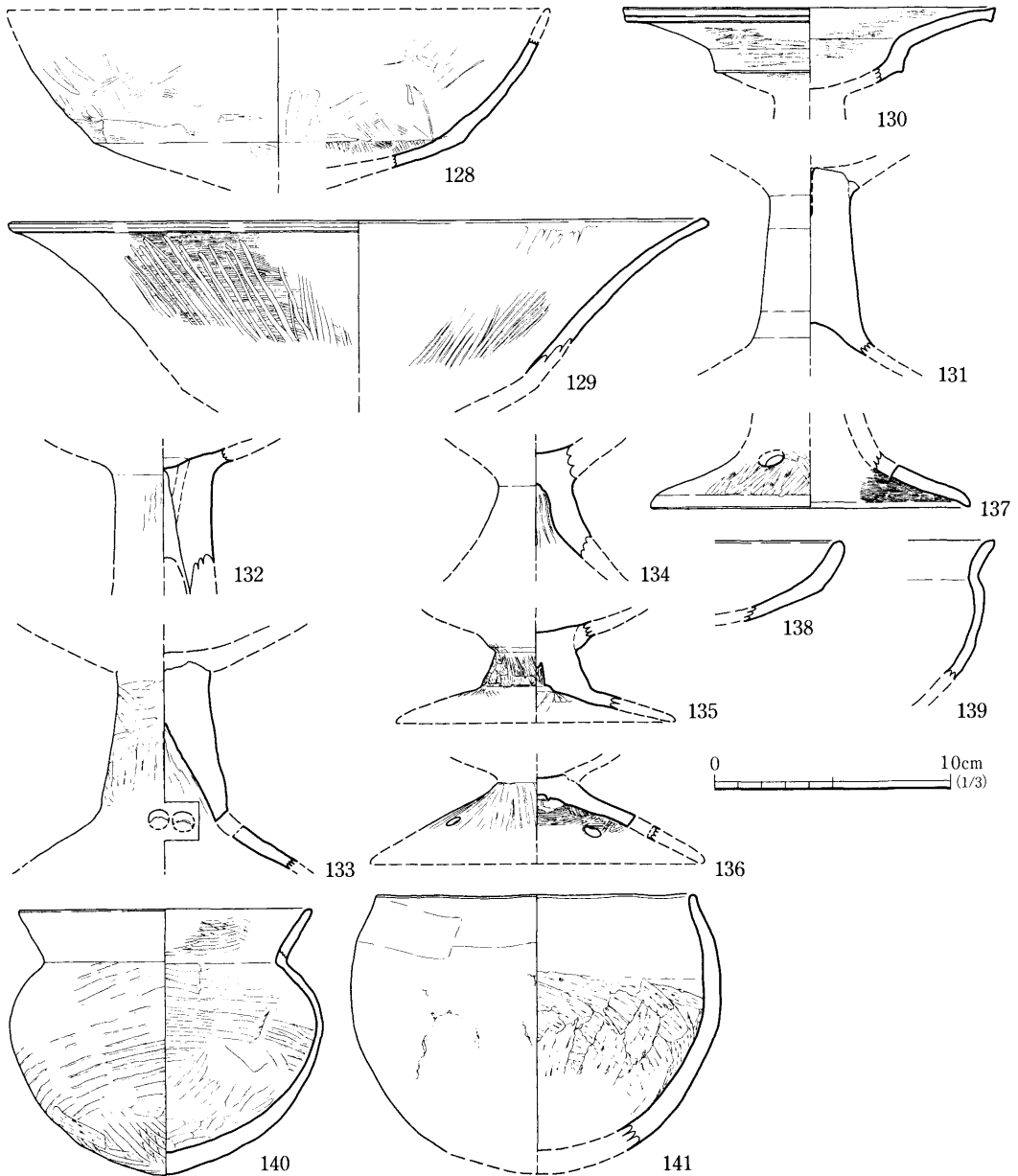


Fig.38 Aトレンチ河川出土古墳時代前期土器実測図(6)

底部 (Fig.39—142~154, 40—155~175, 41—176・177, PL.36~39)

底径が縮小傾向にあるもの、もしくは丸底化の傾向がある壺、鉢、甕の底部である。弥生時代後期～終末期のものも識別が困難なためここに含めて記述する。142~154は壺もしくは鉢の底部と考えられる。148は接合しないが、同一個体と考えられるため、図上復元

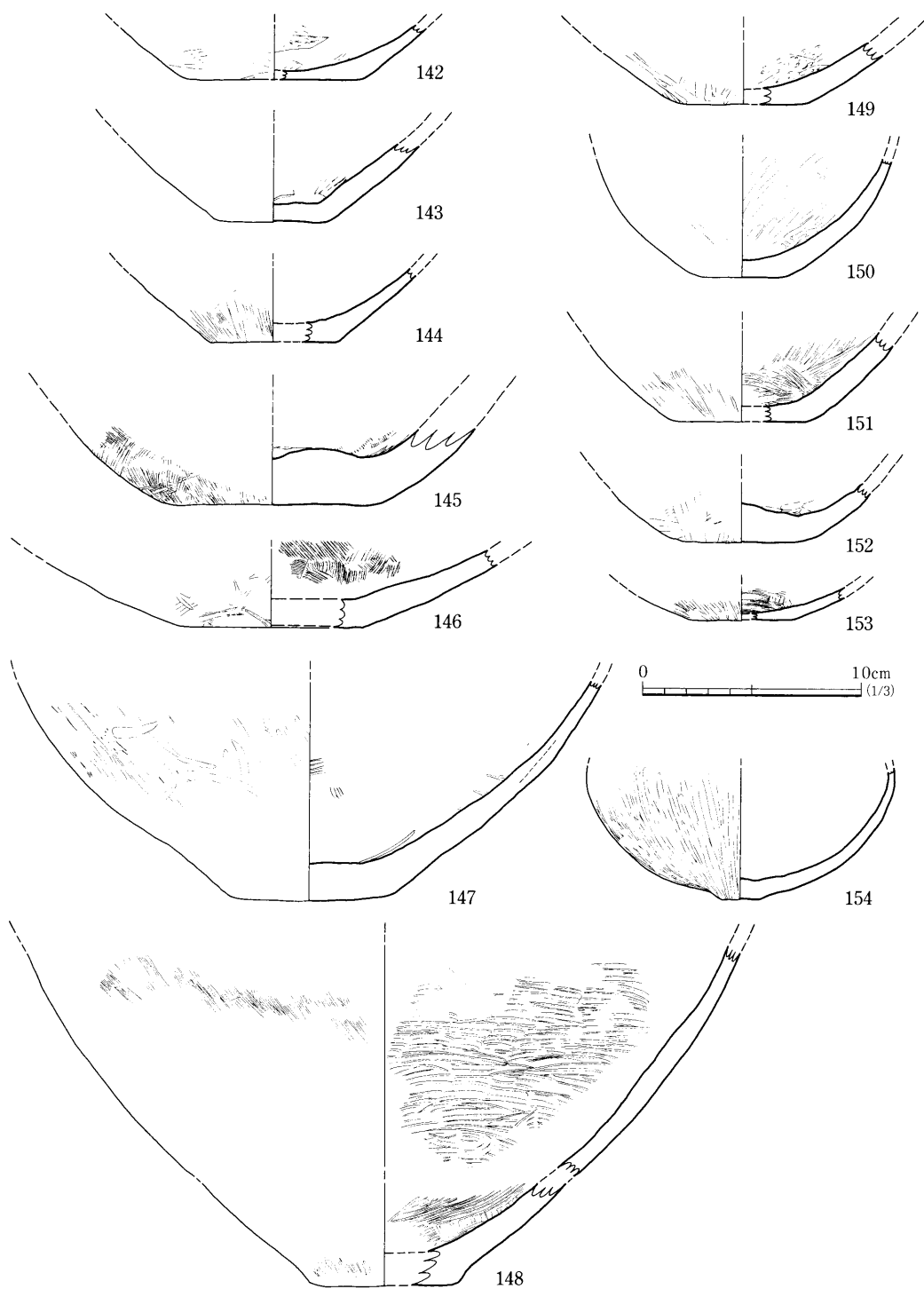


Fig.39 A トレンチ河川出土古墳時代前期土器実測図(7)

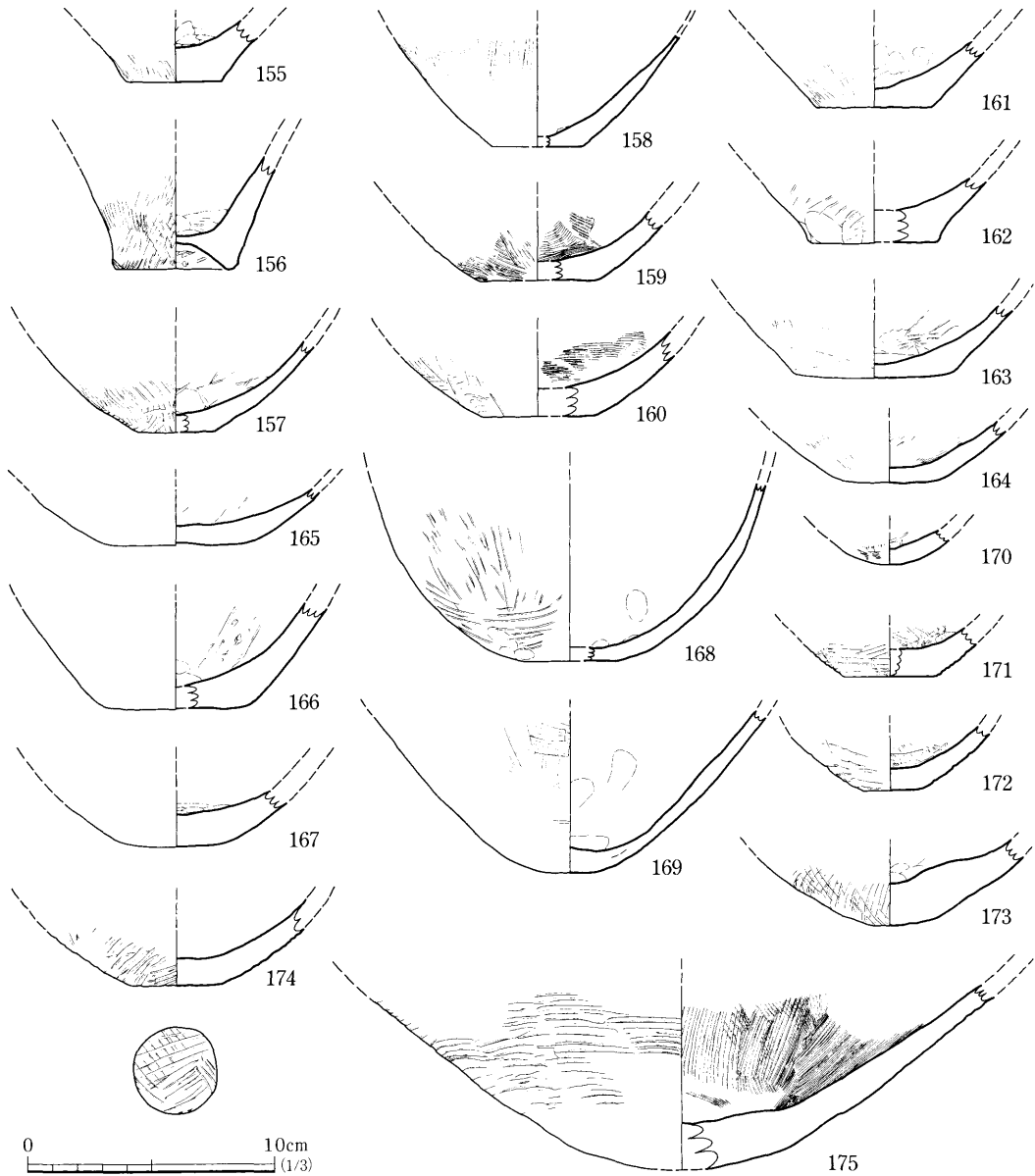


Fig.40 A トレンチ河川出土古墳時代前期土器実測図(8)

した。複合口縁壺の底部の可能性が高い。

155～177は甕の底部である。煤が付着し、被熱のため赤橙色に変色したものが多い。169・170は丸底である。170は外面がヨコハケ後タテハケ、内面はユビオサエ、ナデが施される。171～175は外面にタタキを施し、173・175は丸底である。内面は171・172がケズリ、173・174はナデで、175はタテハケが施される。

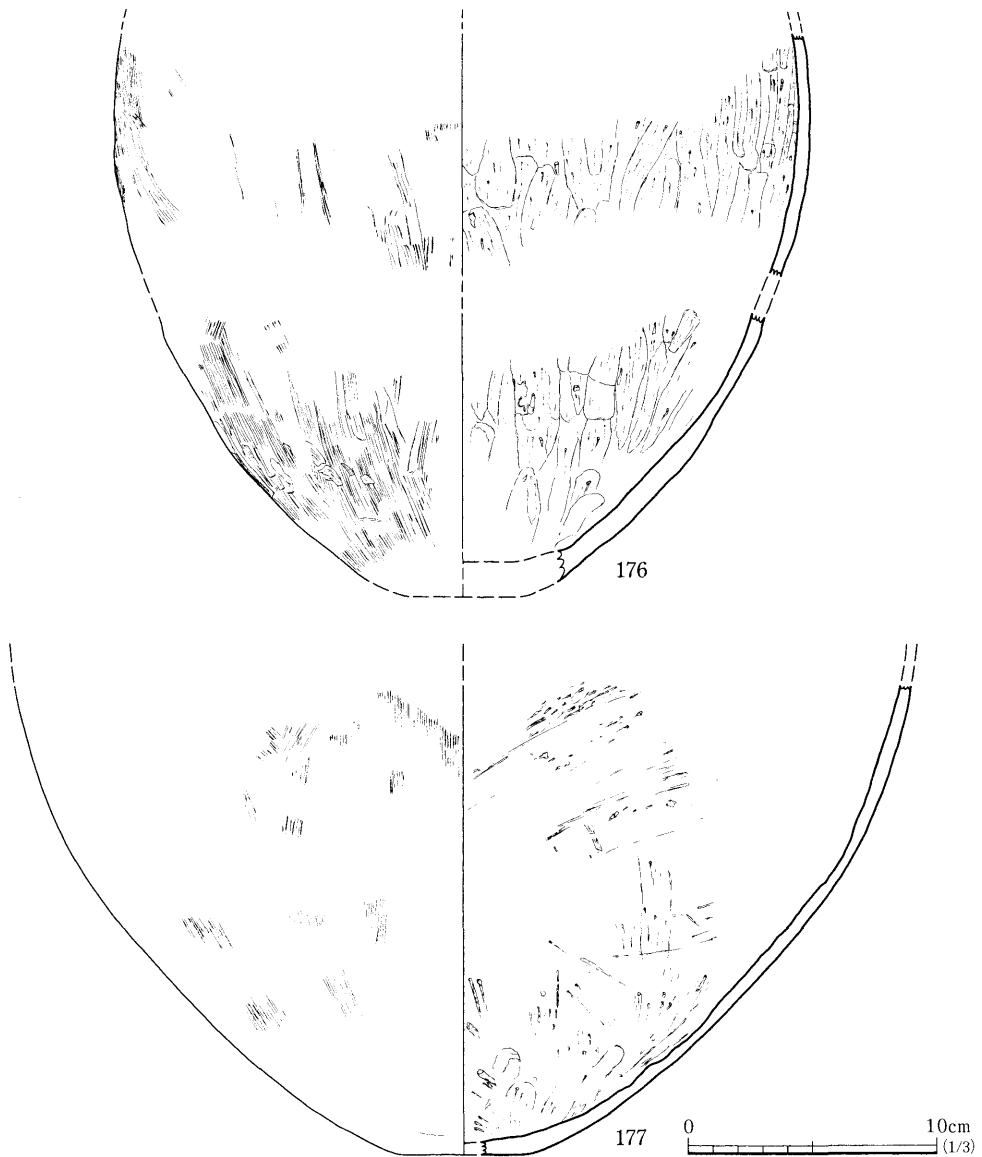


Fig.41 A トレンチ河川出土古墳時代前期土器実測図(9)

176は接合しないが同一個体と考えられるため、図上復元した。底部は欠損しているが、丸底気味の小さな平底と考えられ、胴部は緩やかにすぼまる。外面にはタテハケ後ナデが施され、煤が付着している。内面は下から上方向の荒いケズリの後、ナデが施される。177は痕跡化した平底で、胴部が大きく外へ張り出している。外面はタテハケ後ナデが施される。内面は下から上方向のケズリで、底部内面には指頭痕が残る。

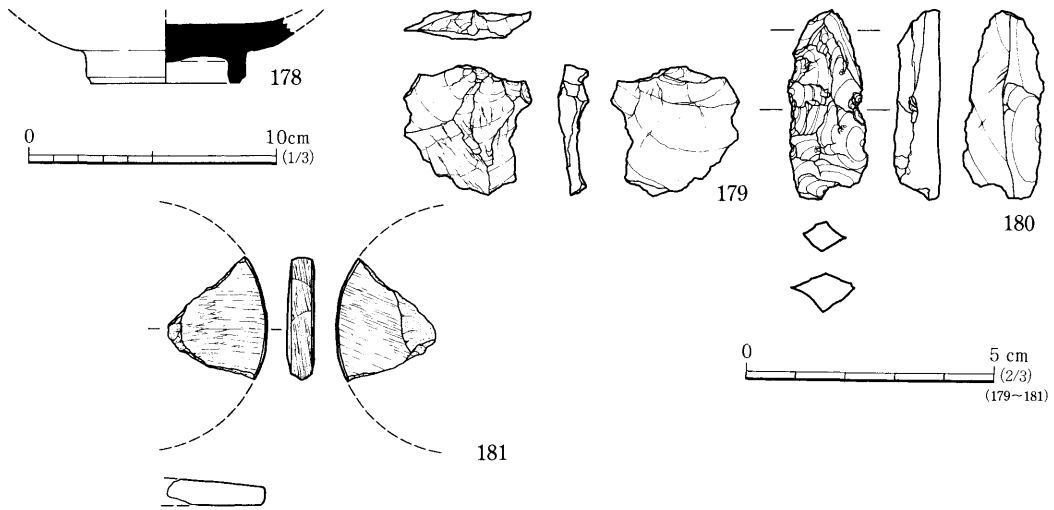


Fig.42 A トレンチ河川出土磁器・石器・石製品実測図

磁器 (Fig.42—178, PL.39)

178は青磁碗の底部である。全面に施釉している。内底面の釉はカキ取られ、露胎となる。内外面に貫入がみられる。高台畳付は側面が削られることにより、やや幅が狭くなっている。表採遺物で近世以降のものと考えられる。

石器・石製品 (Fig.42—179～181, PL.39)

A トレンチでは弥生時代終末から古墳時代初頭の土器が主体を占めているため、石器の出土量は少ない。

179は調整剥片である。背面5枚、腹面1枚の剥離面より構成される。背面の剥離面は全て同方向から打撃しており、特に新しい3面は打点も近接している。このことから、石器製作の際の外形を整えるための調整で生じた剥片である可能性がある。石質はサヌカイトである。

180は石鏃の未製品である。素材剥片の形状は不明だが、表がその腹面になると考えられる。右先端部には折り取りによる剥離面がみられ、調整加工の剥離面も大きく、かなり加工の度合いは高い。裏の調整は1ヶ所だけであるが、剥離面は大きい。石質は黒曜石である。

181は角閃石安山岩製の紡錘車の破片である。中心部は欠損している。復元径は2.6cm、最大厚5.5mmで、表・裏及び側面に二次研磨の痕跡が明瞭に残る。

2 Bトレンチ・配線出土遺物

Bトレンチ及び配線では縄文時代晩期の河川、弥生時代後期の住居跡、弥生時代後期から終末の土坑、溝、近世の水田暗渠を検出した。出土遺物には縄文時代晩期の土器、弥生時代中期から終末の土器、ガラス小玉、古墳時代初頭の土器、近世の陶磁器と弥生時代の石器などがある。以下、時代を追って説明を行う。

(1) 河川出土遺物

縄文時代晩期の土器は河川の肩部や堆積土から出土している。鉄分が付着し、保存状態は不良なものが多い。出土土器はいずれも岩田四類cに相当する晩期中葉の土器である。

深鉢 (Fig.43-182~184, 44-185, 45-186・187, PL.40~42)

182は外反する口縁部である。口唇部は丸くおさめるが、風化のため、刻目の有無は不明である。内外面とも風化が著しく、調整は不明。他にも接合しないが同一個体と考えられる破片がある。

183は口縁部～胴部である。直口でバケツ状にすぼまる。口唇部は面取りをしている。外面は右から左方向の二枚貝条痕が下から上へ施される。内面は左から右方向の二枚貝条痕が下から上へ施される。全体的に鉄分の付着が激しい上、極めて脆いため、採拓を行うことができなかった。岩田四類cに伴うものと考えられる。

184は頸部～胴部である。頸部から胴部にかけて張り出す。外面は横方向の二枚貝条痕が施される。頸部と胴部の境には二枚貝による2条の沈線がみられるが、左側では条痕によって消されている。内面は左から右方向の二枚貝条痕の後にナデが施される。

185は頸部～胴部である。胴部下半は接合しない同一個体から図上復元している。頸部は胴部にかけて張り出し、胴部はバケツ状にすぼまる。緩やかに立ち上がる口縁部を持つものと推測される。頸部外面は右から左方向の二枚貝条痕が施され、胴部は縦もしくは左上がりの二枚貝条痕の後、ナデが施される。頸部内面は右から左方向の二枚貝条痕が施され、胴部内面上半は、二枚貝条痕の後ナデが施される。下半は左上がりの二枚貝条痕が施される。

このように二枚貝条痕をナデ消すのは岩田四類cでも新しく位置づけられ、近畿地方の篠原式の中～新段階¹⁵⁾、九州の黒川式の新相段階に併行する土器と考えられる。山口県内では岩田四類cの出土例が増えつつあるが、新相については出土例が少ない。吉田遺跡においては、農学部連合獣医学科棟新営に伴う発掘調査で、該期の河川から深鉢が出土しているほか、養護学校敷地では土坑から浅鉢と深鉢の底部が出土している¹⁶⁾が、大半は小破片で¹⁷⁾

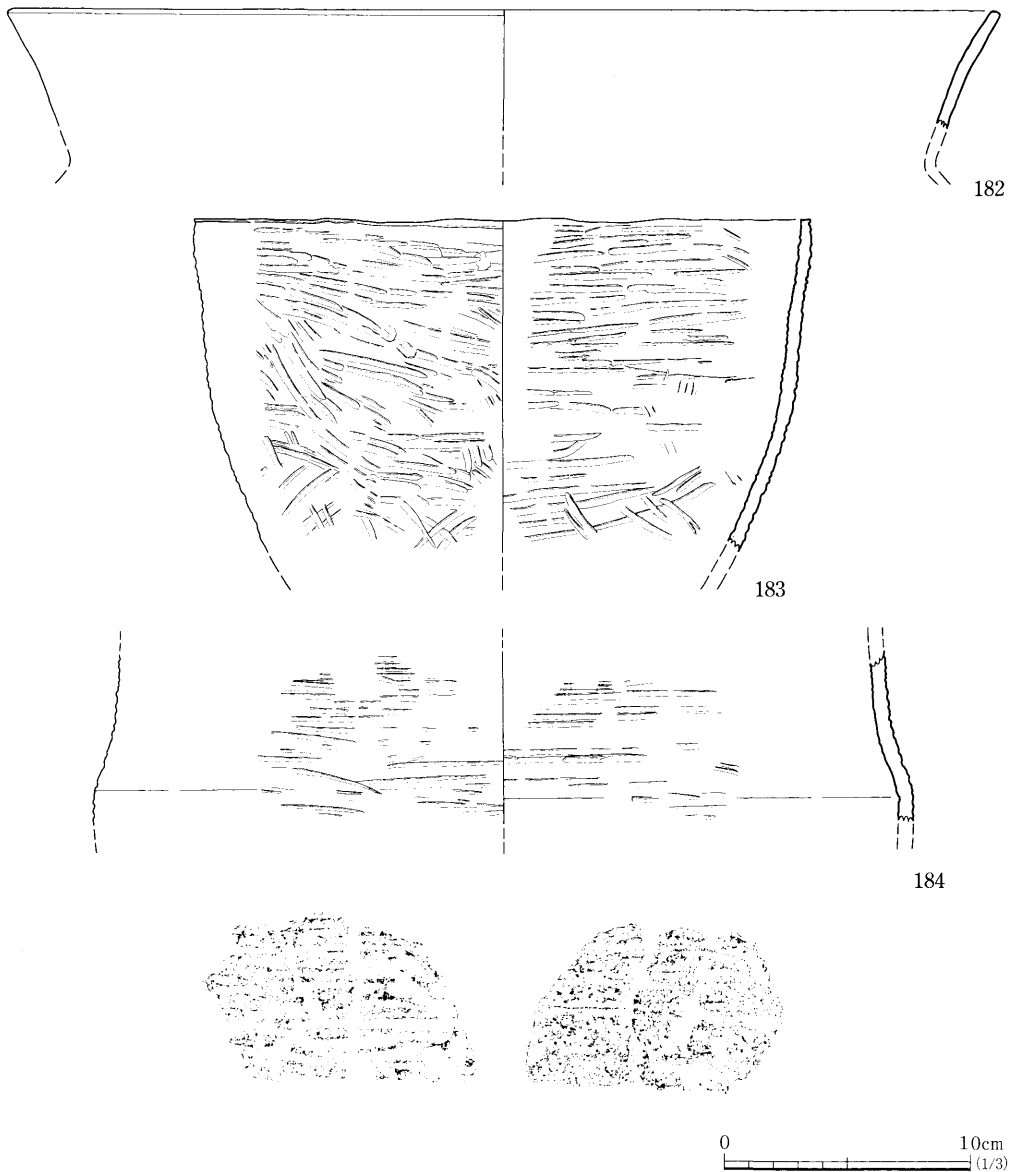


Fig.43 Bトレンチ河川出土縄文時代晩期土器実測図(1)

ある。本例のように頸部から胴部の形態がわかるものは少なく、後述するFトレンチ出土遺物とともに貴重な類例を加えることができた。

186は頸部～胴部である。頸胴部界の屈曲部がわずかしかなかったため、径と傾きについては検討の余地がある。頸部から胴部上半にかけては横方向の二枚貝条痕が施され、胴部下半は右下から左上へ二枚貝条痕が施される。内面は横方向の二枚貝条痕後ナデであ

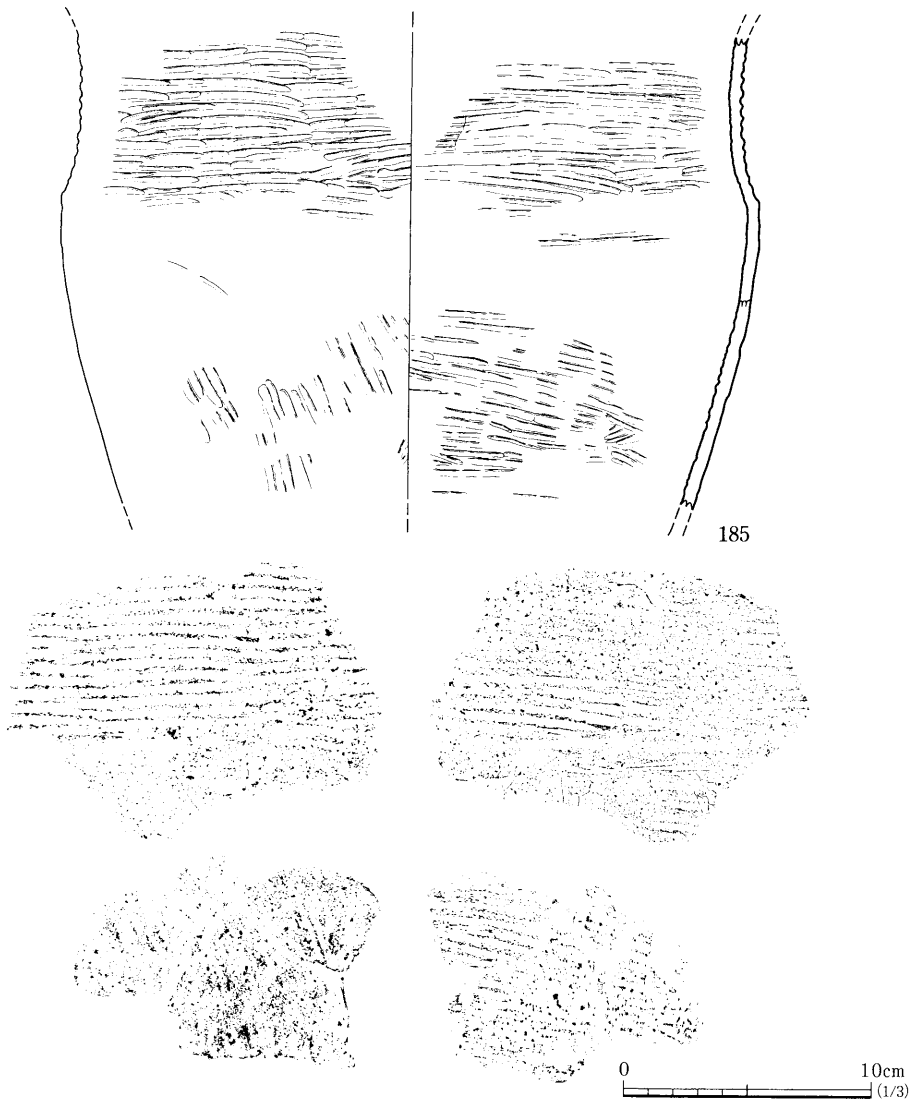


Fig.44 B トレンチ河川出土縄文時代晩期土器実測図(2)

る。風化が激しいため、採拓を行っていない。

187は胴部下半である。他に接合しないが同一個体と考えられる破片がある。外面は風化が激しいため、二枚貝条痕がわずかに観察できるにすぎない。内面はナデである。

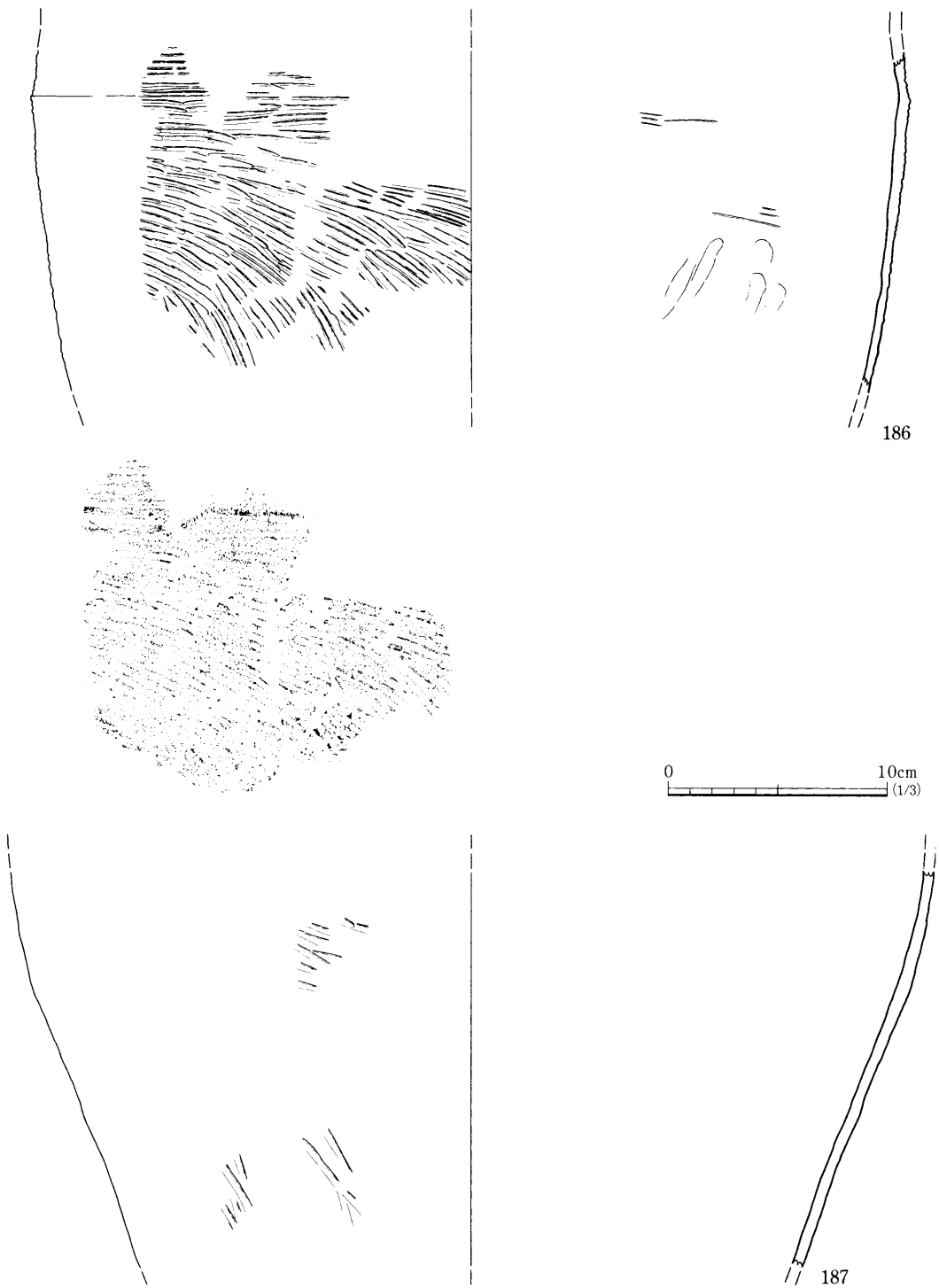


Fig.45 Bトレンチ河川出土縄文時代晩期土器実測図(3)

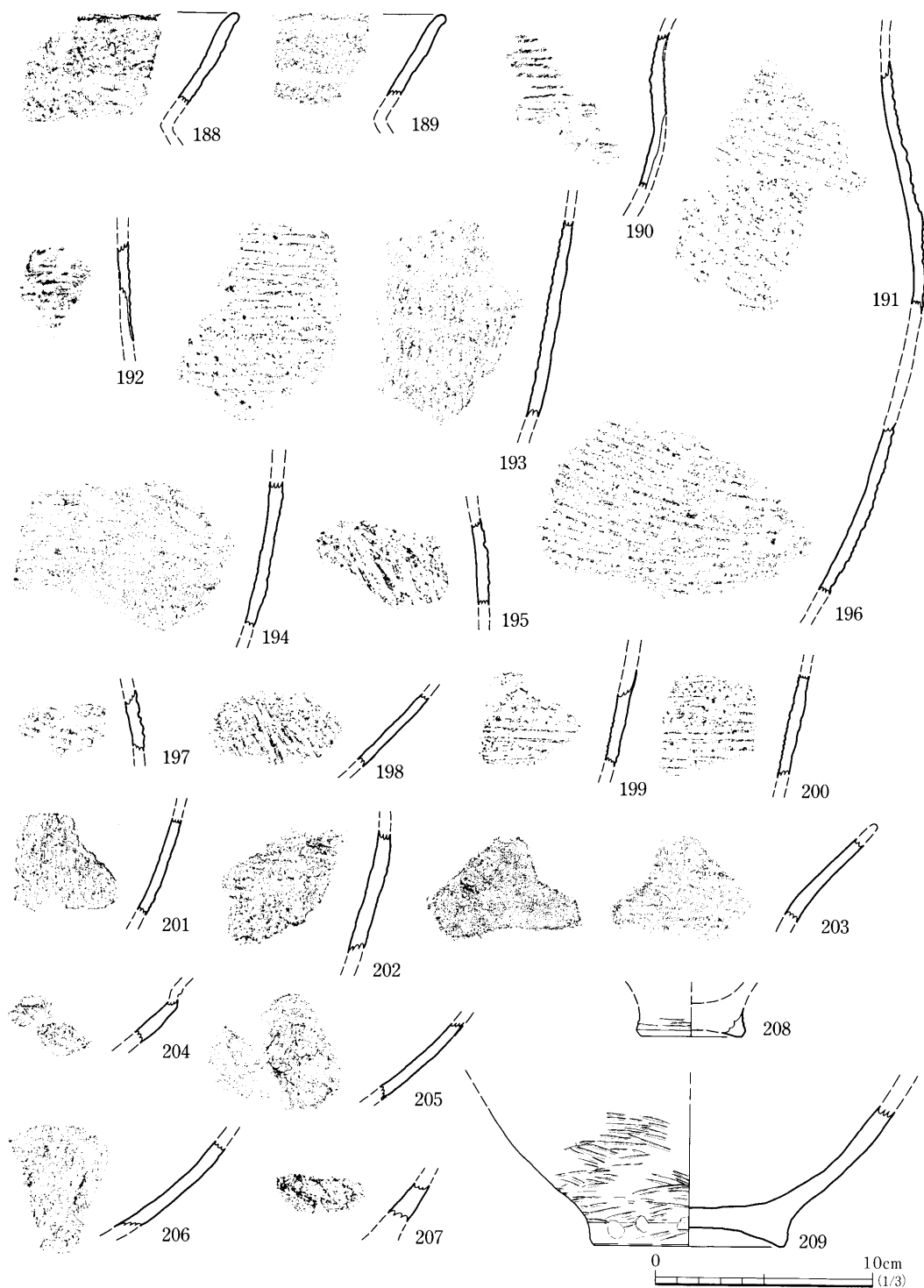


Fig.46 Bトレンチ河川出土縄文時代晩期土器実測図(4)

深鉢口縁部・頸部 (Fig.46—188～192・196, PL.43)

188は口縁部の破片である。先端はヨコナデにより、やや外に折れ曲がる。口唇部は丸くおさめる。内外面とも横方向の二枚貝条痕の後、ナデである。鉄分の付着が著しい。189も同様に先端はヨコナデによりやや外に折れ曲がり、口唇部は丸くおさめる。外面の風化が激しく調整は不明。内面は横方向の二枚貝条痕後ナデである。

190は深鉢の頸部～胴部の破片である。頸部は胴部にかけて張り出し、胴部は緩やかにすばまる。頸部外面は横方向の二枚貝条痕が施され、内面も同様に横方向の二枚貝条痕が施される。185と同一個体の可能性が高い。胴部外面は風化が激しく、調整は不明。胴部内面は横方向の二枚貝条痕後ナデである。

191・196は接合はしないが、土器の色調・胎土・焼成、出土状況などから同一個体として図上復元した。頸部から胴部にかけて緩やかに張り出し、バケツ状にすばまる。外面は左上がりの二枚貝条痕が施される。鉄分の付着が著しい。内面は横方向の二枚貝条痕後、ナデである。

192は頸部の破片である。外面には横方向の二枚貝条痕が施される。内面はナデである。

深鉢胴部片 (Fig.46—193～195, 197～202, PL.43)

193は外面が縦方向及び左上がりの二枚貝条痕後ナデである。内面は横方向の二枚貝条痕が施される。194は内外面とも横方向の二枚貝条痕後ナデである。風化が激しい。195は外面に左上がりの二枚貝条痕が施される。内面はナデである。197は外面に横方向の二枚貝条痕が施される。内面はナデである。198は外面が左上がりの二枚貝条痕で内面が横方向のミガキである。199・200は左上がりの二枚貝条痕後ナデ、内面は横方向の二枚貝条痕が施される。風化が激しい。201は外面が左上がりの二枚貝条痕後ナデで内面もナデである。202は内外面とも横方向の二枚貝条痕後ナデである。

浅鉢 (Fig.46—203～205, PL.44)

203は口縁部で、口唇部を欠く。外面がヨコミガキ、内面が二枚貝条痕後ナデである。204は屈曲部が残る。外面がヨコミガキ、内面がヨコナデである。205・206は胴部片で、205は外面がミガキか。内面はヨコミガキである。206は内外面ともナデである。

底部 (Fig.46—207～209, PL.44)

207・208は浅鉢、209は深鉢の底部である。207は内外面にナデを施す。208はやや上底で横方向の二枚貝条痕が施される。209は上底で、外面は右から左へ横方向の二枚貝条痕が施される。内面は風化で不明。

(2) 第1号竪穴住居跡出土遺物

土器・石器 (Fig.47-210~218, PL.45⁽¹⁾~(3))

210は鋤先口縁の壺である。口縁部の一部が欠損する。内外面は風化が激しい。傾きは異なる可能性もある。弥生時代中期後半～後期初頭と考えられる。211は壺の口縁部である。口縁部下半に紐孔を持つ。212・213は弥生時代中期後半の跳ね上げ口縁の甕の口縁部の破片である。214・215は弥生時代後期前半の高坏の口縁部である。214は直線的に短く外反し、内面には段を持つ。口唇部は欠損している。215は中程まで垂直に立ち上がり、外反する。

216・217は使用痕のある礫及び剥片である。216は扁平な素材剥片を使用している。表は先端部が剥離しており、左側縁部に研磨痕がある。裏は全体的に磨滅している。石質は結晶片岩である。柱穴3出土。217は扁平な素材剥片を使用している。表は先端部に使用による剥離があり、裏にも上部及び先端部に使用による剥離がある。また、左右の側縁部の角が細かく剥落していることから、楔形石器と同様に使用されたものと考えられる。石質は結晶片岩である。柱穴5出土。218は紡錘車である。直径は3.85cm、孔径は0.5cmである。全体的に丁寧な研磨が施されており、裏には欠損部分にも丁寧な研磨痕が残る。石質は滑石である。

ガラス小玉 (Fig.47-219~237, PL.93)

Bトレンチでは遺構埋土の水洗選別を行った。その結果、第1号竪穴住居跡の埋土からは植物遺体の他に19点のガラス小玉を検出した。これらについて、色調、大きさ、外部形態、紐孔形態から観察する。色調には、淡い水色、濃い紺色、淡い青緑色の3種類がみられる。大きさは、小口部長径で2.5~4.7mmの範囲に分布し偏差は見られない。外部形態は、小口部径と側部長の比率により分類する。側面長/長径が0.6未満となり側面長が比較的短く環状になるものを外形1、側面長/長径が0.6以上となり側面長が比較的長く円柱状になるものを外形2とする。さらに側面長/長径が1前後で球状になるものを外形2の特殊形として外形3とする。紐孔形態には、正円形に近いもの、楕円形のもの、やや角張り円弧の一部が潰れて平坦部分を形成し、アルファベットのDのような形態をなすものの3種類がみられる。それぞれ紐孔C1、紐孔C2、紐孔Dとする。

色調が淡い水色のものは、220・223・225・226・230・231・234・235・237。濃い紺色のものは、219・221・224・227~229・232・233。淡い緑青色のものは、222・236である。

外部形態が外形1のものは、219・222・224・227・228・230・233・234・236・237。外

形2のものは、220・221・223・225・226・231・235。外形3のものは、229・232である。

紐孔形態が紐孔C1のものは、221・227・231。紐孔C2のものは、219・222・224・225。

紐孔Dのものは、220・223・226・228～230・232・233～236である。

表面が平滑なものは220・221・225・228・229・231・232・235・237である。このうち221・225・229・232は特に平滑性が高く、研磨仕上げを行った可能性が高い。

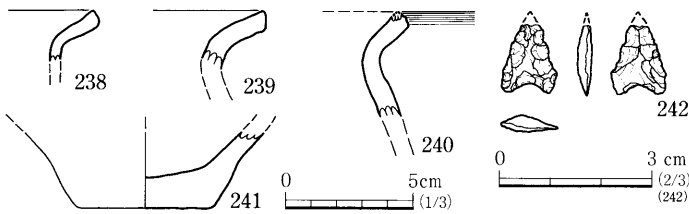


Fig.48 Bトレンチ第2号竪穴住居跡出土遺物実測図

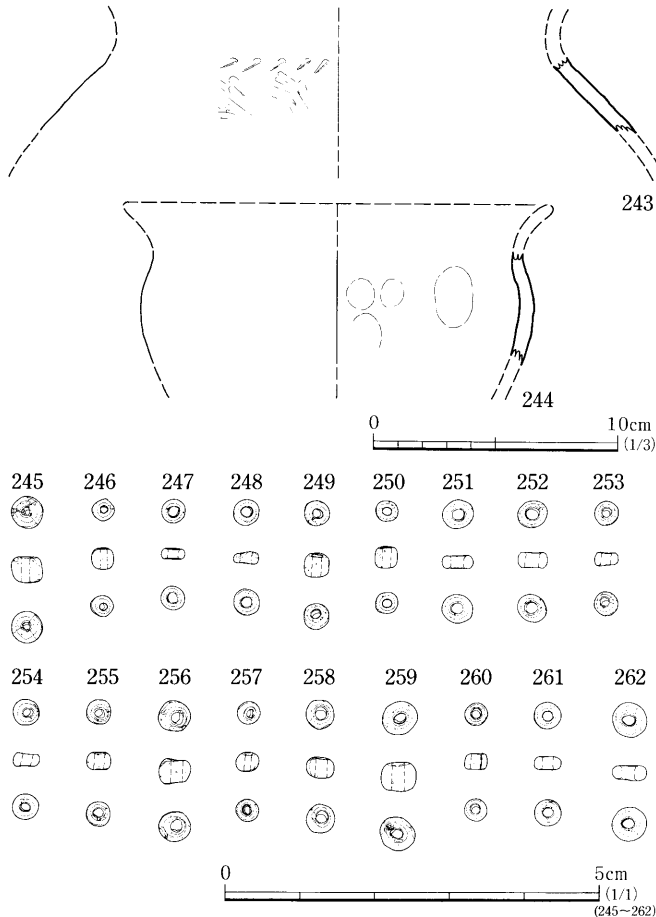


Fig.49 Bトレンチ第3号竪穴住居跡出土遺物実測図

(3) 第2号竪穴住居跡
出土遺物 (Fig.48-238～
242, PL.45 (3) (4))

238～240は甕の口縁部である。238は弥生時代中期後半の跳ね上げ口縁の甕口縁部である。柱穴4出土。239～241は後期前葉の甕である。240は口唇部に2条の擬凹線を持つ。241は甕の底部で、丸底化傾向にある。内外面とも風化が激しい。242は凹基式の石鏃である。先端が欠損しており、風化が激しい。石質はサヌカイトである。

(4) 第3号竪穴住居跡
出土遺物

土器 (Fig.49-243・244,
PL.45 (4))

243は壺の頸部である。上半に刺突が施される。外面には斜方向のミガキが施される。244は甕の胴部である。外面には煤が付着する。風化が激しい。ともに弥生時代

代後期前半と考えられる。

ガラス小玉 (Fig.49-245～262, PL.94)

色調が淡い水色のものは、253・255・256・258・259。濃い紺色のものは、246～252・254・257・260～262。淡い緑青色のものは、245である。

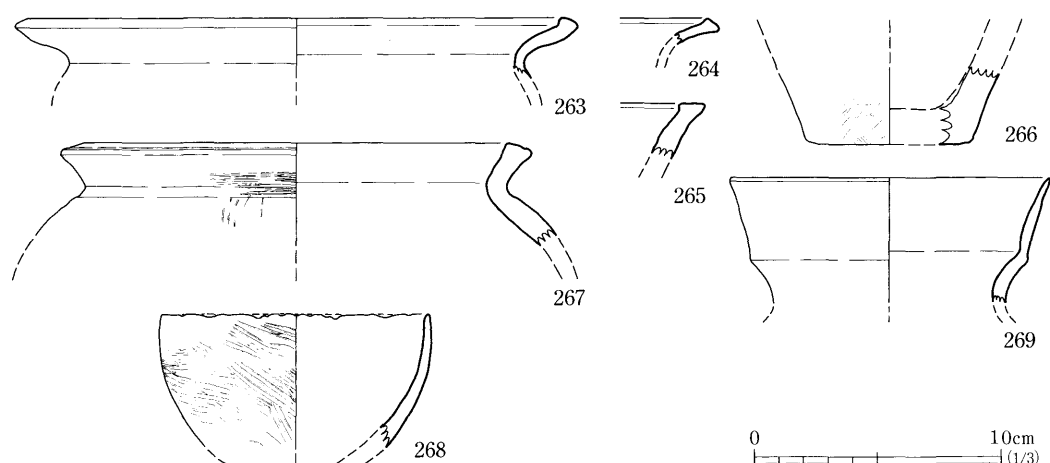


Fig.50 B トレンチ第4号竪穴住居跡出土遺物実測図

外部形態が外形1のものは、247・248・251～254・261・262。外形2のものは、245・246・249・250・255・256・258～260。外形3のものは、257である。

紐孔形態が紐孔C1のものは、258・260・261。紐孔C2のものは、246・248～252・254。紐孔Dのものは、245・247・253・255～257・259・262である。

表面が平滑なものは、246・247・250～253・257・260・261である。このうち、246・250・257は特に平滑性が高く、研磨仕上げを行った可能性が高い。

(5) 第4号竪穴住居跡出土遺物 (Fig.50-263～269, PL.46 (1))

263・264は弥生時代中期後半の跳ね上げ口縁の甕口縁部である。内外面ヨコナデで、口唇部はつまみ上げて外傾させる。264は柱穴4出土である。265は高杯の坏部である。内外面ともナデで口唇部は面をとり、内側には段を持つ。弥生時代中期後半と考えられる。柱穴5出土。266は甕の底部である。外面は斜方向のハケが施される。内面は剥落しており、調整は不明。柱穴4出土。弥生時代前期か。267は甕の口縁部である。口縁部は短く外反し、胴部は肩が張る。口唇部は面をとり、外傾させる。口縁部外面はヨコナデ、胴部外面はタテハケ、口縁部内面はヨコナデ、胴部内面はナデである。弥生時代後期中葉と考えられる。268は鉢である。直口で口唇部は丸くおさめる。外面は左上がりのハケが施される。内面はナデである。弥生時代後期以降のもので、時期が下る可能性もある。柱穴4出土。

269は古墳時代前期の山陰系の甕と考えられる。屈曲部から口縁部が直線的に外反する。内外面とも風化が激しい。遺構埋土の最上層から出土したもので、流れ込みによるものと考えられる。

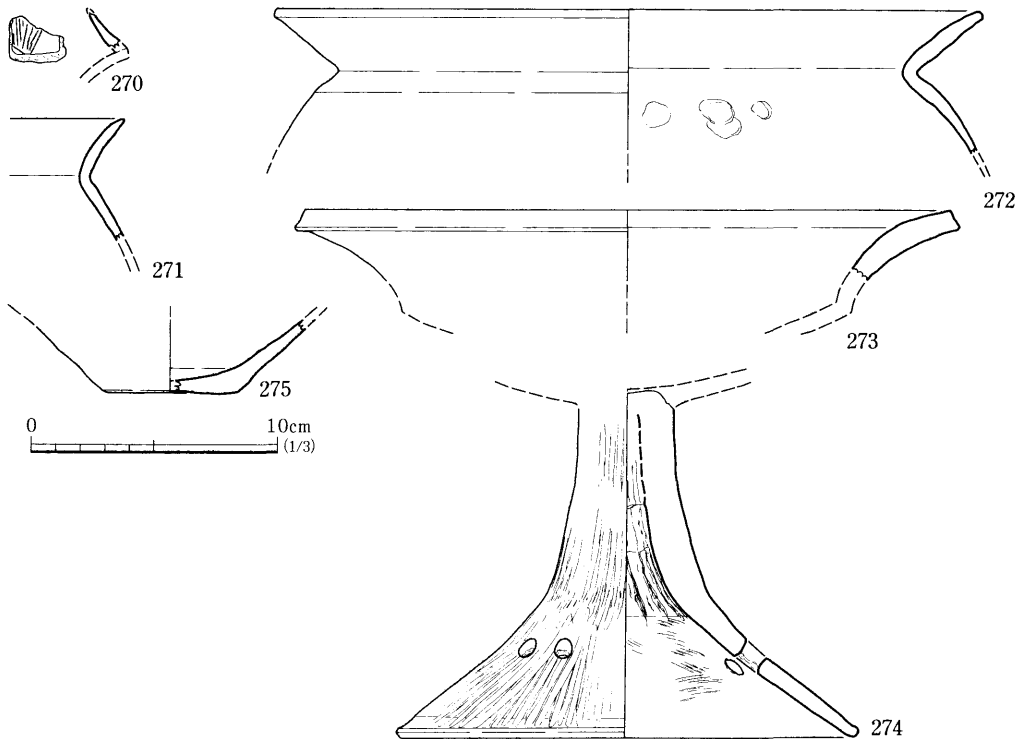


Fig.51 Bトレンチ第1号土坑出土遺物実測図

(6) 第1号土坑出土遺物 (Fig.51-270~275, PL.46 (2))

270は複合口縁壺の口縁部である。口唇部、屈曲部ともに欠損しているが、外面には鋸齒文が施される。内面はナデである。271・272は弥生時代後期後半の甕の口縁部である。271は「く」の字に外反する。口唇部は丸くおさめる。風化が激しく、内外面の調整は不明。272は口縁部が「く」の字に外反し、胴部は肩が張る。口唇部は丸くおさめる。口縁部内外面はヨコナデ、胴部外面はハケの後ナデ、胴部内面はナデで、指頭痕が残る。273は高坏の坏部である。上半は大きく開き、口唇部は面をとる。風化が激しいが、外面にわずかにヨコナデが観察できる。274と同一の可能性がある。274は高坏の脚部である。上部は坏部との接合面で剥離している。外面はタテハケ後タテミガキで、2孔一組の透かし孔を2方向から施す。端部にはヨコナデが施される。脚部の内面には粘土の溜まりがみられるほかシボリ痕が残る、一部はナデにより消される。裾部内面はヨコハケが施される。275は甕底部である。薄い小さな平底で、丸底化傾向にある。風化が激しく内外面の調整は不明。以上の出土遺物は弥生時代後期後半におさまる。

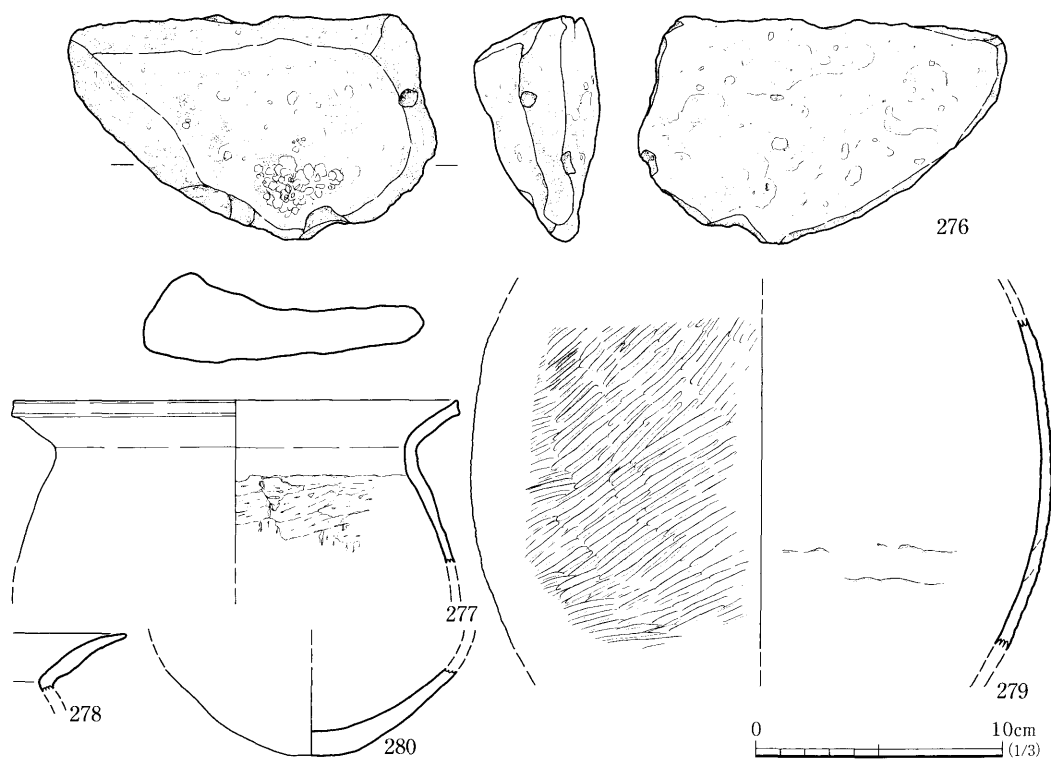


Fig.52 Bトレンチ第2・3号土坑出土遺物実測図

(7) 第2号土坑出土遺物 (Fig.52-276, PL.46 (3))

276は凹石である。円礫を用いており、表には中心部からやや下よりに使用によるくぼみがある。裏は自然面をそのまま残している。石質は凝灰岩である。

(8) 第3号土坑出土遺物 (Fig.52-277~280, PL.47 (1))

277は甕の口縁部～胴部である。口縁部は「く」の字状に外反し、胴部は外へ張り出す。口唇部はヨコナデによりくぼみ、上につまみ上げる。外面は風化が激しく、調整は不明。胴部内面は下半が下から上へのケズリで、上半が左から右へのケズリが施される。278は甕の口縁部である。「く」の字に外反する舌状の口縁部で、接合痕が残る。279は甕の胴部で外面に右上がりのタタキ(1条2.5mm 9mm/3条)が施される。内面はヨコナデで粘土帯接合痕が2ヶ所みられ、これで上下傾きを判断した。280は甕の底部である。丸底の底部で内外面は風化のため、調整は不明。以上の出土遺物は弥生時代後期後半～終末におさまる。

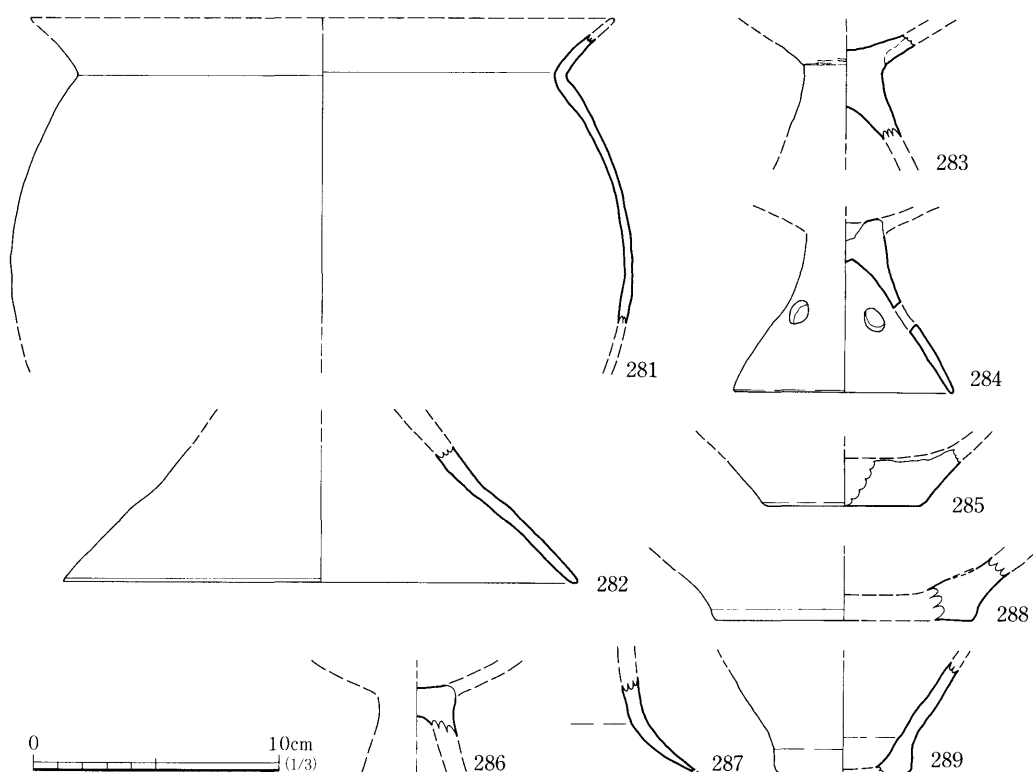


Fig.53 Bトレンチ第4・6号土坑出土遺物実測図

(9) 第4号土坑出土遺物 (Fig.53-281~285, PL.47 (2))

281は甕の口縁部～胴部である。口縁部上半は欠損している。口縁部は「く」の字に外反し、胴部は強く張り出す。内外面とも風化が激しく調整は不明。282は高坏の脚部である。内外面とも風化が激しく調整は不明。283は小型高坏の坏部～脚部である。脚部と坏部の間にはハケが残る。内外面とも風化が激しい。調整は不明。284は小型器台の脚部である。脚部は坏部との接合面で剥離している。脚部と坏部との接合は円盤充填技法による。285は壺の底部である。外面はナデが施される。内面は剥離している。281・282は弥生時代後期後半、283・284は古墳時代前期、285は弥生時代中～後期と考えられる。

(10) 第6号土坑出土遺物 (Fig.53-286~289, PL.48 (1))

286は高坏の脚部である。坏部との接合面で剥離している。外面はナデで、脚部内面にはシボリ痕がわずかに残る。287は高坏の脚部である。風化が激しい。288は壺の底部である。外面はナデで、内面は風化で不明。289は甕底部で、底面の器壁は薄い。286・287は古墳時代前期、288・289は弥生時代中期後半～後期のものであろう。

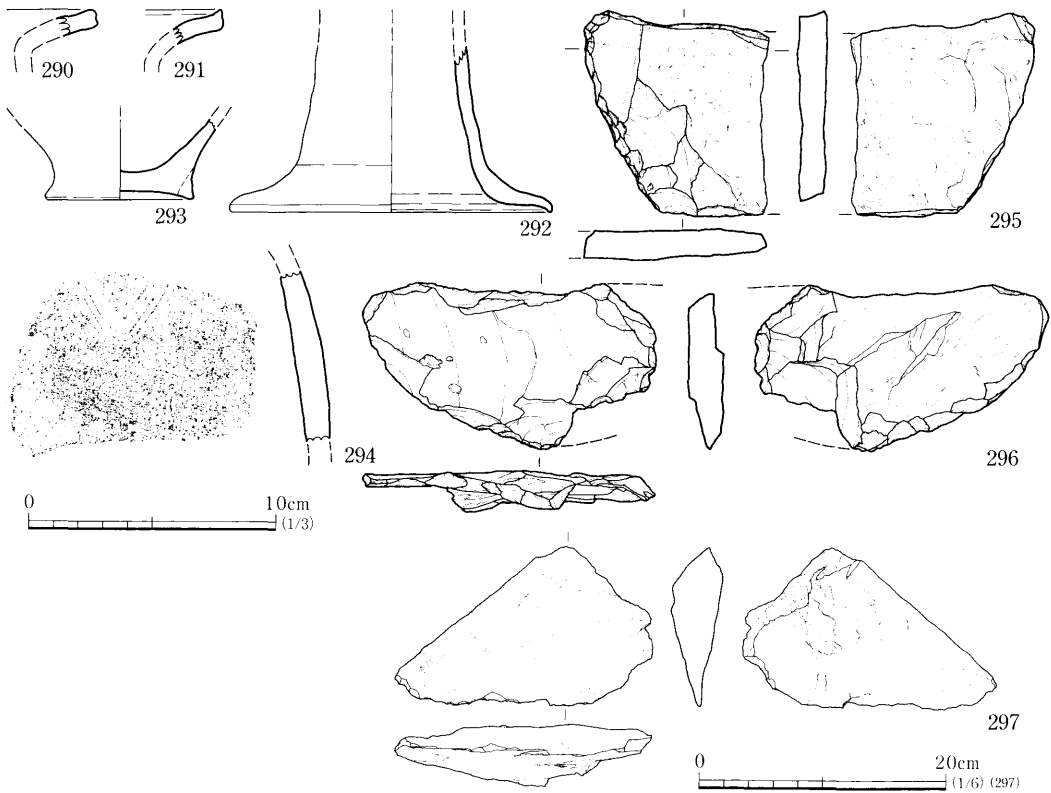


Fig.54 Bトレンチ落ち込み1 出土遺物実測図

(11) 落ち込み1 出土遺物

(Fig.54—290～297, 55—298～300, PL.48 (2)～(3), 49, 50 (1))

290・291は弥生時代中期後半の跳ね上げ口縁の甕口縁部である。292は弥生時代中期の高坏の裾部である。端部はナデにより下方へ突出させる。内外面とも風化が激しい。293は弥生時代中期の甕の底部である。器壁は薄く上げ底で、内外面ともナデである。294は壺の胴部と考えられる。5条単位の櫛描波状文が施される。弥生時代後期か。

295は石包丁の未製品の可能性がある。平坦な素材剥片を使用しており、表は下縁部に調整が施され、外形を整えている。中央から欠損したため廃棄された可能性が高い。石質は結晶片岩である。296は石包丁の未製品である。平坦な素材剥片を使用しており、外縁部に調整を施して外形を整えている。表右下端部が欠損している。石質は結晶片岩である。297は大型刃器である。上面を研磨した砥石状の石の端部を剥離した剥片を使用している。下端部の鋭い縁辺を刃部として使用しており、刃こぼれがみられる。裏は主要剥離面を残す。石質は熔結凝灰岩である。

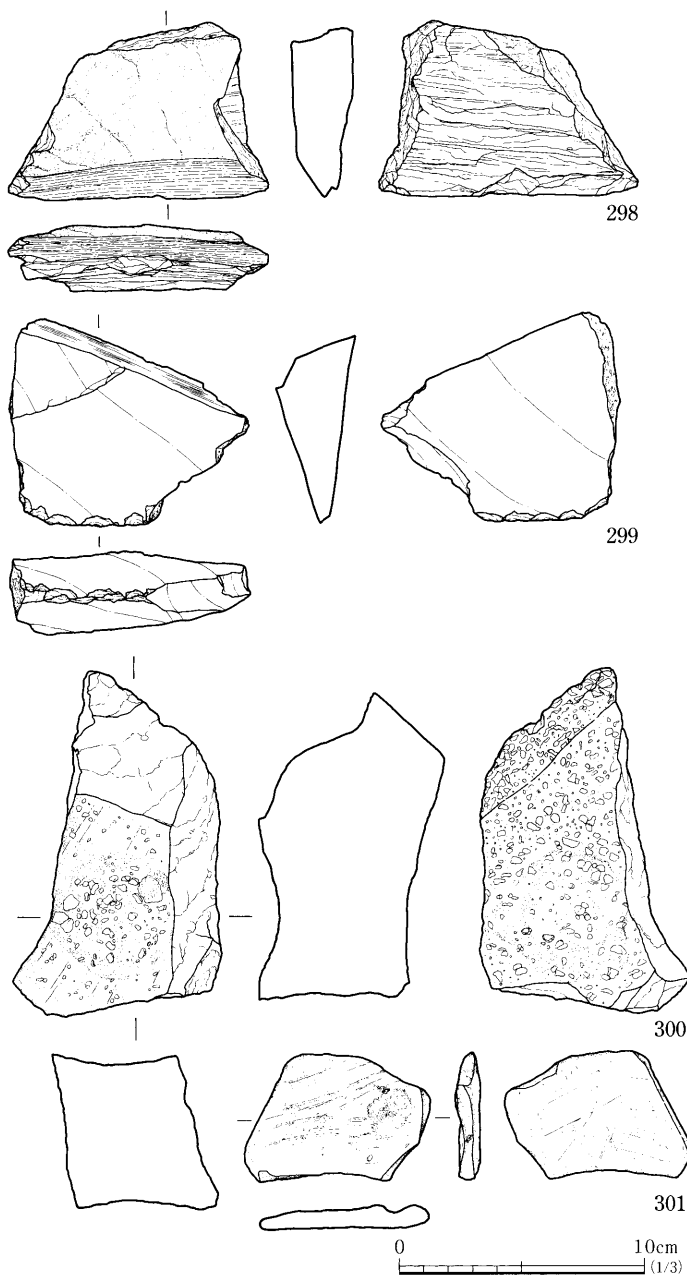


Fig.55 Bトレンチ落ち込み1、土坑8出土遺物実測図

298は刃器である。節理に沿って剥離した素材剥片を使用する。表は左側縁部の下半部を平坦に剥離し、下縁部を節理方向に研磨して刃部になっている。裏も下縁部に調整剥離を加えて刃部としている。石質は結晶片岩である。299は刃器である。上面を研磨した砥石状の石の端部を剥離したと考えられる素材剥片を使用している。表・裏とも使用による刃こぼれがある。石質は熔結凝灰岩である。300は凹石である。上面を研磨した砥石状の石を使用しており、砥石の再利用の可能性がある。背面には中央部に円形のくぼみがある。腹面には研磨はみられないが、使用による円形の浅いくぼみがある。石質は安山岩である。

(12) 土坑8出土遺物
(Fig.55-301, PL.50 (2))

301は角閃石安山岩製紡錘車の未製品である。板状の扁平な転礫を使用している。表は右端部に1ヶ所くぼみをつくり、横方向の研磨を施している。裏には不定方向の研磨が施される。全体的に風化している。

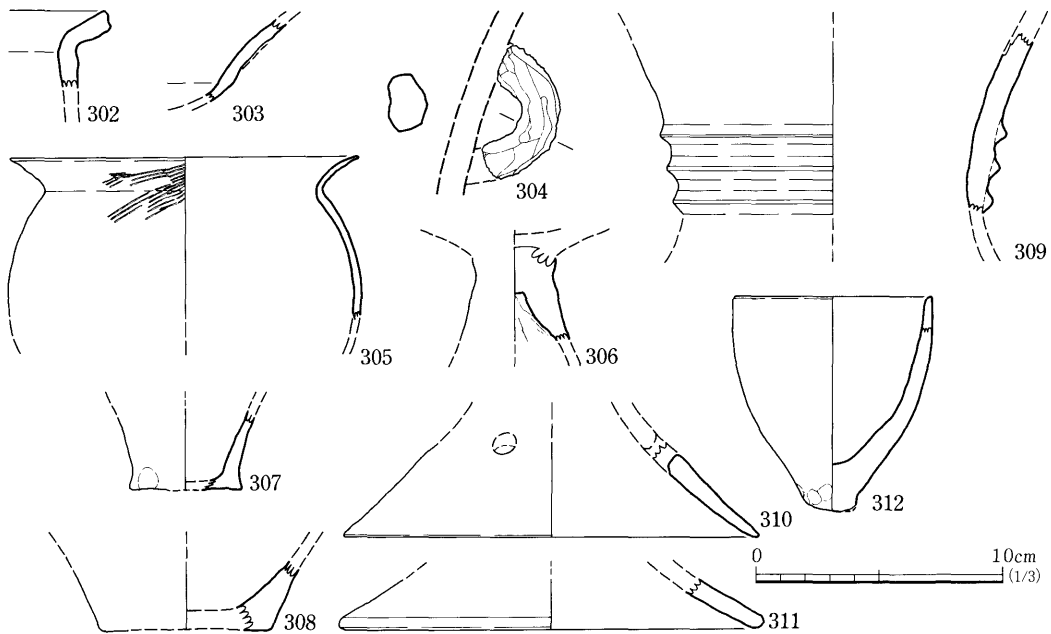


Fig.56 Bトレンチ第1・2号溝出土遺物実測図

(13) 第1号溝出土遺物 (Fig.56-302~308, PL.51 (1))

302は甕の口縁部である。ヨコナデにより口唇部が凹む。口縁部には強いヨコナデが施される。303は高坏の坏部である。風化が激しいが屈曲部がわずかに残る。304は鉢の把手である。指頭痕が顕著に残る。下半部は欠損している。遺跡保存地区第9号堅穴住居跡から同様な把手が出土している¹⁸⁾。305は伝統的V様式の甕である。小型・球胴で、外面には口縁部から体部にかけて右上がりのタタキ（1条2mm 8mm/3本）が施されている。風化が激しく、内面の調整は不明。306は小型高坏の脚部である。風化が激しい。307・308は甕の底部である。307は底部側面がやや外に張り出し、指頭痕が残る。いずれも風化が激しい。302~304は弥生時代後期、305・306は古墳時代前期、307・308は弥生時代中~後期と考えられる。

(14) 配線トレンチ第2号溝出土遺物 (Fig.56-309~312, PL.51 (2))

309は垂下口縁壺の頸部である。3条以上の断面三角形の貼付突帯を持つ。310・311は高坏の裾部である。310は円形透かし孔を持つ。風化が激しい。311は端部を丸くおさめる。風化が激しい。312は小型の鉢である。口縁部は接合しない同一個体から図上復元したものである。底部側面に指頭痕、胴部内面下半にナデを残すほかは風化が激しく、調整は不明。309は弥生時代中期、310~312は弥生時代後期と考えられる。

(15) 配線トレンチC区落ち込み1出土遺物 (Fig.57-313~335, PL.52・53)

最下層(灰黒色砂礫土)

313は弥生時代中期の垂下口縁壺の頸部である。胴部には断面三角形の2条の貼付突帯を持つ。風化しており、内外面の調整は不明。314・315は弥生時代中期後半の跳ね上げ口縁の甕の口縁部である。内外面ヨコナデで端部を垂直につまみ上げる。316は壺の口縁部である。口唇部に面を持ち、3条の擬凹線を持つ。317は第3層出土土器であるが、316と同一個体と考えられる。肩の張る胴部片で2条の沈線が施され、その上下にはハケ原体による右上がりの刺突が施される。弥生時代後期初頭のものと考えられる。318は磨製石斧の頭部である。全体的に丁寧な研磨が施されている。表の左側と下半を欠損しており、左側の欠損部の下は研磨によって若干変形している。石質は輝石安山岩である。

下層(青灰色砂礫土)

319は小型壺の胴部～底部である。胴部はあまり張らず、底部は厚く、わずかに上底である。胴部外面にはヨコミガキ、底部側面にはタテミガキが施され、指頭痕が残る。内面はユビオサエの後、ナデである。320は高坏の脚部である。裾部の端部は沈線が1条施される。外面はタテミガキ、内面はナデである。いずれも弥生時代中期後半と考えられる。

中層(暗灰黄色粘土)

321・322は甕の底部である。323は壺の胴部で外面は丹塗りされている。324は甕の口縁部である。短く外反し、口唇部には1条の沈線が施される。325は口縁部が「く」の字に外反する甕である。風化しており調整は不明。弥生時代後期後半と考えられる。

中層(黒色粘土)

326は高坏の坏部である。上半は短く外反し、接合面で剥離している。外面にはタテハケを残す。327・328は高坏の脚部である。ともに外面にタテミガキが施される。328は坏部との接合に円盤充填技法が用いられる。内面にシボリ痕を残す。329は壺の底部である。底面は剥離している。内外面ともナデが施される。330は土玉である。焼成前に中心部から左側に途中まで穿孔した後、再度右寄りに穿孔する。

上層(黒灰色粘土)

331は甕の底部である。丸底で風化が激しく内外面の調整は不明。

(16) 配線トレンチD区落ち込み出土遺物 (Fig.57-332・333, PL.53 (1))

332は弥生時代中期後半の跳ね上げ口縁の甕口縁部である。333は甕の底部で側面にタタキを残す。弥生時代終末～古墳時代初頭と考えられる。

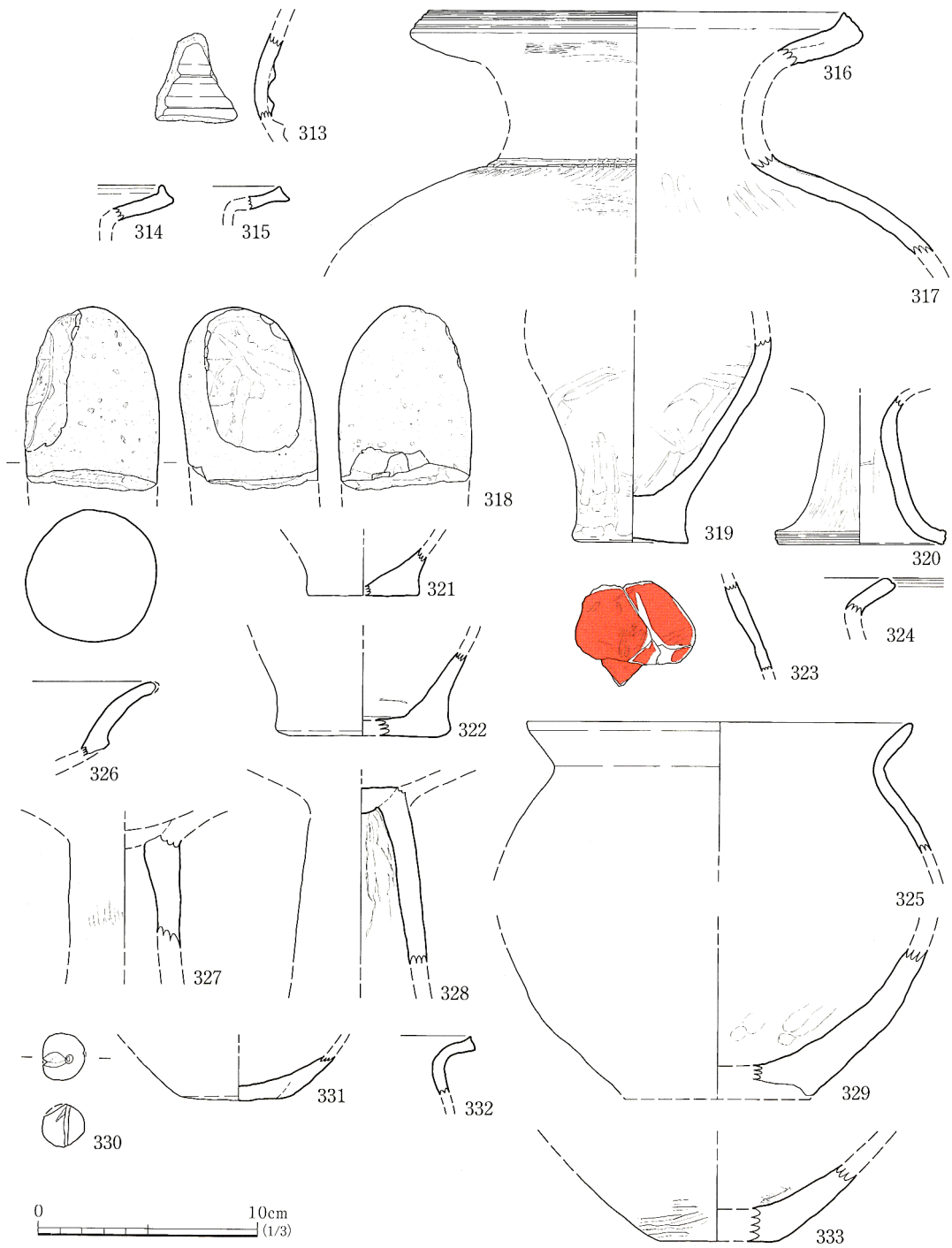


Fig.57 配線トレンチ落ち込み1出土遺物実測図

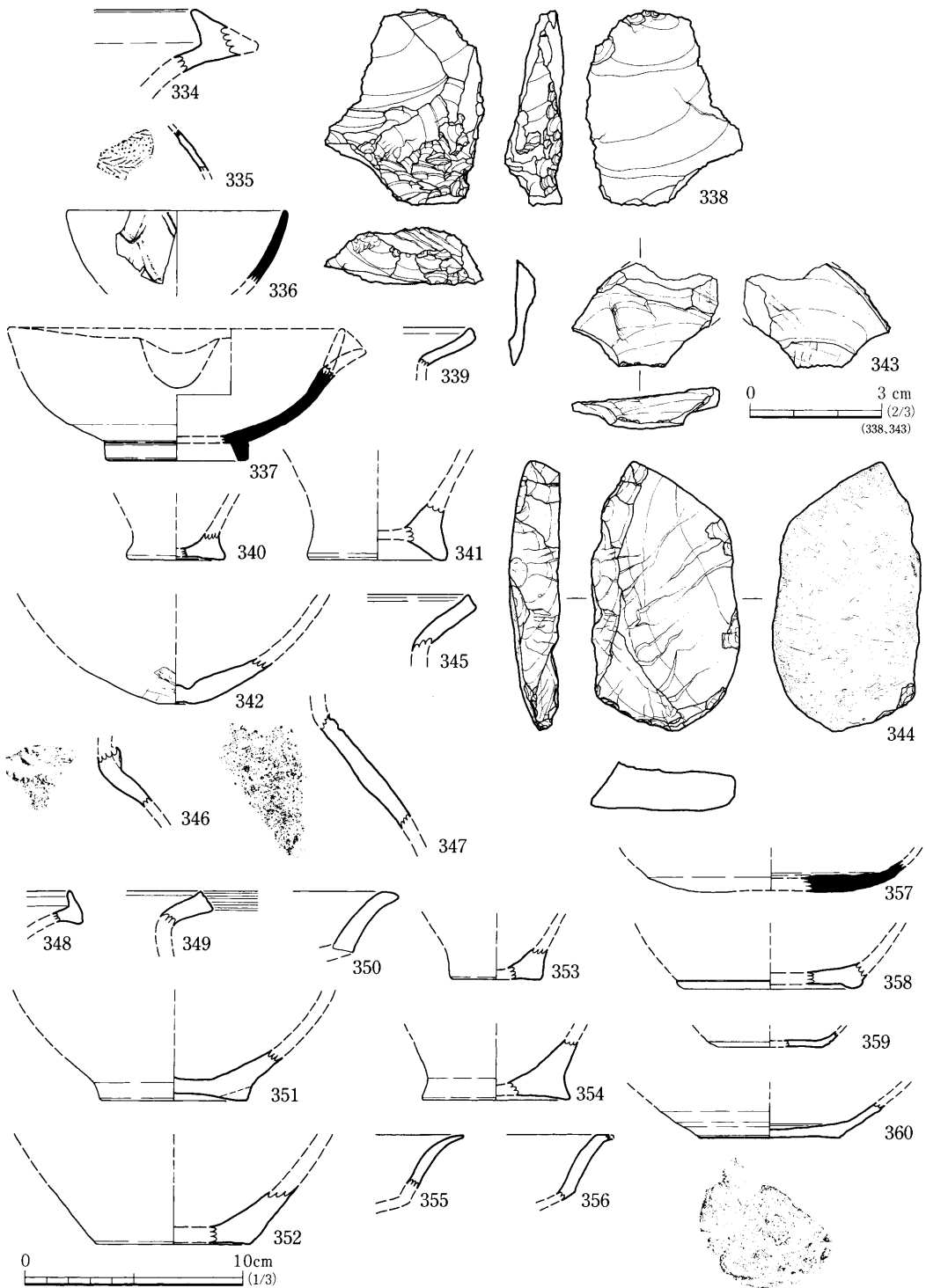


Fig.58 B トレンチ暗渠・遺構検出時出土遺物実測図 (1)

(17) 暗渠出土遺物 (Fig.58-334~338, PL.54 (1) (2))

334は複合口縁壺である。屈曲部を欠損している。混入と考えられる。335は瓦質土器の壺の破片と考えられる。外面には風景画を型押しする。336は肥前系染付でいわゆるくらわんか碗である。二重編目文を染め付ける。337は萩焼の片口である。片口の下部のみ残存し、高台は鋭く削り込まれる。藁灰釉を内面と外面の胴部半まで施す。幕末以降のものと考えられる。338は姫島産黒曜石の剥片である。背面は上方及び左下方から大きく剥離され、右下縁は階段状の剥離を生じる。腹面に主要剥離面を残す。混入と考えられる。

(18) 遺構検出時出土遺物 (Fig.58-339~360, 59-361~366, PL.54 (3)・55)

Bトレンチの遺構検出はトレンチを四分割し、北東隅をG-1、南東隅をG-2、北西隅をG-3、南西隅をG-4に分割して行った。以下各グリッドの出土遺物について述べる。

G-1 出土遺物

339は弥生時代中期後半の跳ね上げ口縁の甕口縁部である。ヨコナデにより口唇部をつまみ上げる。340・341は弥生時代中期の甕の底部である。底部は外側に張り出し、上底である。

G-2 出土遺物

342は土師器甕の底部である。外面はケズリが施され、底面は凹む。343は剥片である。下縁部に使用痕がみられる。石質は安山岩である。344は使用痕のある剥片である。表の左側縁に調整を加え、外形を整えている。下縁部に使用痕がある。裏は円礫面である。石質は流紋岩である。

G-3 出土遺物

345は弥生時代中期後半の跳ね上げ口縁の甕口縁部である。口唇部をヨコナデによりつまみ上げる。346・347は弥生時代後期の壺の頸部である。346は1条の貼付突帯を持つ。突帯には押圧が施される。347は頸部に棒状工具による刺突が2段施される。348は弥生時代後期の複合口縁壺で、口縁下端に1条沈線が施される。風化が激しい。349は弥生時代後期前半の甕口縁部で、口唇部に3条の擬凹線が施される。350は弥生時代後期前半の高坏坏部で、上半が外反する。接合面で剥離している。外面には縦方向のミガキが施される。351・352は弥生時代中期の壺底部、353・354は弥生時代中期の甕の底部である。風化が激しい。355・356は古墳時代中期の高坏の坏部である。いずれも風化が激しい。357は古墳時代後期の須恵器蓋坏の坏底部である。底面に回転ヘラケズリが施される。358は土師器碗の底部で、低いカマボコ状の高台がつく。359・360は土師器皿の底部である。糸切底で、

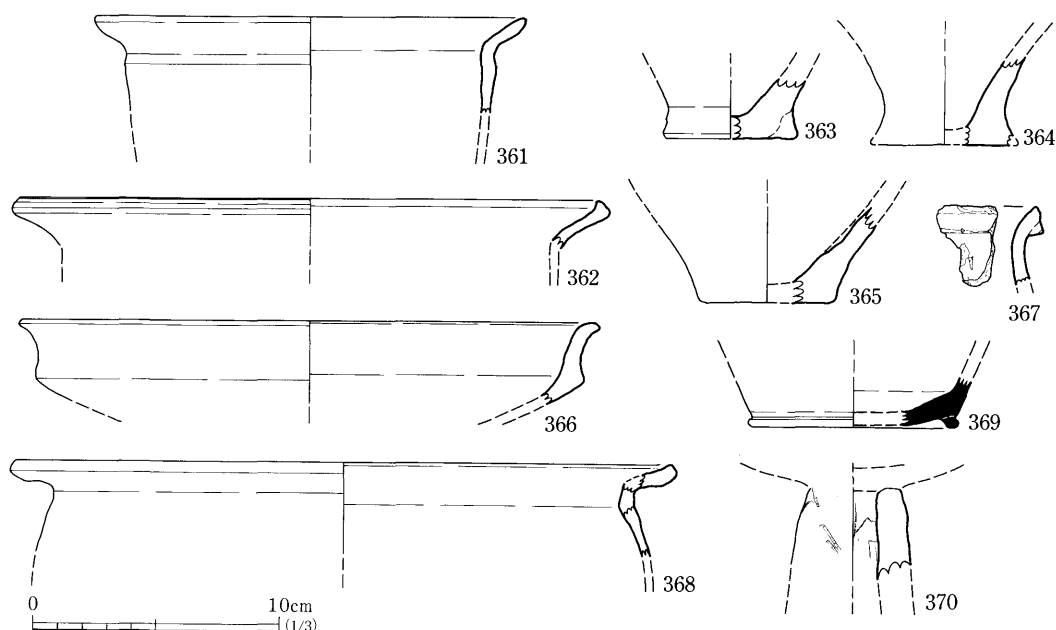


Fig.59 Bトレンチ遺構検出時出土遺物実測図(2)、配線トレンチ攪乱・表土掘削時出土遺物実測図

いずれも風化が激しい。

G-4 出土遺物

361・362は弥生時代中期の甕の口縁部で、361は口縁部に強いヨコナデが施される。362は跳ね上げ口縁の甕で、ヨコナデにより口唇部をつまみ上げる。363～365は甕の底部である。363・364が弥生時代中期、365が弥生時代後期と考えられる。366は高杯の坏部である。上半が屈曲して短く外反する。内外面にヨコミガキの痕跡が残る。弥生時代後期前半と考えられる。

(19) 攪乱、表土掘削時出土土器 (Fig.59-367～370, PL.55)

367は縄文時代晩期の刻目突帯文深鉢の口縁部片である。口唇部に接して断面三角形の貼付突帯を持ち、突帯上には極小の刻目が施される。配線トレンチA 2区攪乱出土。

368は弥生時代中期後半の跳ね上げ口縁の甕口縁部である。「く」の字に外反し、口唇部をつまみ上げる。風化が激しく調整は不明。配線トレンチC区表土掘削時出土。

369は須恵器坏の底部である。貼付高台でやや外に張り出す。その特徴から9世紀中頃のものと考えられる。配線トレンチC区表土掘削時出土。

370は土師器高杯の脚部である。坏部の接合面で剥離する。外面には右上がりのハケが残り、部分的に面をなす。配線トレンチD区表土掘削時出土。

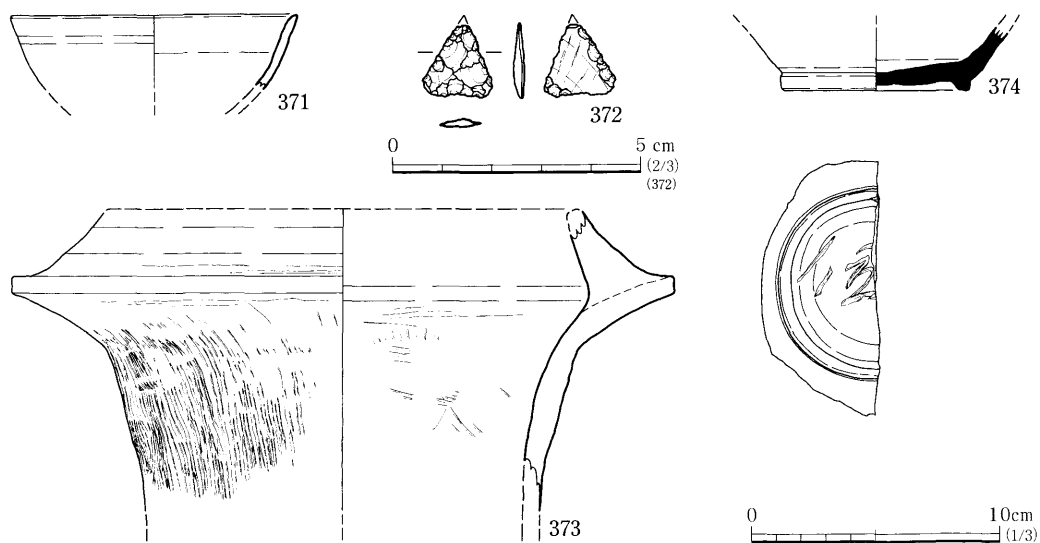


Fig.60 配線トレンチE区・G区出土遺物実測図

(20) 配線トレンチE区包含層出土遺物 (Fig.60—371・372, PL.56 (1)(2))

包含層から遺物が出土した。371は土師器碗の口縁部である。内外面はナデで、口唇部は丸くおさめる。風化が激しい。372は平基式の石鏃である。背面は調整の度合いが大きいが、腹面は右側縁をわずかに整えるのみで素材面を多く残している。石質はサヌカイトである。

(21) 配線トレンチG区出土遺物 (Fig.60—373・374, PL.56 (1)(3))

G区では河川から遺物が出土した。373は弥生時代後期の複合口縁壺である。頸部はほぼ垂直に立ち上がり、立ち上がりが接合面で一部剥離している。口唇部を欠く。頸部外面はタテハケ、口縁部外面にはヨコナデが施される。頸部内面はタテハケ及びヨコハケ後ナデで、口縁部内面はヨコナデが施される。

374は須恵器坏の底部である。やや低い高台を底部と胴部の屈曲部に接して貼り付けていることから、9世紀前半以降のものと考えられる。底面はヘラ描による文字がみられるが、右半分は欠損している。この文字は現状では「位」に最も近いが、「領」の可能性も考えられる。字がほぼ完結していることから、欠損している右側にもう1字あった可能性が高い。「位」と「領」では「領」の方が類例が多く、郡司の官職名である「大領」「少領」などに使用された場合が多い。仮に「領」であれば、¹⁹⁾大学会館前庭部、²⁰⁾神郷大塚遺跡では官衙的遺物が出土していることから、官職名を記した可能性が²¹⁾ある。

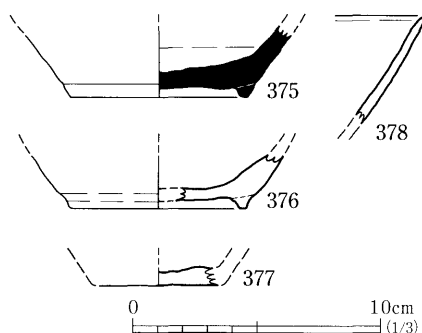


Fig.61 Cトレンチ出土遺物実測図

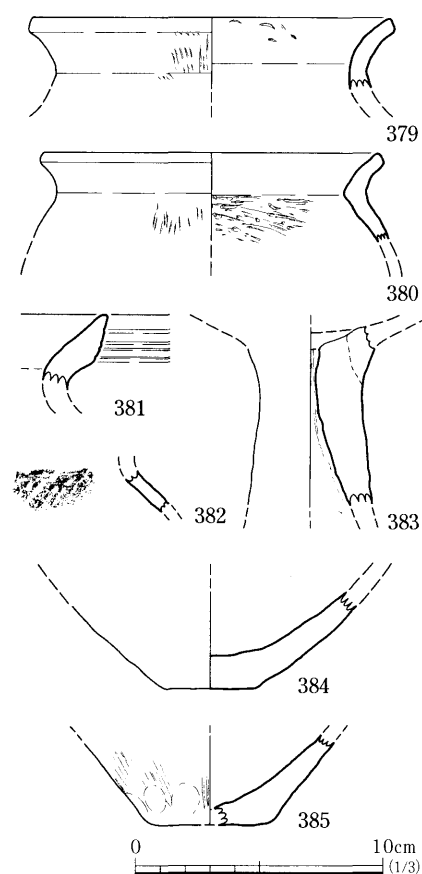


Fig.62 Eトレンチ出土遺物実測図

3 Cトレンチ出土遺物

(Fig.61-375~378, PL.56 (4))

375は須恵器坏底部である。やや低い貼付高台が底部と胴部の境の屈曲部につく。底部にはヘラ切り痕が残る。9世紀前半以降のものと考えられる。水田溝出土。376は土師器碗の底部である。形態が375と極めて近似しており、須恵器を模倣したものであろう。遺物包含層出土。377は土師器坏の底部で、底面にはヘラ切り痕を残す。溜池状遺構出土。378は土師器碗の口縁部である。風化が激しい。第1号土坑出土。

4 Eトレンチ出土遺物

(Fig.62-379~385, PL.56 (5))

E区では包含層から弥生時代後期前半の土器が出土した。379は壺の口縁部である。口縁部はあまり開かない。外面はタテハケ後ヨコミガキ、内面はヨコナデで、爪跡が残る。380は甕の口縁部である。口縁部は短く外反し、体部が張る。口縁部内外面はヨコナデである。体部外面はタテハケ、体部内面は右下から左上へケズリが施される。381は山陰系甕の口縁部である。口縁部には擬凹線を4条施す。口縁部内外面にはヨコナデが施される。風化が激しい。382は甕の頸部である。板状工具によって右上がりの刺突が施される。風化が激しい。383は高坏の脚部である。弥生時代後期のものと考えられる。内面にはシボリ痕が顕著に残る。上面は坏部との接合面で剥離する。風化が激しい。384は甕の底部である。底部はやや厚手の小さな平底である。外面は風化が激しく調整は不明。内面はタテハケ後ナデである。385は甕の底部である。外面はタテハケで、内面はナデである。

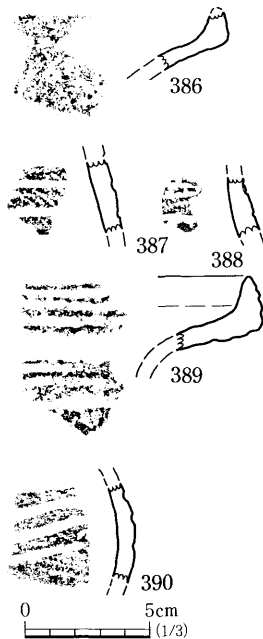


Fig.63 Fトレンチ
河川出土縄文時代
後期土器実測図

5 Fトレンチ出土遺物

Fトレンチでは縄文時代の河川から、下層では縄文時代後期、上層では縄文時代晩期を中心とする土器が出土した。なお、河川を掘り込んだ水田暗渠及び河川上面包含層からも、本来河川堆積土中に含まれていた縄文土器が出土しており、河川出土土器と共に掲載している。詳細は観察表を参照されたい。

(1) 縄文時代後期 (Fig.63—386～390, PL.57)

386～388は磨消縄文系土器で、岩田2類、月崎上層2類に相当する九州の西平系土器と考えられる。386は深鉢の口縁部である。無文で外反する口縁部と立ち上がりを持つ。口唇部は欠損している。内外面ともナデである。387は有文深鉢の胴部である。3条の沈線をもち、RLの縄文が施される。風化が激しい。388は有文深鉢の胴部である。3条の沈線を持つ。沈線間には巻貝の刺突による擬縄文が施される。内面は風化が激しく、調整は不明。389は深鉢の口縁部である。立ち上がり部分に3条、その下に3条の凹線が施される。風化が激しい。岩田3類bに相当する九州の御領系の土器と考えられる。390は深鉢、もしくは鉢の胴部である。3条の右上がりの沈線が施される。下地に施された貝殻条痕が観察できる。晩期初頭の下る可能性もある。

(2) 縄文時代晩期

縄文時代晩期深鉢 (Fig.64—391, 65—392, 66—393～399, PL.58・59)

391は深鉢の口縁部～胴部である。寸づまりの形態で、口径と器高がほぼ等しくなると考えられる。口縁部と胴部の境で屈曲し、口縁部は直線的に外反する。口唇部は面をとり、無文である。胴部外面、口縁部外面には右から左方向の二枚貝条痕が施される。口縁部と胴部の境は二枚貝条痕の後にナデが施される。口縁部内面は右から左方向の二枚貝条痕が施された後、ナデにより入念に条痕が消されている。胴部内面は右から左へ二枚貝条痕が施された後、ナデが施される。以上の特徴は寸づまりである点を除けば、岩田四類cの新相に相当する。

392は深鉢の口縁部～底部である。接合しない同一個体の口縁部、胴部、底部を図上復元した。寸づまりの形態で、口径が器高を上回る。緩やかに口縁部が外反し、尖底の底部



Fig.64 F トレンチ河川出土縄文時代晩期土器実測図 (1)

に続く。口唇部はヨコナデにより丸くおさめ、余った粘土が口縁部下にはみだす。胴部外面・口縁部外面には右から左方向のケズリが施され、煤が付着する。口縁部と胴部の境に



Fig.65 F トレンチ河川出土縄文時代晩期土器実測図 (2)

は半裁竹管状の工具によってC字状の刺突が部分的に施される。体部内面はナデで、口縁部内面にもC字状の刺突が施される。このようなケズリ調整、C字状の刺突には突帯文土器成立直前の岡山県の谷尻式²²⁾に代表される瀬戸内の強い影響がうかがえる。山口県内では、

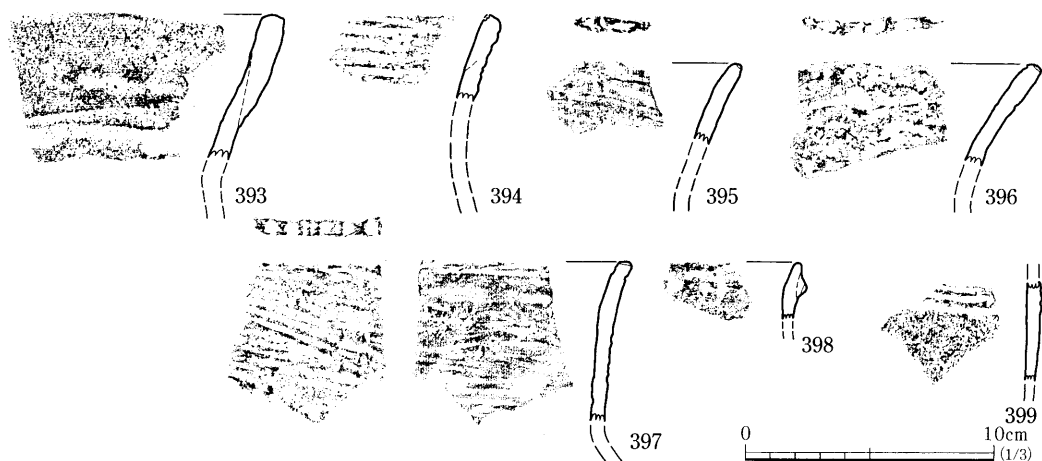


Fig.66 F トレンチ河川出土縄文時代晩期土器実測図 (3)

山口市毛割遺跡 1 号土坑²³⁾で胴部に C 字状の刺突を持つ深鉢が出土している。

393は口縁部に段を持つ。口縁部外面は二枚貝条痕後ナデである。394は口唇部が無文である。口縁部外面は二枚貝条痕、内面は二枚貝条痕後ナデである。395～397は口唇部に刻みを持つ。395は縦長の V 字刻みの左右に横長の O 字刻みを施す。396は逆 D 字、O 字刻みが施される。395・396の内外面は二枚貝条痕後ナデである。397は口唇部に二枚貝による O 字刻みが施される。内外面には横方向の二枚貝条痕が施される。398は刻目突帯文土器深鉢の口縁部である。口唇部は丸くおさめ、わずかに下がった位置に低い断面三角形の貼付突帯を持つ。突帯上には O 字刻みを持つ。399は深鉢の胴部片で、3条の沈線が施され、上部の2条がやや曲線を描くことから、岩田 4 類 c の波頭部の一部と考えられる。小片のため他器種の可能性もある。

浅鉢・壺 (Fig.67—400～409, PL.60)

400・403・407は、口唇部を丸くおさめるか面取りを行うものである。400は口縁部に1条の沈線を持つ。外面は右から左方向への二枚貝条痕の後、タテミガキが施される。内面はヨコミガキである。401は口縁部に立ち上がりを持つ。402は口縁部内面に沈線を持つ。404・405は口縁部の内面に粘土紐を付加して玉縁状に肥厚させる。406は剥離しているが、口縁部の内面を方形に肥厚させる。408は体部で屈曲する浅鉢の胴部で、挟りによる段がある。409は壺の胴部と考えられる。胴部には浅いへら描沈線が施される。内面はナデである。小片のため他器種の可能性もある。

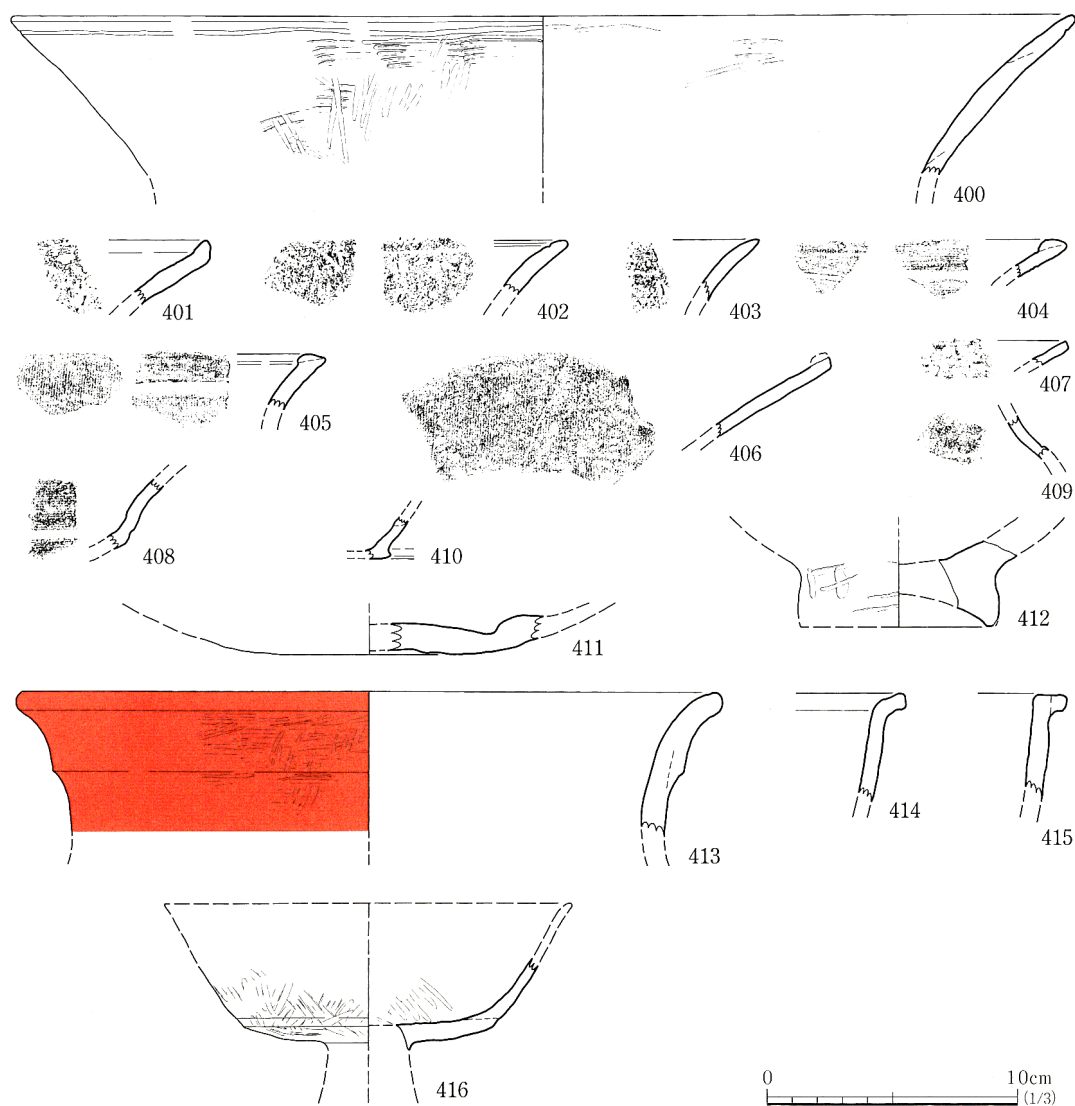


Fig.67 Fトレンチ河川出土縄文時代晩期土器実測図(4)、弥生時代前期土器・土師器実測図

底部 (Fig.67-410~412, PL.61)

410・411は浅鉢底部、412は深鉢底部である。いずれも風化が激しい。

(3) 弥生時代以降 (Fig.67-413~416, PL. 62 (1))

413は弥生時代前期初頭の大型壺の口縁部で、口縁部に段を持ち、外面に丹塗りを施す。内面は風化が激しく調整不明。414・415は弥生時代前期末～中期初頭の甕、416は古墳時代中期の高坏で、河川上面に堆積する包含層から出土した。

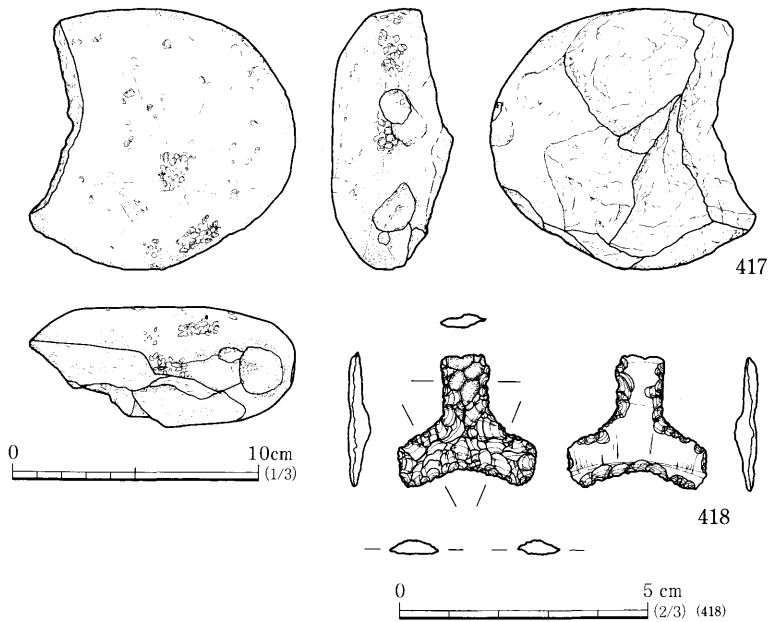


Fig.68 F トレンチ河川出土石器実測図

敲石 (Fig.68—417, PL.62 (2))

417は敲石である。円礫を使用している。表は全体的に研磨が施され、中心部と縁部に敲打痕がある。表の左側約1/4を欠損する。側面にも敲打痕を残す。裏は大半を剥離している。石質は輝石安山岩である。

三脚石器 (Fig.68—418, PL.63 (3))

418は三脚石器で、表にはほぼ全面に調整剥離が施される。表面はやや風化している。裏の側縁部には調整剥離が施されている。石質は黒曜石である。

6 小結

(1) 縄文時代

F トレンチで検出された縄文時代の河川から縄文時代後期の西平系土器、御領系土器と、上層からは岩田四類cの新相に相当する縄文時代晩期中葉の深鉢や浅鉢が出土した。これらに伴って磨石や三脚石器が出土した。また、B トレンチから検出された縄文時代晩期の河川からも、深鉢を中心とする縄文時代晩期中葉の土器が出土した。

近年、県内では下関市の吉田川下流域で吉田馬場遺跡²⁴⁾、大判遺跡²⁵⁾、松ヶ坪遺跡²⁶⁾、柳瀬遺跡²⁷⁾などの晩期の遺跡の調査例が増加し、編年案も出されている。しかし、小片が多く一

括性に欠けるため、その内容はなお検討の余地があろう。Fトレンチ河川出土土器は数は少ないが、時期の異なるものを差し引くと、谷尻式の影響を受けた深鉢(392)、口唇部に刻みを持つ深鉢(395～397)、碗形、皿形の浅鉢(400・402・403)、口縁部内面を肥厚させる浅鉢(404～406)の組み合わせが想定できる。晩期中葉終末に比定され、九州の黒川式終末、愛媛県の持田式²⁸⁾、岡山県の谷尻式、近畿地方の篠原式新段階との併行関係が考えられる。

(2) 弥生時代

Fトレンチの河川からは、突帯文土器の深鉢の口縁部(398)や弥生時代前期初頭の丹塗磨研の大型壺(413)が出土した。同様な壺の口縁部は、Fトレンチから北西に約500m離れた第Ⅰ地区B区²⁹⁾でも出土している。またFトレンチの南西約1kmには前期初頭の遺構・遺物の検出された小路遺跡³⁰⁾が所在する。調査地一帯に前期初頭の遺構・遺物が展開している可能性があり、今後の周辺の調査が期待される。

また、Aトレンチの河川からは前期～終末期の土器が出土した。前期～中期の土器は少なく、後期～終末期の土器が多い。Bトレンチ・配線トレンチでは、弥生時代後期の第1号竪穴住居跡から19個、第3号竪穴住居跡からは18個、合計37個ものガラス小玉が出土した。ともに、竪穴住居跡1棟あたりの出土数としては県内最多である。竪穴住居跡からは中期後半～後期の土器が少量出土し、周辺の土坑からは後期後半～終末の土器、落ち込みからは中期後半～後期後半の土器が出土した。

(3) 古墳時代

Aトレンチと配線トレンチF区からは古墳時代前期を下限とする河川が検出され、土器が多数出土した。弥生終末期～古墳時代初頭の土器は、直口壺(63・67)、山陰系の甕(70～82)、庄内系甕(111)、布留系甕(123)、タタキを持つ在地系の甕(112)、ハケ仕上げの在地系甕(121・122)、高坏(128～136)、鉢(138～141)などの組み合わせが考えられる。このうち、外面にタタキをもち、口縁端部をつまみ上げる庄内系の甕は県内でも類例が少なく、貴重な例を加えることとなった。これらの土器群は第Ⅰ地区A区で検出された古墳時代前期前半の土器群³¹⁾と様相が近似する。時期的にも湯田楠木町遺跡第Ⅰ地区土器捨て場跡出土土器³²⁾とほぼ同時期のものであろう。

(4) 古代

Cトレンチでは古代の土器を含んだ落ち込みが検出されている。また、配線トレンチの包含層からは底面にヘラ書きによる文字を持つ9世紀後半の須恵器の坏が出土した。文字

は「位」もしくは「領」と考えられ、職名、人名、地名などを記した可能性が高い。大学会館前庭部では、墨で「冨」と書かれた9世紀後半の坏底部が出土している。近年、第2学生食堂敷地では、9世紀後半の大溝と掘立柱建物跡が2棟検出され、9世紀後半を中心とする官衙的施設の存在が考えられている³³⁾。また、調査地から南に約600m離れた神郷大塚遺跡では、8世紀～13世紀の掘立柱建物15棟、柵列6、土坑5基や多数の柱穴が検出されている。出土遺物には土師器、須恵器のほか緑釉陶器、製塩土器、鞆羽口、金属滓などがあり、金属製品の生産を行っていたと想定されている³⁴⁾。これらとの関連が注目されよう。

[注]

- 1) 潮見 浩「山口県岩田遺跡出土縄文時代遺物の研究」(『広島大学文学部紀要』第18号、1960年)
- 2) 藤田憲司「山陰「鍵尾式」の再検討とその併行関係」(『考古学雑誌』64巻4号、1979年)
- 3) 中川 寧「山陰の後期弥生土器における編年と地域間関係」(『島根県考古学会誌』第16号、1996年)
- 4) 渡辺一雄編『突抜・馬場遺跡』(『山口県埋蔵文化財調査報告』第87集、1985年)
- 5) 村岡和雄編『坂手沖尻遺跡・惣の尻遺跡』(『山口県埋蔵文化財調査報告』第42集、1978年)
- 6) 乗安和二三編『羽波遺跡・片山遺跡』(『山口県埋蔵文化財調査報告』第121集、1989年)
- 7) 村岡和雄編『宮ヶ久保遺跡』(『阿東町埋蔵文化財調査報告』第1集、1998年)
- 8) 山口県教育委員会『防府市右田・一丁田遺跡、徳山市の場・宮ノ馬場遺跡、徳山市久米市遺跡』(『山口県埋蔵文化財調査報告』第19集、1974年)
- 9) 大久保徹也「下川津遺跡における弥生時代後期から古墳時代前半の土器について」
(『(財)香川県埋蔵文化財調査センター、本州四国連絡橋公団『瀬戸大橋建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告7 下川津遺跡－第2分冊－』、1990年)
大久保徹也氏に土器を実見していただき、御教示を得た。
- 10) 前掲注3文献
- 11) 伊東照雄編『綾羅木郷遺跡Ⅰ』(『下関市埋蔵文化財調査報告』27、1981年)
- 12) 水島稔夫編『吉田馬場遺跡』(『下関市埋蔵文化財調査報告』43、1992年)
- 13) 久住猛雄「北部九州における庄内式併行期の土器様相」(『庄内式土器研究 XIX』、1999年)
- 14) 濱崎真二編『柳瀬遺跡』(『下関市埋蔵文化財調査報告』60、1997年)
- 15) 家根祥多「篠原式の提唱－神戸市篠原中町遺跡出土土器の検討－」(『縄文時代晩期前葉－中葉の広域編年－文部省科学研究費(総合A)研究成果報告書』、1994年)
- 16) 山口大学埋蔵文化財資料館「吉田構内農学部連合獣医学科棟新営に伴う発掘調査」(『山口大学構内

遺跡調査研究年報XII』、1994年)

- 17) 山口大学埋蔵文化財資料館「吉田構内教育学部附属養護学校新営に伴う発掘調査」(『山口大学構内遺跡調査研究年報IX』、1991年)
- 18) 山口大学埋蔵文化財資料館「付篇Ⅰ 山口大学吉田構内遺跡保存地区の発掘調査(昭和59年度)」(『山口大学構内遺跡調査研究年報VI』、1987年)
- 19) 杉原和恵「墨で文字を書きこんだうつわー既刊の報告補訂ー」(『山口大学構内遺跡調査研究年報VII』1989年)
- 20) 杉原和恵編『神郷大塚遺跡』(『山口市埋蔵文化財調査報告』第38集、1991年)
- 21) 人文学部橋本義則教授に実見していただき、ご教示を得た。
- 22) 平井 勝「岡山における縄文晩期突帯文土器の様相」(『古代吉備』第10集、1988年)
- 23) 山口市教育委員会編『毛割遺跡』、(『山口市埋蔵文化財調査報告』第18集、1983年)
- 24) 前掲注12文献
- 25) 水島稔夫・濱崎真二編『大判遺跡・埴生口遺跡』(『下関市埋蔵文化財調査報告』46、1994年)
- 26) 濱崎真二編『松ヶ坪遺跡』(『下関市埋蔵文化財調査報告』51、1994年)
- 27) 濱崎真二「Ⅳ-1 吉田川下流域の縄文晩期の土器」(濱崎真二編『柳瀬遺跡』『下関市埋蔵文化財調査報告』60、1997年)
- 28) 真鍋昭文編『持田町3丁目遺跡』(愛媛県埋蔵文化財センター、1995年)
- 29) 山口大学埋蔵文化財資料館「付篇Ⅱ 第2章 吉田遺跡第Ⅰ地区B区の調査」(『山口大学構内遺跡調査研究年報XI』、1993年)
- 30) 縄田 潔・菅波正人編『小路遺跡』(『山口市埋蔵文化財調査報告』第27集、1988年)
- 31) 山口大学埋蔵文化財資料館「付篇Ⅱ 第1章 吉田遺跡第Ⅰ地区A区の調査」(『山口大学構内遺跡調査研究年報XI』、1993年)
- 32) 山口市教育委員会『山口市字楠木町 湯田中学校造成地 湯田楠木町遺跡第Ⅰ地区発掘調査概報』、1975年、付篇Ⅲ参照
- 33) 山口大学埋蔵文化財資料館平成10年度調査 山口大学埋蔵文化財資料館「山口大学吉田構内第2学生食堂の増築及び改修に伴う発掘調査」(『月刊文化財発掘出土情報』99年9月号、1999年)
- 34) 前掲注20文献

Tab.2 出土遺物観察表(土器)

法量()は復元値

遺物 番号	出土遺構	層 位	器 種	部位	口径 (cm)	底径 (cm)	器高 (cm)	色 調 ①外面②内面	胎 土	備 考
1	Aトレンチ 河川2区	中 層	縄文土器 深鉢	胴部				①浅黄色 ②灰黄色	1~3mmの砂粒を含む	
2	Aトレンチ 河川2区	中 層	縄文土器 浅鉢	口縁部 ~胴部				①暗灰黄色 ②黒褐色	1~3mmの砂粒を少量 含む	
3	Aトレンチ 河川2区	中 層	縄文土器 浅鉢	口縁部				①暗灰黄色 ②黒褐色	1~3mmの砂粒を含む	全面風化が激しい 左より条痕がわずかに残る
4	Aトレンチ 河川1区	中 層	縄文土器 浅鉢	底部		(8.0)		①灰白色 ②淡黄色	1~3mmの砂粒を含む	風化が激しい
5	Aトレンチ 河川2区	下 層	弥生土器 甕	胴部				①灰黄色 ②灰白色	1~3mmの砂粒を含む	風化が激しい 煤が付着
6	Aトレンチ 河川1区	中層上面	弥生土器 長頸壺	頸部				①丹塗り ②灰白色	1~3mmの砂粒を含む	北部九州系
7	Aトレンチ 河川2区	下 層	弥生土器 鋤先口縁壺	口縁部	(27.1)			①灰色・鉄分 付着②灰白色	1~3mmの砂粒を含む	北部九州系
8	Aトレンチ 河川1区	中層上面	弥生土器 鋤先口縁壺	口縁部	(28.4)			橙色	1~5mmの砂粒を含む	北部九州系
9	Aトレンチ 河川1区	下 層	弥生土器 鋤先口縁壺	口縁部	(28.6)			①灰黄色 ②黄褐色	1~3mmの砂粒を含む	北部九州系
10	Aトレンチ 河川1区	下 層	弥生土器 広口壺	口縁部	(23.8)			浅黄橙色	2mm前後の砂粒を含 む	北部九州系 内外面の風化が激しい
11	Aトレンチ 河川2区	中 層	弥生土器 垂下口縁壺	口縁部	(31.5)			灰白色	1~5mmの砂粒を含む	
12	Aトレンチ 河川1区	中 層	弥生土器 垂下口縁壺	頸部				①黄褐色 ②浅黄褐色	1~3mmの砂粒を含む	
13	Aトレンチ 河川2区	透水溝攪乱	弥生土器 在地系壺	口縁部 ~頸部	(18.8)			浅黄色	1~4mmの砂粒を含む	在地系 口縁部穿孔、棒状浮文
14	Aトレンチ 河川1区	下 層	弥生土器 垂下口縁壺	胴部				①灰白色 ②浅黄褐色	1~3mmの砂粒を含む	
15	Aトレンチ 河川2区	中 層	弥生土器 甕	胴部	(35.8)			①黄褐色 ②橙色	1~3mmの砂粒を含む	瀬戸内系
16	Aトレンチ 河川1区	中 層	弥生土器 甕	口縁部	(21.1)			①にぶい黄褐色 ②浅黄褐色	1~3mmの砂粒を含む	
17	Aトレンチ 河川2区	中 層	弥生土器 甕	口縁部	(19.4)			①にぶい橙色 ②淡褐色	1~3mmの砂粒を含む	
18	Aトレンチ 河川2区	中 層	弥生土器 甕	口縁部				①にぶい黄褐色 ②浅黄褐色	1~3mmの砂粒を含む	
19	Aトレンチ 河川1区	下 層	弥生土器 甕	口縁部				①にぶい黄褐色 ②黄褐色	1~3mmの砂粒を含む	
20	Aトレンチ 河川1区	中 層	弥生土器 甕	口縁部	(21.0)			①暗灰黄色 灰黄色	1~3mmの砂粒を含む	
21	Aトレンチ 河川1区	下 層	弥生土器 甕	口縁部 ~胴部	(19.0)			①灰黄色 ②黄褐色	1~3mmの砂粒を含む	
22	Aトレンチ 河川2区	攪 乱	弥生土器 甕	口縁部 ~胴部	(26.7)			①灰白色 ②浅黄褐色	1~3mmの砂粒を含む	
23	Aトレンチ 河川1区	排水溝攪乱	弥生土器 鉢	口縁部 ~胴部	(15.0)			淡黄色	1~3mmの砂粒を含む	
24	Aトレンチ 河川2区	攪 乱	弥生土器 鉢	口縁部				淡黄色	1~4mmの砂粒を含む	風化が激しい
25	Aトレンチ 河川1区	中層上面	弥生土器 高坏	坏部				①褐灰色 ②黒褐色	1~3mmの砂粒を多量 に含む	
26	Aトレンチ 河川2区	中 層	弥生土器 高坏	坏部				①浅黄褐色 ②橙色	1mm前後の砂粒を含 む	外面の風化が激しい
27	Aトレンチ 河川2区	中 層	弥生土器 器台	口縁部 ~胴部	(18.1)			①丹塗り ②灰白色	2~3mmの砂粒を含む	北部九州系
28	Aトレンチ 河川1区	下 層	弥生土器 甕	底部		(7.4)		①にぶい黄褐色 ②灰白色	1~4mmの砂粒を多量 に含む	風化が激しい
29	Aトレンチ 河川2区	下 層	弥生土器 壺	底部		(6.5)		①灰色 ②灰黄色	1~2mmの砂粒を含む	風化が激しい 内面が剥落
30	Aトレンチ 河川1区	中 層	弥生土器 壺	底部		(8.8)		①浅黄色 ②褐灰色	1~3mmの砂粒を含む	
31	Aトレンチ 河川1区	中層上面	弥生土器 甕	底部		(7.2)		浅黄褐色	1mm前後の砂粒を含 む	底部が剥落
32	Aトレンチ 河川1区	排水溝攪乱	弥生土器 甕	底部				①灰白色 ②灰黄色	1~4mmの砂粒を含む	風化が激しい
33	Aトレンチ 河川1区	中層上面	弥生土器 甕	底部		(9.5)		①灰黄色 ②灰白色	1~3mmの砂粒を含む	

出土遺物観察表

法量()は復元値

遺物 番号	出土遺構	層 位	器 種	部 位	口径 (cm)	底径 (cm)	器高 (cm)	色 調 ①外面②内面	胎 土	備 考
34	Aトレンチ 河川2区	中 層	弥生土器 甕	底部		(5.4)		①にぶい橙色 ②黒褐色	1~4mmの砂粒を多量 に含む	
35	Aトレンチ 河川2区	中 層	弥生土器 広口壺	口縁部	(16.2)			にぶい黄橙色	1~3mmの砂粒を含む	
36	Aトレンチ 河川2区	表 採	弥生土器 複合口縁壺	口縁部	(14.4)			灰白色	微砂粒を含む	
37	Aトレンチ 河川2区	中 層	弥生土器 複合口縁壺	口縁部	(20.6)			灰黄色	微砂粒を含む	
38	Aトレンチ 河川2区	下 層	弥生土器 複合口縁壺	口縁部				①灰黄色 ②黒褐色	1mm前後の砂粒を含 む	外面の風化が激しい
39	Aトレンチ 河川2区	中層上面	弥生土器 複合口縁壺	口縁部				①灰黄橙色 ②灰白色	2mmまでの砂粒を含 む	
40	Aトレンチ 河川1区	給水管攪乱	弥生土器 複合口縁壺	口縁部				①灰白色 ②黒褐色	1~2mmの砂粒を含む	外面に櫛描波状文
41	Aトレンチ 河川2区	中 層	弥生土器 複合口縁壺	口縁部	(22.8)			橙色	1~3mmの砂粒を含む	
42	Aトレンチ 河川2区	中 層	弥生土器 複合口縁壺	口縁部	(26.8)			灰白色	2~3mmの砂粒を含む	45と同一個体か
43	Aトレンチ 河川2区	中 層	弥生土器 複合口縁壺	口縁部				①灰黄褐色 ②にぶい黄褐色	1~10mmの砂粒を含 む	
44	Aトレンチ 河川1区	攪 乱	弥生土器 複合口縁壺	頸~ 胴部				①灰白色 ②灰黄色	1~5mmの砂粒を含む	
45	Aトレンチ 河川2区	中 層	弥生土器 複合口縁壺	頸~ 胴部				淡黄色	1mm前後の砂粒を含 む	胴部中央に突帯貼付痕 42と同一個体か
46	Aトレンチ 河川2区	中層上面	弥生土器 甕	口縁部 ~胴部	(11.6)			灰白色	1~3mmの砂粒を含む	外面の風化が激しい
47	Aトレンチ 河川1区	中 層	弥生土器 甕	口縁部 ~胴部	(18.0)			黒褐色	2~3mmの砂粒を含む	外面に煤が付着
48	Aトレンチ 河川1区	中 層	弥生土器 甕	口縁部	(14.7)			①暗灰黄色 ②淡黄色	2~3mmの砂粒を含む	山陰系 外面に5条の擬門線
49	Aトレンチ 河川1区		弥生土器 甕	口縁部				灰白色	1~3mmの砂粒を含む	擬門線2条
50	Aトレンチ 河川2区	中 層	弥生土器 甕	口縁部 ~胴部	(21.0)			灰白色	1~5mmの砂粒を含む	
51	Aトレンチ 河川1区	中層上面	弥生土器 高坏	坏部	(10.2)			①黒褐色 ②淡橙色	1mm前後の砂粒を含 む	
52	Aトレンチ 河川1区	中 層	弥生土器 高坏	坏部	(31.2)			灰白色	2mm前後の砂粒を含 む	
53	Aトレンチ 河川1区	排水溝攪乱	弥生土器 高坏	坏部	(32.6)			①浅黄褐色 ②灰白色	1~2mmの砂粒を含む	
54	Aトレンチ 河川1区	下 層	弥生土器 高坏	坏部				①黄褐色 ②灰黄褐色	2mm前後の砂粒を含 む	風化が激しい
55	Aトレンチ 河川2区	中 層	弥生土器 高坏	坏部				淡黄色	2~3mmの砂粒を含む	風化が激しい
56	Aトレンチ 河川2区	中 層	弥生土器 高坏	脚部				灰白色	1~3mmの砂粒を含む	円形透かし穴
57	Aトレンチ 河川1区		弥生土器 高坏	脚部				①橙色 ②浅黄色	1~5mmの砂粒を含む	中央部穿孔
58	Aトレンチ 河川2区	下 層	弥生土器 高坏	坏部				①灰黄褐色 ②橙色	微砂粒を多量に含む	外面の風化が激しい
59	Aトレンチ 河川2区	中 層	弥生土器 高坏	脚部		(11.8)		①淡黄色 ②明黄褐色	1~5mmの砂粒を含む	円形透かし穴
60	Aトレンチ 河川2区	中 層	弥生土器 高坏	裾部		(15.0)		①灰白色 ②浅黄褐色	1~5mmの砂粒を含む	円形透かし穴
61	Aトレンチ 河川1区	中 層	弥生土器 高坏	裾部		(17.9)		①灰黄色 ②一部黒褐色	1~3mmの砂粒を含む	
62	Aトレンチ 河川2区	中 層	弥生土器 鉢	口縁部	(11.2)			①灰黄褐色 ②淡黄色	1~3mmの砂粒及びわずか に12mmの砂粒を含む	口縁部未調整
63	Aトレンチ 河川1区	中 層	土師器 直口壺	口縁部 ~胴部	(11.2)			①浅黄褐色 ②褐灰色	1~3mmの砂粒を含む	外面の頸部及び胴部に煤 が付着
64	Aトレンチ 河川1区	中 層	土師器 広口壺	口縁部	(17.1)			灰白色	1~4mmの砂粒を含む	
65	Aトレンチ 河川1区		土師器 広口壺	口縁部 ~胴部	(14.4)			淡黄色	1~2mmの砂粒を含む	
66	Aトレンチ 河川1区	中 層	土師器 壺	口縁部 ~胴部	(15.1)			にぶい赤褐色	1~2mmの砂粒を含む	東部瀬川内系か

吉田構内グランド屋外照明施設新設に伴う発掘調査

法量 () は復元値

遺物 番号	出土遺構	層 位	器 種	部 位	口径 (cm)	底径 (cm)	器高 (cm)	色 調 ①外面②内面	胎 土	備 考
67	Aトレンチ 河川1区	中 層	土師器 直口壺	胴部				①淡橙色 ②黒褐色	1~3mmの砂粒を含む	
68	Aトレンチ 河川2区	中 層	土師器 壺	胴部				①灰白色 ②褐灰色	1~3mmの砂粒を含む	
69	Aトレンチ 河川2区	中 層	土師器 壺	胴部				①淡黄色 ②灰黄色	1~3mmの砂粒を含む	
70	Aトレンチ 河川1区	中 層	土師器 甕	口縁部	(13.2)			淡黄色	1mm前後の砂粒を多量に含む	山陰系
71	Aトレンチ 河川2区	中 層	土師器 甕	口縁部	(15.5)			浅黄橙色	微砂粒を多量に含む	山陰系
72	Aトレンチ 河川2区	中 層	土師器 甕	口縁部	(21.8)			淡黄色	微砂粒を多量に含む	山陰系 内面ケズリ
73	Aトレンチ 河川2区	中 層	土師器 甕	口縁部 ~胴部	(19.4)			にぶい黄橙色	微砂粒を多量に含む	山陰系 内面ケズリ、外面に煤付着
74	Aトレンチ 河川2区	中 層	土師器 甕	口縁部				にぶい黄橙色	1~2mmの砂粒を含む	山陰系 風化が激しい
75	Aトレンチ 河川2区	中 層	土師器 甕	口縁部				浅黄橙色	1~2mmの砂粒を含む	山陰系 風化が激しい
76	Aトレンチ 河川1区	中 層	土師器 甕	口縁部				灰白色	1mm前後の砂粒を含む	山陰系
77	Aトレンチ 河川1区	中層上面	土師器 甕	口縁部				①黒褐色 ②浅黄橙色	1mm前後の砂粒を多量に含む	山陰系 外面に煤付着
78	Aトレンチ 河川2区	中 層	土師器 甕	口縁部				①黒褐色 ②灰白色	微砂粒を多量に含む	山陰系 外面に煤付着
79	Aトレンチ 河川1区	下 層 (河床上面)	土師器 甕	胴部				①黒褐色 ②灰白色	1mm前後の砂粒を含む	山陰系 外面に煤付着
80	Aトレンチ 河川1区	中 層	土師器 甕	胴部				灰白色	1~5mmの砂粒を含む	山陰系 外面に煤付着
81	Aトレンチ 河川2区	中 層	土師器 甕	胴部				①浅黄橙色 ②灰黄色	1mm以内の砂粒を含む	山陰系、外面撫描波状文、 内面ケズリ
82	Aトレンチ 河川2区	中層上面	土師器 甕	胴部				①橙色 ②灰黄色	1mm以内の砂粒を含む	山陰系、外面撫描波状文、 内面ケズリ
83	Aトレンチ 河川2区	中 層	弥生~土師器 タタキ甕	口縁部				灰白色	1~3mmの砂粒を含む	
84	Aトレンチ 河川2区	中 層	弥生~土師器 タタキ甕	口縁部				①黒褐色 ②浅黄橙色	1~3mmの砂粒を含む	
85	Aトレンチ 河川2区	透水管複乱	弥生~土師器 タタキ甕	口縁部				灰黄色	1~2mmの砂粒をわずかに含む	
86	Aトレンチ 河川2区	中層上面	弥生~土師器 タタキ甕	胴部				灰白色	1~3mmの砂粒を含む	
87	Aトレンチ 河川2区	中 層	弥生~土師器 タタキ甕	胴部				①黒褐色 ②淡黄色	1~3mmの砂粒を含む	外面に煤付着
88	Aトレンチ 河川1区	中 層	弥生~土師器 タタキ甕	胴部				淡黄色	1~3mmの砂粒を含む	
89	Aトレンチ 河川2区	中 層	弥生~土師器 タタキ甕	胴部				①暗灰黄色 ②灰白色	1~3mmの砂粒を含む	
90	Aトレンチ 河川2区	中 層	弥生~土師器 タタキ甕	胴部				灰黄色	1~5mmの砂粒を含む	外面に煤付着
91	Aトレンチ 河川2区	透水管複乱	弥生~土師器 タタキ甕	胴部				黒褐色	1~3mmの砂粒を含む	外面に煤付着
92	Aトレンチ 河川2区	中 層	弥生~土師器 タタキ甕	胴部				淡黄褐色	1~3mmの砂粒を含む	
93	Aトレンチ 河川1区		弥生~土師器 タタキ甕	胴部				淡黄褐色	1~5mmの砂粒を含む	
94	Aトレンチ 河川2区	中 層	弥生~土師器 タタキ甕	胴部				①黒褐色 ②灰黄色	1~3mmの砂粒を含む	外面に煤付着
95	Aトレンチ 河川2区	中 層	弥生~土師器 タタキ甕	胴部				灰白色	1~3mmの砂粒を含む	風化が激しい
96	Aトレンチ 河川1区	給水管複乱	弥生~土師器 タタキ甕	胴部				①淡黄色 ②灰黄色	1~3mmの砂粒を含む	
97	Aトレンチ 河川2区	下 層	弥生~土師器 タタキ甕	胴部				①明赤褐色 ②橙色	1~3mmの砂粒を含む	
98	Aトレンチ 河川2区	中 層	弥生~土師器 タタキ甕	胴部				①黒褐色 ②灰白色	1~3mmの砂粒を含む	外面に煤付着
99	Aトレンチ 河川2区	中 層	弥生~土師器 タタキ甕	胴部				浅黄橙色	1~3mmの砂粒を含む	

出土遺物観察表

法量 () は復元値

遺物 番号	出土遺構	層 位	器 種	部位	口径 (cm)	底径 (cm)	器高 (cm)	色 調 ①外面②内面	胎 土	備 考
100	Aトレンチ 河川2区	下 層	弥生～土師器 タタキ甕	胴部				①黄灰色 ②淡黄色	1～3mmの砂粒を含む	
101	Aトレンチ 河川2区	下 層	弥生～土師器 タタキ甕	胴部				①灰黄色 ②浅黄色	1～3mmの砂粒を含む	102・103と同一個体か
102	Aトレンチ 河川2区	透水管攪乱	弥生～土師器 タタキ甕	胴部				①黒褐色 ②浅黄色	1～3mmの砂粒を含む	101・103と同一個体か
103	Aトレンチ 河川2区	中 層	弥生～土師器 タタキ甕	胴部				①にぶい赤褐色 ②浅黄色	1～3mmの砂粒を含む	101・102と同一個体か
104	Aトレンチ	表 採	弥生～土師器 タタキ甕	胴部				①黒褐色 ②灰白色	1～3mmの砂粒を含む	外面に煤付着
105	Aトレンチ 河川2区	中 層	弥生～土師器 タタキ甕	胴部				①黒褐色 ②浅黄色	1～3mmの砂粒を含む	外面に煤付着
106	Aトレンチ 河川1区	下 層	弥生～土師器 タタキ甕	胴部				①にぶい赤褐色 ②灰白色	1～3mmの砂粒を含む	
107	Aトレンチ 河川2区	中 層	弥生～土師器 タタキ甕	胴部				浅黄褐色	1～3mmの砂粒を含む	
108	Aトレンチ 河川2区	透水管攪乱	弥生～土師器 タタキ甕	胴部				灰黄色	1～3mmの砂粒を含む	
109	Aトレンチ 河川1区	下 層	弥生～土師器 タタキ甕	胴部				①黒褐色 ②灰白色	1～3mmの砂粒を含む	外面に煤付着
110	Aトレンチ 河川2区	中 層	弥生～土師器 タタキ甕	胴部				灰白色	1～3mmの砂粒を含む	風化が激しい
111	Aトレンチ 河川2区	中 層	弥生～土師器 庄内系甕	口縁部 ～胴部	(15.4)			灰白色	2～3mmの砂粒を多量 に含む	庄内系 外面に一部煤付着
112	Aトレンチ 河川2区	中 層	弥生～土師器 在地系長胴甕	口縁部 ～胴部	(19.2)			①灰黄色 ②灰黄色	1～3mmの砂粒を含む	外面に一部煤付着
113	Aトレンチ 河川1区	下 層	弥生～土師器 タタキ甕	胴部				①灰黄色 ②褐灰色	1～3mmの砂粒を含む	
114	Aトレンチ 河川2区	中 層	弥生～土師器 タタキ甕	胴部				①淡黄色 ②浅黄色	1～3mmの砂粒を含む	
115	Aトレンチ 河川2区	中 層	弥生～土師器 タタキ甕	胴部				橙色	微砂粒を含む	
116	Aトレンチ 河川1区	中 層	弥生～土師器 タタキ甕	胴部				①灰黄色 ②浅黄褐色	1～4mmの砂粒を含む	
117	Aトレンチ 河川2区	中層上面	土師器 甕	口縁部				灰黄色	1mm前後の砂粒を含 む	風化が激しい
118	Aトレンチ 河川2区	透水管攪乱	土師器 甕	口縁部				灰黄色	1～2mmの砂粒を含む	
119	Aトレンチ 河川2区	中 層	土師器 甕	口縁部 ～胴部				淡橙色	2mm以内の砂粒を含 む	風化が激しい
120	Aトレンチ 河川2区	中 層	土師器 甕	口縁部				灰黄色	1mm前後の砂粒を含 む	
121	Aトレンチ 河川2区	中 層	土師器 甕	口縁部 ～胴部	(8.5)			灰白色	1～5mmの砂粒を含む	外面に一部煤付着
122	Aトレンチ 河川2区	中 層	土師器 甕	口縁部 ～胴部	(16.8)			灰黄色	1～3mmの砂粒を含む	外面に煤が付着 内面ケズリ
123	Aトレンチ 河川2区	中 層	土師器 甕	口縁部	(17.8)			①灰白色 ②浅黄褐色	1～3mmの砂粒を含む	布留系
124	Aトレンチ 河川1区	給水管攪乱	土師器 甕	口縁部	(30.1)			①淡黄色 ②黄灰色	1～3mmの砂粒を含む	
125	Aトレンチ 河川2区	中 層	土師器 甕	胴部				浅黄褐色	1～3mmの砂粒を含む	外面に煤付着
126	Aトレンチ 河川2区	中 層	土師器 甕	胴部				①黒褐色 ②灰白色	1～3mmの砂粒を含む	布留系もしくは山陰系、 外面に煤付着、127と同一か
127	Aトレンチ 河川2区	中 層	土師器 甕	胴部				①黒褐色 ②にぶい黄褐色	1～3mmの砂粒を含む	布留系もしくは山陰系、 外面に煤付着、126と同一か
128	Aトレンチ 河川1区	排水溝攪乱	土師器 高坏	坏部				①淡黄色 ②黒褐色	1～3mmの砂粒を含む	外面に煤付着
129	Aトレンチ 河川2区	中 層	土師器 高坏	坏部	(29.1)			①淡黄褐色 ②橙色	精製粘土	外面に煤付着
130	Aトレンチ 河川2区	中 層	土師器 高坏	坏部	(15.1)			①灰白色 ②淡黄色	微砂粒を含む	脚部の可能性あり
131	Aトレンチ 河川2区	中 層	土師器 高坏	脚部				淡黄色	2～3mmの砂粒を含む	
132	Aトレンチ 河川1区	下 層	土師器 高坏	脚部				黄褐色	1～3mmの砂粒を含む	

吉田構内グランド屋外照明施設新設に伴う発掘調査

法量 () は復元値

遺物 番号	出土遺構	層 位	器 種	部 位	口径 (cm)	底径 (cm)	器高 (cm)	色 調 ①外面②内面	胎 土	備 考
133	Aトレンチ 河川2区	中 層	土師器 高坏	脚部				淡黄色	1~3mmの砂粒を含む	2孔一組の透かし穴
134	Aトレンチ 河川2区	中 層	土師器 高坏	脚部				浅黄色	1~3mmの砂粒を含む	
135	Aトレンチ 河川2区	中層上面	土師器 高坏	脚部				黄橙色	赤色斑粒を含む	
136	Aトレンチ 河川2区	中 層	土師器 高坏	脚部				浅黄橙色	精製粘土	円形透かし穴
137	Aトレンチ 河川1区	中 層	土師器 高坏	脚部		(13.4)		灰白色	微砂粒を含む	円形透かし穴
138	Aトレンチ 河川2区	中 層	土師器 鉢	口縁部 ~胴部				黄橙色	2~3mmの砂粒を含む	
139	Aトレンチ 河川1区	中 層	土師器 小形丸底鉢	口縁部 ~胴部				淡黄色	1~3の砂粒を含む	
140	Aトレンチ 河川1区	中 層	土師器 鉢	口縁部 ~底部	(12.3)	(11.3)		淡黄色	精製粘土に1mm以下の砂粒を少量含む	外面にタタキ痕
141	Aトレンチ 河川1区	下 層	土師器 鉢	口縁部 ~底部	(13.4)			①淡黄色 ②灰白色	1~4mmの砂粒を含む	一部被熱 煤付着
142	Aトレンチ 河川1区	下 層	弥生~土師器 壺	底部		(8.0)		①淡赤橙色 ②にぶい黄橙色	微砂粒を含む	風化が激しい
143	Aトレンチ 河川2区	透水管複乱	弥生~土師器 壺	底部		(4.8)		灰白色	1~7mmの砂粒を含む	風化が激しい
144	Aトレンチ 河川2区	中 層	弥生~土師器 壺	底部		(6.0)		灰黄色	1~3mmの砂粒を含む	
145	Aトレンチ 河川1区	給水管複乱	弥生~土師器 壺	底部		(8.6)		淡黄色	1~4mmおよび9mmの砂粒を含む	
146	Aトレンチ 河川2区	下 層	弥生~土師器 壺	底部		(8.2)		黄橙色	1~5mmの砂粒を含む	
147	Aトレンチ 河川跡1区	中 層	弥生~土師器 壺	底部		(7.5)		黄橙色	1~5mmの砂粒を含む	
148	Aトレンチ 河川2区	中 層	弥生~土師器 壺	底部		(6.8)		灰黄色	1~3mmの砂粒を含む	一部被熱
149	Aトレンチ 河川1区	中 層	弥生~土師器 壺	底部		(5.6)		灰白色	1~2mmの砂粒を含む	風化が激しい
150	Aトレンチ 河川2区	中 層	弥生~土師器 鉢	底部		(3.8)		①灰白色 ②灰色	1~3mmの砂粒を含む	
151	Aトレンチ 河川1区	中 層	弥生~土師器 壺	底部		(6.0)		①浅黄色 ②黒褐色	1~2mmの砂粒を含む	
152	Aトレンチ 河川1区	下 層	弥生~土師器 壺	底部		(5.6)		①黒褐色 ②黄灰色	1~4mmの砂粒を含む	風化が激しい
153	Aトレンチ 河川2区	中 層	弥生~土師器 壺	底部		(5.0)		①浅黄橙色 ②灰白色	1~2mmの砂粒を含む	
154	Aトレンチ 河川2区	中 層	弥生~土師器 壺	底部		(14.0)		①浅黄橙色 ②にぶい橙色	1~2mmの白色砂粒を含む	
155	Aトレンチ 河川1区	中 層	弥生~土師器 甕	底部		(3.8)		①淡赤橙色 ②浅黄色	1~3mmの砂粒を含む	被熱
156	Aトレンチ 河川2区	透水管複乱	弥生~土師器 甕	底部		(5.2)		灰黄色	1~5mmの砂粒を含む	
157	Aトレンチ 河川2区	中 層	弥生~土師器 甕	底部		(3.2)		黄灰色	1~3mmの砂粒を含む	外面に煤付着
158	Aトレンチ 河川1区	下 層	弥生~土師器 甕	底部		(3.7)		①淡赤橙色 ②淡黄色	1~3mmの砂粒を含む	被熱
159	Aトレンチ 河川1区	下 層	弥生~土師器 甕	底部		(4.8)		灰黄色	1~5mmの砂粒を含む	
160	Aトレンチ 河川1区	中 層	弥生~土師器 甕	底部		(4.6)		灰黄色	微砂粒を含む	風化が激しい
161	Aトレンチ 河川1区	下 層	弥生~土師器 甕	底部		(4.6)		①灰白色 ②淡黄色	1~4mmの砂粒を含む	
162	Aトレンチ 河川2区	中層上面	弥生~土師器 甕	底部		(5.2)		①淡黄色 ②浅黄橙色	1mm前後の砂粒を多量に含む	風化が激しい
163	Aトレンチ 河川2区	中 層	弥生~土師器 甕	底部		(6.2)		黄灰色	1~2mmの砂粒を含む	外面に煤付着
164	Aトレンチ 河川1区	下 層	弥生~土師器 甕	底部		(3.8)		①淡赤橙色 ②灰黄色	1~2mmの砂粒を含む	被熱
165	Aトレンチ 河川1区	下 層	弥生~土師器 甕	底部		(6.0)		①灰白色 ③黒褐色	1~2mmの砂粒を含む	風化が激しい

出土遺物観察表

法量（ ）は復元値

遺物 番号	出土遺構	層 位	器 種	部位	口径 (cm)	底径 (cm)	器高 (cm)	色 調 ①外面②内面	胎 土	備 考
166	Aトレンチ 河川1区	下 層	弥生～土師器 甕	底部		(6.2)		灰黄色	1～2mmの砂粒を含む	風化が激しい
167	Aトレンチ 河川1区	中 層	弥生～土師器 甕	底部		(2.5)		①淡黄色 ②黄灰色	1～6mmの砂粒を含む	風化が激しい
168	Aトレンチ 河川2区	中 層	弥生～土師器 甕	底部		(3.6)		①灰黄色 ②淡黄色	微砂粒を含む	煤が付着
169	Aトレンチ 河川1区	中 層	弥生～土師器 甕	底部		(2.0)		浅黄橙色	1～3mmの砂粒を含む	
170	Aトレンチ 河川2区	中 層	弥生～土師器 甕	底部		(0.9)		黒褐色	1～3mmの砂粒を含む	
171	Aトレンチ 河川2区	透水管攪乱	弥生～土師器 甕	底部		(3.6)		①淡赤橙色 ②灰褐色	1～3mmの砂粒を含む	外面にタタキ痕
172	Aトレンチ 河川1区	中 層	弥生～土師器 甕	底部		(2.2)		①黄橙色 ②淡黄色	1～3mmの砂粒を含む	外面にタタキ痕
173	Aトレンチ 河川1区	中 層	弥生～土師器 甕	底部		(1.1)		①灰黄色 ②黄灰色	1mm前後の砂粒を含む	外面にタタキ痕
174	Aトレンチ 河川1区	中 層	弥生～土師器 甕	底部		(3.5)		①灰白色、一部 赤変 ②灰白色	1～5mmの砂粒を含む	外面にタタキ痕
175	Aトレンチ 河川2区	中 層	弥生～土師器 甕	底部		(2.4)		①淡黄色 ②にぶい黄橙色	2.5mm以内の砂粒を含む	外面にタタキ痕
176	Aトレンチ 河川2区	下 層	弥生～土師器 甕	底部				①灰白色 ②明褐色	1～5mmの砂粒を含む	外面に煤付着
177	Aトレンチ 河川2区	下 層 (河床上面)	弥生～土師器 甕	底部		(5.0)		①灰黄色 ②淡黄色	1～3mmの砂粒を含む	外面に煤付着
178	Aトレンチ	表 採	磁器 碗	底部		(6.0)		素地 白色 釉調 緑灰色	精良	青磁 内外面貫入
182	Bトレンチ 河川肩部	淡黄灰色 シルト層	縄文土器 深鉢	口縁部	(39.6)			灰白色	1mm前後の砂粒を含む	全面風化
183	Bトレンチ 河川肩部	淡黄灰色 シルト層	縄文土器 深鉢	口縁部 ～胴部	(24.8)			①暗褐色 ②明黄褐色	1～2mmの砂粒を含む	
184	Bトレンチ 河川肩部	淡黄灰色 シルト層	縄文土器 深鉢	頸部～ 胴部				①にぶい 橙色 ②褐色	1～2mmの砂粒を含む	内面の風化が激しい
185	Bトレンチ 河川肩部	淡黄灰色 シルト層	縄文土器 深鉢	頸部～ 胴部				①灰黄色 ②黄灰色	1～3mmの砂粒を含む	190と同一個体か
186	Bトレンチ 河川肩部	淡黄灰色 シルト層	縄文土器 深鉢	頸部～ 胴部				①暗黄灰色 ②灰白色	1mm前後の砂粒を含む	
187	Bトレンチ 河川肩部	淡黄灰色 シルト層	縄文土器 深鉢	胴部				①淡黄色 ②黒褐色	1mm前後の砂粒を含む	
188	Bトレンチ 河川肩部	淡黄灰色 シルト層	縄文土器 深鉢	口縁部				①明黄褐色 ②黒褐色	1mm前後の砂粒を含む	
189	Bトレンチ 河川肩部		縄文土器 深鉢	口縁部				明黄褐色	1～2mmの砂粒を含む	
190	Bトレンチ 河川肩部	淡黄灰色 シルト層	縄文土器 深鉢	頸部～ 胴部				①灰黄色 ②黄灰色	1mm前後の砂粒を含む	185と同一個体か
191	Bトレンチ 河川肩部	淡黄灰色 シルト層	縄文土器 深鉢	胴部				①灰黄褐色 ②褐色	1～3mmの砂粒を含む	196と同一個体
192	Bトレンチ 河川肩部	淡黄灰色 シルト層	縄文土器 深鉢	胴部				①灰黄色 ②淡黄色	1mm前後の砂粒を含む	
193	Bトレンチ 河川肩部	淡黄灰色 シルト層	縄文土器 深鉢	胴部				①灰黄色 ②黄灰色	微砂粒を含む	
194	Bトレンチ 河川肩部	淡黄灰色 シルト層	縄文土器 深鉢	胴部				①灰白色 ②灰色	1～2mmの砂粒を含む	
195	Bトレンチ 河川肩部	淡黄灰色 シルト層	縄文土器 深鉢	胴部				①にぶい黄橙色 ②黄橙色	1mm前後の砂粒を含む	
196	Bトレンチ 河川肩部	淡黄灰色 シルト層	縄文土器 深鉢	胴部				①灰黄褐色 ②褐色	1～3mmの砂粒を含む	191と同一個体
197	Bトレンチ 河川肩部	淡黄灰色 シルト層	縄文土器 深鉢	胴部				①にぶい黄褐色 ②褐色	1～3mmの砂粒を含む	
198	Bトレンチ 河川肩部	淡黄灰色 シルト層	縄文土器 深鉢	胴部				①にぶい黄橙色 ②黒褐色	1mm前後の砂粒を含む	
199	Bトレンチ 河川肩部	淡黄灰色 シルト層	縄文土器 深鉢	胴部				①にぶい黄橙色 ②黄橙色	1mm前後の砂粒を含む	
200	Bトレンチ 河川肩部	淡黄灰色 シルト層	縄文土器 深鉢	胴部				①灰白色 ②黒褐色	1mm前後の砂粒を含む	
201	Bトレンチ 河川肩部	淡黄灰色 シルト層	縄文土器 深鉢	胴部				①黄灰色 ②黒褐色	1mm前後の砂粒を含む	

吉田構内グランド屋外照明施設新設に伴う発掘調査

SB：竪穴住居跡、SK：土坑、SD：溝、SX：落ち込み 法量（ ）は復元値

遺物 番号	出土遺構	層 位	器 種	部 位	口径 (cm)	底径 (cm)	器高 (cm)	色 調 ①外面②内面	胎 土	備 考
202	Bトレンチ 河川肩部	淡黄灰色 シルト層	縄文土器 深鉢	胴部				①明黄褐色 ②黒褐色	1mm前後の砂粒を含む	
203	Bトレンチ 河川肩部	暗灰色 砂礫層	縄文土器 浅鉢	口縁部				①黄灰色 ②褐灰色	1mm前後の砂粒を含む	
204	Bトレンチ 河川肩部	淡黄灰色 シルト層	縄文土器 浅鉢	胴部				①明黄褐色 ②褐灰色	1mm前後の砂粒を含む	
205	Bトレンチ 河川肩部	淡黄灰色 シルト層	縄文土器 浅鉢	胴部				①明黄褐色 ②褐灰色	微砂粒を含む	
206	Bトレンチ 河川肩部	シルト層	縄文土器 浅鉢	胴部				①淡黄色 ②明黄褐色	1mm前後の砂粒を含む	
207	Bトレンチ 河川肩部	シルト層	縄文土器 浅鉢	底部				①明黄褐色 ②黒褐色	1mm前後の砂粒を含む	
208	Bトレンチ 河川肩部	淡黄灰色 シルト層	縄文土器 浅鉢	底部		(4.6)		黄橙色	1～3mmの砂粒を含む	
209	Bトレンチ 河川肩部	淡黄灰色 シルト層	縄文土器 深鉢	底部		(8.7)		①にぶい黄褐色 ②褐灰色	1～3mmの砂粒を含む	風化が激しい
210	Bトレンチ SB-1		弥生土器 鋤先口縁壺	口縁部	(42.4)			灰色	1～3mmの砂粒を含む	北部九州系
211	Bトレンチ SB-1 周溝		弥生土器 壺	口縁部	(14.0)			灰白色	1～3mmの砂粒を含む	口縁部に紐孔
212	Bトレンチ SB-1		弥生土器 甕	口縁部				①浅黄褐色 ②淡黄色	1～4mmの砂粒を多量に含む	被熱 風化が激しい
213	Bトレンチ SB-1		弥生土器 甕	口縁部				灰黄色	1～3mmの砂粒を含む	風化が激しい
214	Bトレンチ SB-1	ド 層	弥生土器 高坏	口縁部				淡赤橙色	1～3mmの砂粒を含む	被熱 風化が激しい
215	Bトレンチ SB-1		弥生土器 高坏	口縁部	(18.2)			①淡黄色 ②黄灰色	1～3mmの砂粒と雲母を含む	内面ヘラミガキ
238	Bトレンチ SB-2 Pit4		弥生土器 甕	口縁部				①淡黄色 ②灰白色	2～4mmの砂粒を含む	風化が激しい
239	Bトレンチ SB-2		弥生土器 甕	口縁部				灰白色	1～4mmの砂粒を含む	風化が激しい
240	Bトレンチ SB-2		弥生土器 甕	口縁部				①灰黄色 ②黄灰色	1～4mmの砂粒を含む	口唇部に2条の擬門線
241	Bトレンチ SB-2		弥生土器 甕	底部		(5.4)		灰白色	1～5mmの砂粒を多量に含む	風化が激しい
243	Bトレンチ SB-3		弥生土器 壺	頸部				灰黄色	1～4mmの砂粒を含む	
244	Bトレンチ SB-3		弥生土器 甕	胴部				灰白色	1～3mmの砂粒を含む	風化が激しい 煤付着
263	Bトレンチ SB-4		弥生土器 甕	口縁部	(21.9)			①灰黄色 ②淡黄色	1～3mmの砂粒を含む	
264	Bトレンチ SB-4 Pit4		弥生土器 甕	口縁部				①淡赤橙色 ②橙色	1～2mmの砂粒を含む	風化が激しい
265	Bトレンチ SB-4 Pit5		弥生土器 高坏	坏部				灰黄色	1～4mmの砂粒を含む	
266	Bトレンチ SB-4 Pit4		弥生土器 甕	底部		(6.8)		①淡黄色 ②灰白色	1～3mmの砂粒を含む	
267	Bトレンチ SB-4		弥生土器 甕	口縁部	(17.0)			淡黄色	1～2mmの砂粒を含む	
268	Bトレンチ SB-4 Pit4		弥生土器 鉢	口縁部 ～胴部	(10.8)			淡黄色	1～4mmの砂粒を含む	被熱 煤付着
269	Bトレンチ SB-4		土師器 甕	口縁部	(12.9)			①黄灰色 ②灰黄色	1～3mmの砂粒を含む	山陰系 風化が激しい 混入か
270	Bトレンチ SK-1		弥生土器 複合口縁壺	口縁部				淡黄色	1mm前後の砂粒を含む	山形文 風化が激しい
271	Bトレンチ SK-1		弥生土器 甕	口縁部				灰白色	1～4mmの砂粒を含む	風化が激しい
272	Bトレンチ SK-1	上 層	弥生土器 甕	口縁部	(28.0)			灰黄色	1～3mmの砂粒を含む	被熱 風化が激しい
273	Bトレンチ SK-1	遺構面露時	弥生土器 高坏	坏部	(25.8)			浅黄色	1～2mmの砂粒を含む	風化が激しい 274と同一個体か
274	Bトレンチ SK-1	上 層	弥生土器 高坏	脚部		(18.2)		灰白色	1～5mmの砂粒を含む	2孔一組の透かし穴 風化 が激しい 273と同一個体か
275	Bトレンチ SK-1	上 層	弥生土器 甕	底部		(5.4)		①暗灰黄色 ②黒褐色	1～5mmの砂粒を含む	風化が激しい

出土遺物観察表

SB：竪穴住居跡、SK：土坑、SD：溝、SX：落ち込み 法量（ ）は復元値

遺物 番号	出土遺構	層 位	器 種	部 位	口径 (cm)	底径 (cm)	器高 (cm)	色 調 ①外面②内面	胎 土	備 考
277	Bトレンチ SK-3	下 層	弥生土器 甕	口縁部 ～胴部	(17.8)			①黄灰色 ②淡黄色	1～5mmの砂粒を含む	
278	Bトレンチ SK-3	下 層	弥生土器 甕	口縁部				灰白色	微砂粒を含む	
279	Bトレンチ SK-3		弥生土器 甕	胴部				①浅黄色 ②灰白色	微砂粒を含む	
280	Bトレンチ SK-3	上 層	弥生土器 甕	底部		(1.4)		①にぶい橙色 ②灰黄色	1～5mmの砂粒を含む	風化が激しい
281	Bトレンチ SK-4	上 層	弥生土器 甕	口縁部 ～胴部				淡黄橙色	1～2mmの砂粒を含む	風化が激しい
282	Bトレンチ SK-4	上 層	弥生土器 高坏	脚部		(20.7)		灰白色	微砂粒を含む	風化が激しい
283	Bトレンチ SK-4	上 層	土師器 高坏	脚部				にぶい黄橙色	2mm以下の砂粒を含む	風化が激しい
284	Bトレンチ SK-4		土師器 器台	脚部		(8.8)		浅黄橙色	微砂粒を含む	透かし穴5ヶ所 風化が激しい
285	Bトレンチ SK-4		弥生土器 壺	底部		(6.6)		①褐灰色 ②橙色	1～6mmの砂粒を含む	被熱 風化が激しい
286	Bトレンチ SK-6		土師器 高坏	脚部				淡黄橙色	1～2mmの砂粒を含む	風化が激しい
287	Bトレンチ SK-6		土師器 高坏	脚部				淡黄橙色	1～2mmの砂粒を含む	風化が激しい
288	Bトレンチ SK-6		弥生土器 壺	底部		(10.8)		灰白色	1mm前後の砂粒を含む	被熱 風化が激しい
289	Bトレンチ SK-6	上 層	弥生土器 甕	底部		(5.6)		浅黄橙色	1mm前後の砂粒を含む	風化が激しい
290	Bトレンチ SX-1	下 層	弥生土器 甕	口縁部				灰白色	微砂粒を含む	
291	Bトレンチ SX-1	下 層	弥生土器 甕	口縁部				灰白色	微砂粒を含む	
292	Bトレンチ SX-1		弥生土器 高坏	胴部	(13.0)			灰白色	1～2mmの砂粒を含む	風化が激しい
293	Bトレンチ SX-1		弥生土器 甕	底部		(6.0)		①にぶい橙色 ②淡黄色	1～2.5mmの砂粒を含む	風化が激しい
294	Bトレンチ SX-1		弥生土器 壺	胴部				灰白色	1～3.5mmの砂粒を含む	5条単位の櫛描波状文
302	Bトレンチ SD-1		弥生土器 甕	口縁部				①黒褐色 ②灰白色	1～3mmの砂粒を含む	風化が激しい
303	Bトレンチ SK-6		弥生土器 高坏	坏部				浅黄橙色	微砂粒を含む	風化が激しい
304	Bトレンチ SD-1	下 層	弥生土器 鉢	把手				浅黄橙色	1～5mmの砂粒を含む	風化が激しい
305	Bトレンチ SD-1		土師器 伝統的V様式系甕	口縁部 ～胴部	(14.0)			灰白色	1～2mmの砂粒を含む	風化が激しい
306	Bトレンチ SD-1	下 層	土師器 高坏	脚部				浅黄橙色	精製粘土に1mm前後の 砂粒をわずかに含む	風化が激しい
307	Bトレンチ SD-1		弥生土器 甕	底部		(4.5)		①浅黄橙色 ②褐灰色	1mm前後の砂粒を含む	風化が激しい
308	Bトレンチ SD-1		弥生土器 甕	底部		(6.9)		灰白色	1～2mmの砂粒を含む	風化が激しい
309	配線トレンチ SD-2		弥生土器 垂下口縁壺	頸部				浅黄橙色	1～2mmの砂粒を多量 に含む	風化が激しい
310	配線トレンチ SD-2		弥生土器 高坏	脚部		(16.7)		浅黄橙色	1～4mmの砂粒を含む	円形透かし穴 風化が激しい
311	配線トレンチ SD-2		弥生土器 高坏	胴部		(17.1)		灰白色	1～3mmの砂粒を含む	
312	配線トレンチ SD-2		弥生土器 鉢	胴部～ 底部	(8.1)	(1.9)	(8.1)	灰白色	1～4mmの砂粒を含む	
313	配線トレンチ C区SX-1	下 層	弥生土器 垂下口縁壺	頸部				褐灰色	1～2mmの砂粒を含む	風化が激しい
314	配線トレンチ C区SX-1	下 層	弥生土器 甕	口縁部				灰白色	微砂粒を含む	
315	配線トレンチ C区SX-1	下 層	弥生土器 甕	口縁部				①黒褐色 ②淡黄色	1～2mmの砂粒を含む	外面煤付着
316	配線トレンチ C区SX-1	下 層	弥生土器 壺	口縁部	(18.9)			淡黄色	3mm以内の砂粒を含む	口唇部に3条の擬門線 317と同一個体

吉田構内グランド屋外照明施設新設に伴う発掘調査

SB：竪穴住居跡、SK：土坑、SD：溝、SX：落ち込み 法量（ ）は復元値

遺物 番号	出土遺構	層 位	器 種	部位	口径 (cm)	底径 (cm)	器高 (cm)	色 調 ①外面②内面	胎 土	備 考
317	配線トレンチ C区SX-1	下 層	弥生土器 壺	胴部				①淡黄色 ②灰白色	1～3mmの砂粒をわず かに含む	316と同一個体
319	配線トレンチ C区SX-1	下 層	弥生土器 壺	胴部～ 底部		(5.2)		①浅黄色 ②灰白色	1～3mmの砂粒を含む	内外面に黒斑
320	配線トレンチ C区SX-1	下 層	弥生土器 高坏	脚部		(7.6)		①淡黄色 ②黄灰色	1～2mmの砂粒を含む	
321	配線トレンチ C区SX-1	下 層	弥生土器 甕	底部		(5.0)		①浅黄橙色 ②灰黄色	1～2mmの砂粒を含む	風化が激しい
322	配線トレンチ C区SX-1	下 層	弥生土器 甕	底部		(8.0)		①淡黄色 ②灰白色	1mm前後の砂粒を含 む	
323	配線トレンチ C区SX-1	中 層	弥生土器 壺	胴部				①丹塗り ②黄灰色	1～3mmの砂粒を含む	北部九州系
324	配線トレンチ C区SX-1	中 層	弥生土器 甕	口縁部				①黄灰色 ②灰白色	1～3mmの砂粒を含む	外面煤付着
325	配線トレンチ C区SX-1	中 層	弥生土器 甕	口縁部 ～胴部				①淡黄色 ②灰白色	1～4mmの砂粒を含む	風化が激しい
326	配線トレンチ C区SX-1	中 層	弥生土器 高坏	坏部				浅黄橙色	1～2mmの砂粒を含む	
327	配線トレンチ C区SX-1	上 層	弥生土器 高坏	脚部				にぶい橙色	1～4mmの砂粒を多量 に含む	被熱 風化が激しい
328	配線トレンチ C区SX-1	中 層	弥生土器 高坏	脚部				橙色	1～4mmの砂粒を多量 に含む	
329	配線トレンチ C区SX-1	中 層	弥生土器 壺	底部		(8.5)		①淡褐色 ②黒褐色	1～3mmの砂粒を含む	
331	配線トレンチ C区SX-2	上 層	弥生土器 甕	底部		(3.5)		淡黄色	1～3mmの砂粒を含む	風化が激しい 外面に黒斑
332	配線トレンチ D区SX	上 層	弥生土器 甕	口縁部				灰白色	1～2mmの砂粒を含む	風化が激しい
333	配線トレンチ D区SX	上 層	土師器 甕	底部		(5.0)		①灰黄色 ②灰白色	1mm前後の砂粒を含 む	
334	Bトレンチ 暗渠1	清掃時	弥生土器 複合口縁壺	口縁部				灰白色	1～2mmの砂粒を含む	風化が激しい
335	Bトレンチ 暗渠1		瓦質土器 壺	胴部				灰白色	精良	風景画型押し
336	Bトレンチ 暗渠1		磁器 碗	口縁部～ 体部	(9.8)			素地 白色 釉調 灰色	精良	肥前系染付
337	Bトレンチ 暗渠1	清掃時	陶器 片口	体部～ 底部		(6.6)		素地 灰色 釉調 灰白色	精製粘土	萩焼 外面の釉は体部下半まで
333	Bトレンチ G-1	遺構検出時	弥生土器 甕	口縁部				浅黄橙色	1～2mmの砂粒を含む	風化が激しい
340	Bトレンチ G-1	遺構検出時	弥生土器 甕	底部		(4.5)		灰白色	1mm前後の砂粒を含 む	風化が激しい 上底
341	Bトレンチ G-1	遺構検出時	弥生土器 甕	底部		(6.4)		浅黄橙色	1mm前後の砂粒を含 む	上底
342	Bトレンチ G-2	遺構検出時	土師器 甕	底部		(1.7)		①浅黄橙色 ②褐灰色	1～2mmの砂粒を含む	外面ケズリ 風化が激しい
345	Bトレンチ G-3	遺構検出時	弥生土器 甕	口縁部				淡黄色	1～3mmの砂粒を含む	
346	Bトレンチ G-3	遺構検出時	弥生土器 壺	頸部				淡黄色	1～4mmの砂粒を多量 に含む	1条の貼付突帯 風化が激しい
347	Bトレンチ G-3	遺構検出時	弥生土器 壺	頸部				灰白色	1～3mmの砂粒を含む	2段の刺突文 風化が激しい
348	Bトレンチ G-3	遺構検出時	弥生土器 複合口縁壺	口縁部				淡黄橙色	1mm前後の砂粒を含 む	風化が激しい
349	Bトレンチ G-3	遺構検出時	弥生土器 甕	口縁部				灰白色	1～3mmの砂粒を含む	口唇部に3条の擬凹線 風化が激しい
350	Bトレンチ G-3	遺構検出時	弥生土器 高坏	坏部				淡黄色	微砂粒と3～5mmの砂 粒を含む	風化が激しい
351	Bトレンチ G-3	遺構検出時	弥生土器 壺	底部		(6.8)		淡黄色	2～4mmの砂粒を多量 に含む	底部貼付 風化が激しい
352	Bトレンチ G-3	遺構検出時	弥生土器 甕	底部		(7.2)		灰白色	1～4mmの砂粒を含む	風化が激しい
353	Bトレンチ G-3	遺構検出時	弥生土器 甕	底部		(4.3)		①浅黄色 ②褐灰色	1～3mmの砂粒を含む	風化が激しい
354	Bトレンチ G-3	遺構検出時	弥生土器 甕	底部		(6.7)		①淡黄色 ②黄灰色	1mm前後の砂粒を含 む	風化が激しい

出土遺物観察表

法量 () は復元値

遺物 番号	出土遺構	層 位	器 種	部位	口径 (cm)	底径 (cm)	器高 (cm)	色 調 ①外面②内面	胎 土	備 考
355	Bトレンチ G-3	遺構検出時	土師器 高坏	坏部				浅黄橙色	1~3mmの砂粒を含む	風化が激しい
356	Bトレンチ G-3	遺構検出時	土師器 高坏	坏部				浅黄橙色	1~5mmの砂粒を含む	風化が激しい
357	Bトレンチ G-3	遺構検出時	須恵器 蓋坏 坏	底部		(7.5)		青灰色	1mm前後の砂粒を含む	
358	Bトレンチ G-3	遺構検出時	土師器 碗	底部		(8.5)		淡黄色	精製粘土	
359	Bトレンチ G-3	遺構検出時	土師器 皿	底部		(4.8)		灰白色	精製粘土	糸切底 内面に炭素吸着
360	Bトレンチ G-3	遺構検出時	土師器 皿	底部		(6.5)		淡黄色	精良	糸切底
361	Bトレンチ G-4	遺構検出時	弥生土器 甕	口縁部	(17.1)			灰白色	金雲母と赤色斑粒を わずかに含む	風化が激しい
362	Bトレンチ G-4	遺構検出時	弥生土器 甕	口縁部	(23.2)			淡黄色	1~3mmの砂粒を多量 に含む	風化が激しい
363	Bトレンチ G-4	遺構検出時	弥生土器 甕	底部		(5.4)		淡黄色	1mm前後の砂粒を含む	風化が激しい
364	Bトレンチ G-4	遺構検出時	弥生土器 甕	底部				淡黄色	1mm前後の砂粒を含む	風化が激しい
365	Bトレンチ G-4	遺構検出時	弥生土器 甕	底部		(5.4)		淡黄色	1~2mmの砂粒を含む	風化が激しい
366	Bトレンチ G-4	遺構検出時	弥生土器 高坏	坏部	(22.9)			淡黄色	1~3mmの砂粒を含む	
367	配線トレンチ A2区	撈 乱	縄文土器 深鉢	口縁部				橙色	1~3mmの砂粒を含む	貼付突帯
368	配線トレンチ C区	表土掘削時	弥生土器 甕	口縁部	(26.4)			①橙色 ②灰白色	1~2mmの砂粒を含む	被熱 風化が激しい
369	配線トレンチ C区	表土掘削時	須恵器 坏	底部		(8.5)		青灰色	1mm前後の砂粒を含む	
370	配線トレンチ D区	表土掘削時	土師器 高坏	脚部				橙色	1~2mmの砂粒を含む	
371	配線トレンチ E区	遺物包含層	土師器 碗	口縁部	(11.6)			灰白色	精製粘土	
373	配線トレンチ G区 河川	下 層	弥生土器 複合口縁壺	口縁部 ~頸部				淡黄色	1~3mmの砂粒を含む	
374	配線トレンチ G区	写真清掃時	須恵器 坏	底部		(7.6)		青灰色	1mm前後の砂粒を含む	
375	Cトレンチ 水田 溝		須恵器 坏	底部		(7.2)		青灰色	1~2mmの砂粒を含む	
376	Cトレンチ 北西端	遺物包含層	土師器 碗	底部		(7.2)		①淡黄色 ②灰白色	1mm以内の微砂粒を含む	
377	Cトレンチ 溜池状遺構		土師器 坏	底部				黄橙色	微砂粒を含む	
378	Cトレンチ SK-1		土師器 碗	口縁部				浅黄橙色	精製粘土に1mm前後 の砂粒を含む	風化が激しい
379	Eトレンチ 南半	遺物包含層	弥生土器 壺	口縁部	(14.4)			淡黄色	1~2mmの砂粒を少量 含む	
380	Eトレンチ 北半	遺物包含層	弥生土器 甕	口縁部	(13.4)			淡黄色	1~2mmの砂粒を少量 含む	
381	Eトレンチ 南半	遺物包含層	弥生土器 甕	口縁部				灰白色	微砂粒を多量に含み 1~6mmの砂粒を含む	山陰系 風化が激しい
382	Eトレンチ 北半	遺物包含層	弥生土器 甕	頸部				灰白色	微砂粒を含む	
386	Eトレンチ 南半	遺物包含層	弥生土器 高坏	脚部				灰黄色	1~3mmの砂粒を含む	
384	Eトレンチ 南半	遺物包含層	弥生土器 甕	底部		(3.6)		灰黄色	1~4mmの砂粒を含む	
385	Eトレンチ	遺物包含層	弥生土器 甕	底部		(5.2)		灰黄色	2mm以内の砂粒を含む	
386	Fトレンチ 河川	縄文晩期 堆積土下層	縄文土器 深鉢	口縁部				灰黄色	1~2mmの砂粒を含む	
387	Fトレンチ 河川	縄文晩期 堆積土上層	縄文土器 深鉢	胴部				暗灰黄色	1~2mmの砂粒を含む	縄文RL
388	Fトレンチ 河川	縄文晩期 堆積土上層	縄文土器 深鉢	胴部				①黄灰色 ②灰黄色	1~3mmの砂粒を含む	巻貝による擬縄文

法量（ ）は復元値

遺物 番号	出土遺構	層 位	器 種	部位	口径 (cm)	底径 (cm)	器高 (cm)	色 調 ①外面②内面	胎 土	備 考
389	Fトレンチ 河川	上面包含層	縄文土器 深鉢	口縁部				灰黄色	1mm前後の砂粒を含む	6条の凹線
390	Fトレンチ 河川	縄文晩期 堆積土上層	縄文土器 深鉢	胴部				灰黄色	2mm以内の砂粒を含む	3条の沈線 風化が激しい
391	Fトレンチ 河川北肩	縄文晩期 堆積土上層	縄文土器 深鉢	口縁部 ～胴部	(36.8)			暗褐色～ にぶい褐色	1～5mmの砂粒を含む	
392	Fトレンチ 河川	縄文晩期 堆積土上層	縄文土器 深鉢	口縁部 ～底部		(1.0)	(26.1)	①灰黄褐色 ②黒褐色	1～9mmの砂粒を含む	
393	Fトレンチ 河川	縄文晩期 堆積土上層	縄文土器 深鉢	口縁部				灰白色	1～3mmの砂粒を含む	
394	Fトレンチ 河川	縄文晩期 堆積土上層	縄文土器 深鉢	口縁部				黒褐色	1～2.5mmの砂粒を含む	外面に煤付着
395	Fトレンチ 河川	縄文晩期 堆積土上層	縄文土器 深鉢	口縁部				黒褐色	1～9mmの砂粒を含む	外面に煤付着 口唇部刻目あり
396	Fトレンチ 河川	縄文晩期 堆積土上層	縄文土器 深鉢	口縁部				①淡黄色 ②黒褐色	1mm前後の砂粒を含む	口唇部刻目あり
397	Fトレンチ 河川	上面包含層	縄文土器 深鉢	口縁部				黒褐色	1～2mmの砂粒を含む	外面に煤付着 口唇部刻目あり
398	Fトレンチ 河川	上面包含層	縄文土器 深鉢	口縁部				①灰黄色 ②黄灰色	1～2mmの砂粒を含む	
399	Fトレンチ 河川	縄文晩期 堆積土上層	縄文土器 深鉢	胴部				淡黄色	1～2mmの砂粒を含む	
400	Fトレンチ 河川	縄文晩期 堆積土上層	縄文土器 浅鉢	口縁部	(42.0)			①黒褐色 ②黄灰色	1～3mmの砂粒を含む	
401	Fトレンチ 河川	縄文晩期 堆積土上層	縄文土器 浅鉢	口縁部				浅黄色	1～3mmの砂粒を含む	
402	Fトレンチ 河川	上面包含層	縄文土器 浅鉢	口縁部				黄灰色	1～3mmの砂粒を含む	
403	Fトレンチ 暗渠		縄文土器 浅鉢	口縁部				黄灰色	1～2mmの砂粒を含む	
404	Fトレンチ 河川北肩	縄文晩期 堆積土上層	縄文土器 浅鉢	口縁部				黄灰色	1mm前後の砂粒を含む	外面に貝殻条痕を残す
405	Fトレンチ 河川	縄文晩期 堆積土上層	縄文土器 浅鉢	口縁部				黄灰色	1～2mmの砂粒を含む	
406	Fトレンチ 河川	縄文晩期 堆積土上層	縄文土器 浅鉢	口縁部				黄灰色	1mm前後の砂粒を含む	
407	Fトレンチ 河川北肩	縄文晩期 堆積土上層	縄文土器 浅鉢	口縁部				黄灰色	精良	内面に剝離痕
408	Fトレンチ 河川	上面包含層	縄文土器 浅鉢	胴部				黄灰色	1mm前後の砂粒を含む	
409	Fトレンチ 河川	縄文晩期 堆積土上層	縄文土器 壺	胴部				黄灰色	1～2mmの砂粒を含む	
410	Fトレンチ 暗渠		縄文土器 浅鉢	底部				①黄灰色 ③灰黄色	微砂粒を含む	
411	Fトレンチ 暗渠		縄文土器 浅鉢	底部		(7.4)		浅黄色	1～2mmの砂粒を含む	
412	Fトレンチ 河川北肩	縄文晩期 堆積土上層	縄文土器 深鉢	底部		(7.8)		①黄褐色 ③暗灰黄色	1～3mmの砂粒を含む	風化が激しい 内面に煤付着
413	Fトレンチ 河川	上面包含層	弥生土器 壺	口縁部	(27.5)			①丹塗り ③淡黄色	1～3mmの砂粒を含む	外面丹塗り
414	Fトレンチ 河川	上面包含層	弥生土器 甕	口縁部				浅黄色	1～3mmの砂粒を含む	混入か
415	Fトレンチ 河川	上面包含層	弥生土器 甕	口縁部				浅黄色	1～3mmの砂粒を含む	混入か
416	Fトレンチ 河川	上面包含層	土師器 高坏	坏部				浅黄色	1～2mmの砂粒を含む	混入か

Tab.3 出土遺物観察表（土製品）

法量（ ）は復元値

遺物 番号	出土遺構	層 位	器 種	最大径 (cm)	最大孔径 (cm)	最大厚 (cm)	重量 (g)	色 調	備 考
330	配線CIX SX-1	黒色粘土	土 玉	2.1	0.2	1.9	7.3	灰黄色	精製粘土に1～2mmの砂粒をわずかに 含む

Tab.4 出土遺物観察表（石器・石製品）

法量（ ）は現存値

遺物 番号	出土遺構	層 位	器 種	最大長 (cm)	最大幅 (cm)	最大厚 (cm)	重量 (g)	石 質	備 考
179	Aトレンチ 河川1区	最下層 (河床上面)	調整剥片	2.6	2.6	0.6	2.6	サヌカイト	
180	Aトレンチ 河川1区	ド 層	石 鏃	3.8	1.6	0.95	4.4	黒曜石	未製品
181	Aトレンチ 河川2区	中 層	紡錘車	径 (2.6)		0.6	2.6	角閃石安山岩	
216	Bトレンチ SB-1 Pit-3		礫	5.7	3.8	0.7	18.8	結晶片岩	使用痕あり
217	Bトレンチ SB-1 Pit-5		剥 片	6.1	3.0	0.7	15.2	結晶片岩	使用痕あり
218	Bトレンチ SB-1		紡錘車	最大径 3.85	孔径 0.5	0.7	17.8	滑 石	
242	Bトレンチ SB-2		石 鏃	(1.4)	(1.1)	0.35	0.3	サヌカイト	
276	Bトレンチ SK-2	上 層	凹 石	9.1	14.7	5.0	592.9	凝灰岩	
295	Bトレンチ SX-1		石庖丁	8.1	7.4	1.2	120.4	結晶片岩	未製品か
296	Bトレンチ SX-1		石庖丁	6.7	11.7	1.6	102.8	結晶片岩	未製品か
297	Bトレンチ SX-1	下 層	大型刃器	13.0	20.3	3.8	771.2	熔結凝灰岩	
298	Bトレンチ SX-1		刃 器	7.1	10.4	2.5	214.5	結晶片岩	
299	Bトレンチ SX-1	下 層	刃 器	8.3	9.6	3.2	231.4	熔結凝灰岩	
300	Bトレンチ SX-1	中 層	台 石	14.0	8.4	7.5	940.7	安山岩	
301	Bトレンチ SK-8		紡錘車	5.15	7.5	1.0	39.7	角閃石安山岩	未製品
318	配線トレンチ C区SX-1	下 層	磨製石斧	(8.3)	(6.0)	6.1	468.0	輝石安山岩	
338	Bトレンチ 暗渠		剥 片	4.4	3.6	1.3	15.5	姫島産黒曜石	
343	Bトレンチ G-2	遺構検出時	剥 片	(2.4)	(3.4)	0.95	4.2	安山岩	使用痕あり
44	Bトレンチ G-2	遺構検出時	剥 片	12.2	6.7	2.4	236.5	流紋岩	使用痕あり
372	配線トレンチ E区	遺物包含層上面	石 鏃	1.4	1.4	0.2	0.3	サヌカイト	
417	Fトレンチ 河川		敲 石	10.5	10.7	4.8	720.8	輝石安山岩	
418	Fトレンチ 河川	縄文晩期堆積土	三脚石器	2.6	2.8	0.5	2.0	黒曜石	

Tab.5 出土遺物観察表（ガラス小玉）

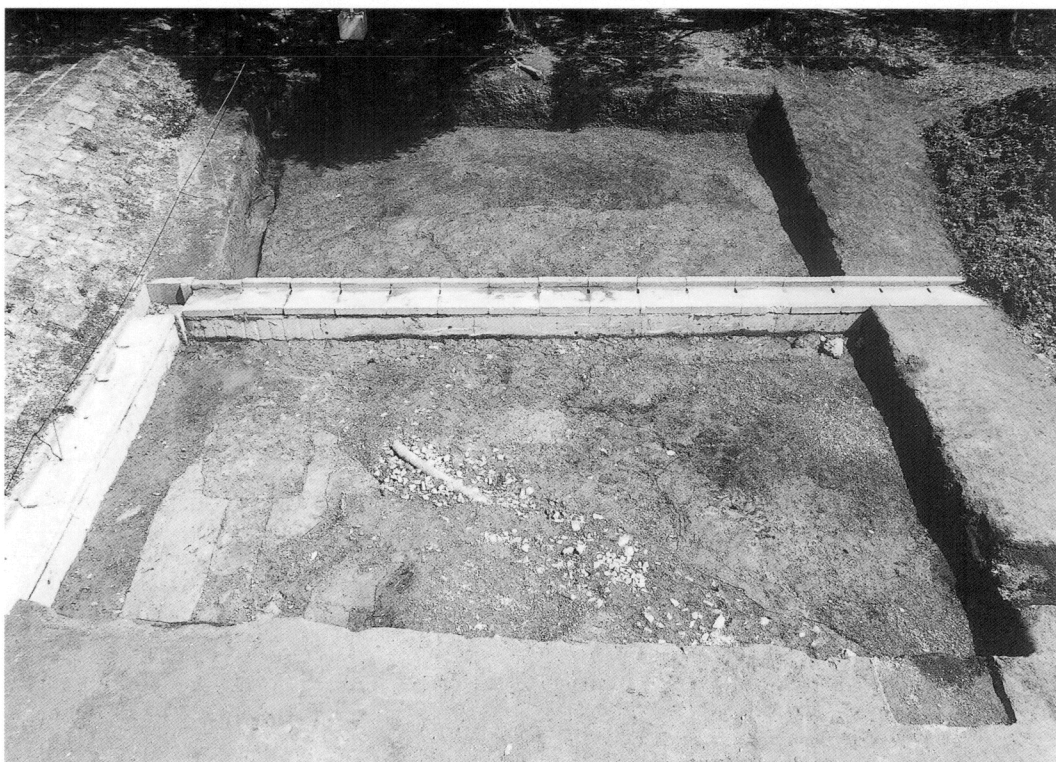
遺物 番号	出土遺構	層 位	小口長径 (mm)	小口短径 (mm)	最大孔径 (mm)	側面長 (mm)	重量 (g)	外 部 形 態	色 調	紐孔形態	備 考
219	Bトレンチ SB-1	水洗選別	3.1	3.0	1.1	1.5	0.03	形態1	濃紺色	紐孔C2	気孔管がある
220	Bトレンチ SB-1	水洗選別	3.8	3.6	1.6	4.5	0.08	形態2	淡水色	紐孔D	
221	Bトレンチ SB-1	水洗選別	2.9	2.8	0.8	3.3	0.03	形態2	濃紺色	紐孔C1	小口面に大きな不純物がある
222	Bトレンチ SB-1	水洗選別	3.6	3.4	1.4	1.7	0.02	形態1	淡緑青色	紐孔C2	断面形が三角形になる
223	Bトレンチ SB-1	水洗選別	4.2	4.1	1.3	2.9	0.07	形態2	淡水色	紐孔D	熔着痕跡がある
224	Bトレンチ SB-1	水洗選別	2.4	2.4	0.8	1.1	0.02	形態1	濃紺色	紐孔C2	
225	Bトレンチ SB-1	水洗選別	4.4	4.4	1.8	3.6	0.08	形態2	淡水色	紐孔C2	
226	Bトレンチ SB-1	水洗選別	3.8	3.7	1.4	3.6	0.06	形態2	淡水色	紐孔D	気孔管がある 表面の凹凸が激しい

吉田構内グランド屋外照明施設新設に伴う発掘調査

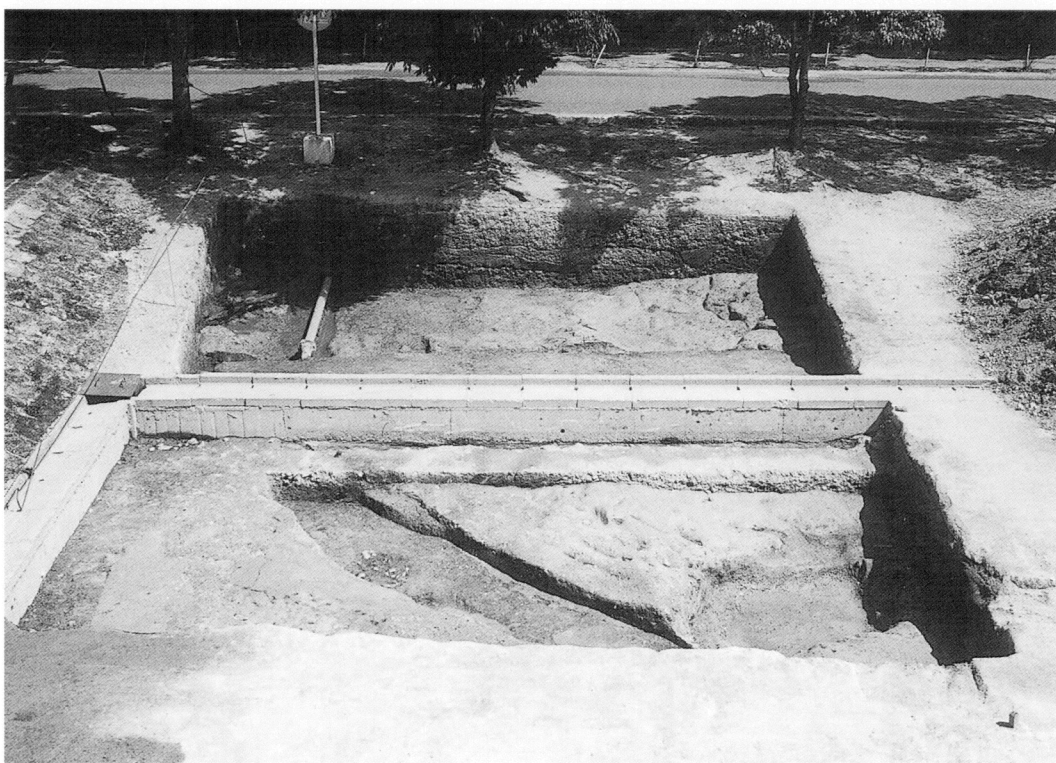
遺物 番号	2出土遺構	層 位	小口長径 (mm)	小口短径 (mm)	最大孔径 (mm)	側面長 (mm)	重量 (g)	外 部 形 態	色 調	紐孔形態	備 考
227	Bトレンチ SB-1	水洗選別	2.5	2.4	1.0	1.1	0.01	形態1	濃紺色	紐孔C1	
228	Bトレンチ SB-1	水洗選別	3.4	3.2	1.7	1.2	0.02	形態1	濃紺色	紐孔D	
229	Bトレンチ SB-1	水洗選別	3.5	3.4	1.0	3.4	0.05	形態3	濃紺色	紐孔D	
230	Bトレンチ SB-1	水洗選別	3.8	3.7	2.1	1.8	0.03	形態1	淡水色	紐孔D	
231	Bトレンチ SB-1	水洗選別	2.9	2.7	1.6	3.0	0.03	形態2	淡水色	紐孔C1	器壁が薄く環状になる
232	Bトレンチ SB-1	水洗選別	3.2	3.1	1.2	3.1	0.05	形態3	濃紺色	紐孔D	
233	Bトレンチ SB-1	水洗選別	3.5	3.4	1.3	1.8	0.04	形態1	濃紺色	紐孔D	気孔管がある
234	Bトレンチ SB-1 Pit-2	水洗選別	3.3	3.2	1.6	1.3	0.02	形態1	淡水色	紐孔D	
235	Bトレンチ SB-1	水洗選別	3.0	2.9	1.1	2.0	0.03	形態2	淡水色	紐孔D	
236	Bトレンチ SB-1	水洗選別	3.1	2.9	1.6	1.6	0.03	形態1	淡緑青色	紐孔D	
237	Bトレンチ SB-1	水洗選別				1.8	計測 不能	形態1	淡水色	不明	欠損品
245	Bトレンチ SB-3	水洗選別	4.3	4.2	1.1	3.5	0.08	形態2	淡緑青色	紐孔D	
246	Bトレンチ SB-3	水洗選別	3.0	2.8	1.1	2.9	0.03	形態2	濃紺色	紐孔C2	
247	Bトレンチ SB-3	水洗選別	3.2	3.1	1.5	1.4	0.02	形態1	濃紺色	紐孔D	
248	Bトレンチ SB-3	水洗選別	3.6	3.4	1.5	1.6	0.03	形態1	濃紺色	紐孔C2	
249	Bトレンチ SB-3	水洗選別	3.5	3.4	1.4	3.2	0.05	形態2	濃紺色	紐孔C2	
250	Bトレンチ SB-3	水洗選別	3.1	2.7	1.3	2.8	0.03	形態2	濃紺色	紐孔C2	
251	Bトレンチ SB-3	水洗選別	4.2	3.8	1.7	1.8	0.03	形態1	濃紺色	紐孔C2	
252	Bトレンチ SB-3	水洗選別	4.0	3.6	1.8	2.1	0.04	形態1	濃紺色	紐孔C2	
253	Bトレンチ SB-3	水洗選別	3.3	3.1	1.3	1.8	0.02	形態1	淡水色	紐孔D	
254	Bトレンチ SB-3	水洗選別	3.6	3.5	1.3	2.0	0.03	形態1	濃紺色	紐孔C2	
255	Bトレンチ SB-3	水洗選別	3.4	3.2	1.3	2.4	0.02	形態2	淡水色	紐孔D	
256	Bトレンチ SB-3	水洗選別	4.3	4.0	1.7	3.4	0.07	形態2	淡水色	紐孔D	
257	Bトレンチ SB-3	水洗選別	3.1	3.0	1.2	2.7	0.03	形態3	濃紺色	紐孔D	
258	Bトレンチ SB-3	水洗選別	3.9	3.8	1.7	2.8	0.05	形態2	淡水色	紐孔C1	
259	配線トレンチ A1区 SB-3	水洗選別	4.8	4.4	1.7	3.9	0.10	形態2	淡水色	紐孔D	しわ状の収縮痕がある
260	配線トレンチ A1区 SB-3	水洗選別	3.1	2.9	1.3	2.1	0.03	形態2	濃紺色	紐孔C1	
261	配線トレンチ A1区 SB-3	水洗選別	3.6	3.6	1.4	1.8	0.03	形態1	濃紺色	紐孔C1	
262	Bトレンチ SB-3	水洗選別	4.6	4.6	1.7	2.1	0.06	形態1	濃紺色	紐孔D	

吉田構内全景（南から）





(1) A トレンチ遺構検出状況（北西から）



(2) A トレンチ遺構完掘状況（北西から）



(1) A トレンチ遺構完掘状況 (南西から)



(2) A トレンチ河川遺物出土状況 (北から)



(3) A トレンチ南西壁土層断面 (北東から)

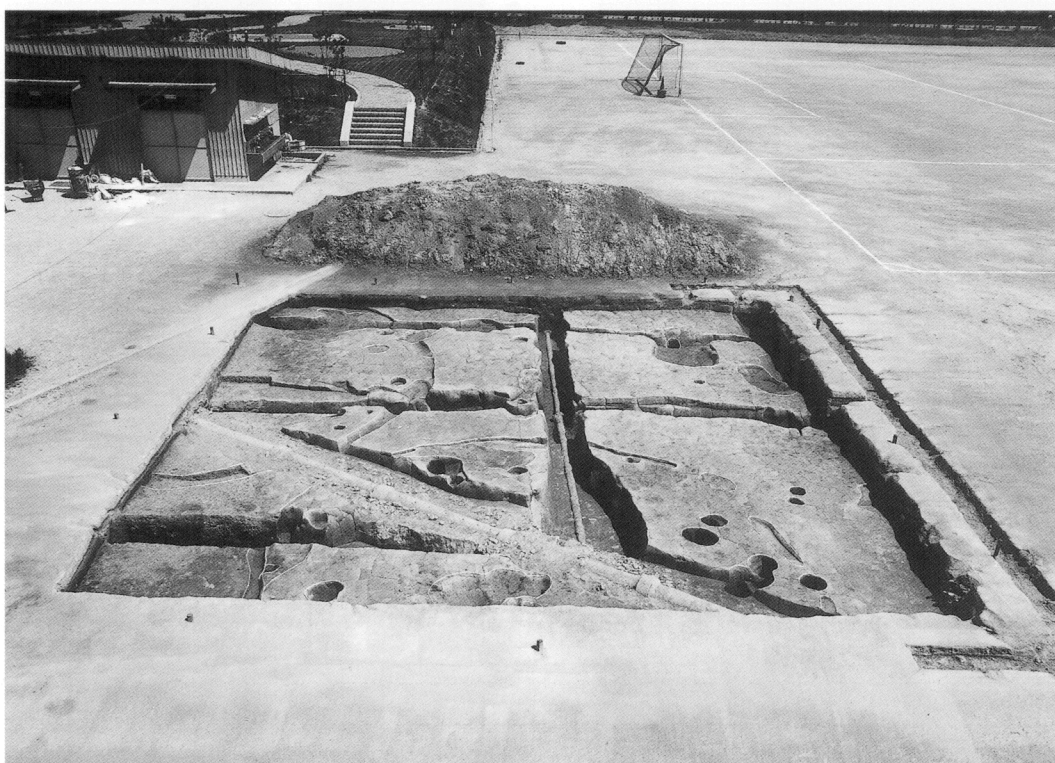


(4) A トレンチ南西壁土層断面 (北東から)

田中内子と屋外照明施設新設に伴う発掘調査



(1) B トレンチ遺構検出状況（北西から）



(2) B トレンチ遺構完掘状況（北西から）



(1) Bトレンチ第1号竪穴住居跡検出状況(南西から)



(2) Bトレンチ第1号竪穴住居跡完掘状況(南西から)



(1) Bトレンチ第1号竪穴住居跡完掘状況(南から)



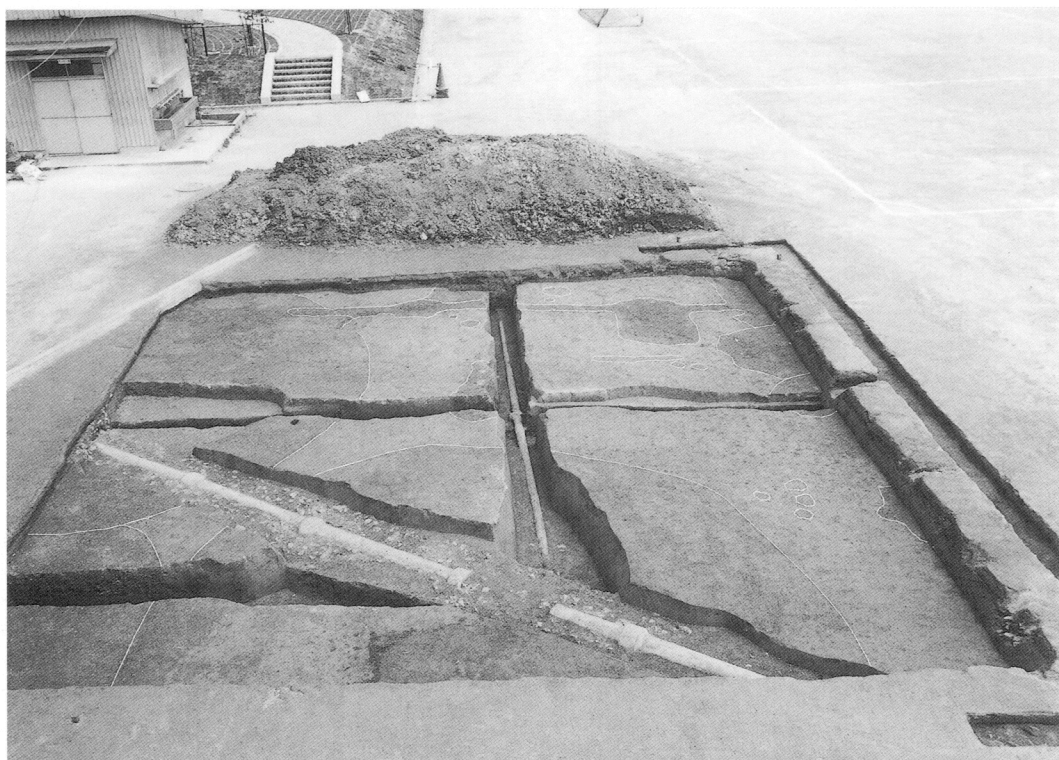
(2) Bトレンチ第1号竪穴住居跡完掘状況(北東から)



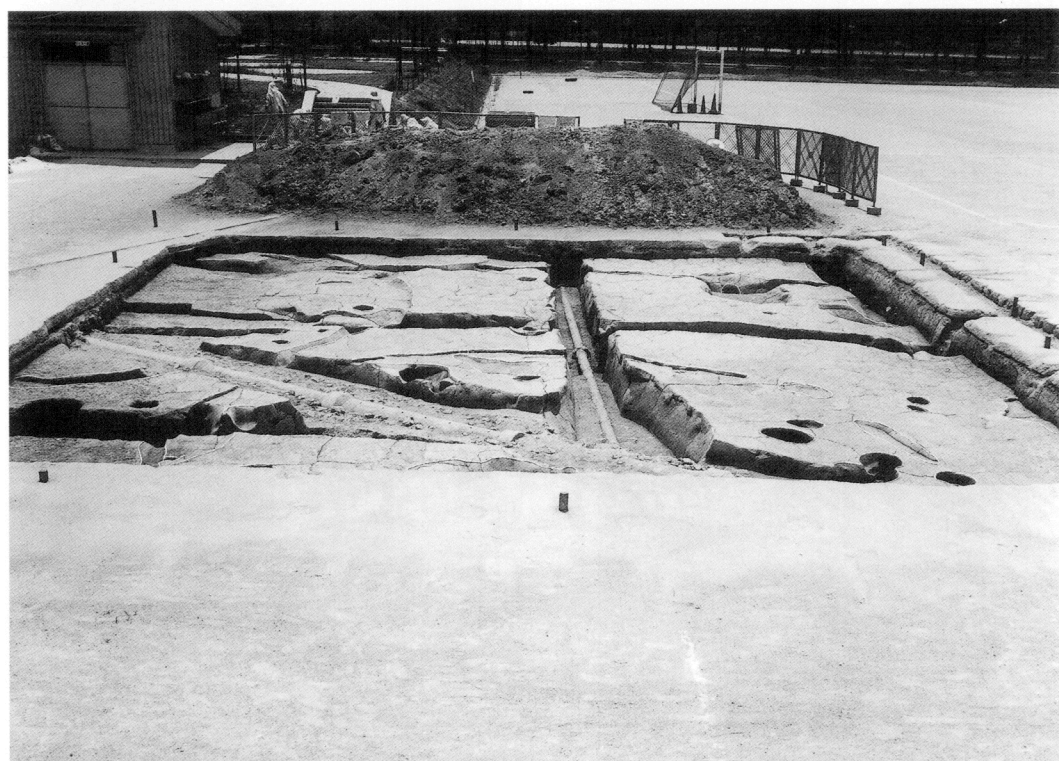
(3) 配線トレンチ第1号竪穴住居跡完掘状況(南東から)



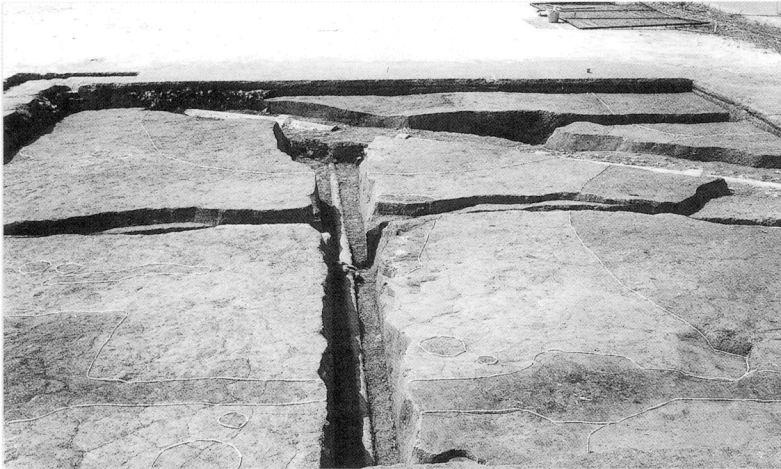
(4) Bトレンチ第1号竪穴住居跡滑石製紡錘車出土状況(東から)



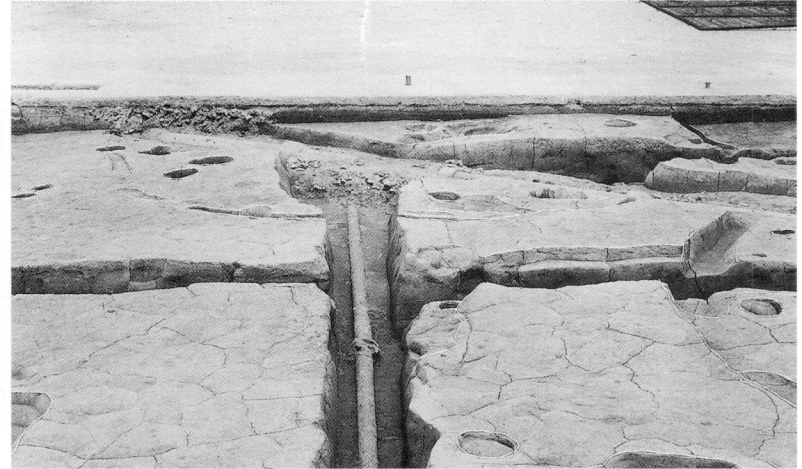
(1) B トレンチ第 2 号竪穴住居跡検出状況（北西から）



(2) B トレンチ第 2 号竪穴住居跡完掘状況（北西から）



(1) Bトレンチ第2号竪穴住居跡検出状況(南東から)



(2) Bトレンチ第2号竪穴住居跡完掘状況(南東から)



(3) Bトレンチ第2号竪穴住居跡完掘状況(南から)



(4) Bトレンチ第2号竪穴住居跡炉跡検出状況(南西から)



(1) 配線トレンチ第3号竪穴住居跡検出状況(南東から)



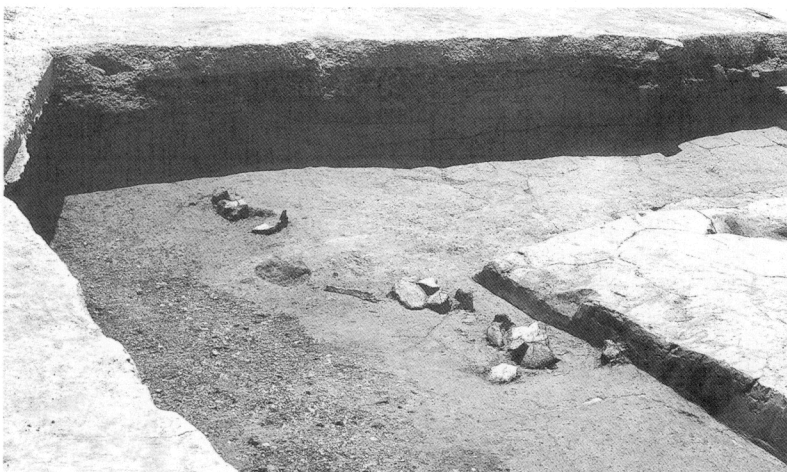
(2) 配線トレンチ第3号竪穴住居跡完掘状況(南東から)



(3) 配線トレンチ第4号竪穴住居跡検出状況(南東から)



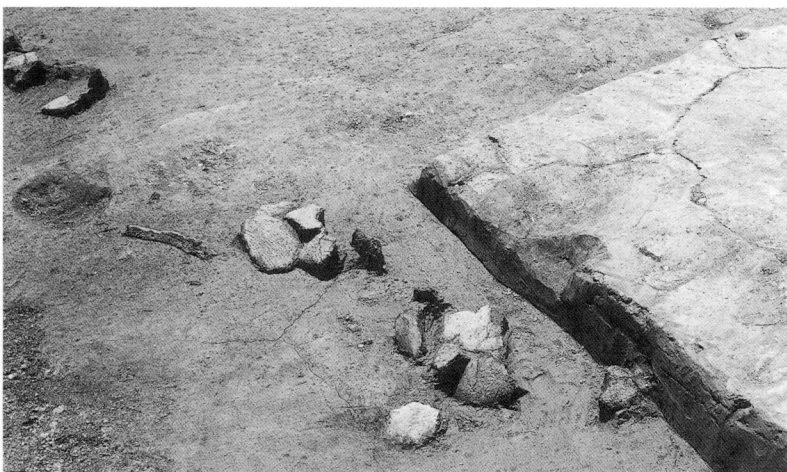
(4) 配線トレンチ第4号竪穴住居跡完掘状況(南東から)



(1) B トレンチ縄文土器検出状況（北西から）



(2) B トレンチ縄文土器検出状況（南東から）



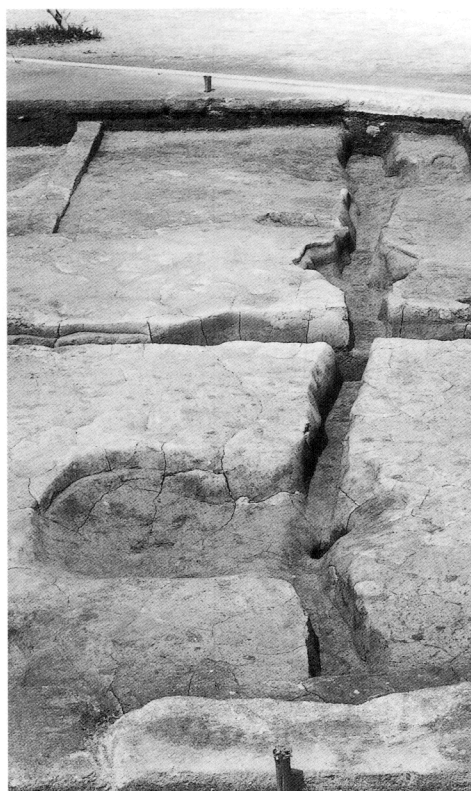
(3) B トレンチ縄文土器検出状況（北から）



(4) B トレンチ河川土層断面（北西から）

吉田構内グランド屋外照明施設新設に伴う発掘調査 一〇

(2) Bトレンチ第1号溝完掘状況(南西から)



(4) Bトレンチ第1号溝土器出土状況(南西から)



(1) Bトレンチ第1号溝検出状況(南西から)



(3) Bトレンチ第1号溝完掘状況(北東から)





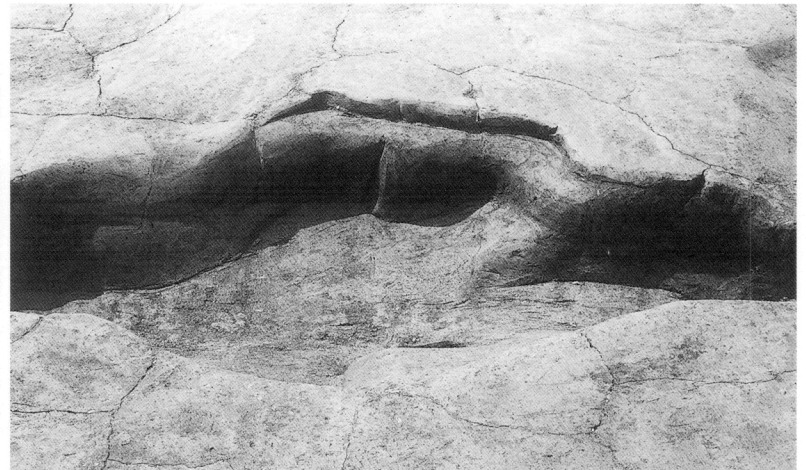
(1) Bトレンチ第3号土坑土層断面(南東から)



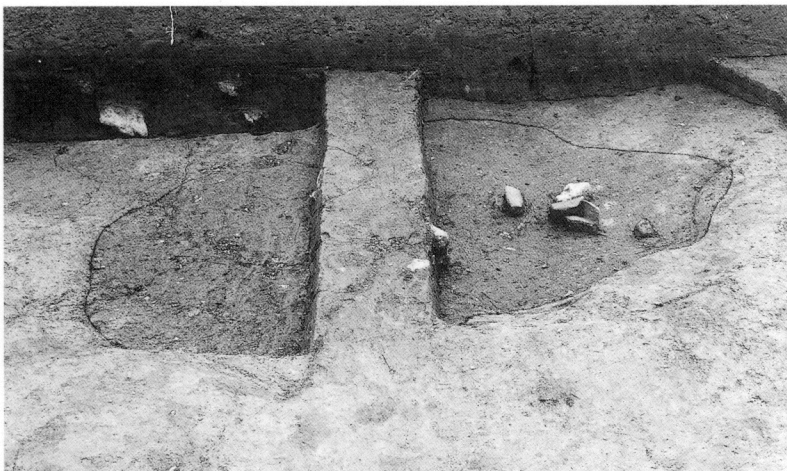
(2) Bトレンチ第3号土坑完掘状況(南東から)



(3) Bトレンチ第4号土坑土器出土状況(南東から)



(4) Bトレンチ第4号土坑完掘状況(南東から)



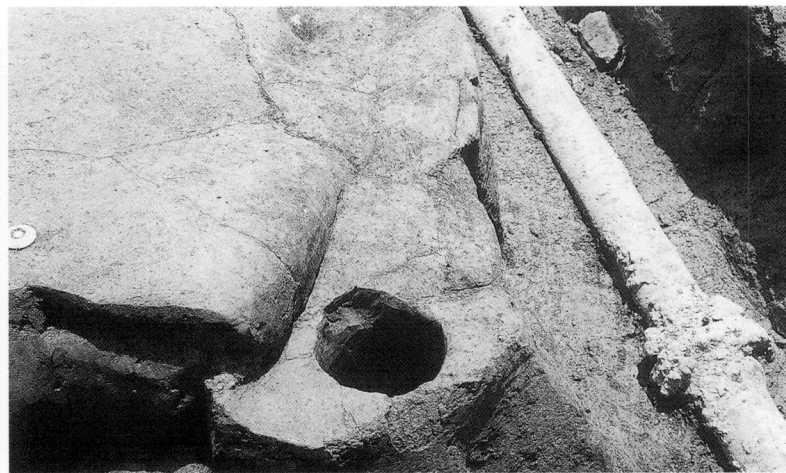
(1) Bトレンチ第1号土坑検出状況(北東から)



(2) Bトレンチ第1号土坑完掘状況(北東から)



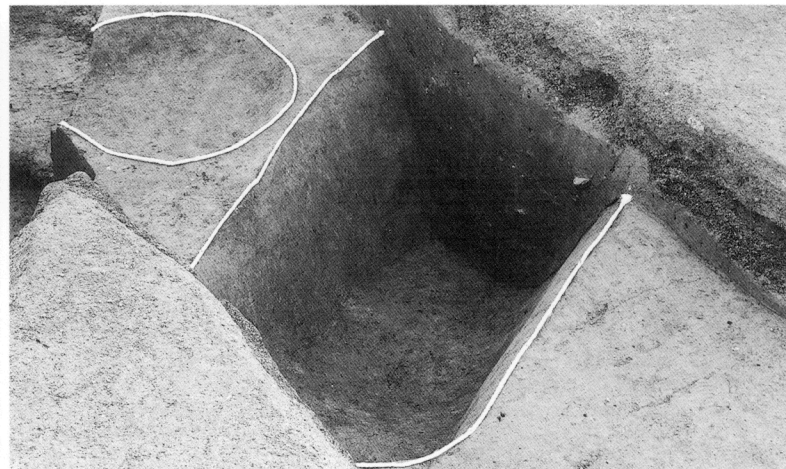
(3) Bトレンチ第2号土坑検出状況(北西から)



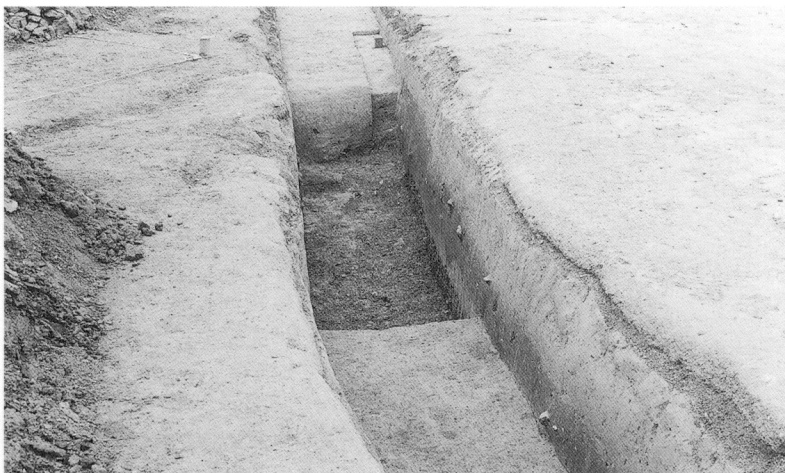
(4) Bトレンチ第2号土坑完掘状況(北西から)



(1) Bトレンチ第5号土坑完掘状況(北東から)



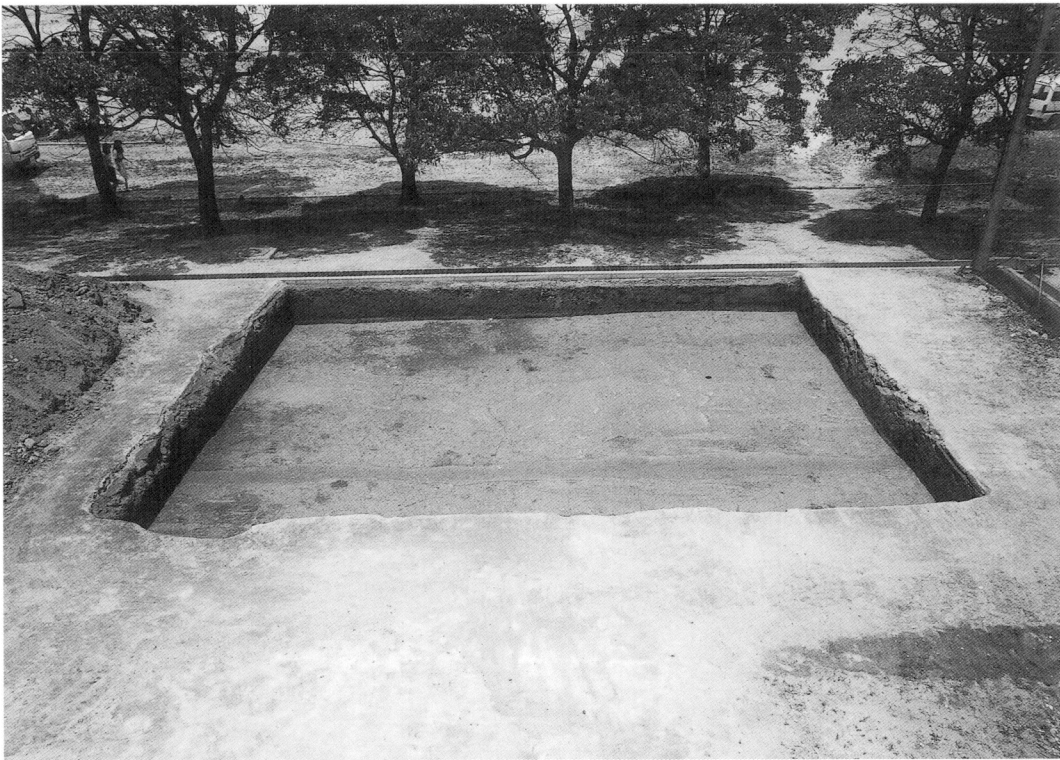
(2) 配線トレンチ第2号溝完掘状況(北西から)



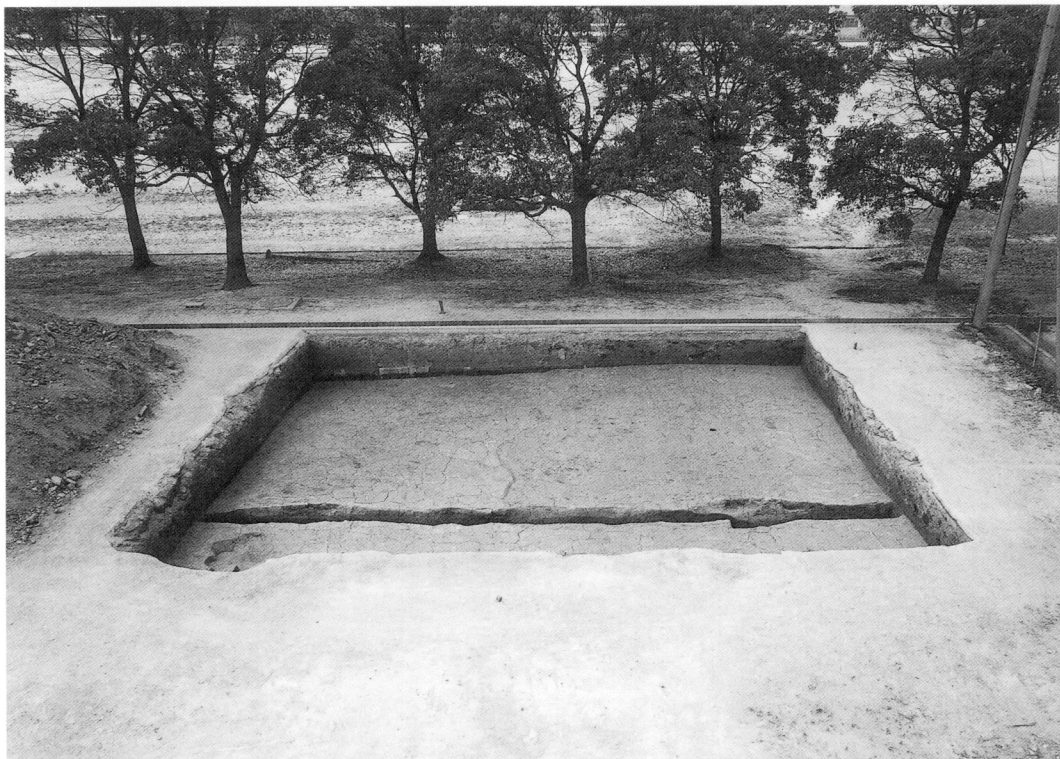
(3) 配線トレンチ落ち込み1完掘状況(南西から)



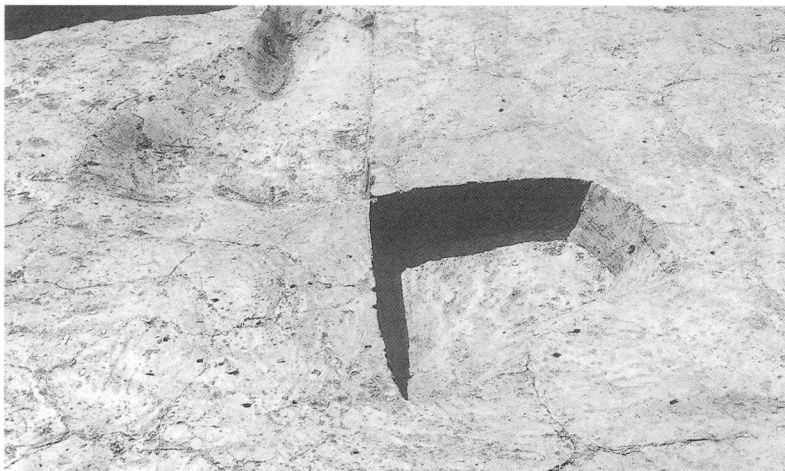
(4) Bトレンチ落ち込み1完掘状況(北西から)



(1) C トレンチ遺構検出状況（南東から）



(2) C トレンチ遺構完掘状況（南東から）



(1) Cトレンチ第1号土坑土層断面(北西から)



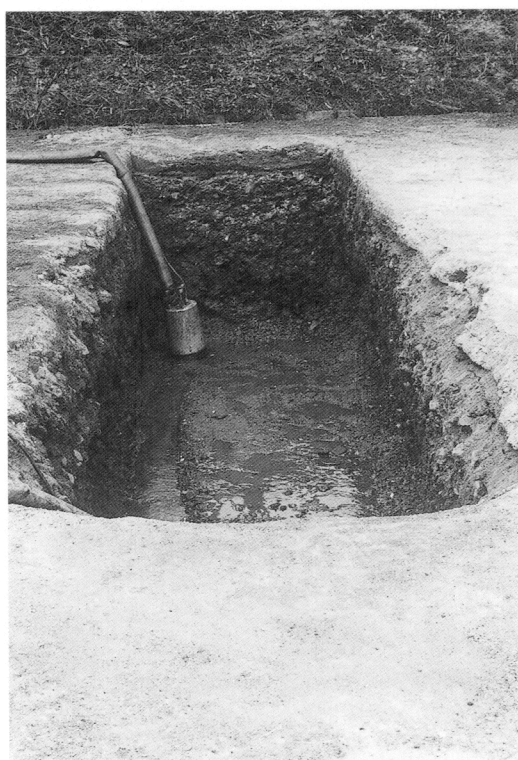
(2) Cトレンチ第1号土坑完掘状況(北西から)



(3) Cトレンチ落ち込み状遺構完掘状況(北東から)



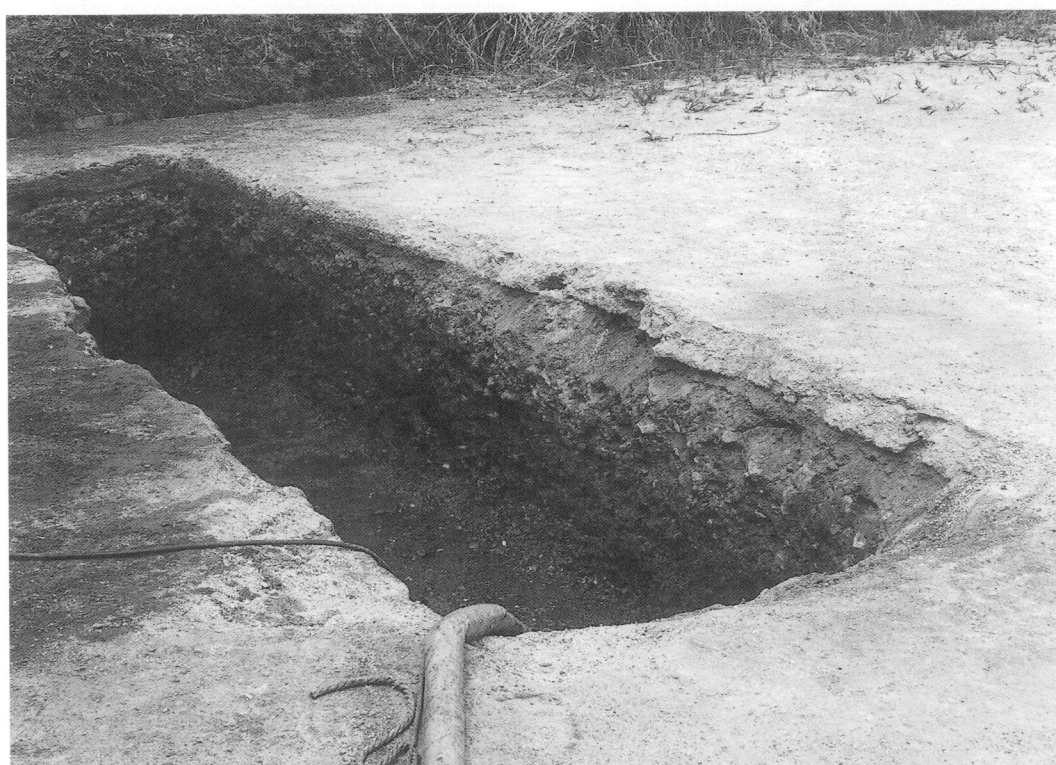
(4) Cトレンチ北西壁土層断面(南東から)



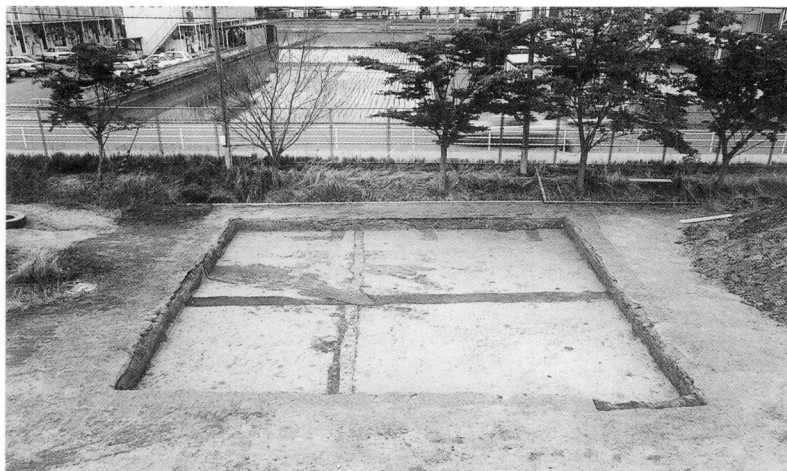
(1) D トレンチ完掘状況（北東から）



(2) D トレンチ完掘状況（南西から）



(3) D トレンチ北西壁土層断面（東から）



(1) E トレンチ全景 (北東から)



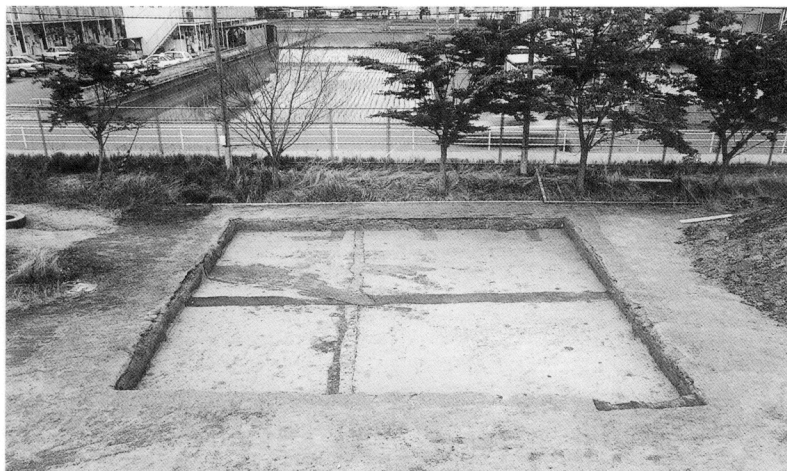
(2) E トレンチ全景 (北西から)



(3) E トレンチ南西壁土層断面 (東から)



(4) E トレンチ北東壁土層断面 (西から)



(1) E トレンチ全景 (北東から)



(2) E トレンチ全景 (北西から)



(3) E トレンチ南西壁土層断面 (東から)



(4) E トレンチ北東壁土層断面 (西から)



(1) F トレンチ遺構完掘状況（北東から）



(2) F トレンチ遺構完掘状況（南東から）



(1) F トレンチ縄文土器出土状況 (西から)



(2) F トレンチ縄文土器出土状況 (北西から)



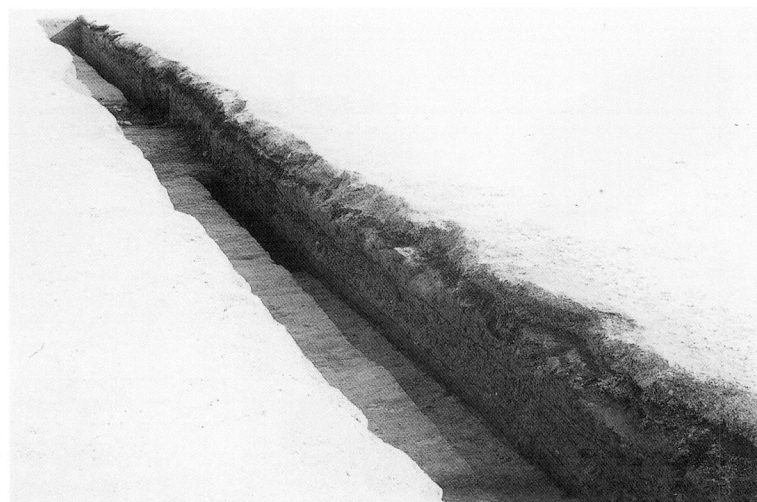
(3) F トレンチ北東壁土層断面 (西から)



(4) F トレンチ南西壁土層断面 (北から)



(1) 配線トレンチE区
遺構検出状況(北東から)



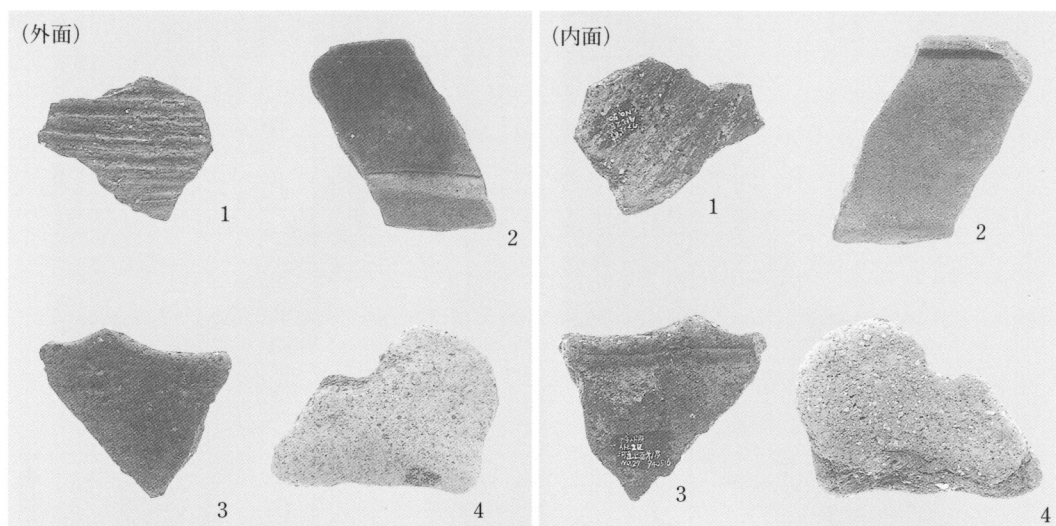
(2) 配線トレンチE区
土層断面(南西から)



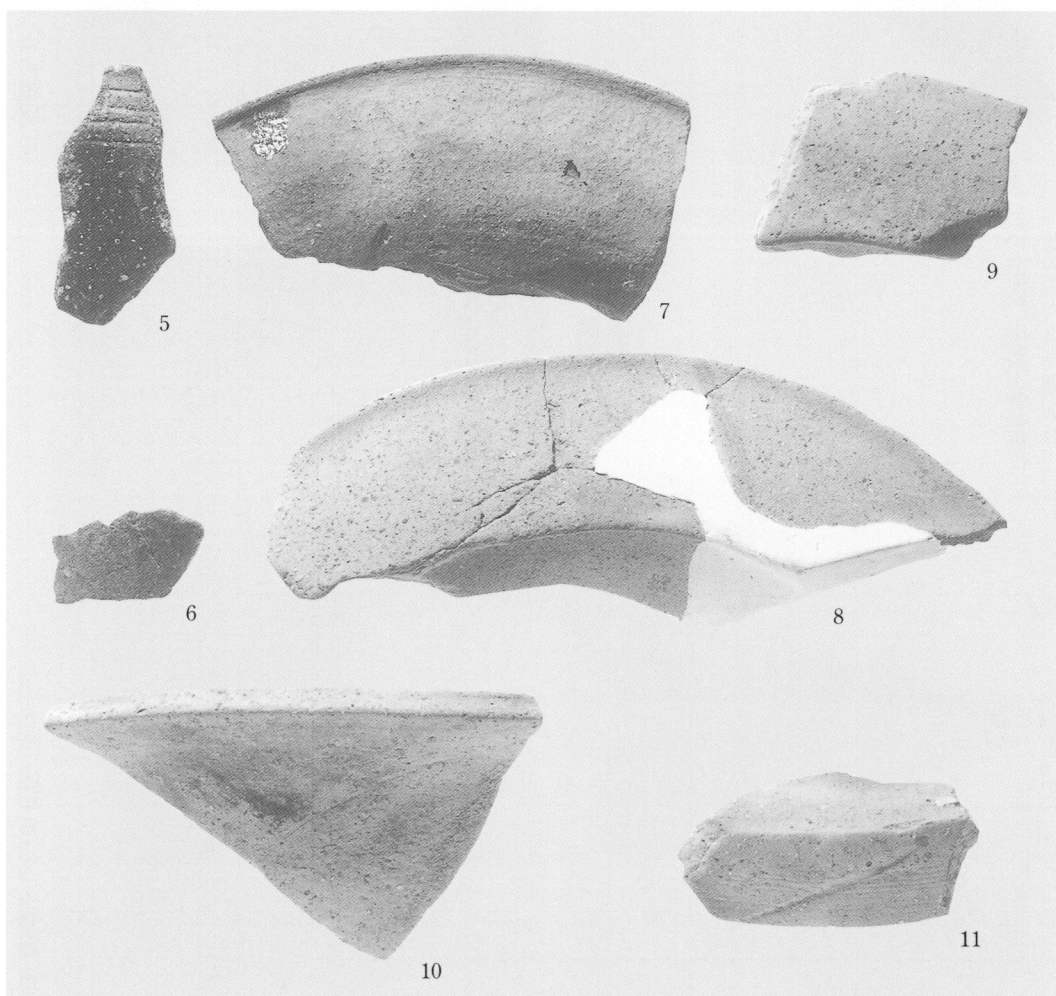
(3) 配線トレンチF区(北から)



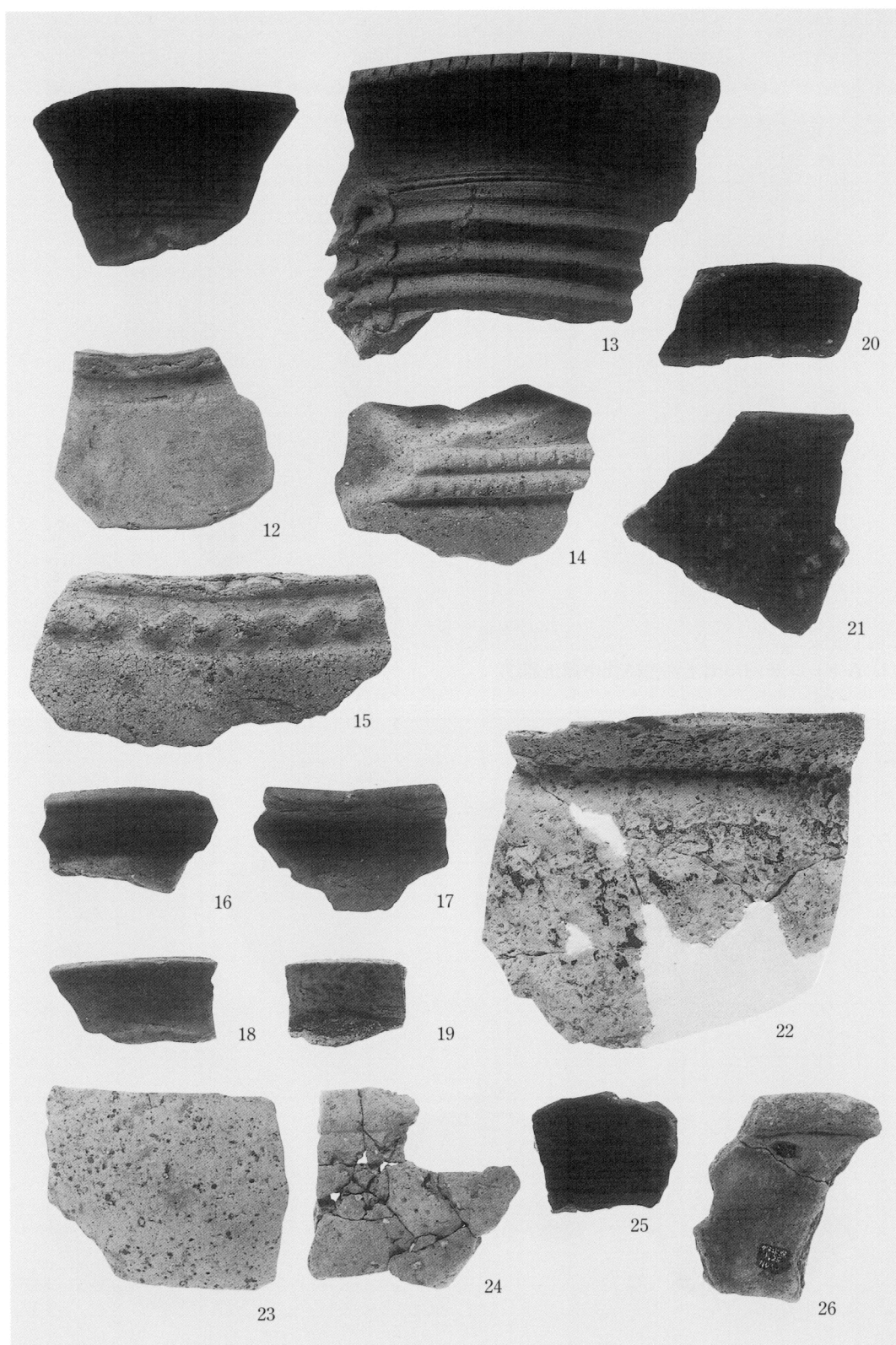
(4) 配線トレンチG区(北から)



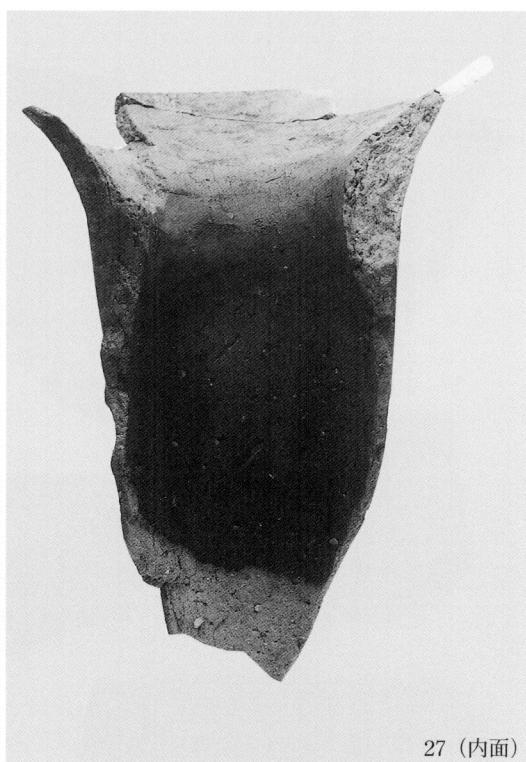
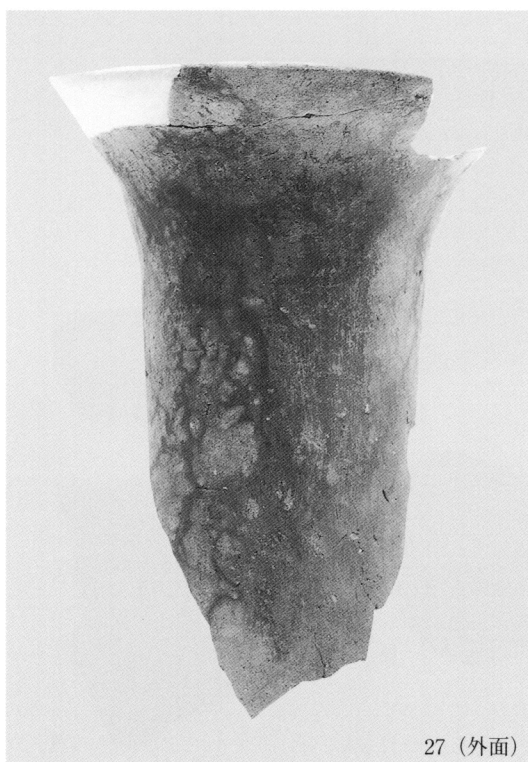
(1) A トレンチ河川出土縄文土器



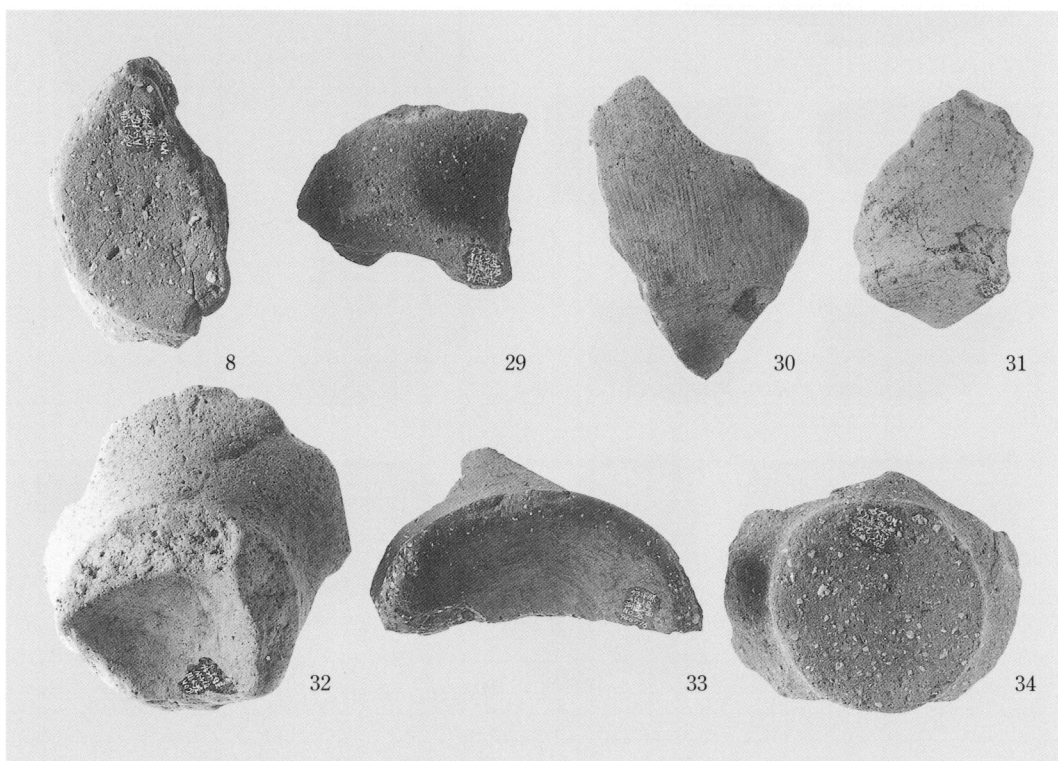
(2) A トレンチ河川出土弥生時代前期～中期土器①



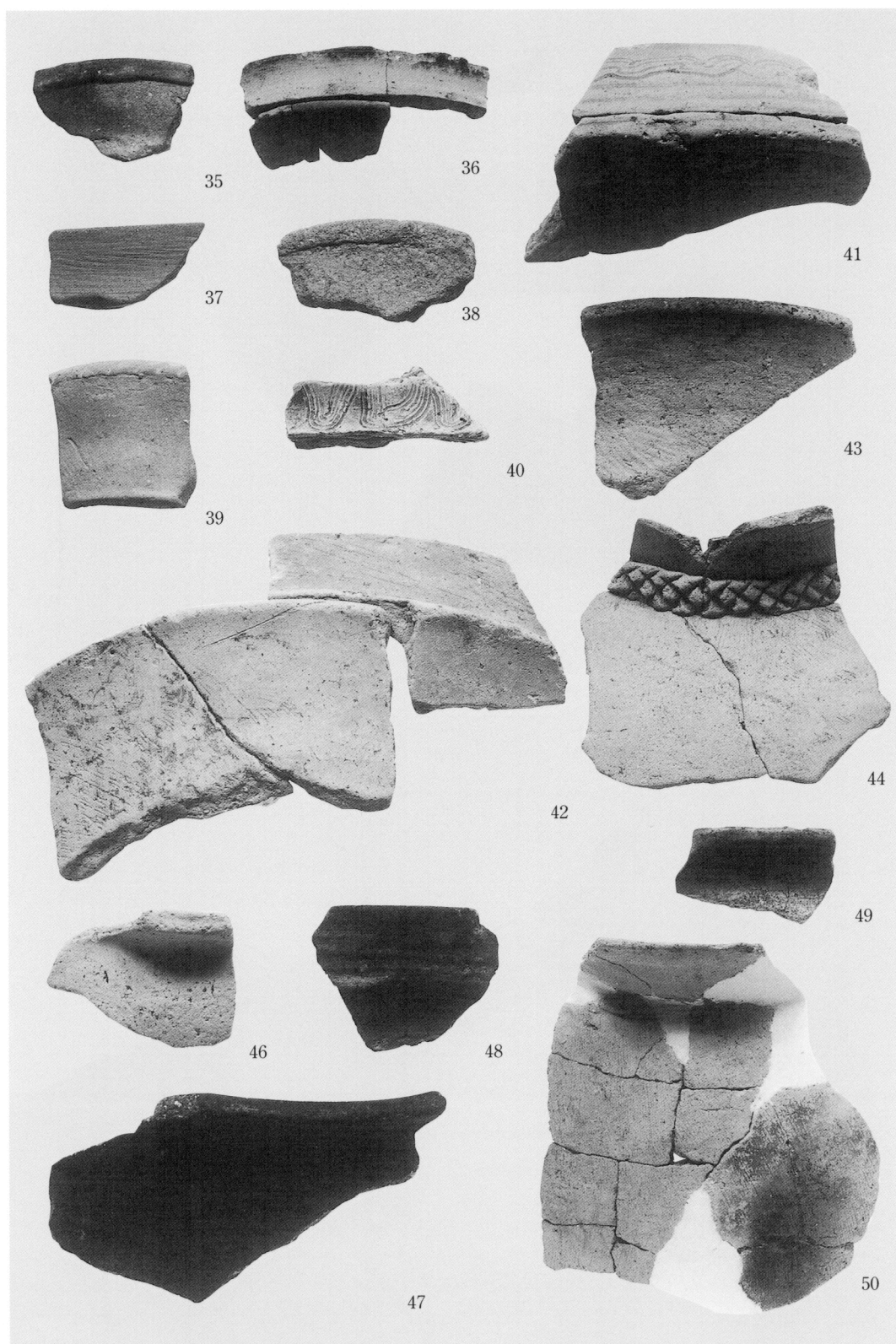
A トレンチ河川出土弥生時代中期土器②



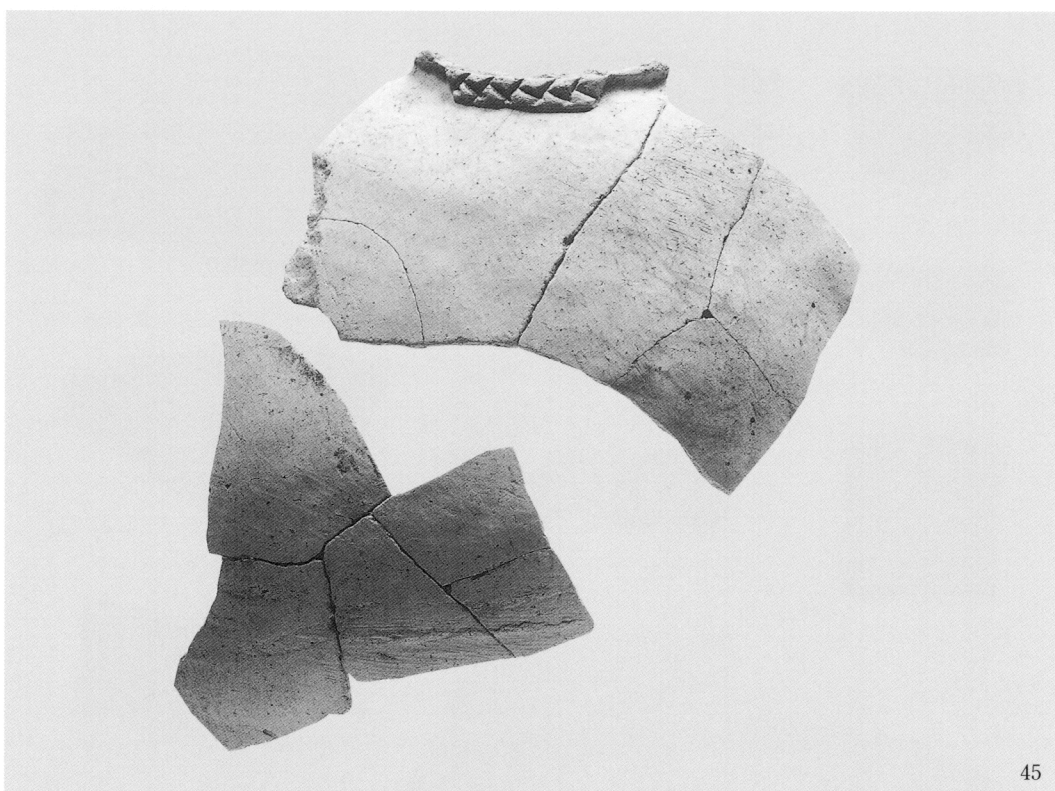
(1) A トレンチ河川出土弥生時代中期土器③



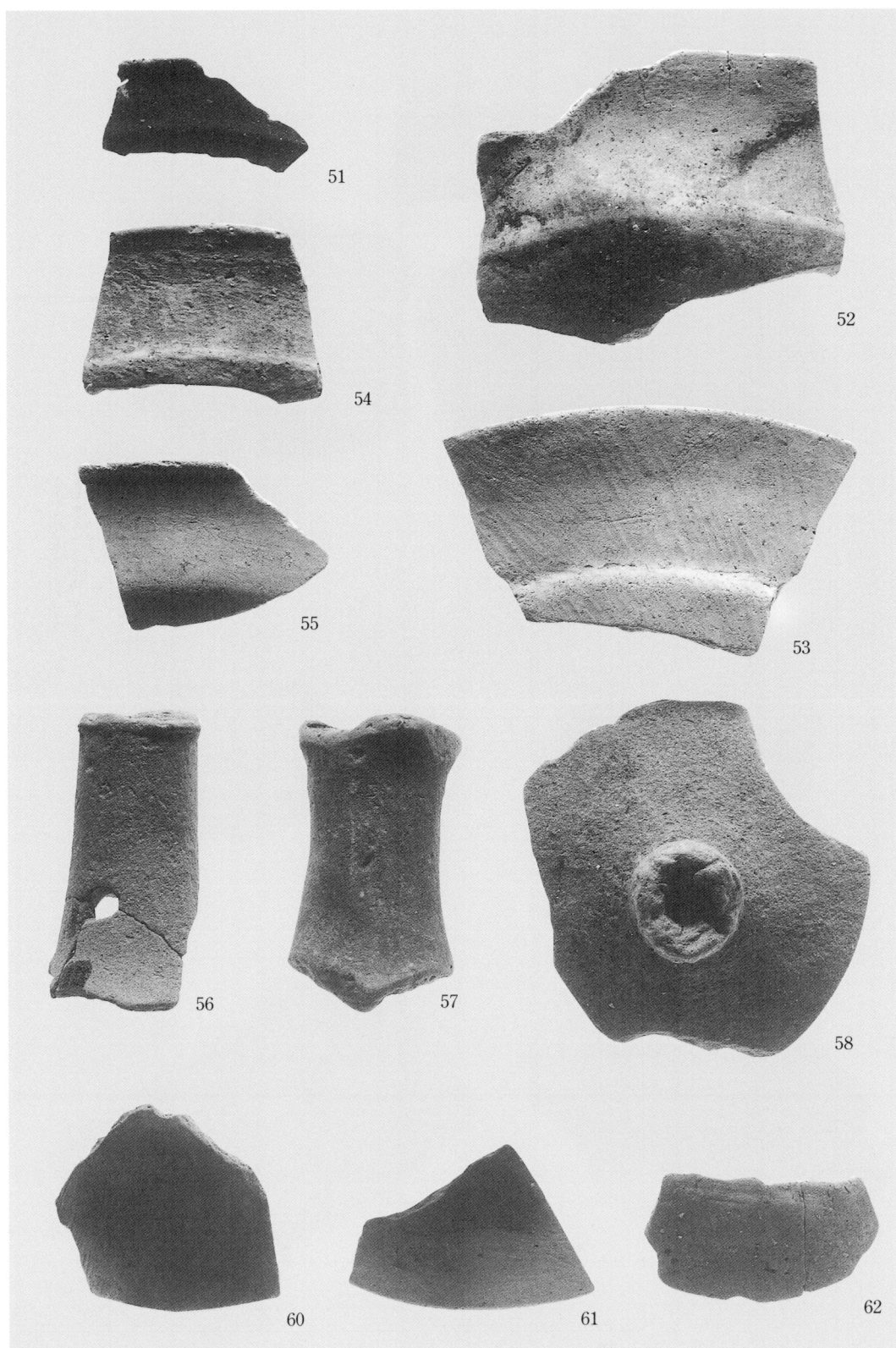
(2) A トレンチ河川出土弥生時代中期土器④



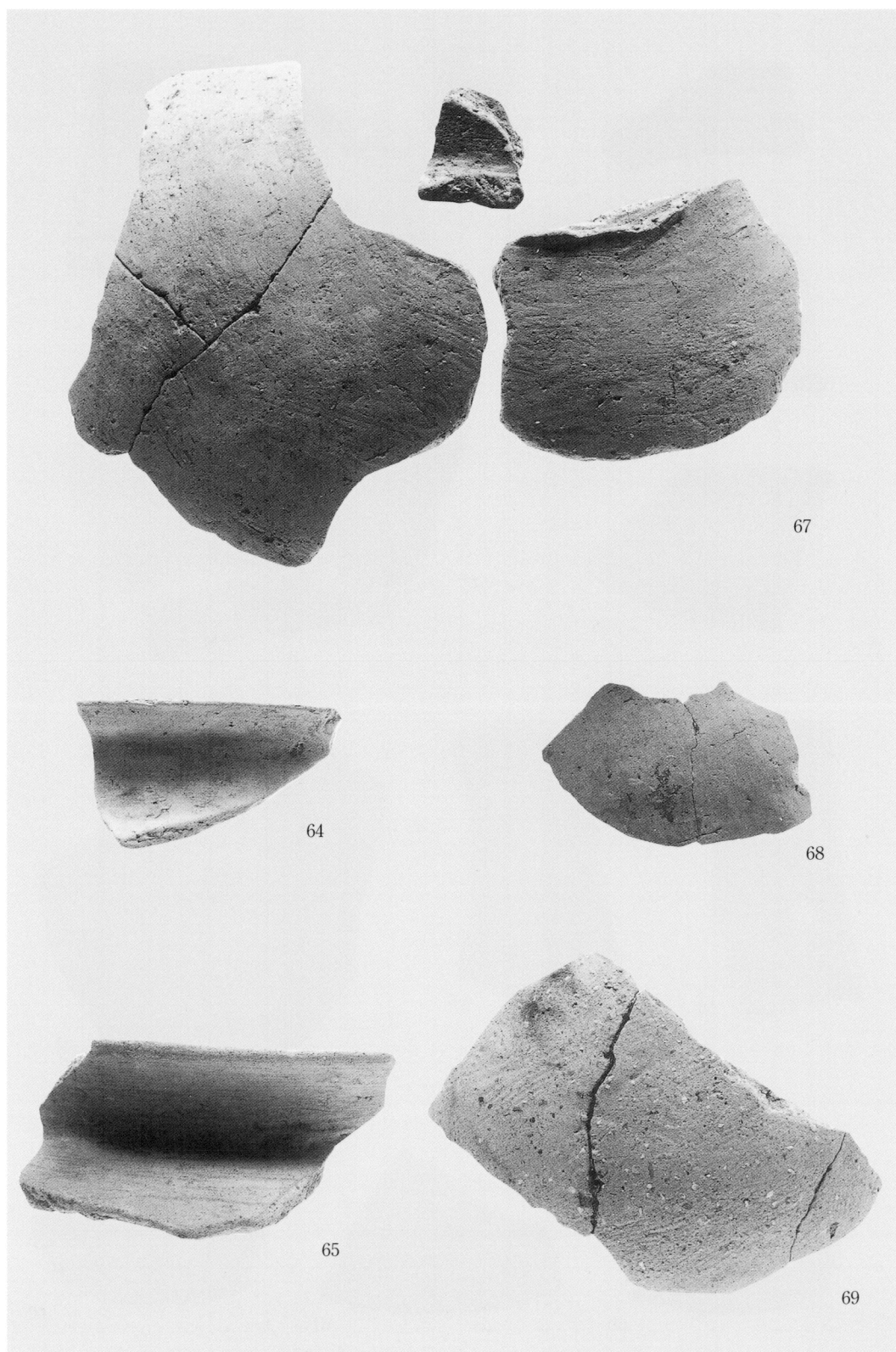
A トレンチ河川出土弥生時代後期土器①



A トレンチ河川出土弥生時代後期土器②



A トレンチ河川出土弥生時代後期土器③



A トレンチ河川出土古墳時代前期土器①



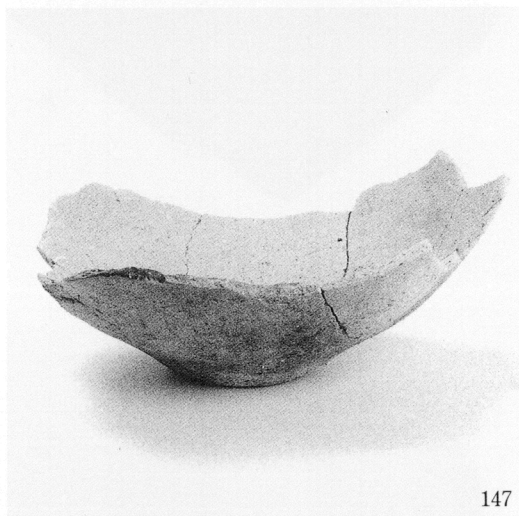
59



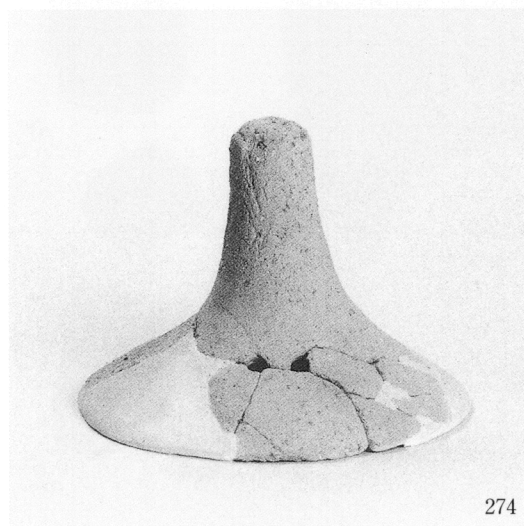
63



66



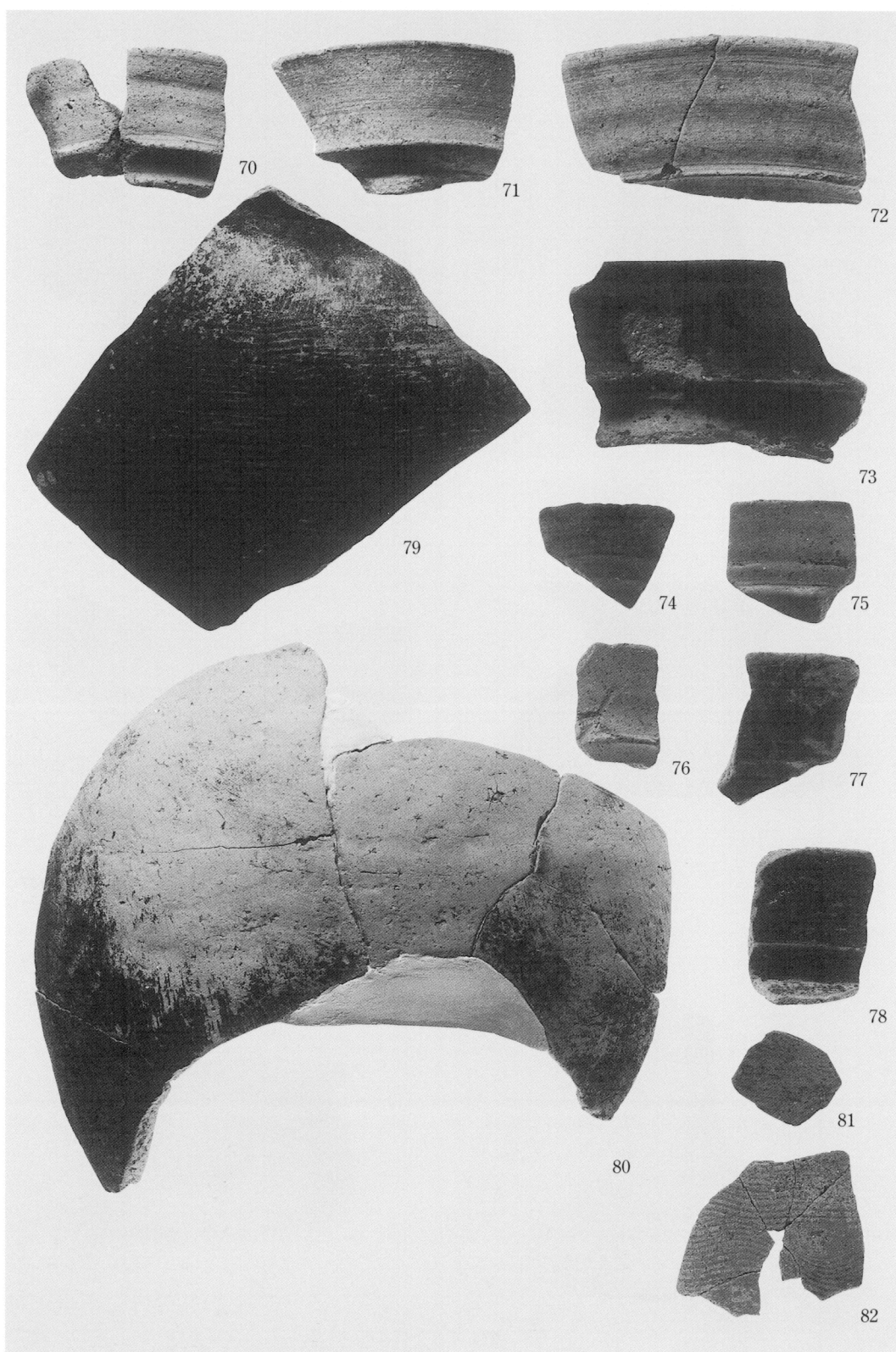
147



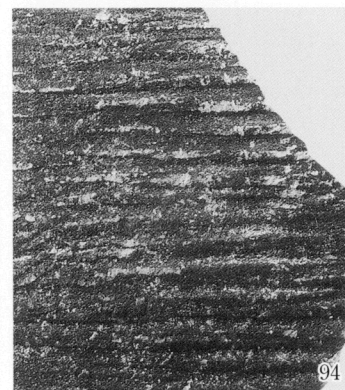
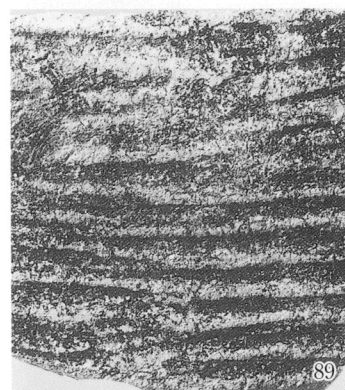
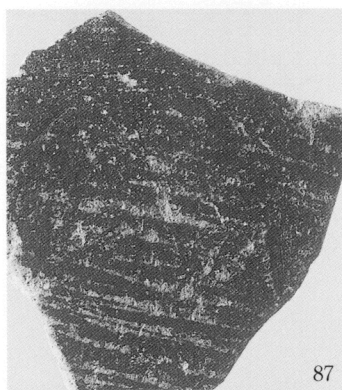
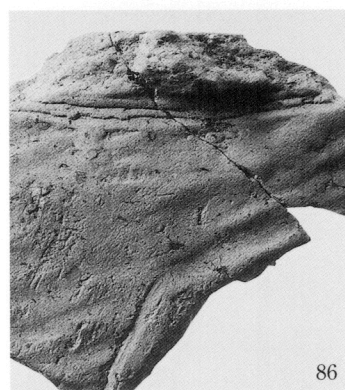
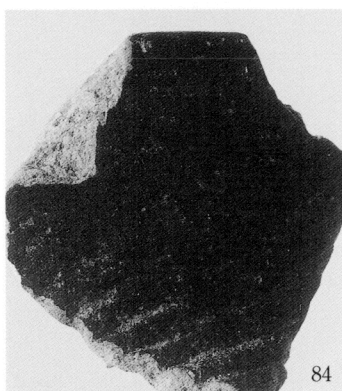
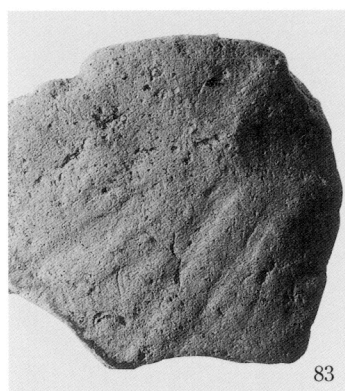
274



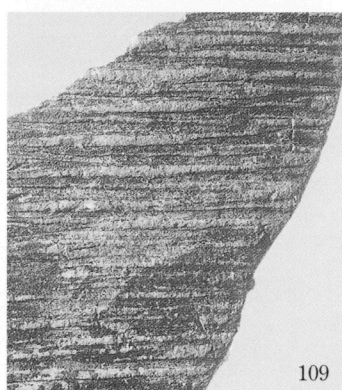
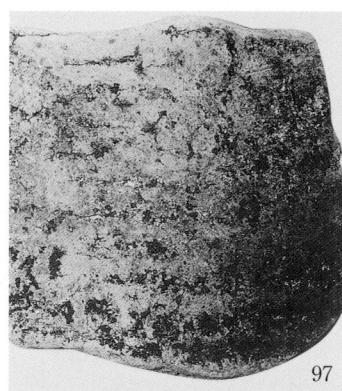
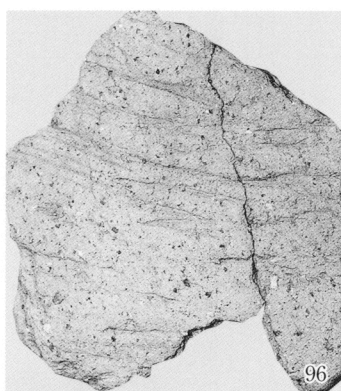
305



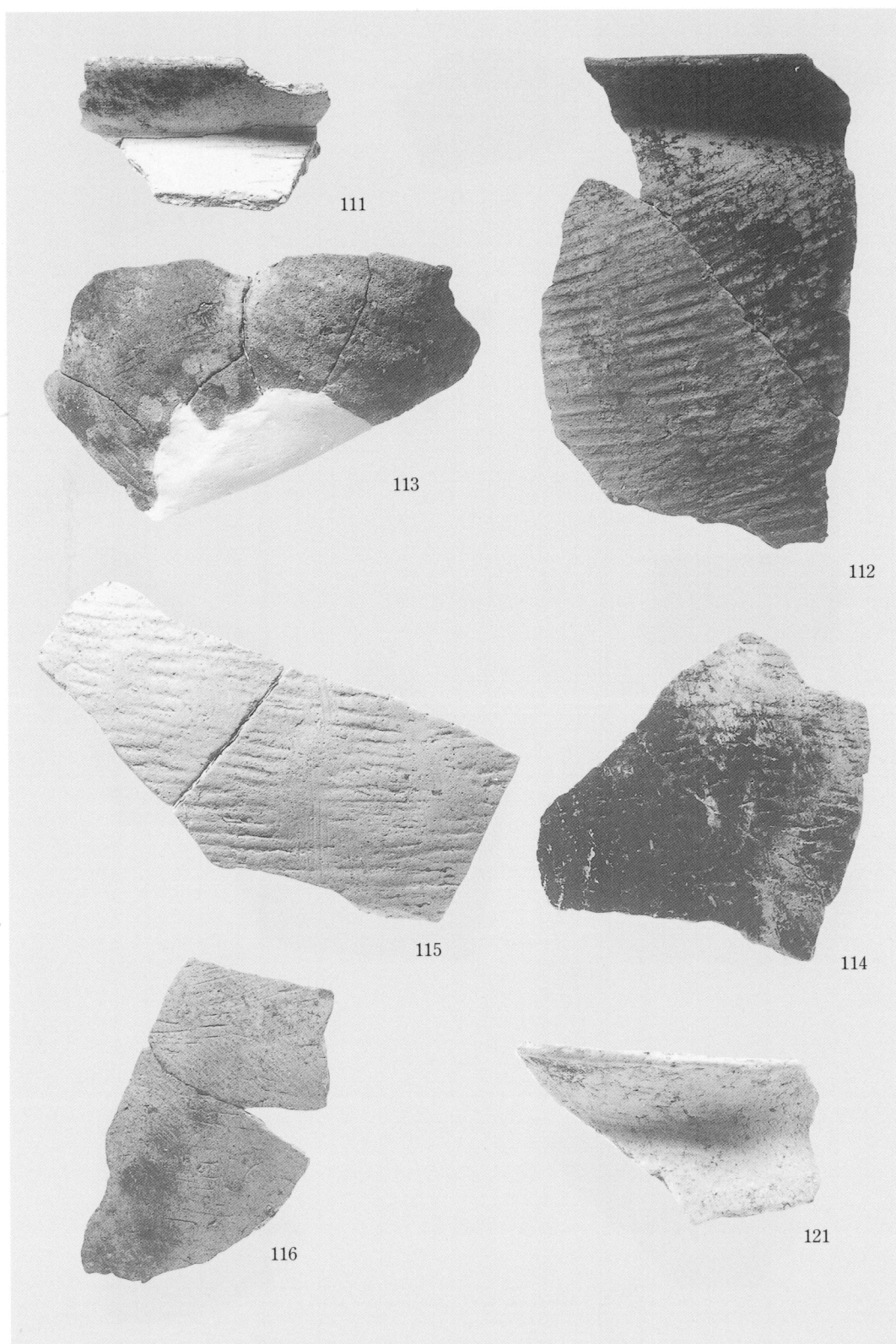
A トレンチ河川出土古墳時代前期土器②



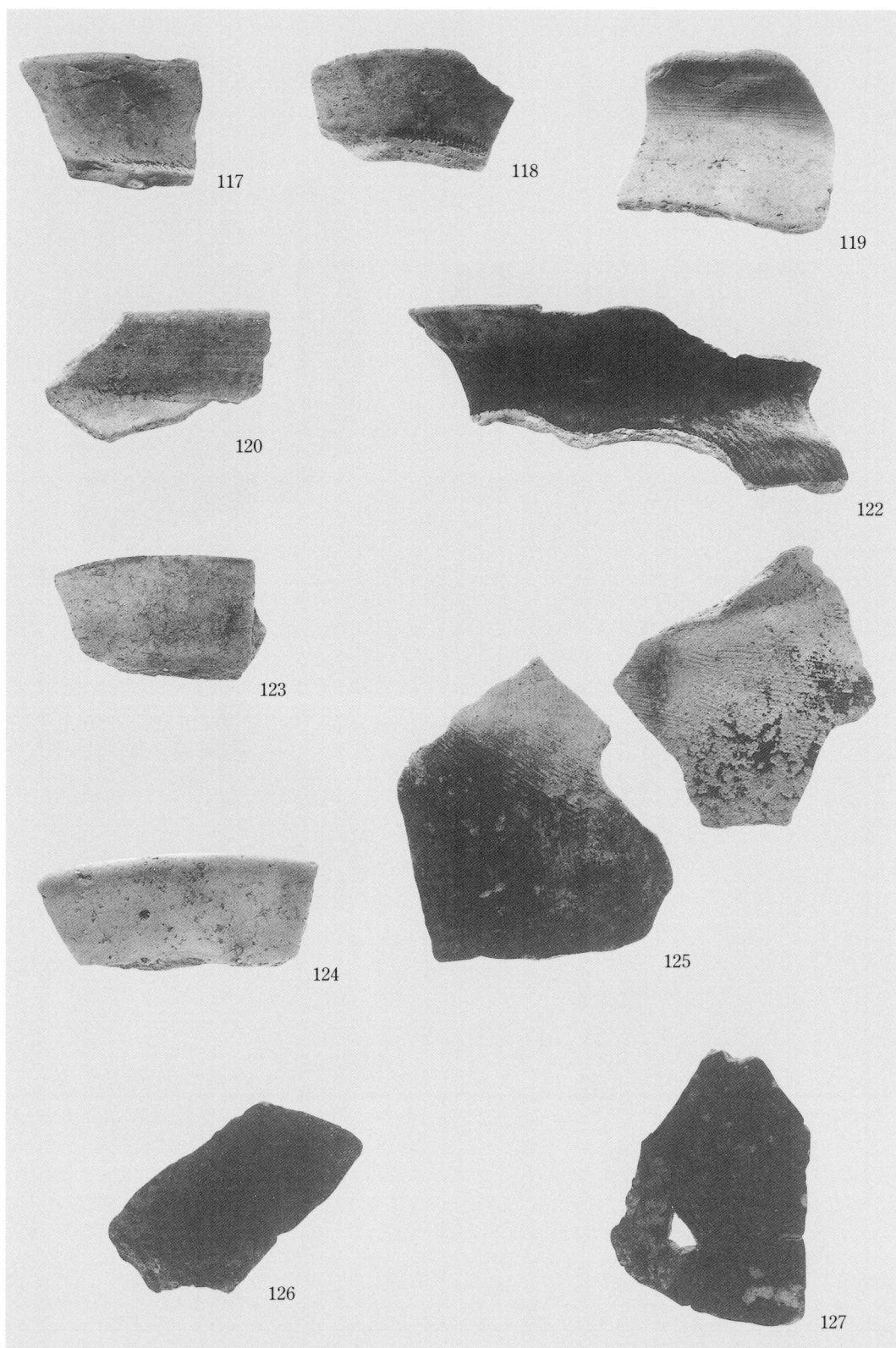
A トレンチ河川出土古墳時代前期土器③



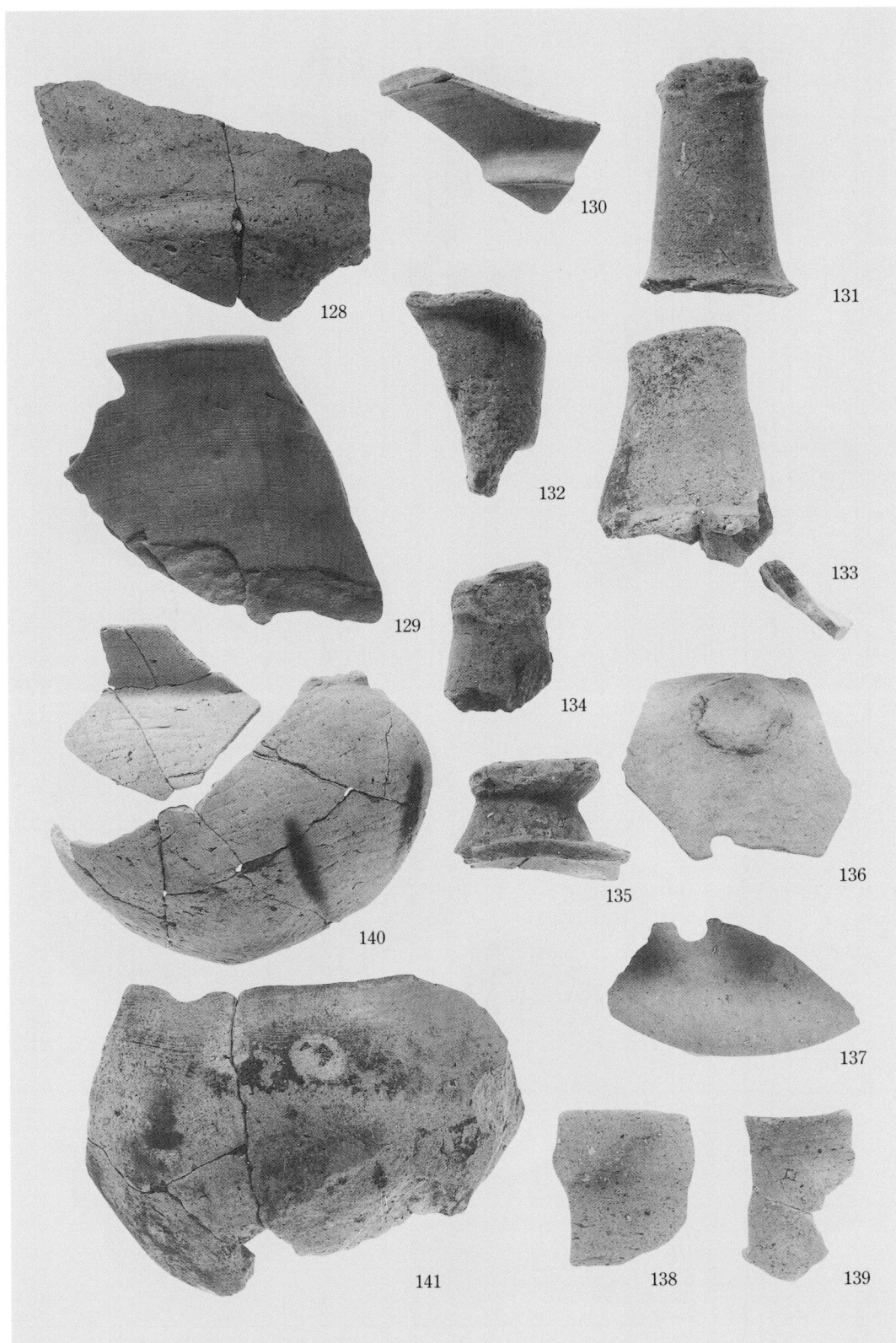
A トレンチ河川出土古墳時代前期土器④



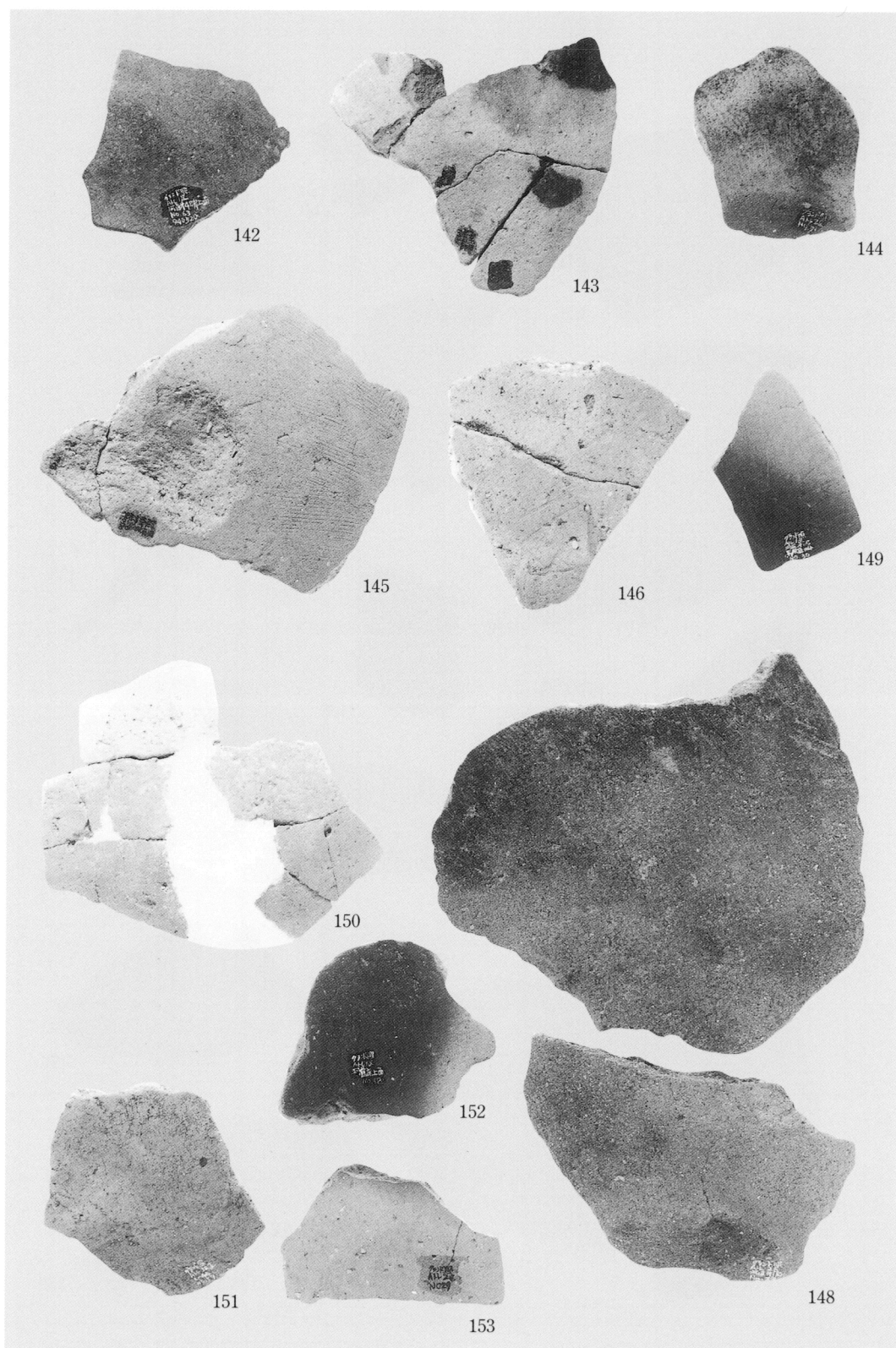
A トレンチ河川出土古墳時代前期土器⑤



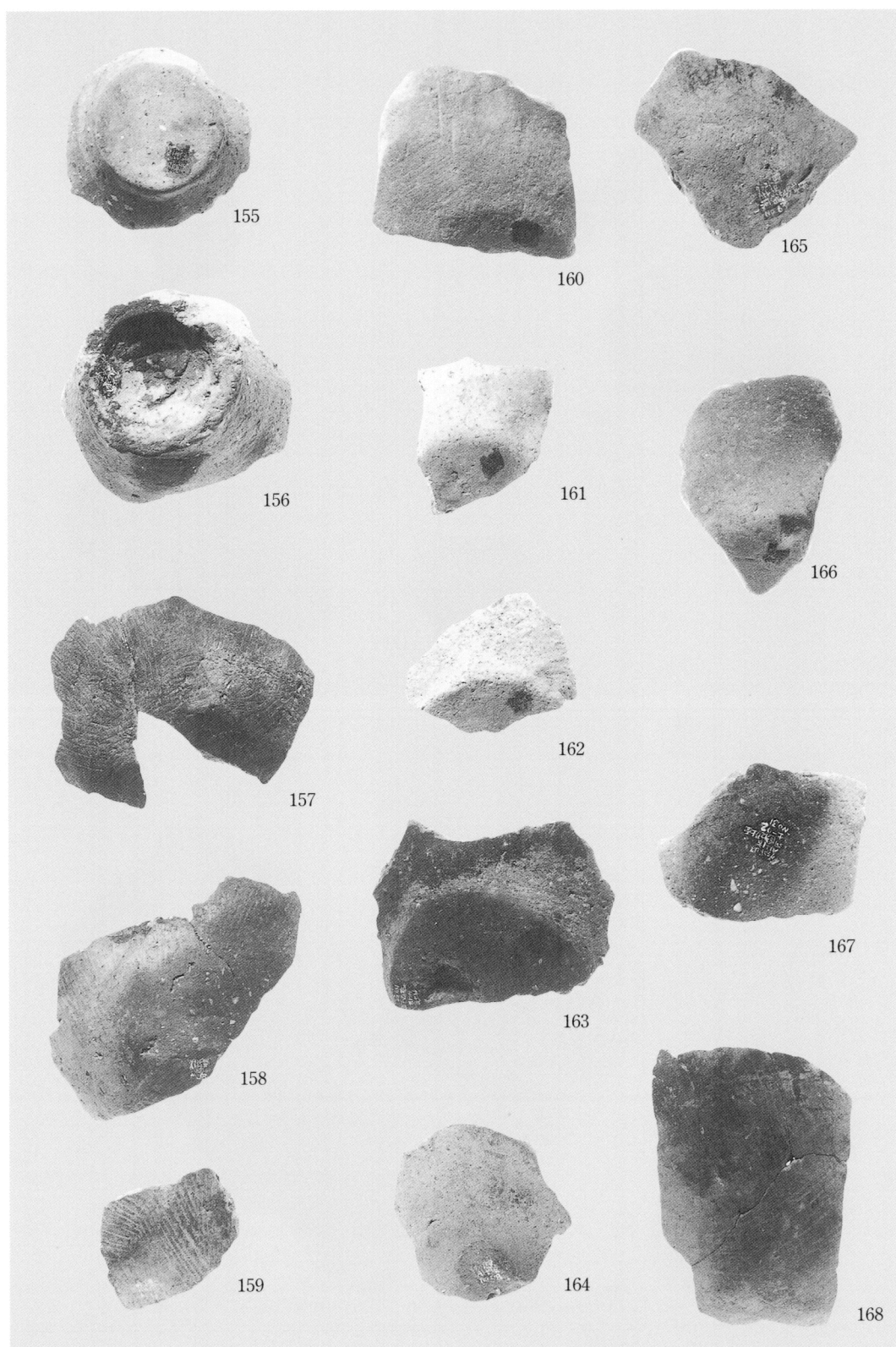
A トレンチ河川出土古墳時代前期土器⑥



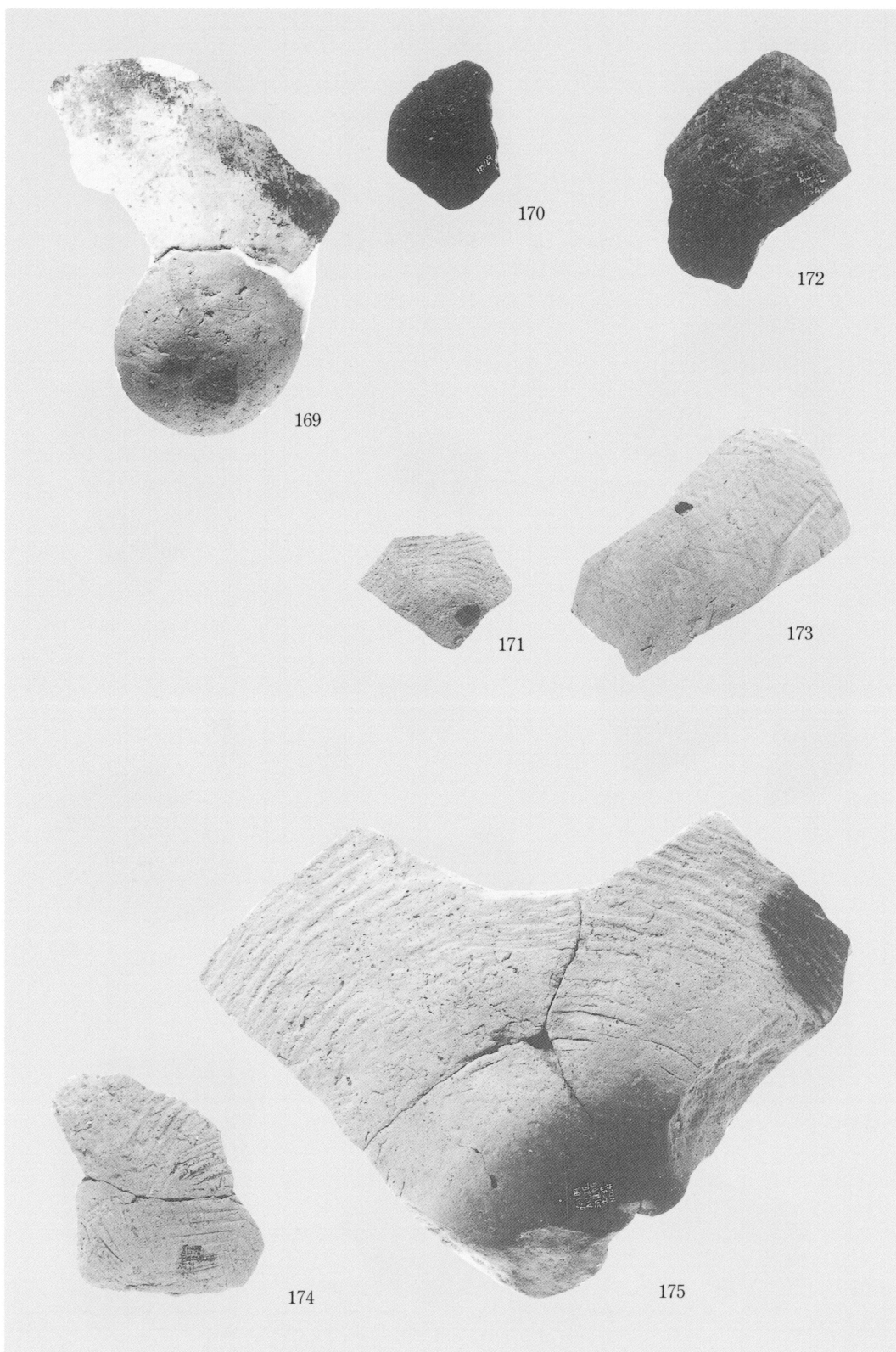
A トレンチ河川出土古墳時代前期土器⑦



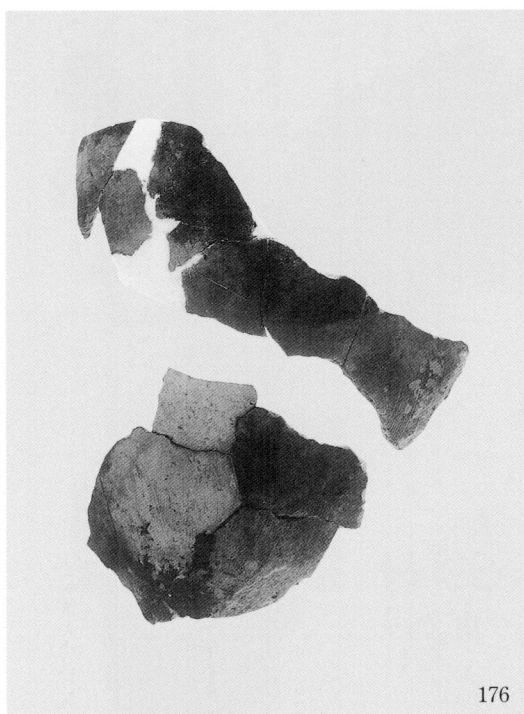
A トレンチ河川出土古墳時代前期土器⑧



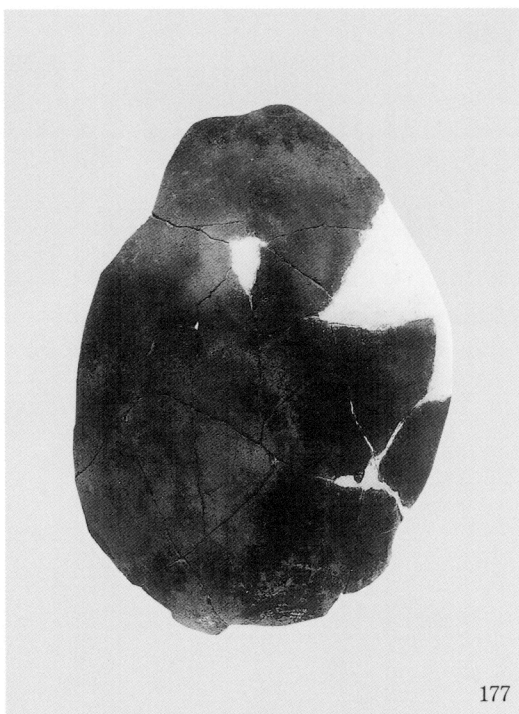
A トレンチ河川出土古墳時代前期土器⑨



A トレンチ河川出土古墳時代前期土器⑩



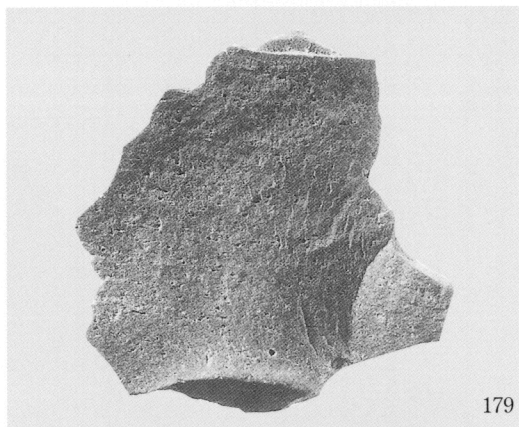
176



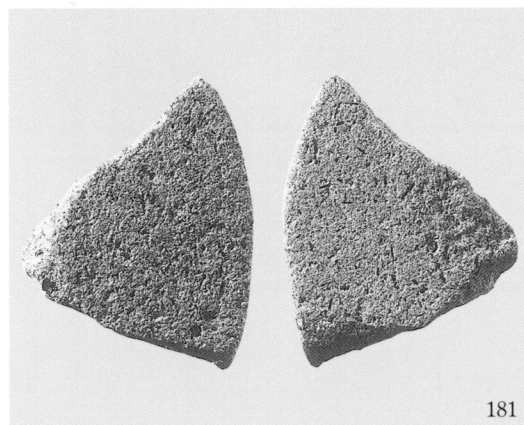
177



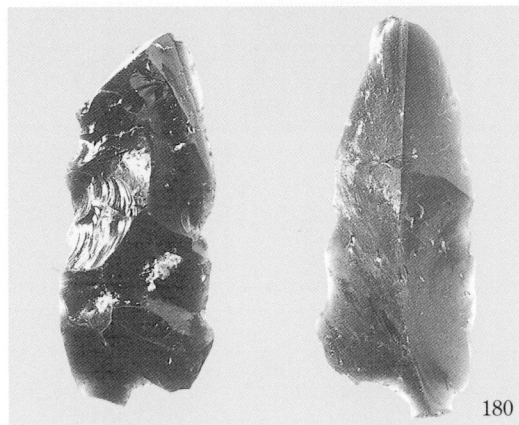
178



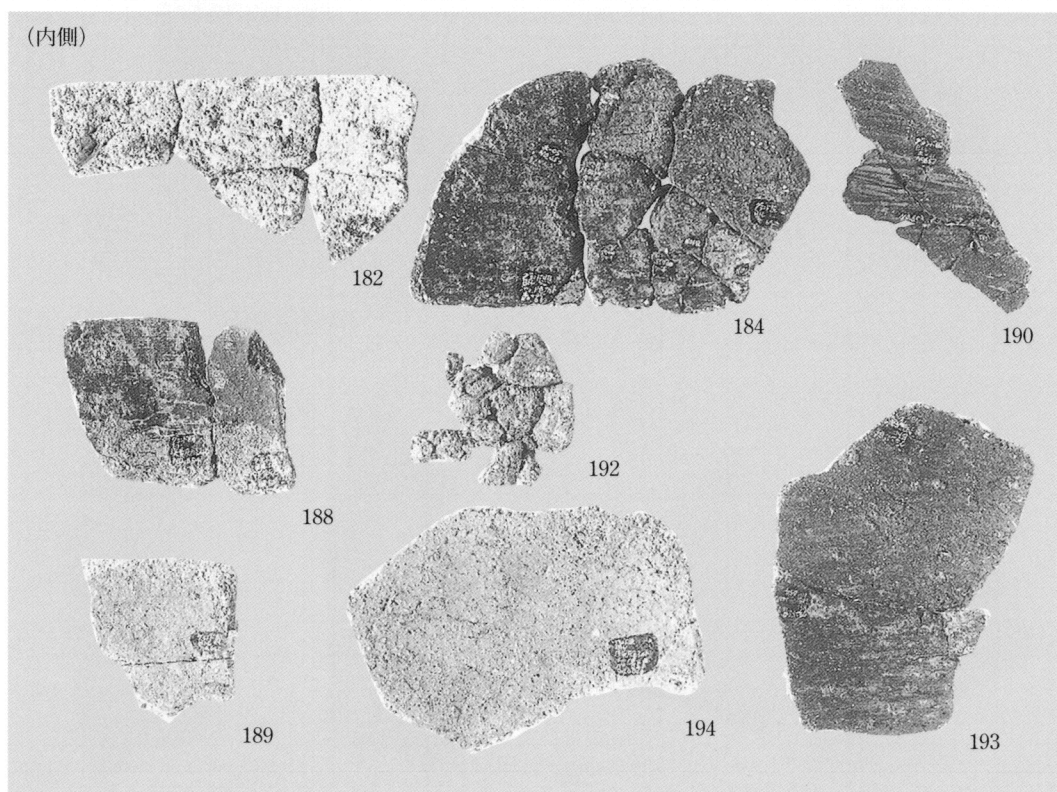
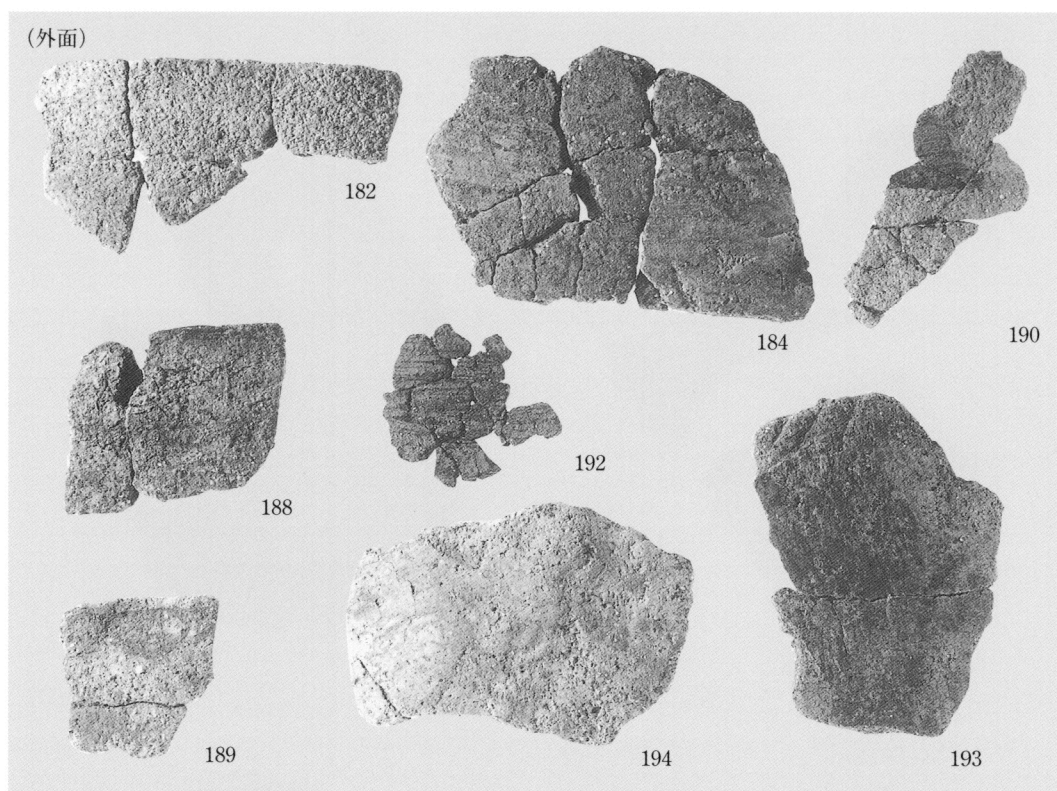
179



181



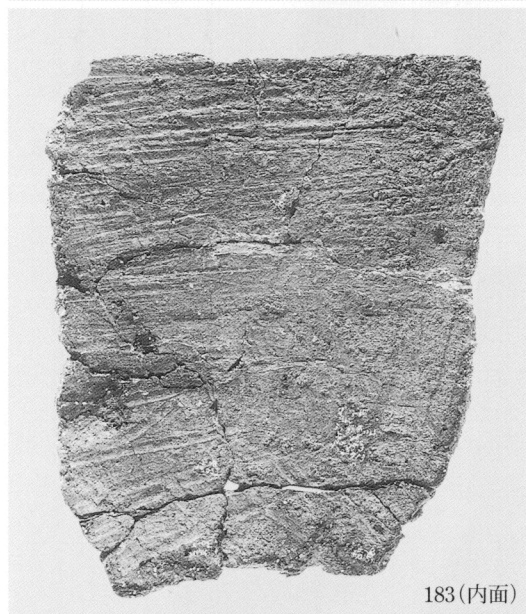
180



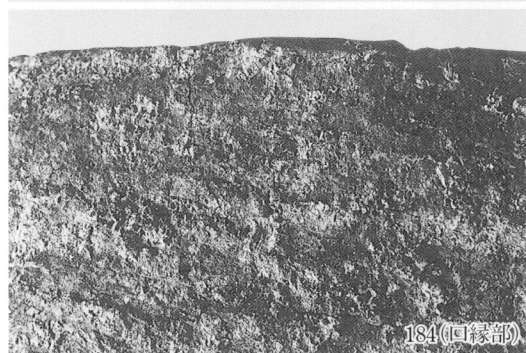
B トレンチ河川出土縄文時代晩期土器①



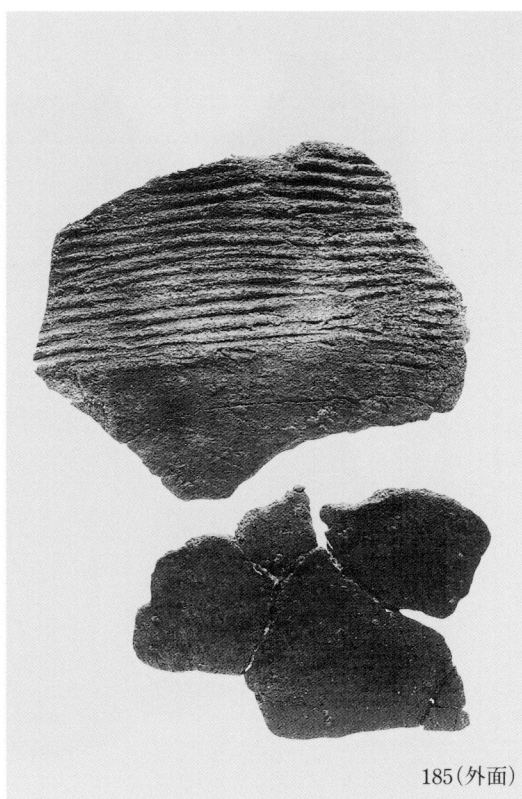
183 (外面)



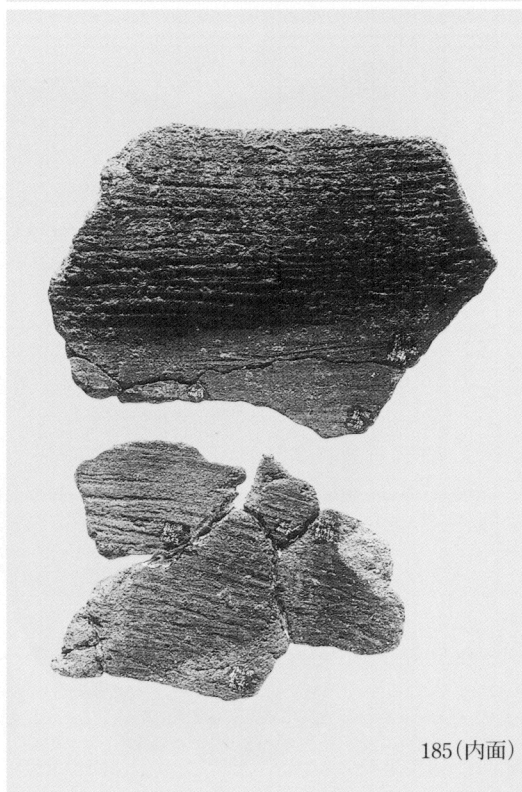
183 (内面)



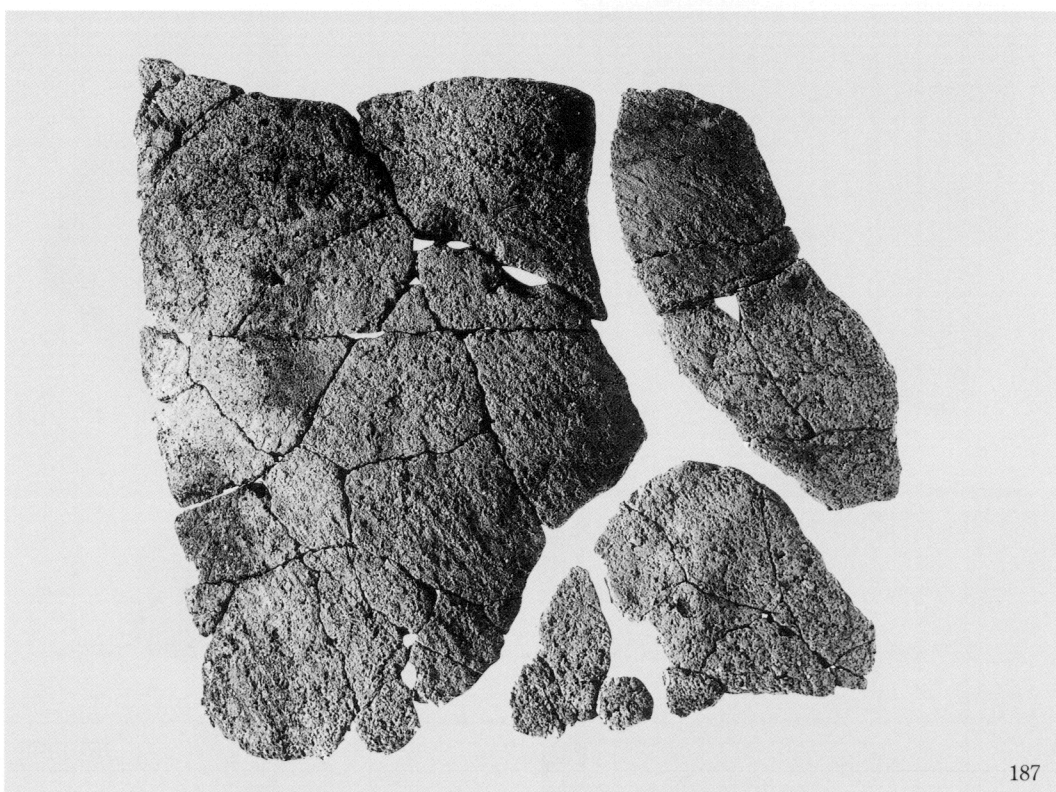
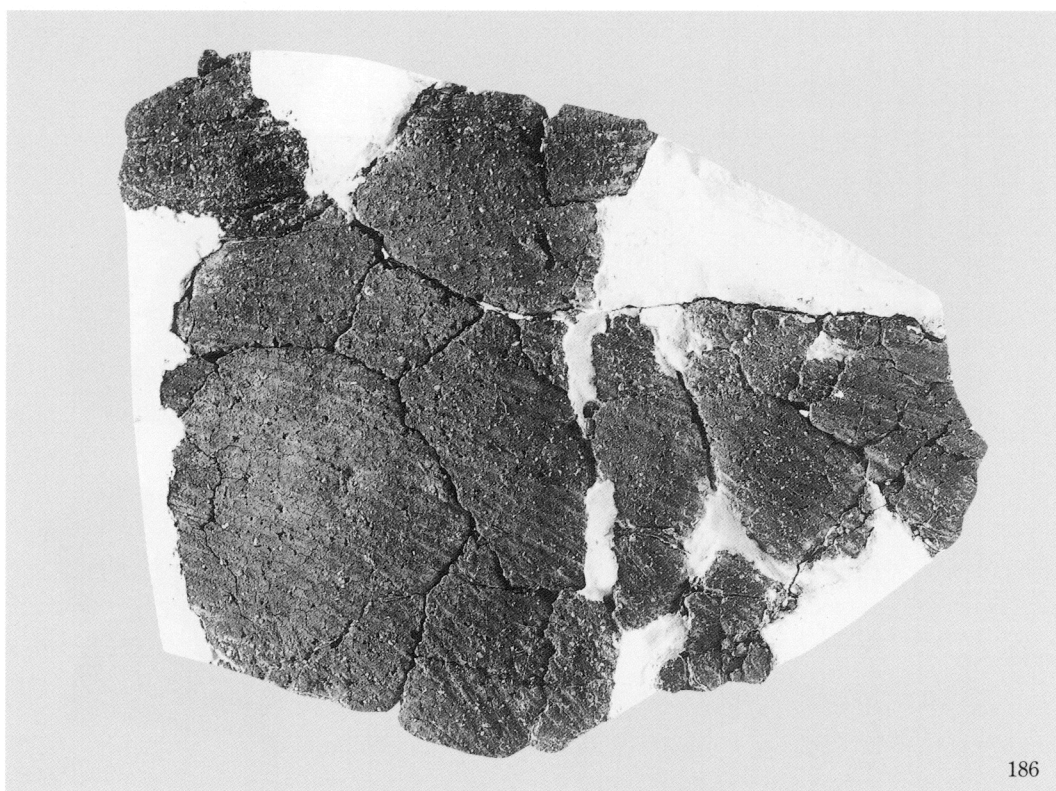
184 (口縁部)



185 (外面)

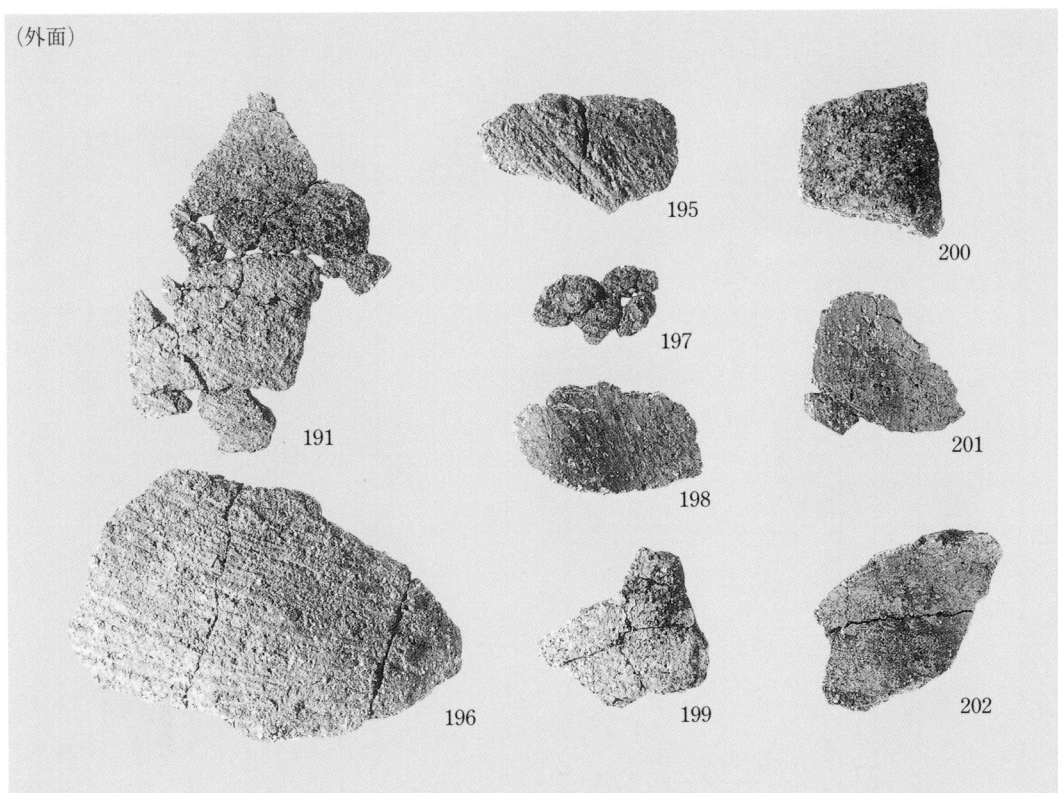


185 (内面)

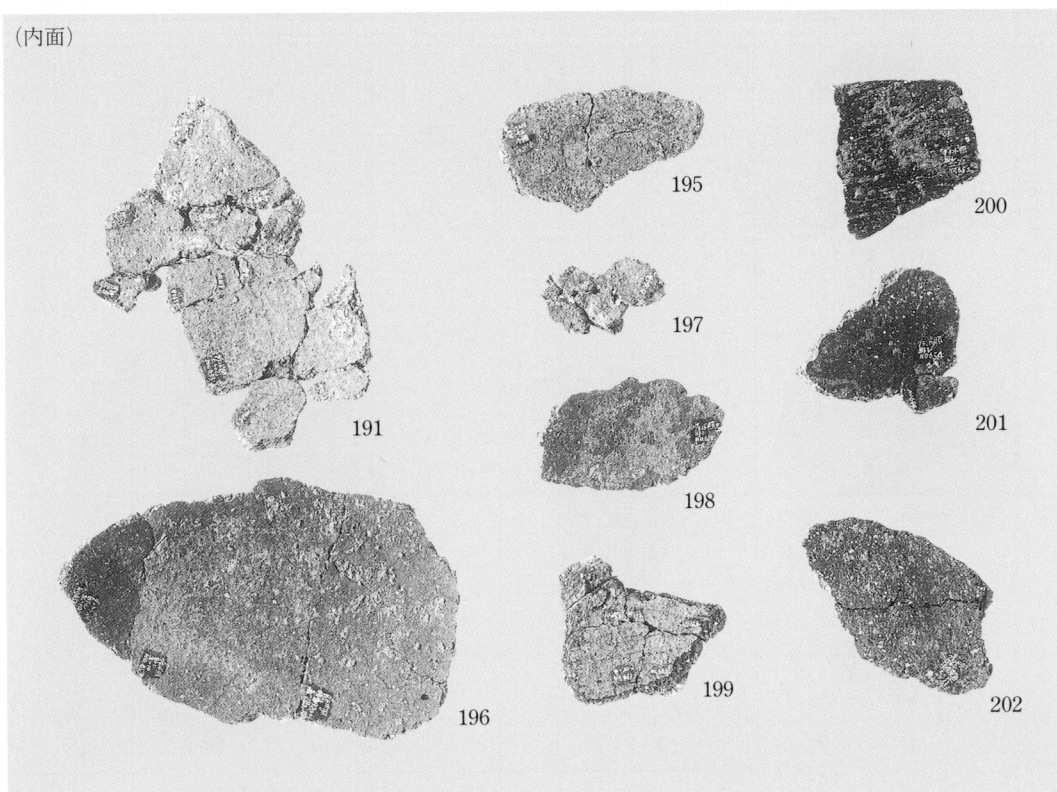


B トレンチ河川出土縄文時代晩期土器③

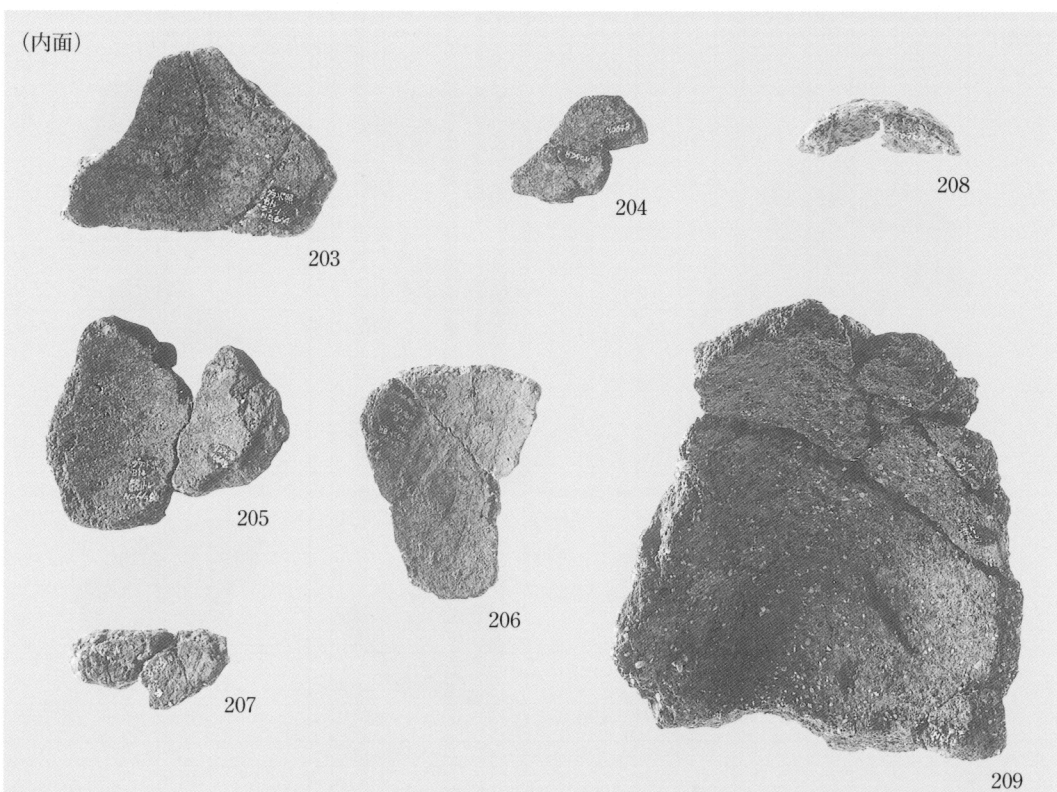
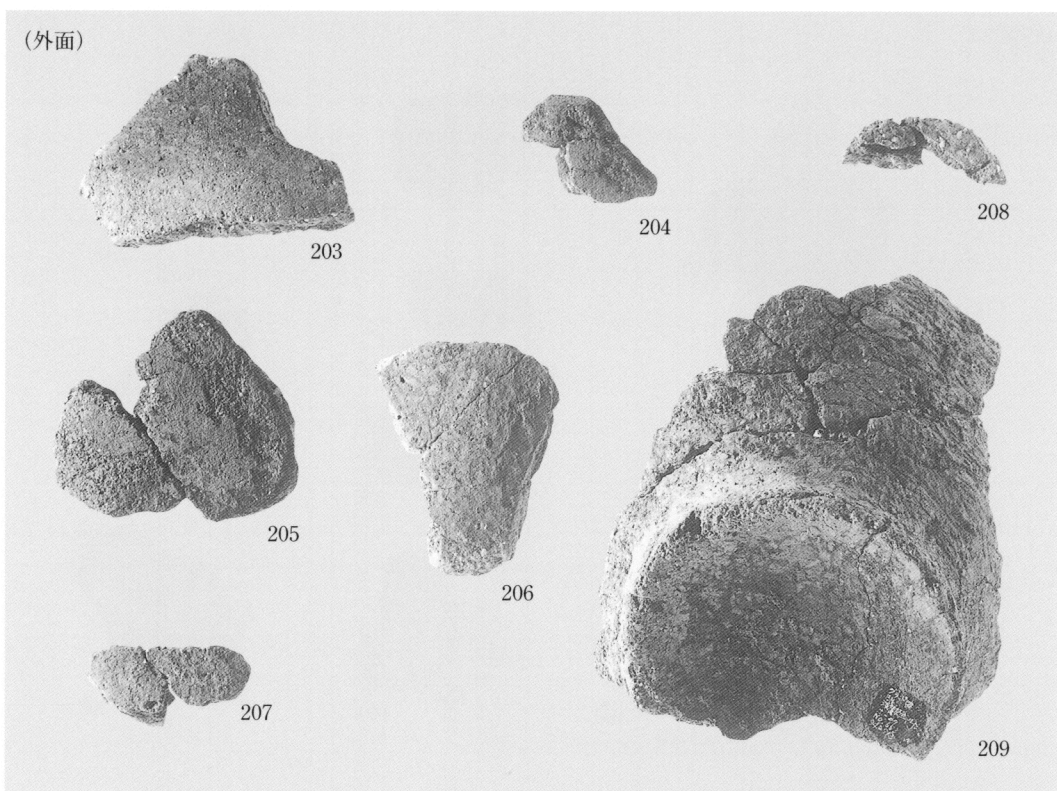
(外面)



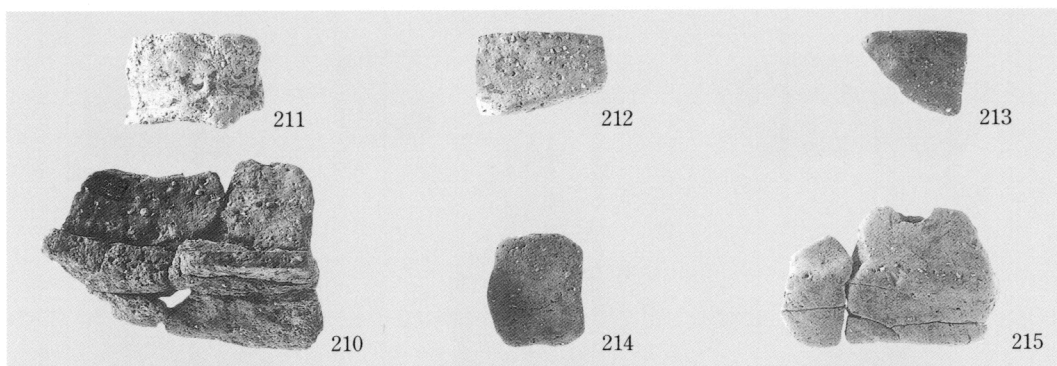
(内面)



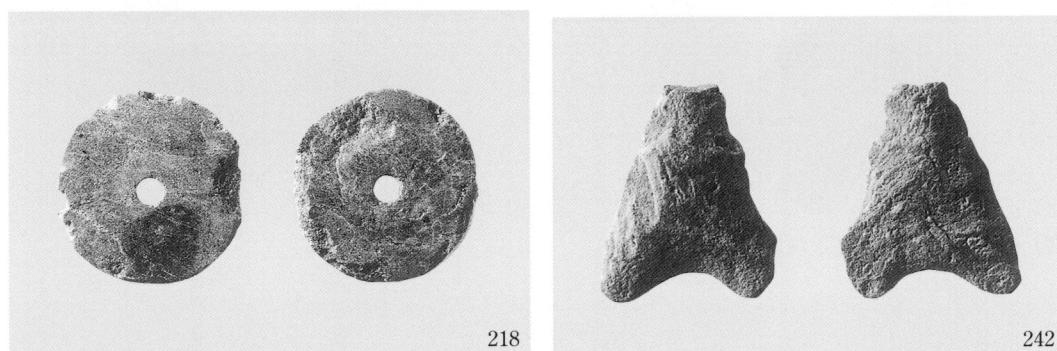
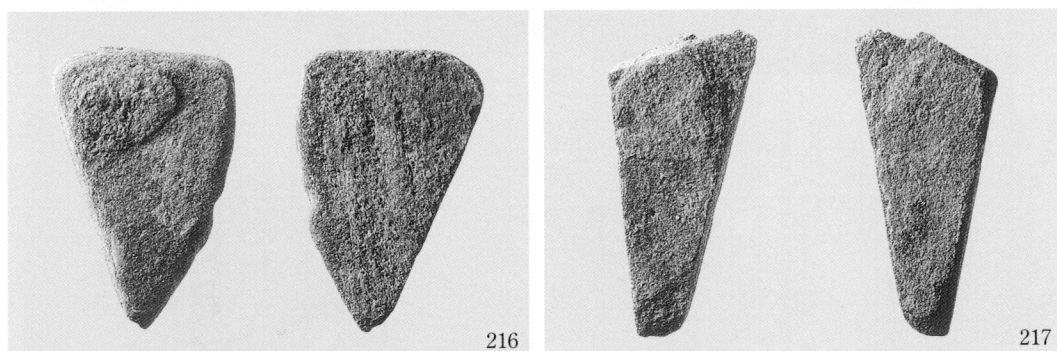
B トレンチ河川出土縄文時代晩期土器④



B トレンチ河川出土縄文時代晩期土器⑤

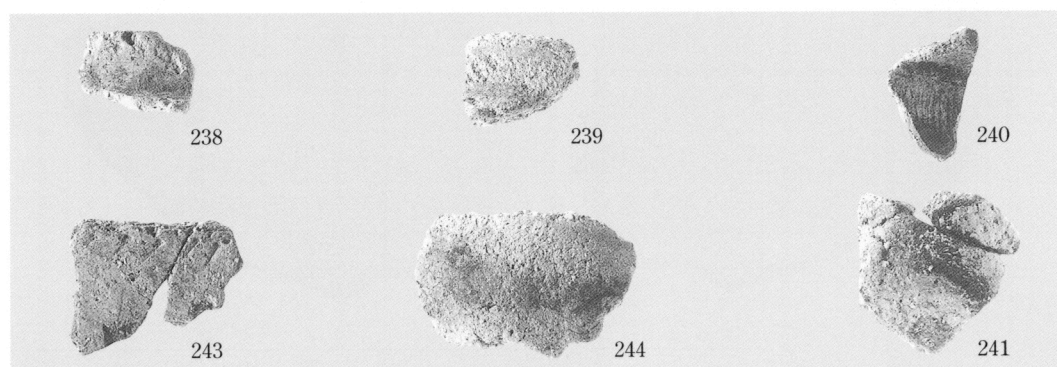


(1) B トレンチ第1号竪穴住居跡出土土器

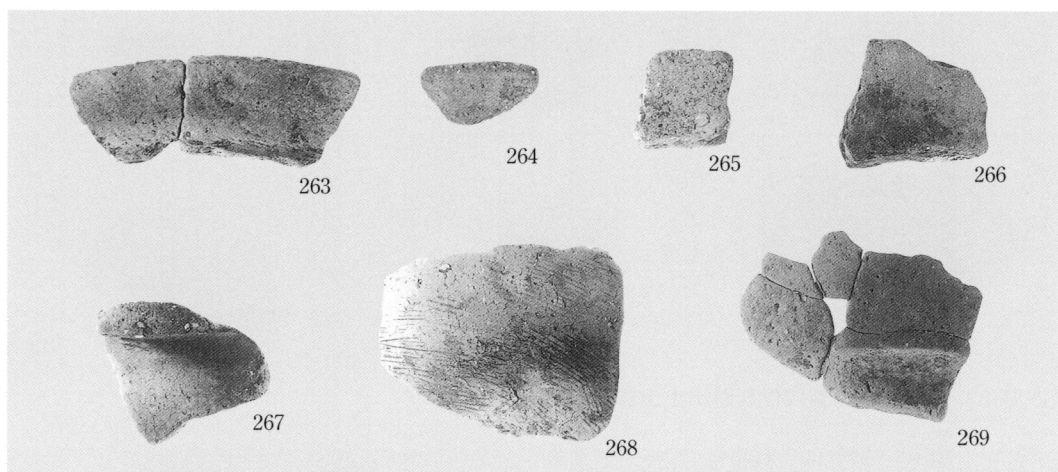


(2) B トレンチ第1号竪穴住居跡出土石器

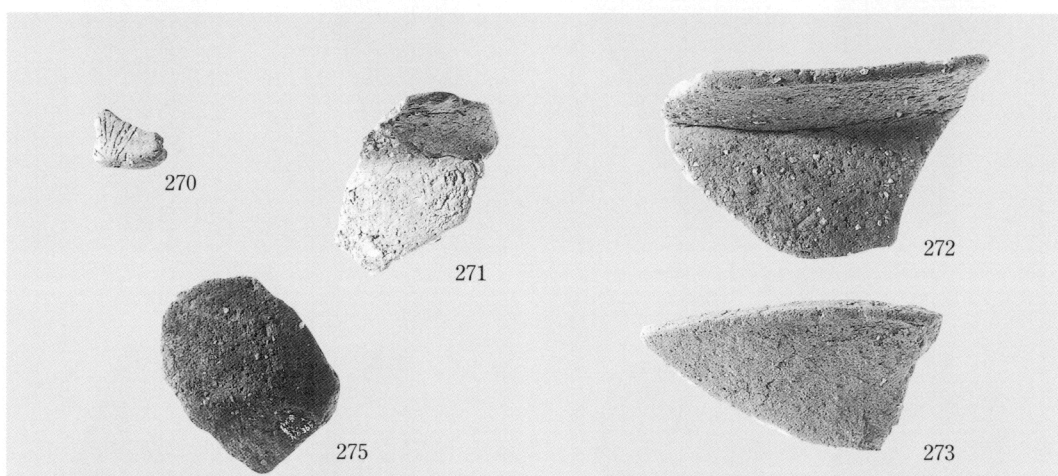
(3) B トレンチ第2号竪穴住居跡出土石器



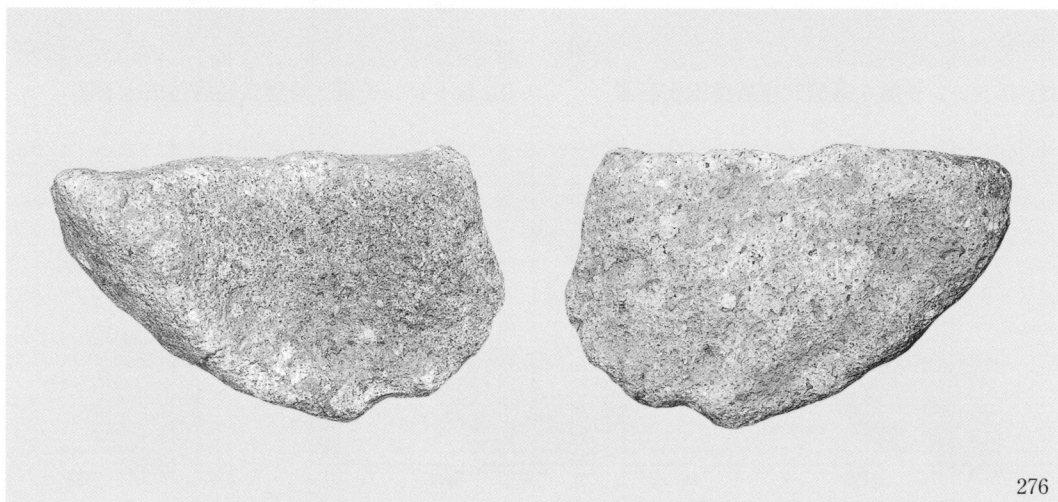
(4) B トレンチ第2・3号竪穴住居跡出土土器



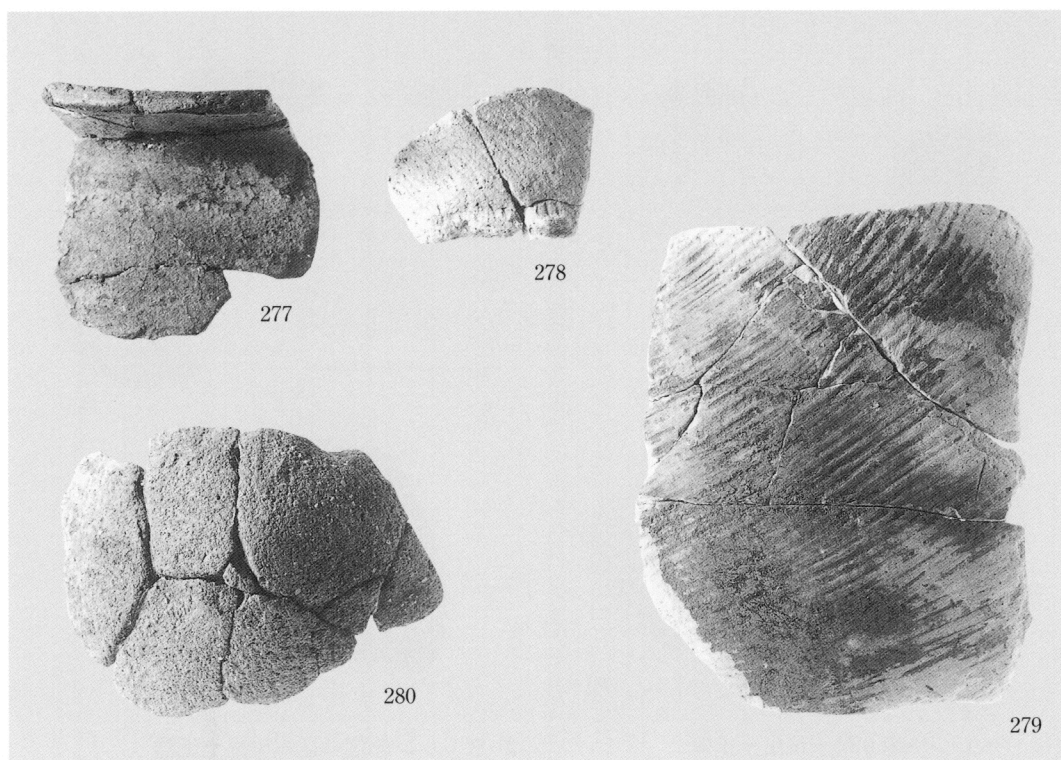
(1) B トレンチ第 4 号竪穴住居跡出土土器



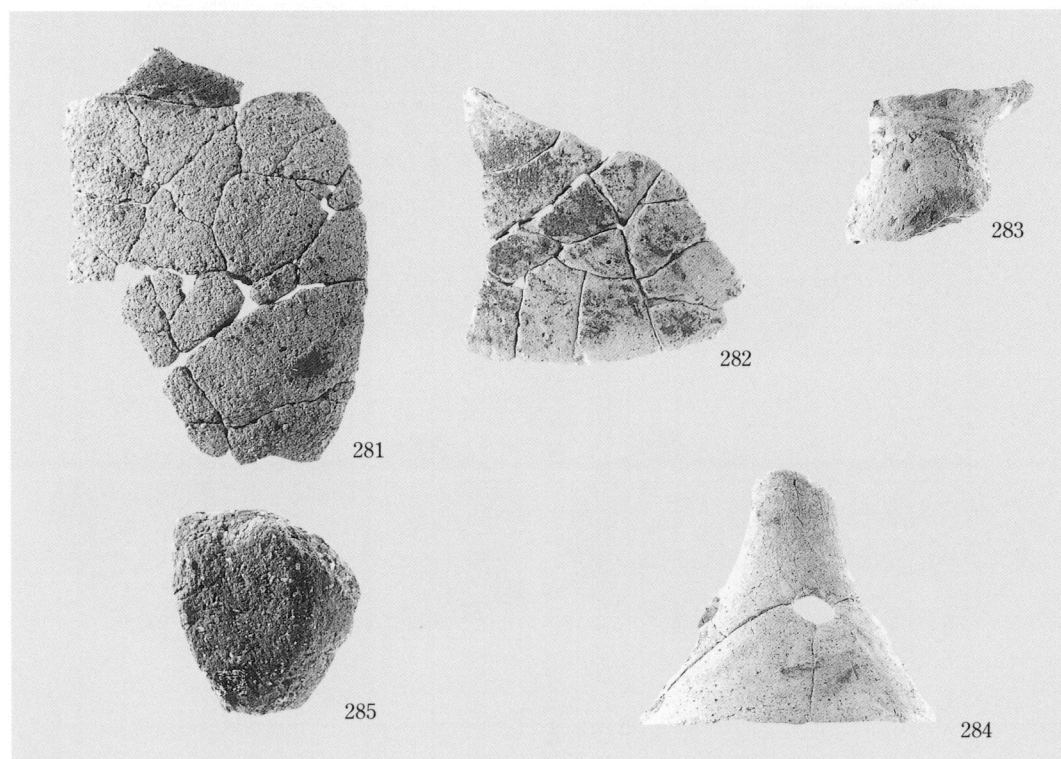
(2) B トレンチ第 1 号土坑出土土器



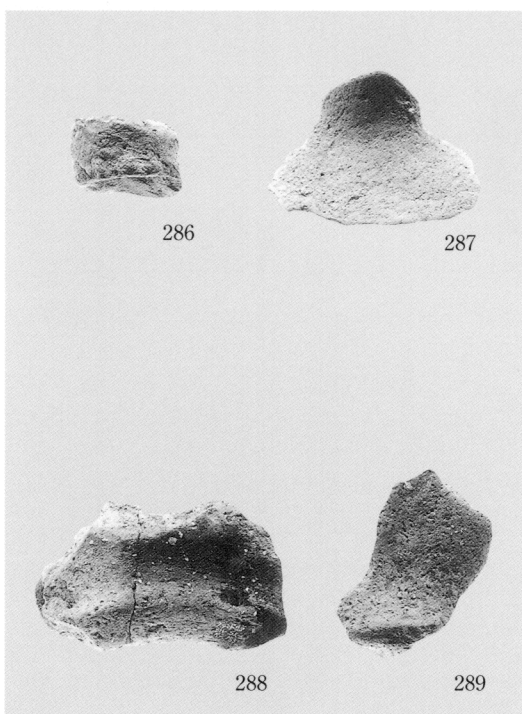
(3) B トレンチ第 2 号土坑出土石器



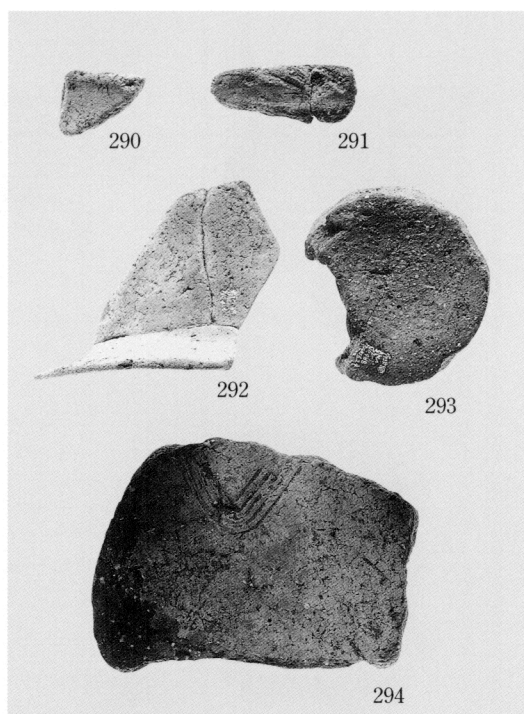
(1) B トレンチ第 3 号土坑出土土器



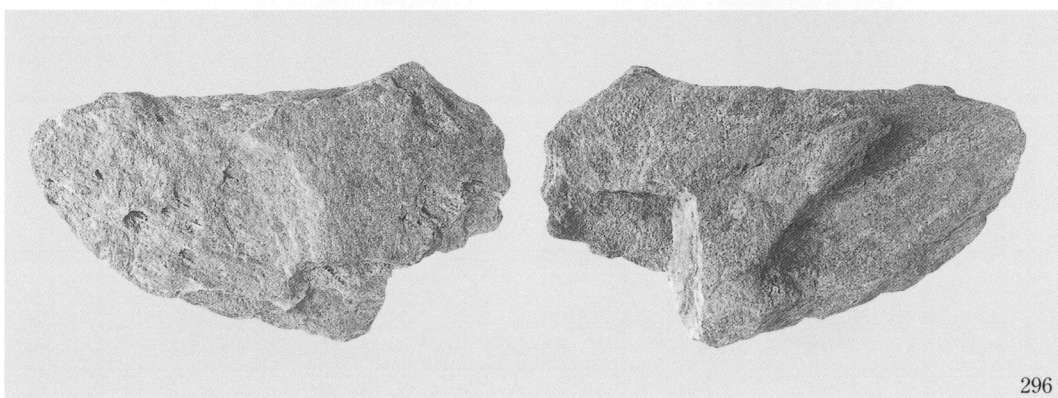
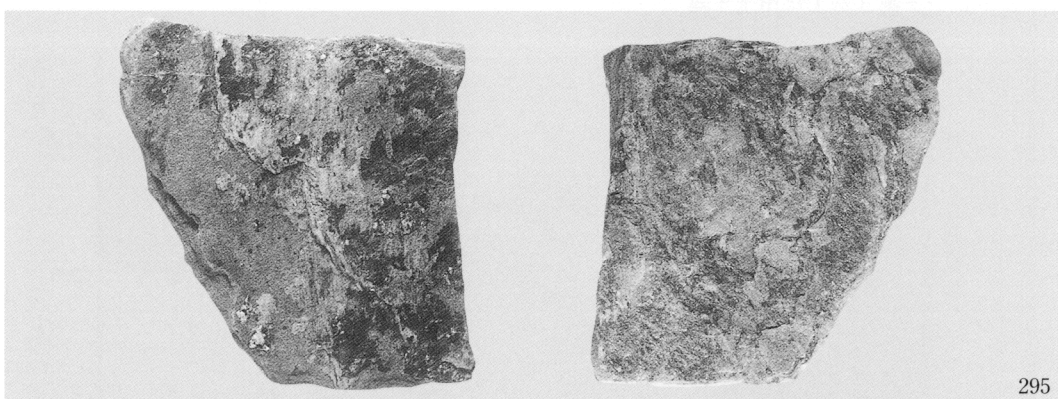
(2) B トレンチ第 4 号土坑出土土器



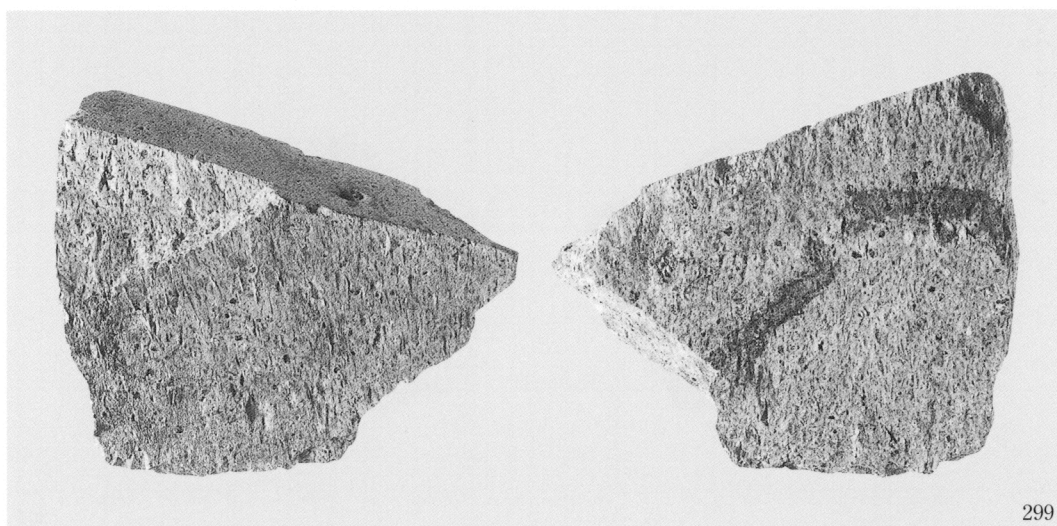
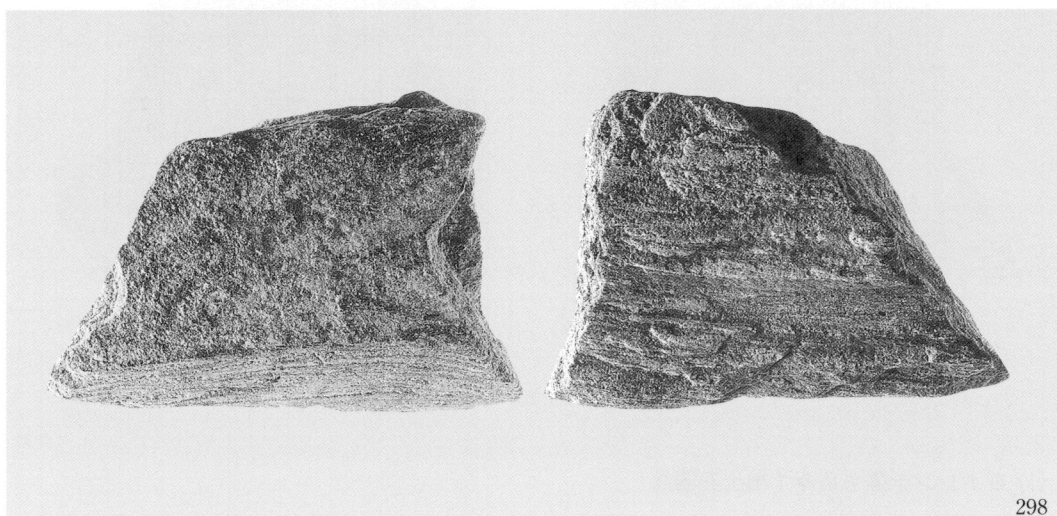
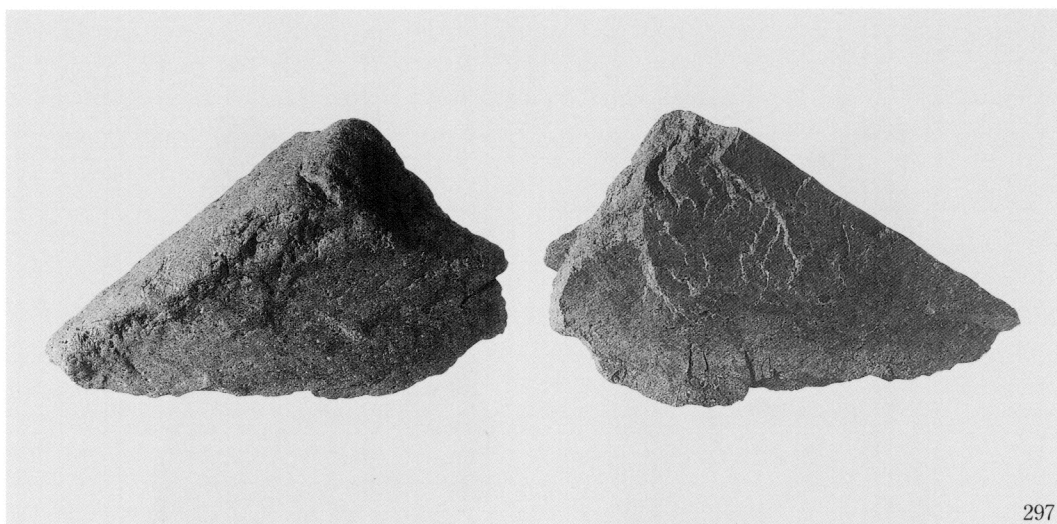
(1) B トレンチ第 6 号土坑出土土器



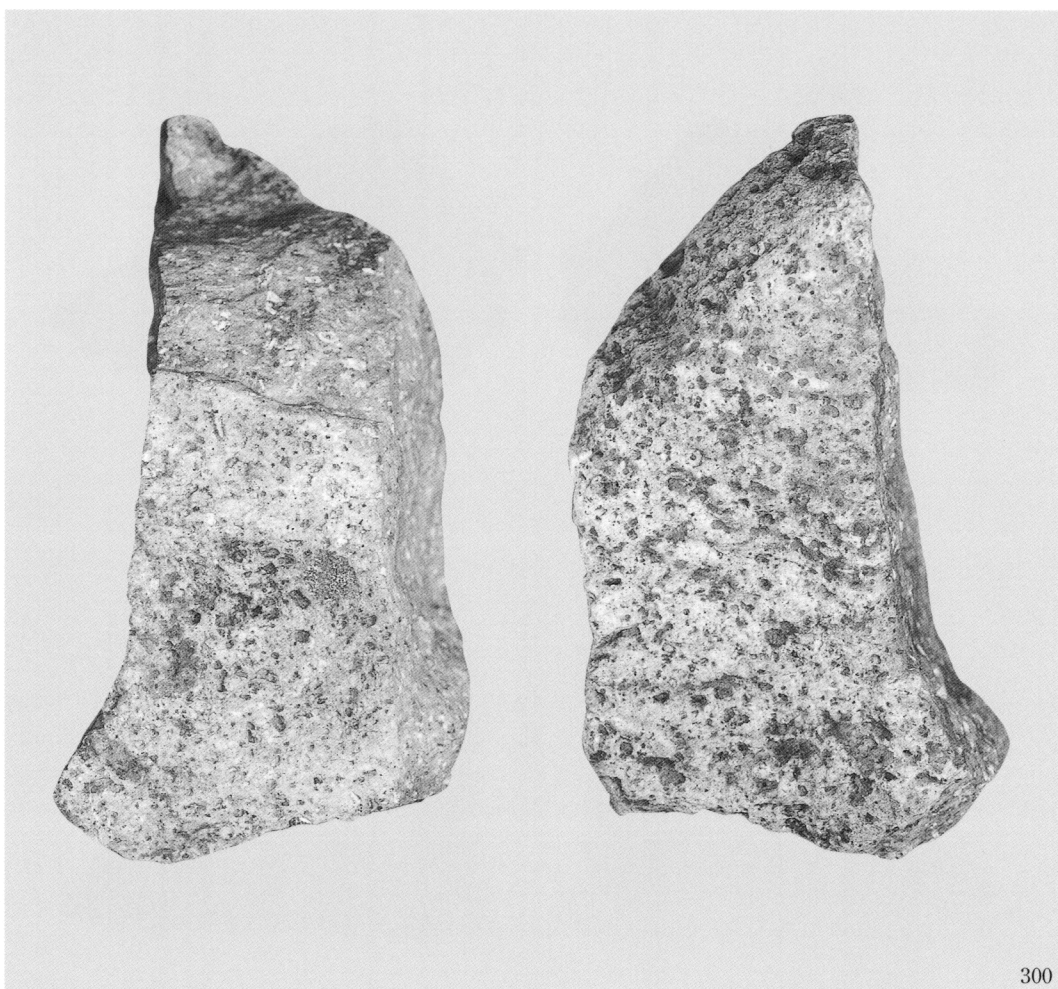
(2) B トレンチ落ち込み 1 出土土器



(3) B トレンチ落ち込み 1 出土石器①

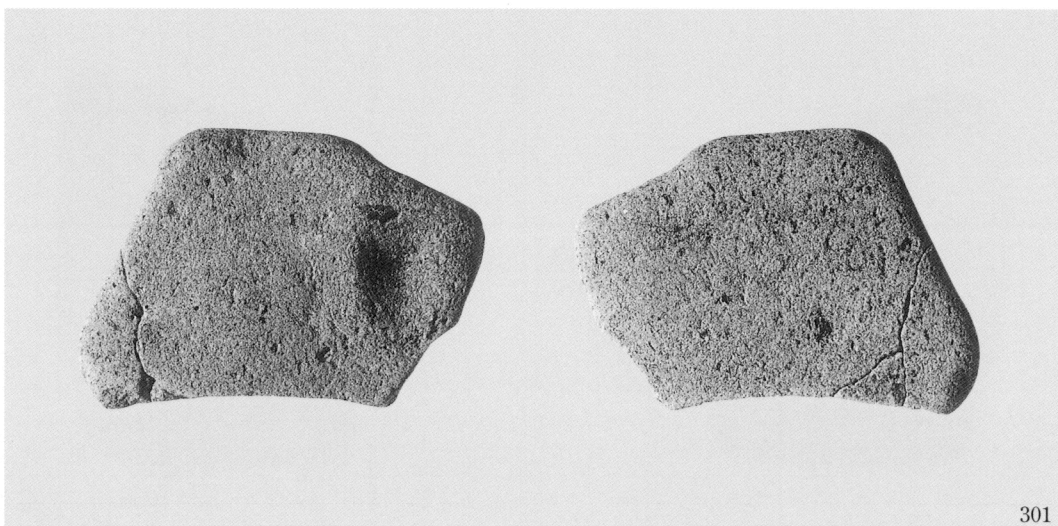


B トレンチ落ち込み 1 出土石器②



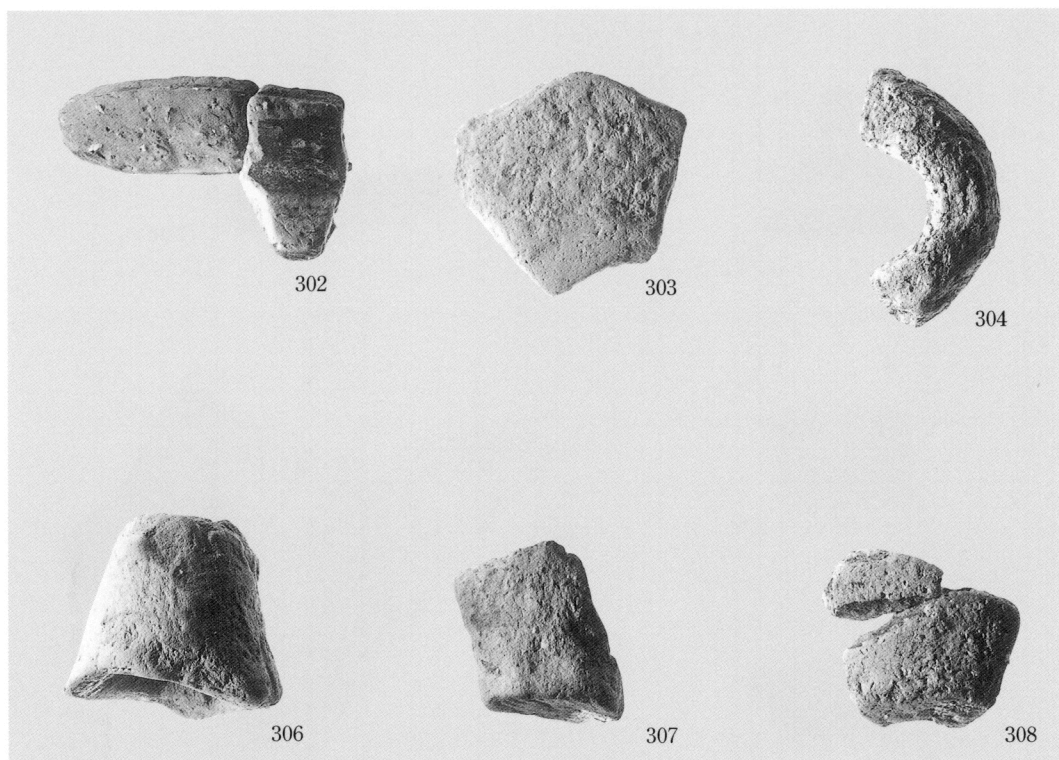
300

(1) B トレンチ落ち込み 1 出土石器③

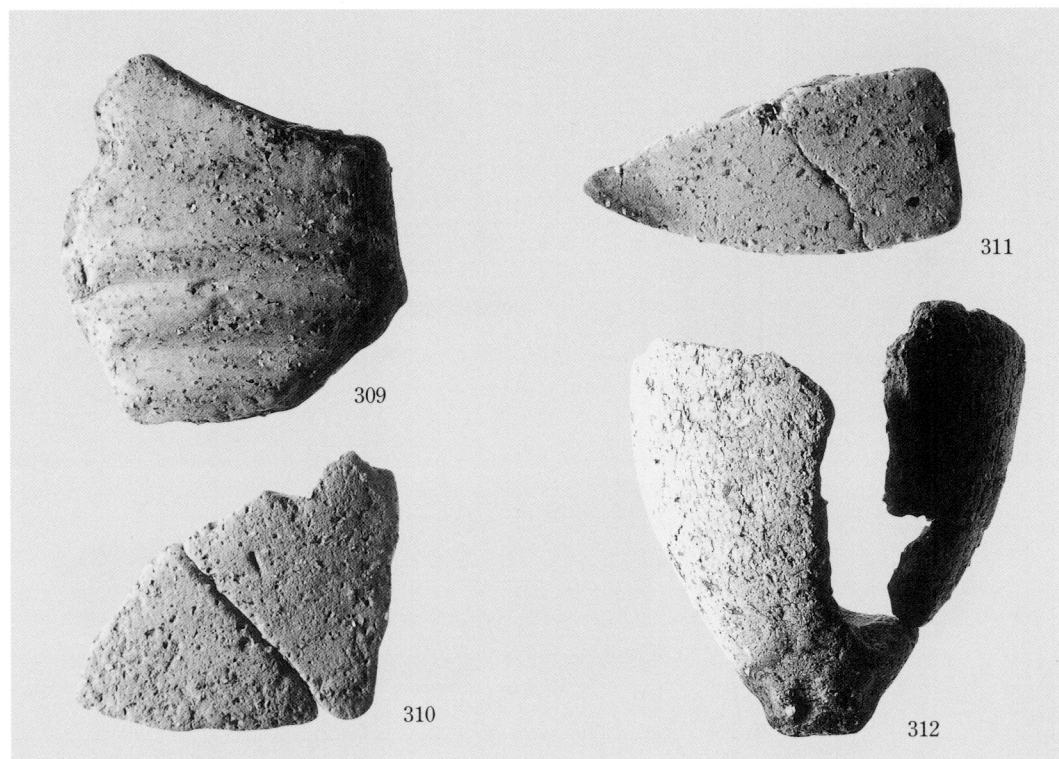


301

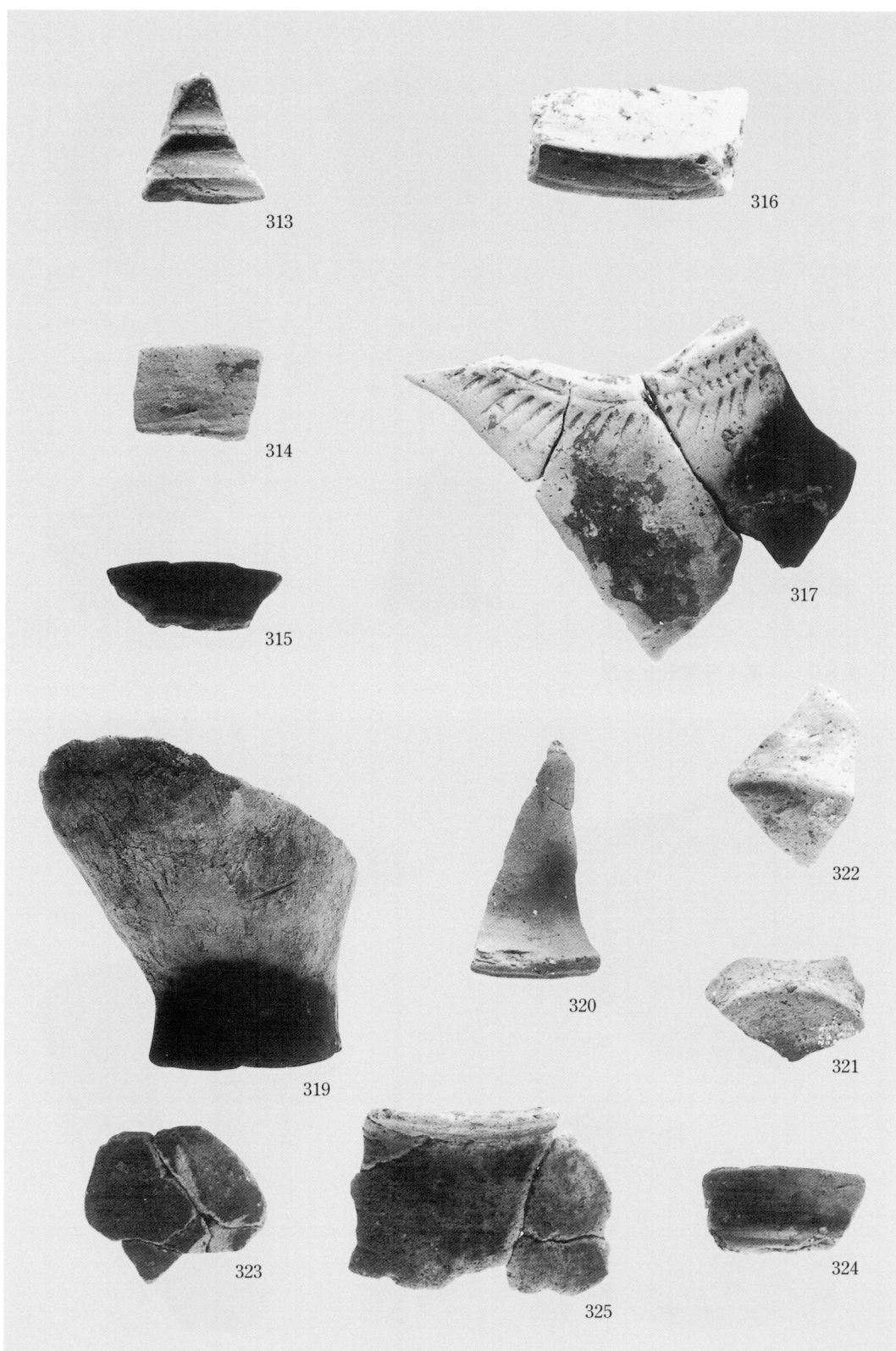
(2) B トレンチ土坑 8 出土石器



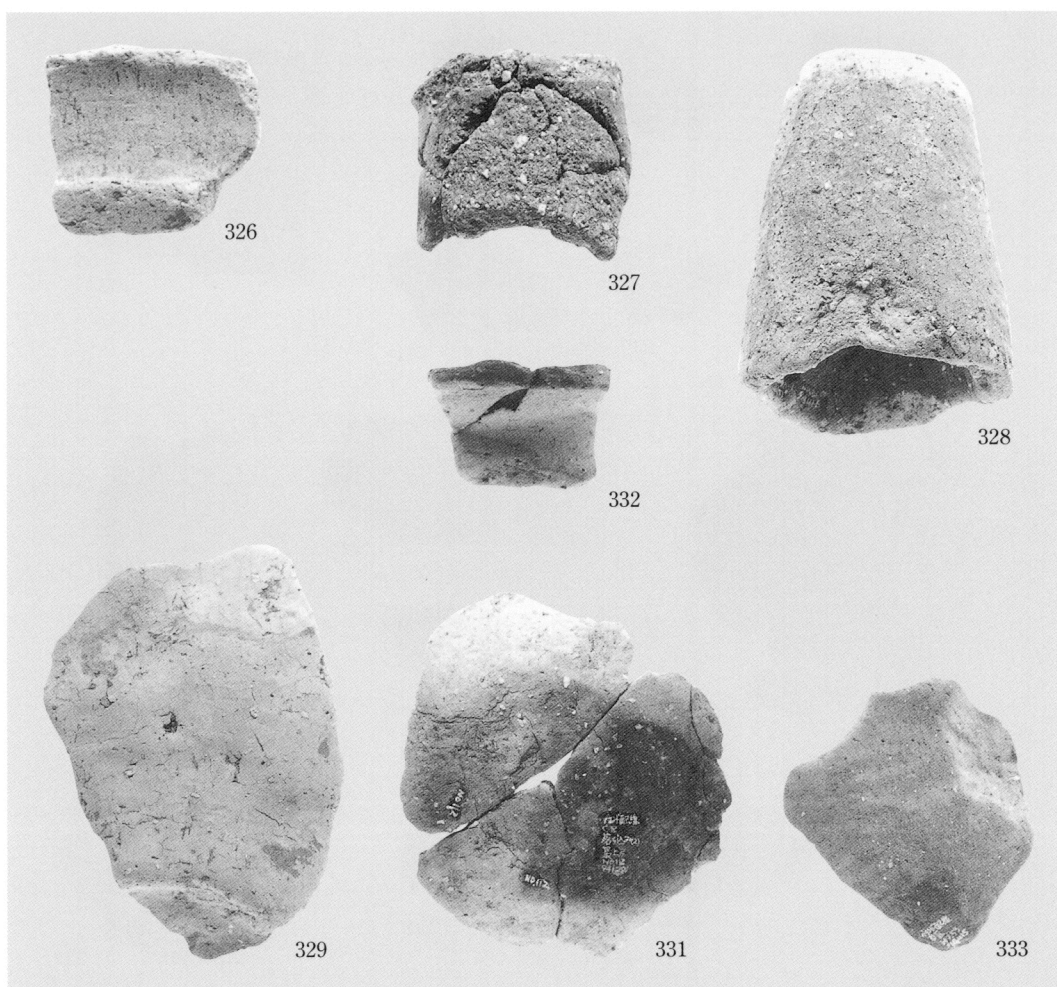
(1) B トレンチ第1号溝出土土器



(2) 配線トレンチ第2号溝出土土器



配線トレンチC区落ち込み1出土遺物

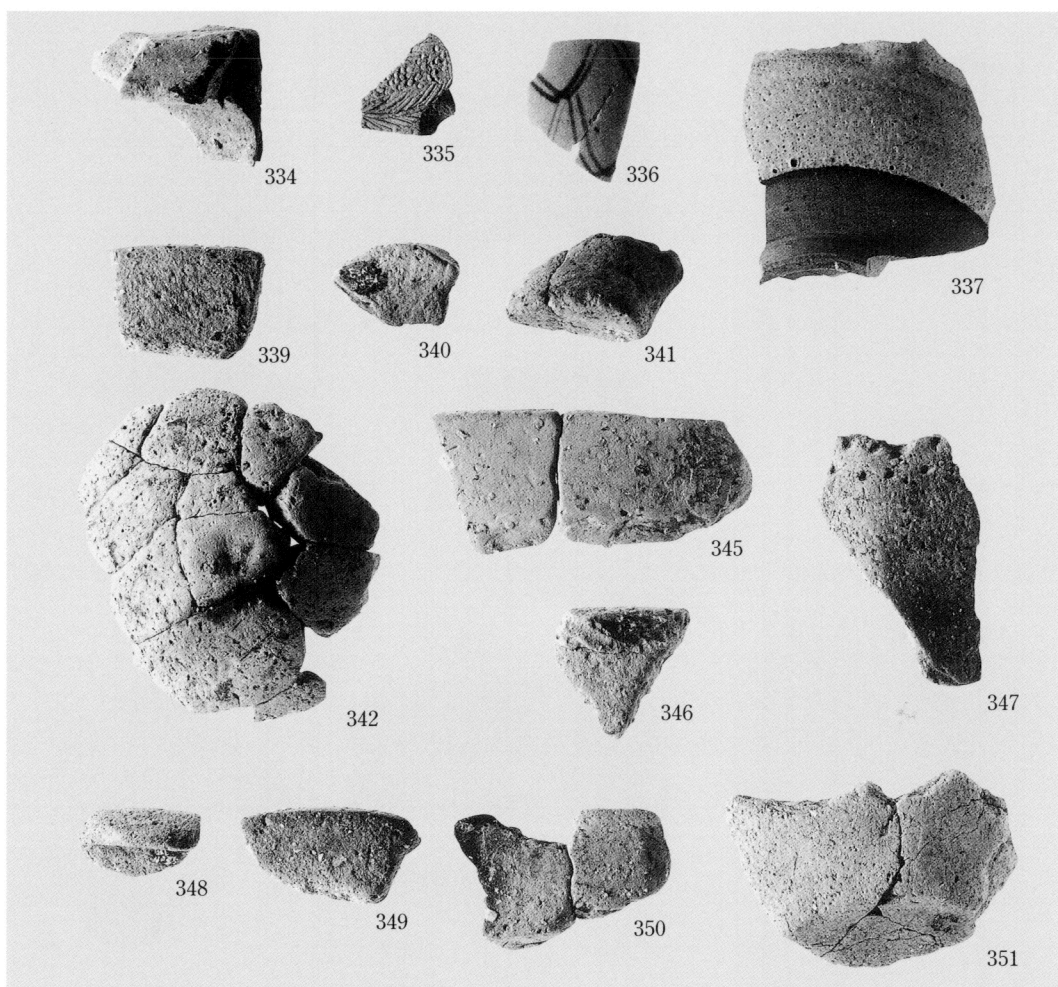


(1) 配線トレンチ落ち込み1出土土器

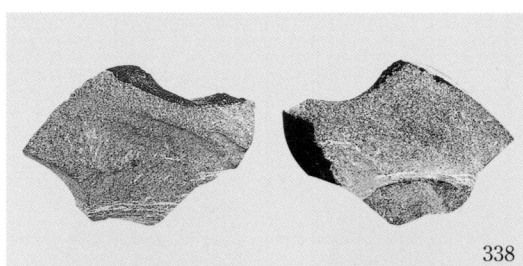


(2) 配線トレンチ
落ち込み1出土
土玉

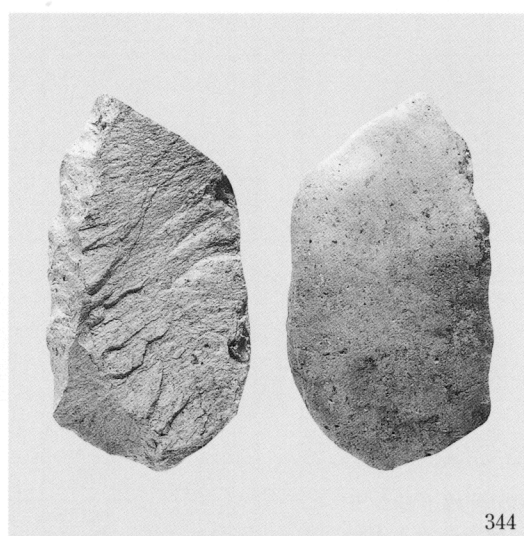
(3) 配線トレンチ落ち込み1出土石器



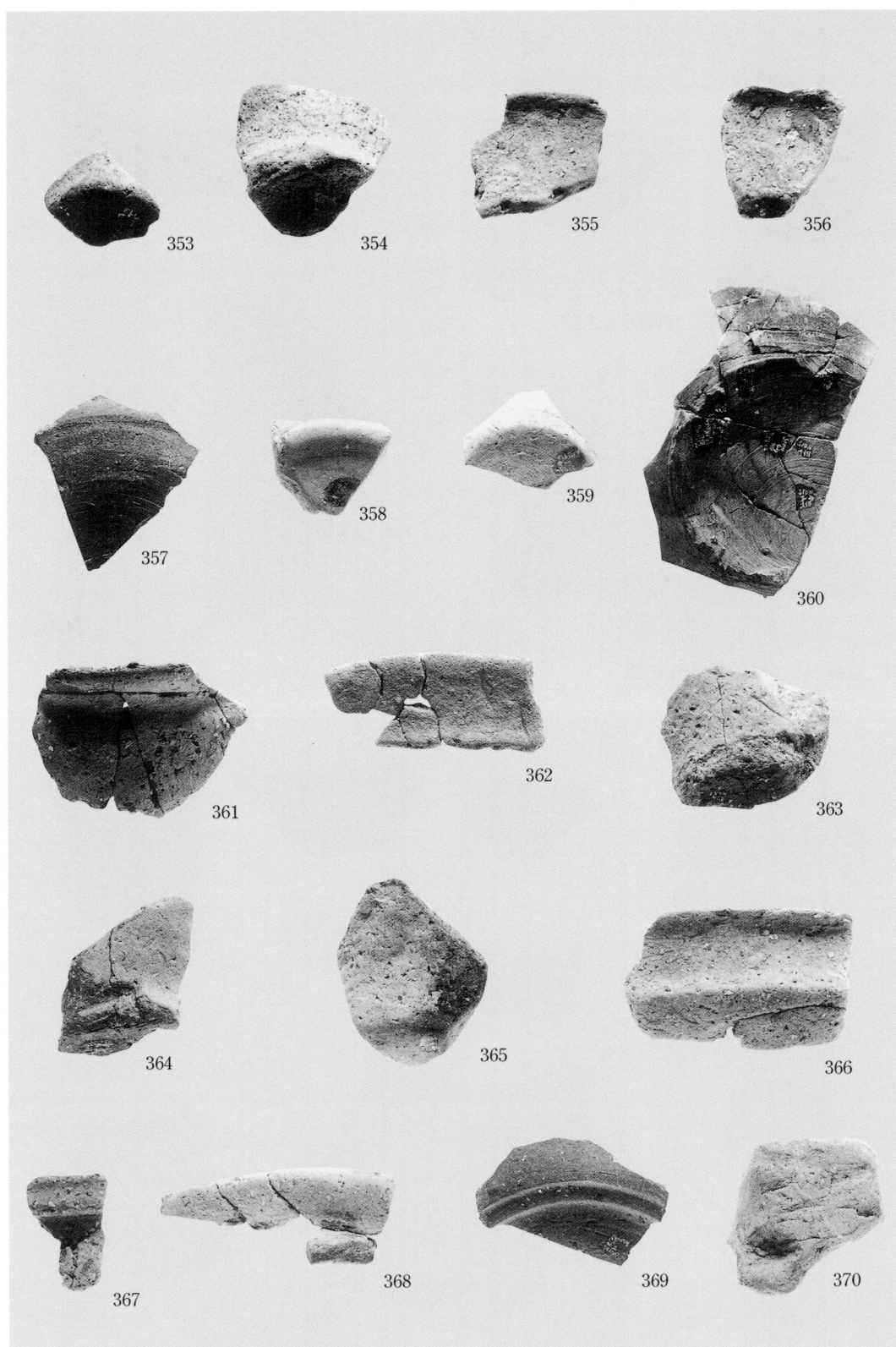
(1) B トレンチ暗渠・遺構検出時出土土器



(2) B トレンチ暗渠・遺構検出時出土土器①



(3) B トレンチ遺構検出時出土土器②



B トレンチ攪乱・表土掘削時出土土器

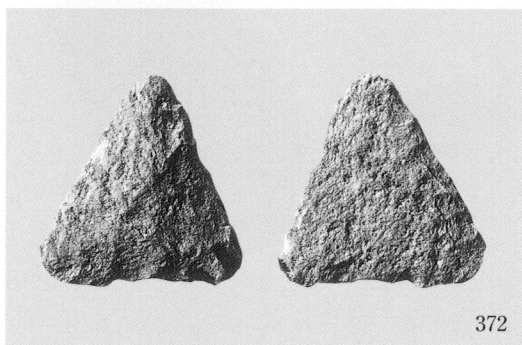


371



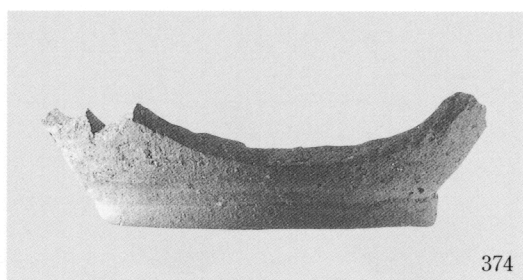
373

(1) 配線トレンチE区、G区出土土器

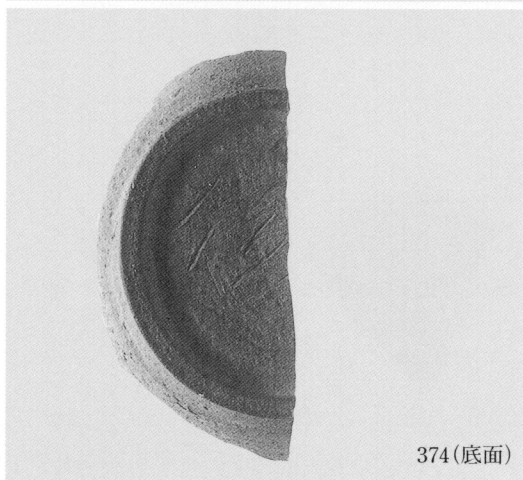


372

(2) 配線トレンチE区出土石鏃

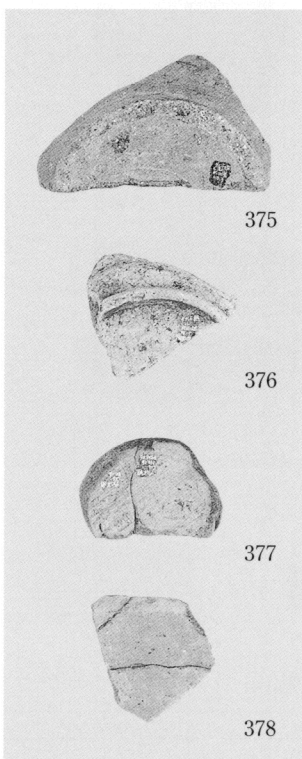


374

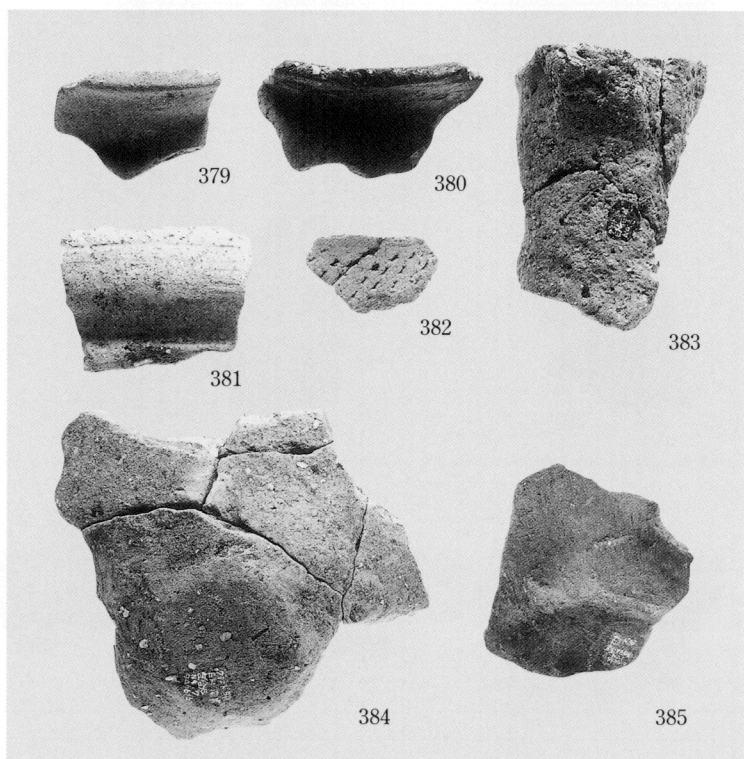


374(底面)

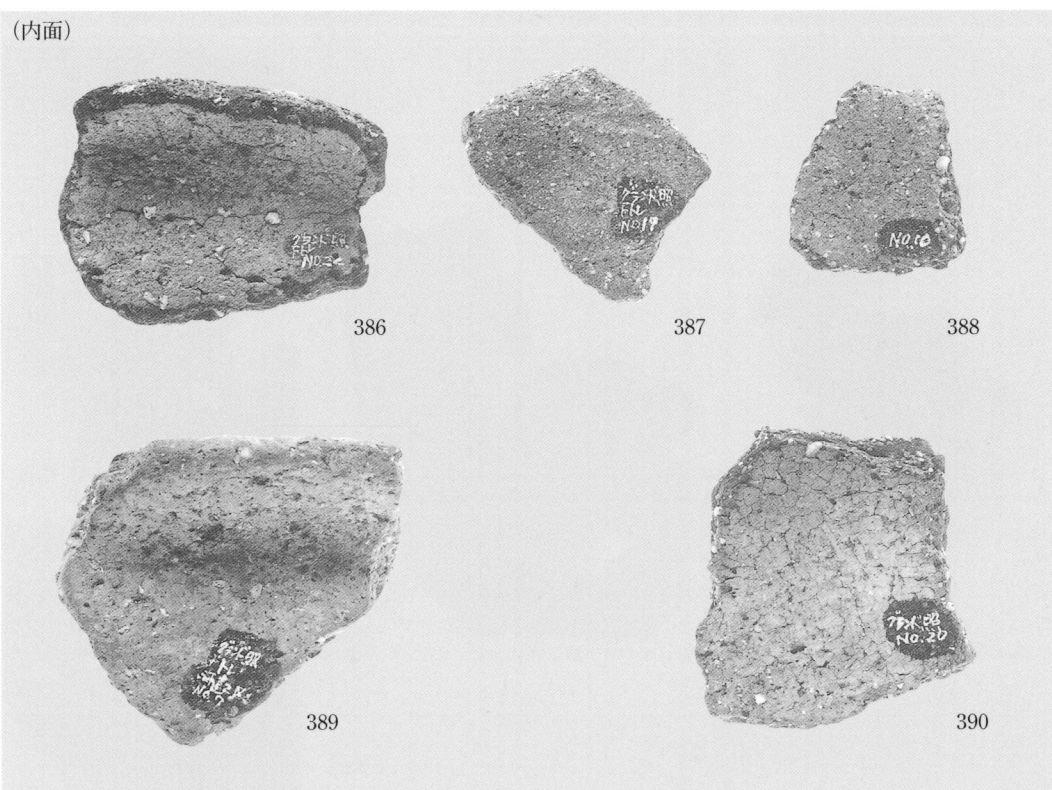
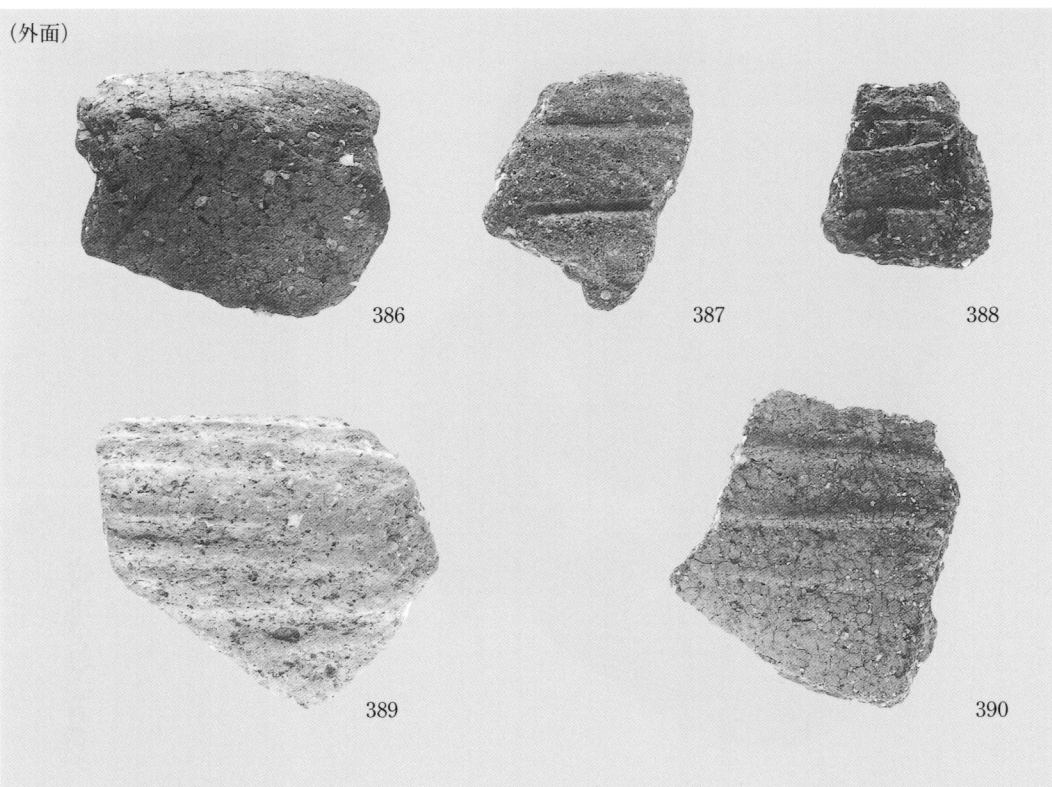
(3) 配線トレンチG区出土土器



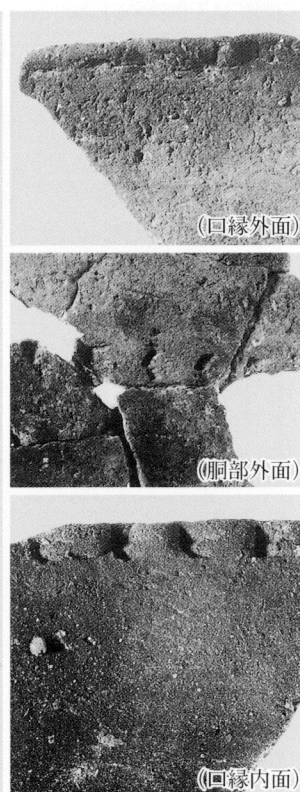
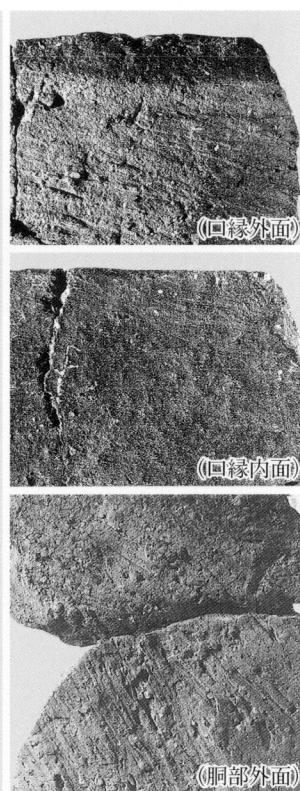
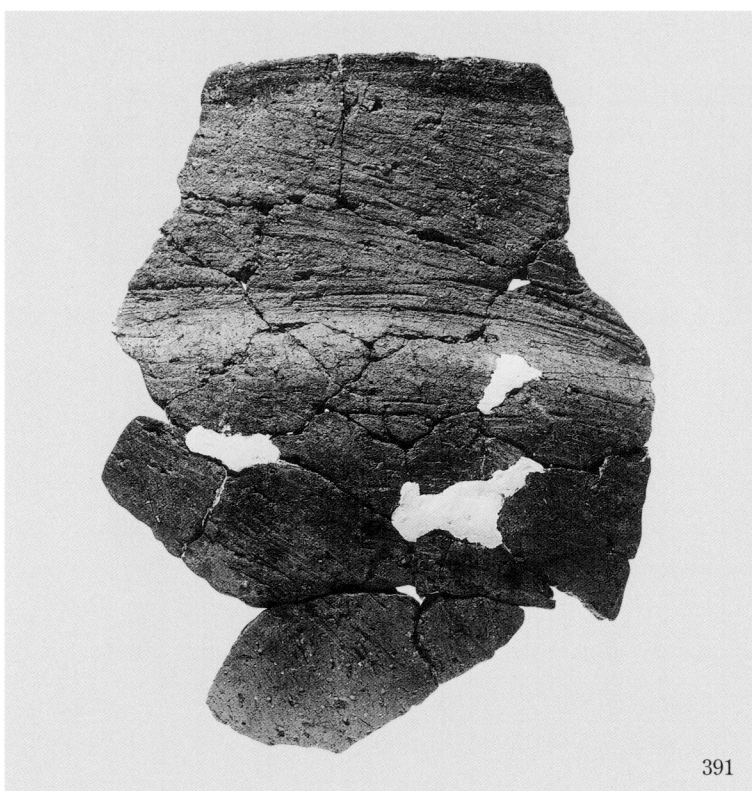
(4) C トレンチ出土土器



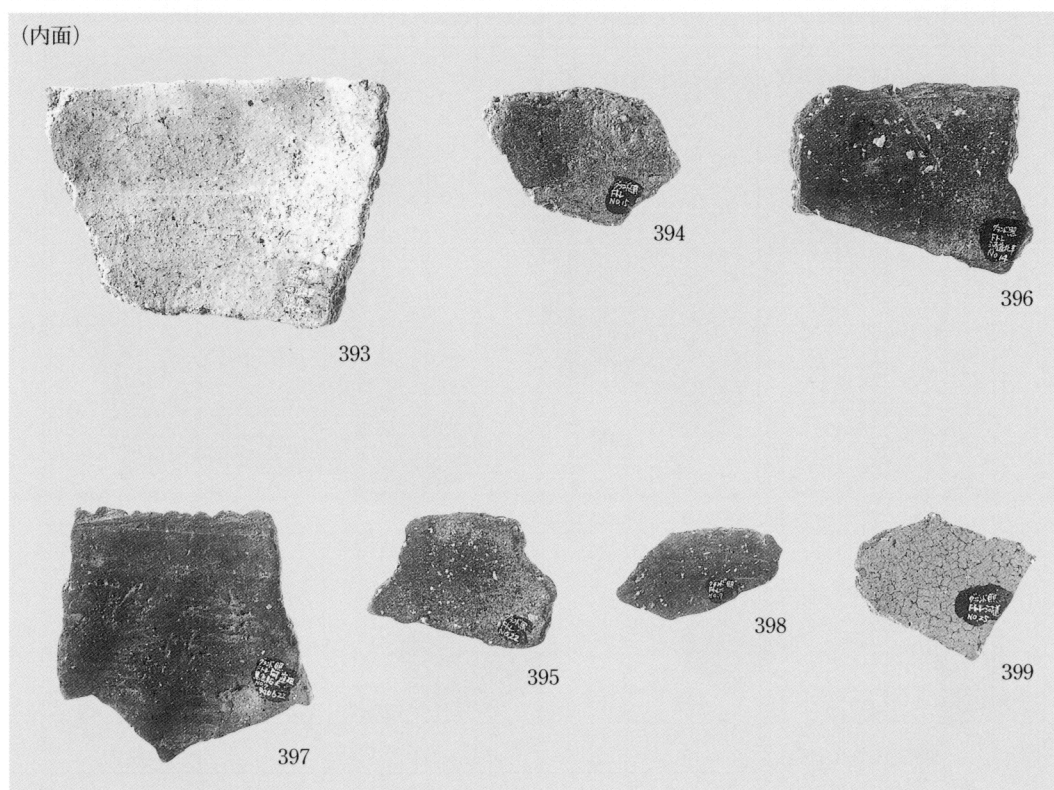
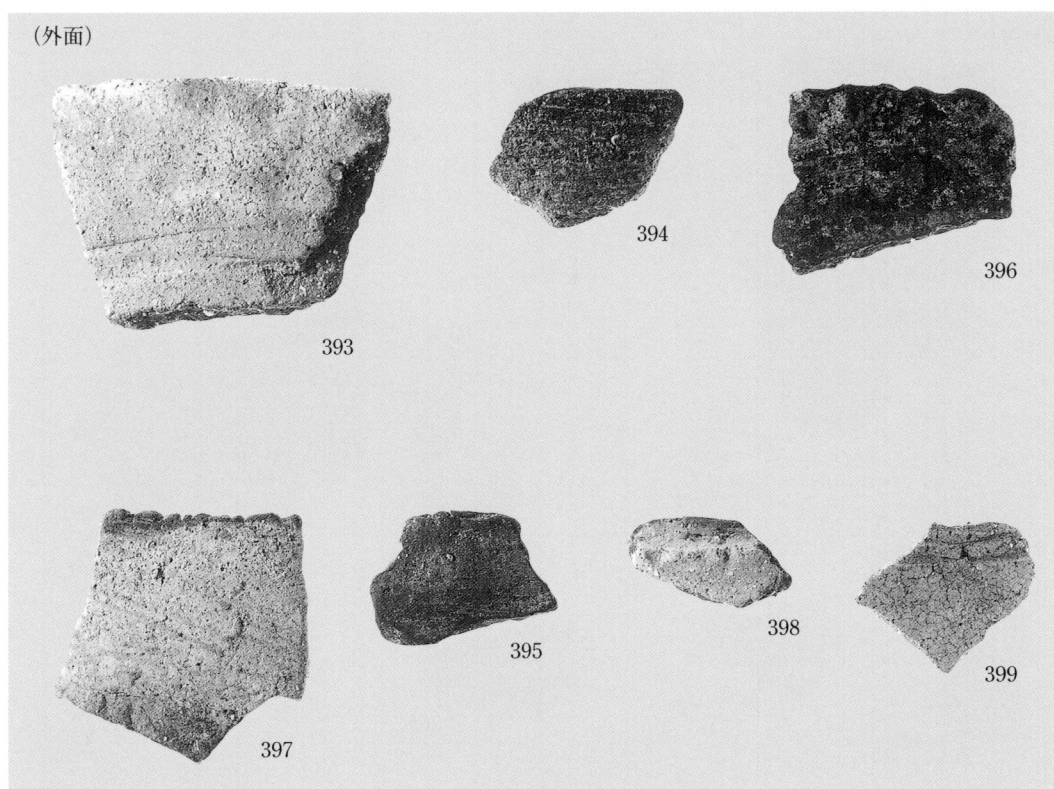
(5) E トレンチ出土土器



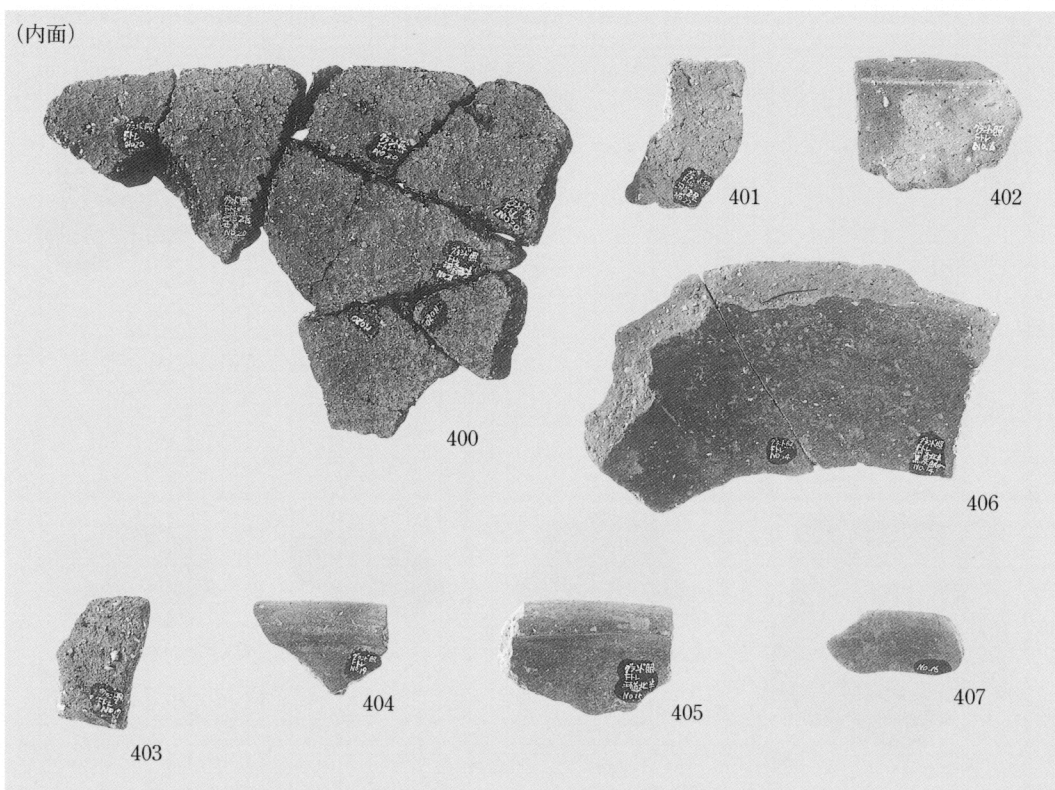
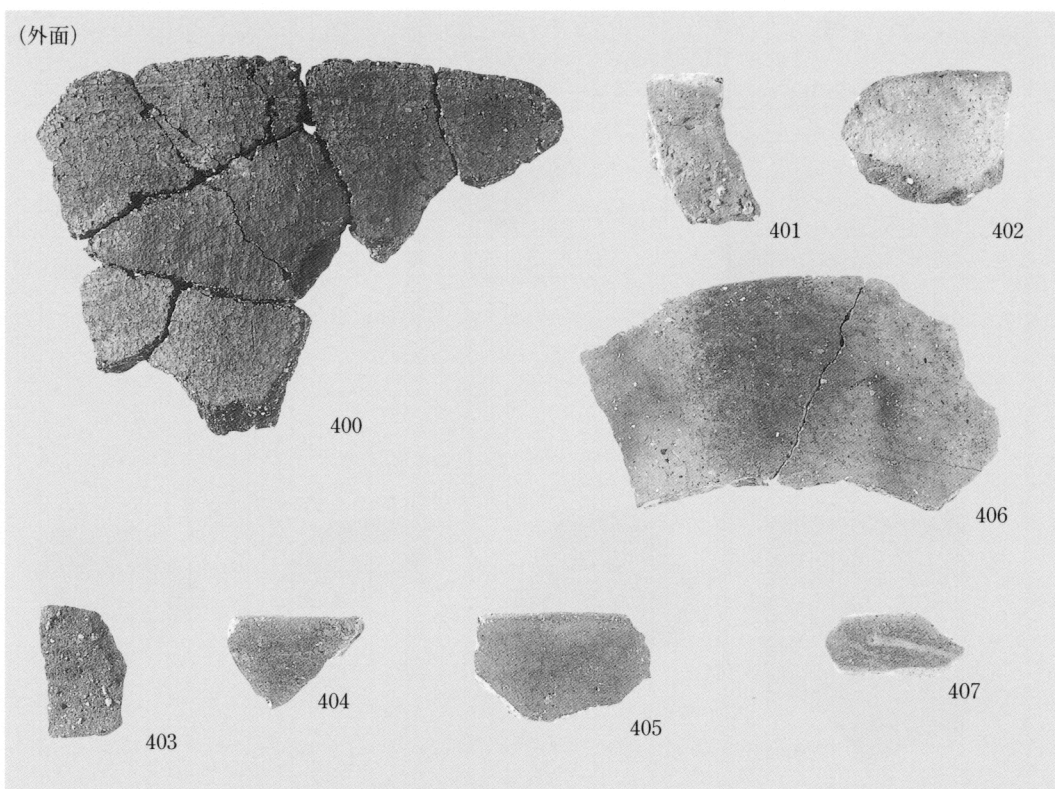
F トレンチ河川出土縄文時代後期土器



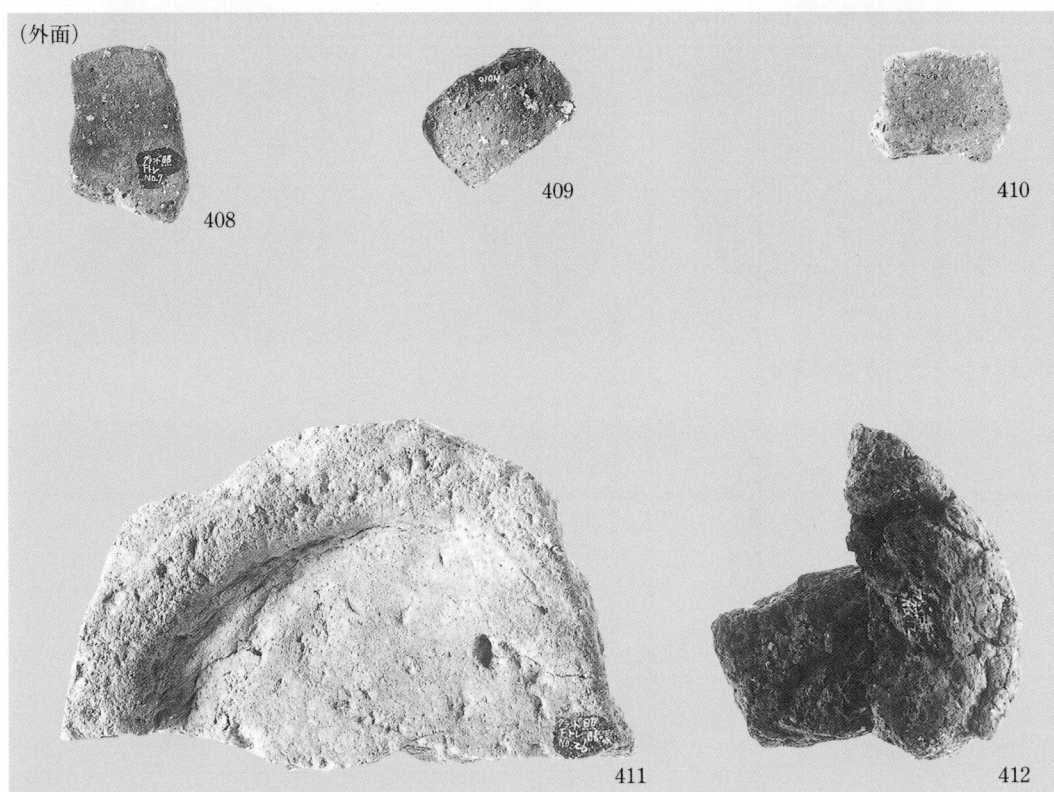
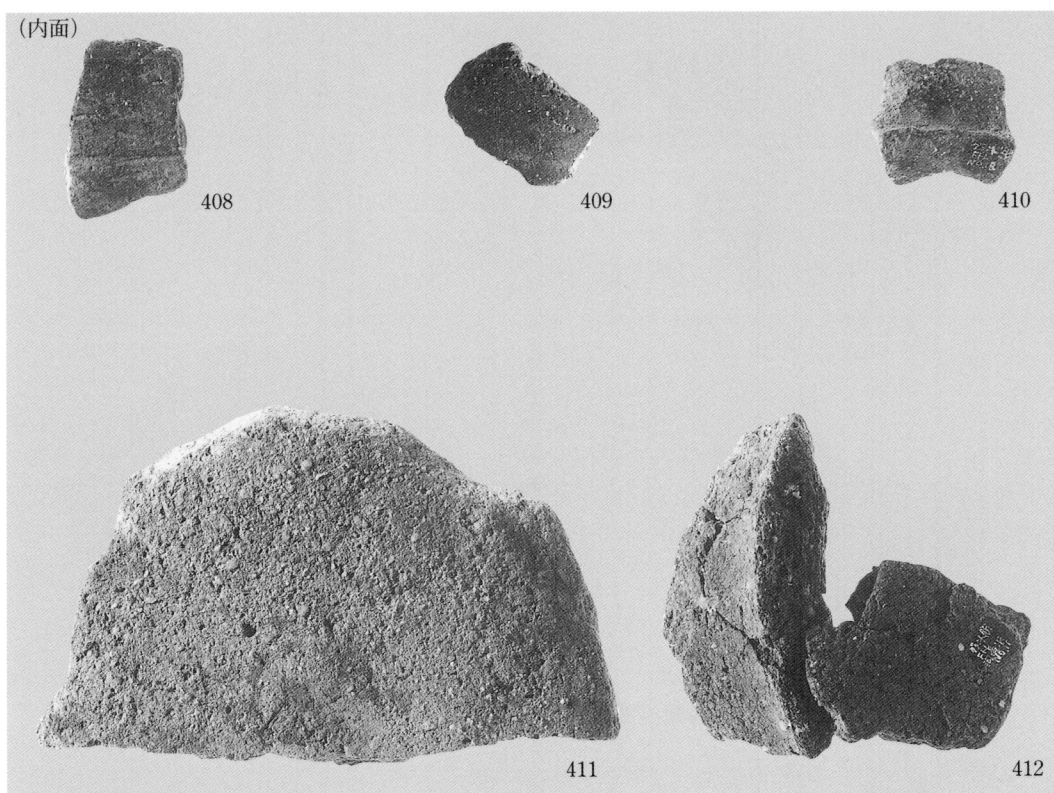
F トレンチ河川出土縄文時代晩期深鉢①



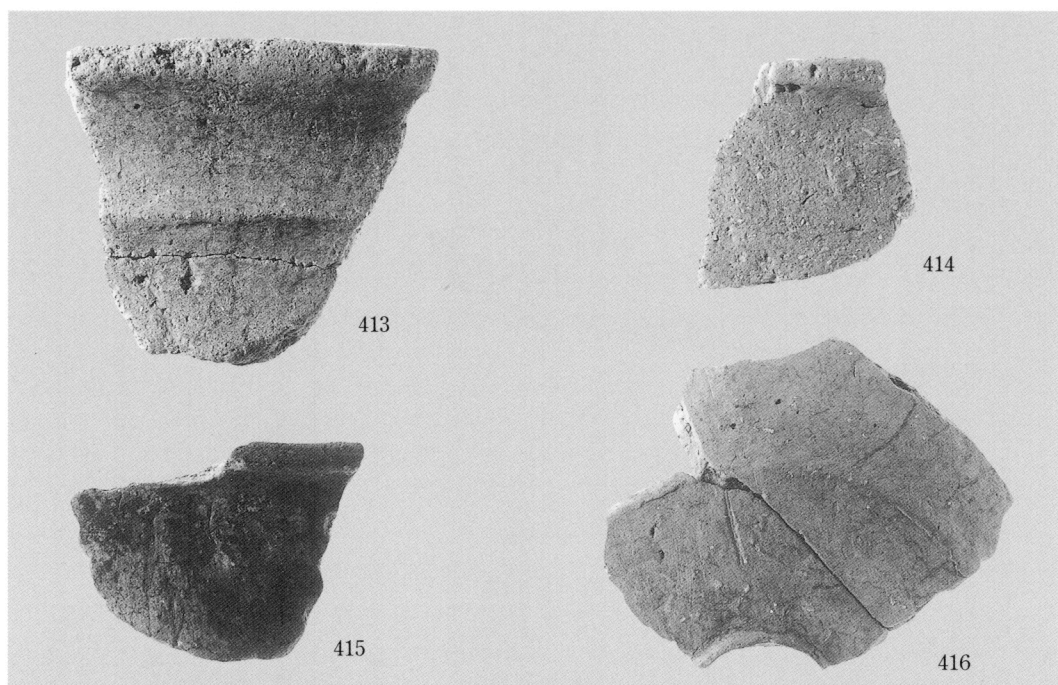
F トレンチ河川出土縄文時代晩期深鉢②



F トレンチ河川出土縄文時代晩期浅鉢①



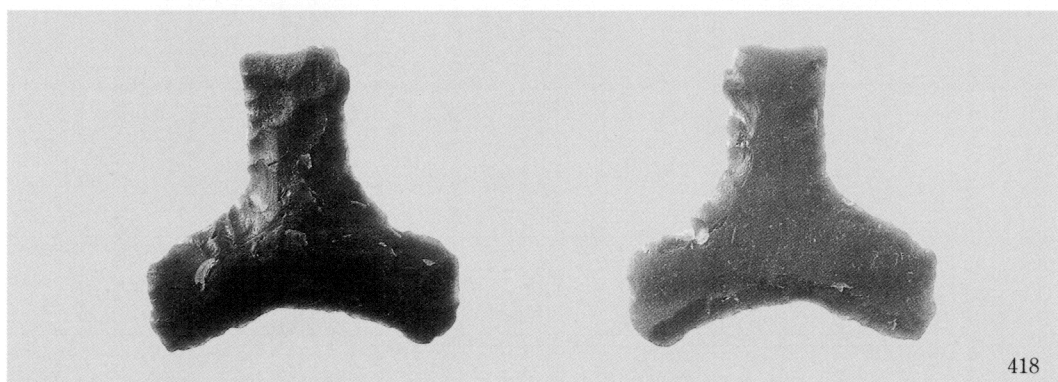
F トレンチ河川出土縄文時代晩期浅鉢②



(1) F トレンチ河川出土弥生時代前期～古墳時代中期土器



(2) F トレンチ河川出土敲石

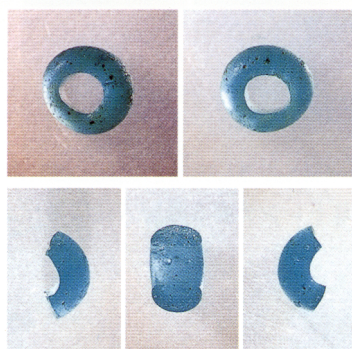


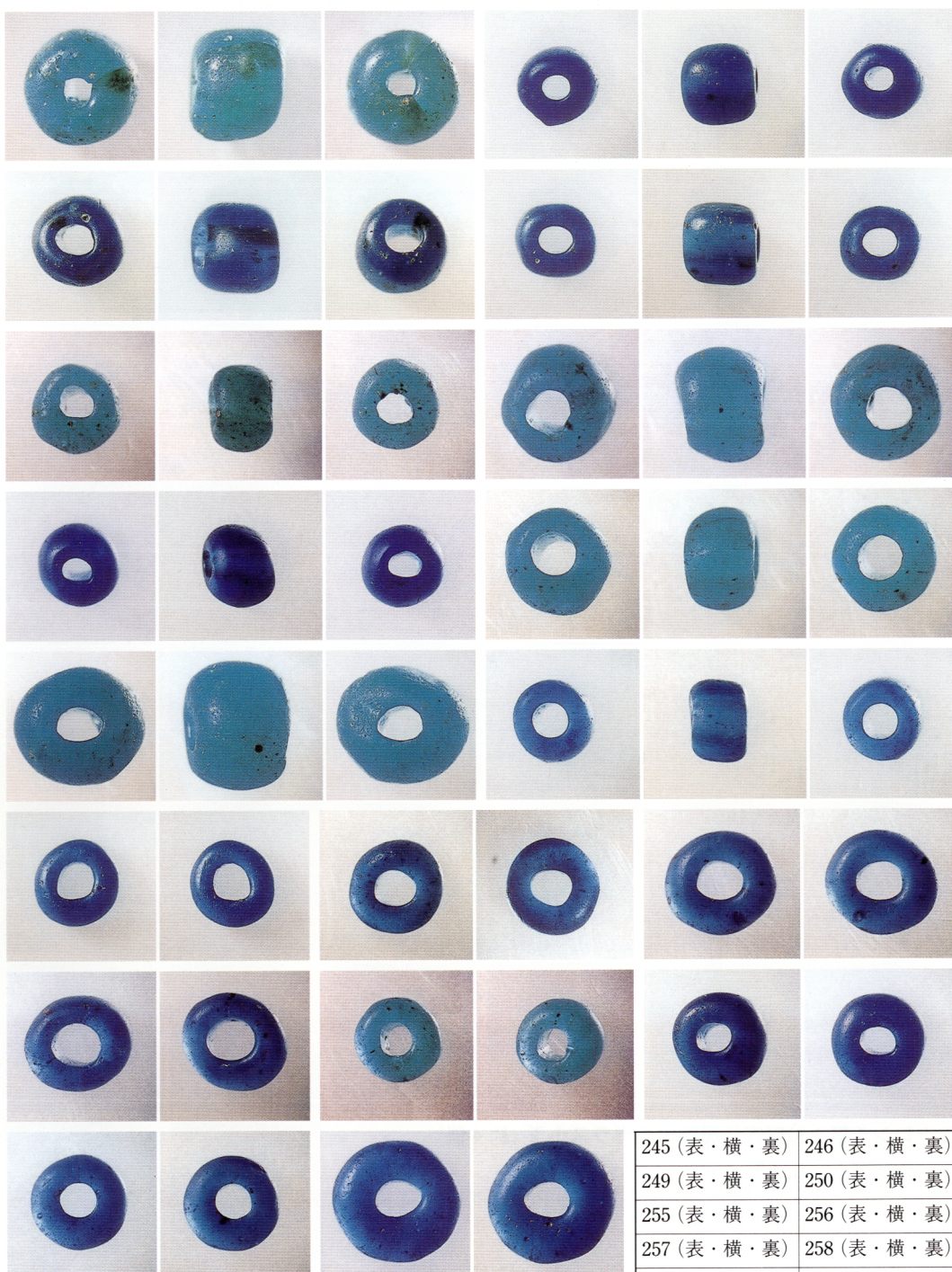
(3) F トレンチ河川出土三脚石器



B トレンチ第1号竪穴住居跡出土ガラス小玉(約4倍)

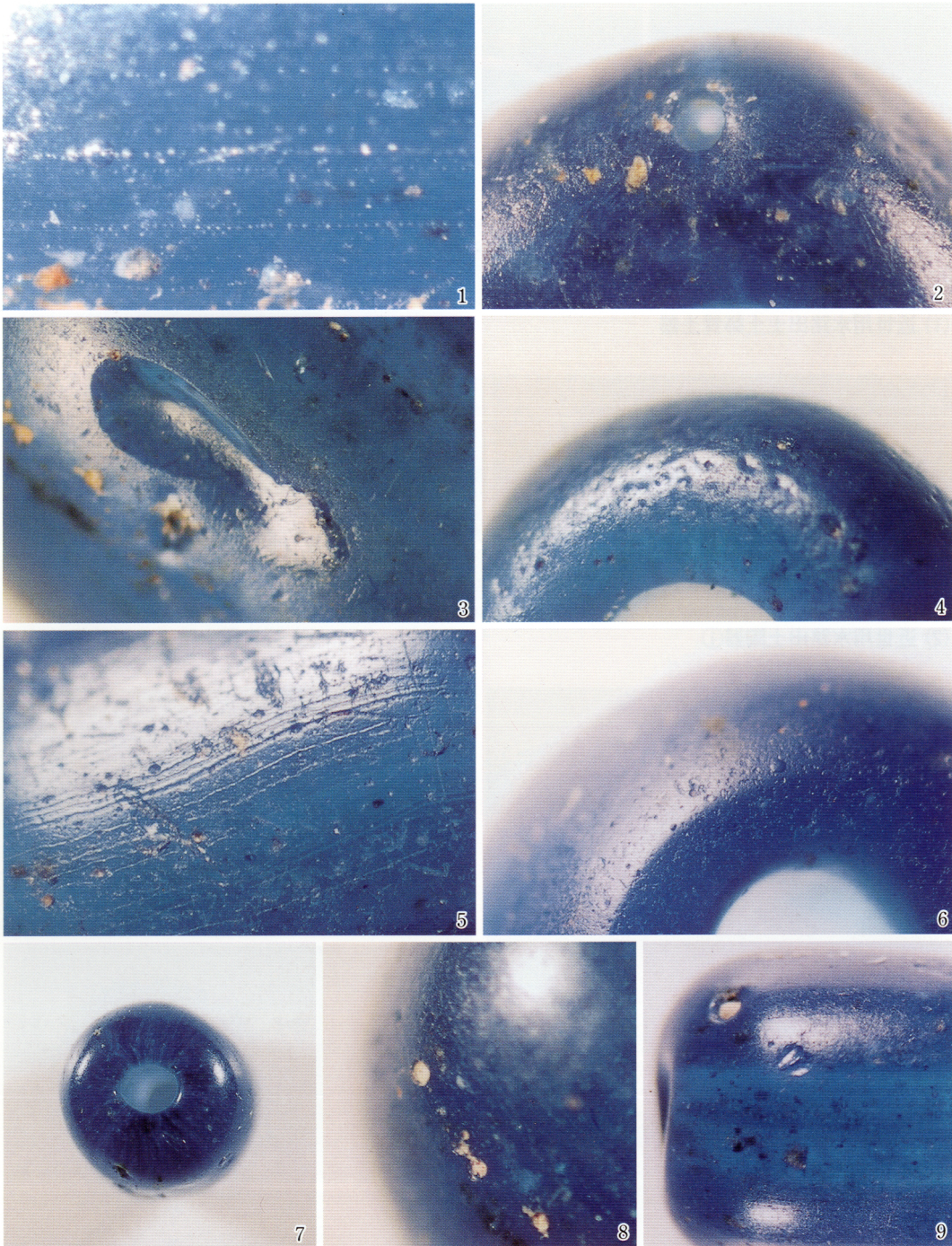
220 (表・横・裏)	221 (表・横・裏)	
223 (表・横・裏)	225 (表・横・裏)	
226 (表・横・裏)	229 (表・横・裏)	
231 (表・横・裏)	232 (表・横・裏)	
219 (表・裏)	222 (表・裏)	224 (表・裏)
227 (表・裏)	228 (表・裏)	230 (表・裏)
233 (表・裏)	234 (表・裏)	235 (表・裏)
		236 (表・裏)
		237 (表・裏)





B トレンチ第 3 号竪穴住居跡出土ガラス小玉 (約 4 倍)

245 (表・横・裏)		246 (表・横・裏)	
249 (表・横・裏)		250 (表・横・裏)	
255 (表・横・裏)		256 (表・横・裏)	
257 (表・横・裏)		258 (表・横・裏)	
259 (表・横・裏)		260 (表・横・裏)	
247 (表・裏)	248 (表・裏)	251 (表・裏)	
252 (表・裏)	253 (表・裏)	254 (表・裏)	
261 (表・裏)	262 (表・裏)		



B トレンチ出土ガラス小玉（部分拡大）

- | | |
|------------------|---|
| 1 直列する気泡 約50倍 | 2 表裏貫通した気孔 約35倍 |
| 3 楕円形の気孔 約35倍 | 4 表面の状態①（あばた状）約35倍 |
| 5 表面の状態②（条痕）約35倍 | 6 表面の状態③（光沢・稜・つぶれた突起）約35倍 |
| 7 放射状に並ぶ気泡 約10倍 | 8 不純物の入った気孔①
（縁部が鋭い）約35倍 |
| | 9 不純物の入った気孔② 約17.5倍
（縁部が丸く外縁部が盛り上がる） |